

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観に関する調査研究 (1) -①-ア)
【事業概要】 文化的景観の体系化や保護策に関する研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報の収集を進めるとともに、文化的景観の学術及び保護に資する研究会を定期開催し、その成果をふまえて文化的景観の保護に関する研究集会を開催する。また、ケーススタディーとして実施してきた高知県四万十川流域の文化的景観に関する調査研究報告書を作成する。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 小野健吉
【スタッフ】	清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [同部研究員]、松本将一郎 [同部アソシエイトフェロー]、宮城俊作 [客員研究員]、小浦久子 [客員研究員]
【主な成果】 文化的景観に関する基礎的な情報の収集、四万十川流域や宇治の文化的景観に関する現地調査等を通じて、文化的景観の価値評価、保存計画立案、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、四万十川流域の文化的景観調査報告書を刊行するとともに、論文・Web サイトを通じて成果を報告した。また、文化的景観の学術及び保護に資する研究会である文化的景観学研究会を2回開催し、その成果を踏まえつつ、文化的景観の保存計画と整備・活用をテーマに文化的景観研究集会（第3回）を開催した。関連して、昨年度開催の研究集会（第2回）の成果報告書を刊行した。	
【年度実績概要】 1. 基礎的・体系的研究 文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、文化的景観に関する学術及び保護行政の情報・課題を共有し、議論を深める場として昨年度末に立ち上げた「文化的景観学研究会」を2回開催した。第1回は「文化的景観の概念」を、第2回は「文化的景観の整備・活用に関わる計画と諸問題」をテーマに開催した。 ここでの議論を踏まえつつ、一昨年度、昨年度に開催した研究集会での検討内容を受け、2010年12月16・17日に「文化的景観の持続可能性—生きた関係を継承するための整備と活用—」をテーマとして文化的景観研究集会（第3回）を開催した。初日は、基調講演の後、「保存計画と整備手法」をテーマに4件の報告と総括の議論をおこない、2日目は5件の報告の後、総合討議をおこなった。これに合わせ、『文化的景観研究集会（第3回）講演・報告資料集』（資料集③）を作成した他、昨年度開催した研究集会（第2回）の成果報告書（報告書①）を刊行した。 2. 文化的景観保護に関する現地調査・研究 昨年度まで実施してきた四万十川流域の文化的景観に関する現地調査成果を整理・分析し、文化的景観の価値評価と保存計画の立案のあり方に関するモデルケースの提示を意図した報告書『四万十川流域の文化的景観調査報告書』（報告書等②）を出版した。 この他、京都岡崎、佐渡相川の文化的景観に関する受託調査研究、宇治の文化的景観選定地区における伝統的家屋調査の受託研究や、全国の文化的景観の視察と担当者との協議を通して、特に都市に関わる文化的景観の価値評価と保存計画立案、文化的景観の整備・活用事業のあり方について、調査報告会や受託調査の成果報告書においての基本的な考え方を整理し、提言として盛り込んだ。	
【実績値】 研究集会開催数：1回（資料集③）、参加者数：地方自治体職員（文化財、都市計画、企画ほか）等、169名。報告書刊行：2冊（①、②）、論文：5件（④～⑧）、研究発表：5件（⑨～⑬）	
【備考】 報告書等：①『文化的景観研究集会（第2回）報告書 生きたものとしての文化的景観—変化のシステムをいかに読むか—』奈良文化財研究所、2010.12、②『四万十川流域の文化的景観調査報告書』奈良文化財研究所、2011.3、③『文化的景観研究集会（第3回）講演・報告資料集』奈良文化財研究所、2010.12 論文：④清水重敦「変化を前提とするものとしての文化的景観」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6、⑤松本将一郎・恵谷浩子「伝統的家屋からみた宇治の文化的景観」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6、⑥恵谷浩子「宇治の文化的景観」『奈文研ニュース No.38』奈良文化財研究所、2010.9、⑦恵谷浩子「広域の文化的景観をどう捉えるか 四万十川流域を事例として」『文化的景観研究集会（第2回）報告書』奈良文化財研究所、2010.12、⑧松本将一郎「都市・集落を文化財とすること—伝統的建造物群と文化的景観—」、『遺跡学研究 第7号』、p220, 2010 研究発表：⑨恵谷浩子「四万十川流域の文化的景観 景観から読み解く四万十川」（四万十・流域圏学会 第10回大会「四万十川流域の活性化」特別記念講演、2010.5）、⑩恵谷浩子「中宇治地区における碾茶生産・製造の有機関係」（平成22年度 日本造園学会関西支部大会、2010.12）、⑪清水重敦「文化的景観における都市建築」（文化的景観研究集会（第3回）報告、2010.12）、⑫恵谷浩子「白川に息づく茶業風景」松本将一郎「白川の民家が面白い」（宇治市白川区伝統的家屋調査中間報告会、2011.1）、⑬清水重敦「相川の景観構造の特質—二極構造を持つ都市とその周辺環境」（佐渡市相川地区文化的景観調査中間報告会、2011.03）	



研究集会の様子

自己点検評価調査

研究所 No.1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 重要文化的景観の国選定事例が増加しつつありながら、その保護手法に関する事例が少なく、かつ基礎的情報が整備されていない現状に対し、①調査及び保護手法に関する研究会及び研究会の開催、②その成果報告書の刊行による情報発信、③現地調査を通じた保護手法についての独創性ある提案、をおこない、文化的景観を学術及び保護行政の両面において持続的かつ発展性のある領域へと広げていくことに貢献し得た。特に研究会及び研究集会においては、専門領域や立場を越えた議論の場を設けることに務めたことで、保護行政及び学術の両面において新しい局面を切り開いている。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考 研究成果を2冊の報告書として出版刊行したほか、学術雑誌等における論文や研究発表による公表をおこなった。 本年度開催した研究集会には169名の参加を得、文化的景観の保護行政をめぐる諸課題に関する活発な議論ができた。また参加者の内97%の参加者から有意義であったという評価を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化的景観に関する基礎的情報の収集・発信、研究会及び研究集会等の実施、四万十川流域等を対象とした現地調査・研究、学会や学術雑誌等での研究成果発表と、年度当初の計画を十全に実施し、的確な成果を公表し得た。これらの成果を踏まえつつ、今後も文化的景観に関する保護行政及び学術に資する成果の的確な公表を目指し、基礎的調査研究と現地調査研究を進めていく。なかでも、文化的景観研究集会に関しては、地方公共団体や専門家等からの評価も高く、次年度以降もこれを開催していくべき事業であると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観の体系化と保護行政に関する実践的研究に関して、基礎的研究、現地調査、研究集会の開催等を通じて、計画通り研究が進捗し、多くの成果を公表し得た。新規中期計画の初年度である次年度は、文化的景観の保護行政に資する目的で、諸外国との比較を含めた文化的景観保護施策に関する研究を実施する。また、文化的景観の概念と保護手法に資することを目的に、研究所独自のフィールドを設定し、専門領域を越えた文化財保護のあり方について調査研究を深めていく。

業務実績書

研究所 No. 2

新2009 No. 2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	民俗技術に関する調査・資料収集 ((1)-①-イ) 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 ((1) - ④)		
【事業概要】 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。 また文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査研究を実施し、保護施策に資するデータを提供する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 俵木 悟（無形文化遺産部）、服部比呂美（客員研究員）			
【主な成果】 民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さらに地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報について、確認作業を行い、データ化を完了した。			
【年度実績概要】 1. 民俗技術に関する調査・資料収集 民俗技術に関する調査・資料収集として、長野県飯田市の水引細工の製作と伝承の現状について、現地調査を行った。その成果は、過去5年間の調査の成果とともに『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』で報告した。 2. 無形民俗文化財の伝承状況に関する調査研究 無形民俗文化財の伝承状況の調査として、千葉県銚子市の銚子大神幸祭、鹿児島県悪石島の盆踊り、鹿児島県いちき串木野市の羽島崎神社春祭などの現地調査と資料収集を行った。また、過去5年間の調査研究に基づく成果を、『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』で報告した。 3. 無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究 ブロック別民俗芸能大会等の公開状況について調査を行った。 4. 研究集会の開催 第5回無形民俗文化財研究協議会を、「無形の民俗の保護における博物館・資料館の役割」をテーマに、2010年11月18日（木）に、東京文化財研究所セミナー室において開催した。4件の事例報告をもとに、コーディネーター1名、コメンテーター2名を含めた総合討議を行なった。協議の成果は『第5回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。参加者98名。 5. 無形文化遺産の記録の所在情報のデータベースの構築 昨年度末までに収集した記録の所在情報のデータについて整理を行い、その結果を一覧表にして、情報提供者である地方自治体に配布し、情報の確認、訂正の作業を行って、データ化を完了した。その経過については学術雑誌で報告した。			
【実績値】 論文等発表数：3件（①～③） 研究会等発表数：1件（④）			
【備考】 ①俵木悟「無形民俗文化財の映像記録-「使える記録」の実現に向けて-」『日本民俗学』264、pp. 122-137、10.11 ②宮田繁幸「無形民俗文化財の公開と国際交流-「国際民俗芸能フェスティバル」の15年-」『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』pp. 39-57 ③俵木悟「民俗芸能の伝承組織についての一試論-「保存会」という組織のあり方について-」『無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書』pp. 59-79 ④俵木悟「文化財としての民俗芸能、昭和30～40年代の再検証」、第62回日本民俗学会年会（東北大学）、10.10.03			

自己点検評価調査

研究所 No. 2

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等	発表				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形民俗文化財としての民俗技術や民俗芸能の伝承状況や伝承組織の調査と情報収集、無形民俗文化財研究協議会の実施、学会や学術雑誌等での研究成果発表などを十分実施できた。また中期計画最終年度として、調査研究報告書も予定通り刊行できた。伝承組織の実態の調査は、伝承者の不足に悩む多くの保護団体に対して有益な情報提供が可能であり、今後も継続していきたい。また無形民俗文化財研究協議会は、この数年、それまで以上の多数の参加者を集め、反響も大きくなっているので、テーマ設定を工夫するなどして、継続的かつ発展的に今後も取り組んでいきたい。記録所在データに関しては、データ化は完了したが、今後はその有効な公開方法につきさらに検討を進めていく。以上、本年度の目標は100%達成できたと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は、中期計画最終年度として、報告書も刊行でき、当初の計画は順調に達成できた。次期に関しては、取り組むスタッフの専門性を生かしつつ、今中記計画の成果を発展的に継承していく。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジアの美術に関する資料学的研究 (① - ② - ア)
【事業概要】 日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 塩谷純
【スタッフ】 田中 淳、勝木言一郎、津田徹英、山梨絵美子、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）、中野照男（副所長）、相澤正彦、吉田千鶴子、三上 豊、森下正昭（以上、客員研究員）	
【主な成果】 (1) 情報資料の収集のための調査：横山大観《山路》の調査。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年記資料集成 十五世紀』のデータ入力。古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。 (3) 研究会の開催：『美術研究』400号、『美術史論壇』30号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」—美術史における「評価」」の開催。オープンレクチャーの開催。 (4) 研究成果報告書の編集・刊行：『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』の刊行。	
【年度実績概要】 (1) 情報資料の収集のための調査 永青文庫が所蔵する横山大観《山路》の調査を、寄託先である熊本県立美術館にて行った（塩谷）。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成 『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』の刊行にむけて蓄積したデータ（総登録数4181件、重複を含む）のうち載録分（全833件）の校正、ならびに未収載分の整理統合作業を完了した（綿田）。既に当研究所のBによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を行った。作業にあたっては目録（出典等）のみならず当該記事本文も入力し、公開時の利便性を図った。今年度は約1,800件の入力を終えた（土屋）。 (3) 研究会の開催 2月27日に『美術研究』400号、『美術史論壇』30号記念日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」—美術史における「評価」」を開催、洪善杓氏（韓国美術研究所・梨花女子大学）による基調講演、張辰城氏（ソウル大学）・文貞姫氏（韓国美術研究所）・綿田・江村による発表、および田中・相澤による司会でディスカッションを行なった。同シンポジウムは3月12日にソウルでも開催、基調講演を田中が務めた。またオープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと10月15・16日に開催した。 (4) 報告書の刊行 日本絵画史関係の年記資料のうち15世紀の銘記類、833件を翻刻して年代順に集成した『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』を刊行した。	
【実績値】 学会誌等への掲載論文数2件（①～②） 学会等での発表件数5件（③～⑦） 報告書刊行件数1件（⑧）	
【備考】 ①田中淳「東京文化財研究所『日本美術年鑑』とデジタルアーカイブ」 水谷長志編著『MLA連携の現状・課題・将来』 勉誠出版 10.6 ②土屋貴裕「天狗草紙」の作画工房 『美術研究』403 11.03 ③皿井舞「神護寺薬師如来の史的考察」 『美術研究』403 11.03 ④綿田稔「山水長巻考—雪舟の再評価にむけて」 日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」—美術史における「評価」」 11.2.27 ⑤江村知子「江戸時代初期風俗画の表現世界」 日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」—美術史における「評価」」 11.2.27 ⑥田中淳「創作と評価—萬鉄五郎《風船を持つ女》を中心に」 日韓共同シンポジウム「視線の「力学」—美術史における「評価」」 11.3.12 ⑦津田徹英「中世における真宗祖師先徳彫像の制作をめぐる」 企画情報部オープンレクチャー 10.10.15 ⑧塩谷純「秋元洒江と明治の日本画」 企画情報部オープンレクチャー 10.10.16 ⑨『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』 東京文化財研究所 11.03	

自己点検評価調書

研究所 No.3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は15世紀の日本絵画についての銘記類を集成した『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』を刊行、文化財研究の基盤整備に大きく寄与し、また日韓共同シンポジウム「人とモノの「力学」—美術史における「評価」」を開催、同内容のシンポジウムはソウルでも行われ、日韓両国の研究交流を促進したためAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	上記の成果の他、前年度より継続して行なっている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化も順調に進み、また今年度より新たに横山大観の代表作《山路》の多角的な調査を開始、画材や来歴についての新知見を得ることができた。これらの蓄積されたデータについては、次期中期計画において公開に努めることにしたい。

業務実績書

研究所 No. 4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する総合的研究（(1)-②-イ）		
【事業概要】 多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第一にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第二に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子
【スタッフ】 田中 淳、塩谷 純（以上、企画情報部）、三上 豊、丸川雄三（以上、客員研究員）			
【主な成果】 未公開資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための準備を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、黒田記念館にてデジタルコンテンツ「写真で見る黒田清輝の日常」を作成し公開した。			
【年度実績概要】 1 未公開資料の収集整理とデータ化に向けた調査研究では以下の3件を行うことができた。 （1） 矢代幸雄筆ベレンソン宛書簡の翻刻および関連調査を行った。 （2） 笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理を進めた。 （3） 既刊の『日本美術年鑑』の年史、文献目録、物故者の各データ（1936年から2003年）を創IMAGINE上で試験的に公開した。 2 資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開促進としては、以下を行った。 （1） 昨年度の受贈作品5点を黒田清輝展（岩手県立美術館、7.17－8.29）で特別公開し、それに伴って配布するパンフレットに掲載するために当該作品の画像と作品解説を作成した。 （2） 黒田家遺族から寄贈された資料写真の中から73点を選び、解説を付して「写真で見る黒田清輝の日常」と題するデジタルコンテンツを作成し、黒田記念館に設置した64インチ大型タッチパネルにて公開した（2010.11.3～）。そのうち3点の写真については最新の「絵引き」技術を用い、被写体部分をタッチすることによって、それに関する解説が見られるように作成した。			
【実績値】 研究会等発表 3件（①～③） 論文掲載数 5件（④～⑨）			
【備考】 ①山梨絵美子 「黒田清輝と西洋文学補遺一ド・ラマルティヌ「湖」と「湖畔」をめぐる」企画情報部研究会 10.5.19 ②山梨絵美子 東アジア近代洋画史再考のための二、三の視点 国立台湾師範大学（台湾）10.6.7 ③田中 淳「日本近代美術におけるデューラー受容」、シンポジウム「デューラー受容史 500年」、明治学院大学文学部芸術学科、10.11.13 ④塩谷 純「川端玉章の研究（三）」 『美術研究』401 2010.8 ⑤山梨絵美子「渡辺幽香 幼児図」『国華』 1382号 10.12 ⑥田中 淳 「『後期印象派・考－1912年前後を中心に』連載をめぐる」、『美術史論壇』31号、韓国美術研究所、2011.1 （韓国語、日本語併載） ⑦山梨絵美子 「平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品について－《舟》、《芍薬》、《日清役二龍山砲台突撃図》、《林政文肖像》二点」 『美術研究』402号、10.2 ⑧田中 淳「画家中川一政 ひねもす走りおおせたる者」、『没後20年 中川一政展』カタログ（日本橋高島屋）、11.3			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4122

自己点検評価調書

研究所 No. 4

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数	報告書件数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集整理とデータ化、および近現代視覚芸術に関する調査研究ともに順調に推進することができた。ウェブ上への公開や最新のデジタル技術を用いたタッチパネルでの公開等、調査成果の発信も積極的に試み、公開方法についても智識と経験を蓄積することができた。次年度以降、さらなる内容の充実につなげていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って実施することができ、また、ウェブ上での公開を進めることができた。ウェブ上での公開により、国内のみならず日本近代美術史研究の国際的な広がりを獲得しつつある。次年度の東アジア等諸地域における近現代美術の交流に関する調査研究に活かしていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の技法・材料に関する広領域的研究（(1) -②-ウ）		
【事業概要】 文化財にかかわる諸分野との提携による作品の多角的研究を目指す。具体的には作品を構成する材料や用いられた技法、制作の過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたかなどを、関係の文献史料や、あるいは作品そのものに対する科学的・光学的分析（X線撮影など）を援用しながら解明し、文化財についてより深く考究していくことを目的としている。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 綿田 稔
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）			
【主な成果】 本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像の技法についてこれまでの調査研究成果をまとめた報告書を刊行した。また、ホームページ上で公開している奈良時代史料にあらわれた彩色語彙についてのデータベースを再点検し、精度の向上をはかった。			
【年度実績概要】 本年度は過去4年にわたって行ってきた脱活乾漆技法の解明のため作品調査を総括した報告書『研究資料 脱活乾漆像の技法』を刊行した。 また研究の発展的継承を期し、木造彫刻の調査を行った（京都・神光院蔵、薬師如来立像および地藏菩薩立像）。 美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）のデータ集積とホームページ上での公開を行ってきたが、今年度は全約 6,500 件のデータの校正ならびに再整理を行い、精度の向上を図った。同時に索引を作成し、報告書に添付した。 研究会 2 件（2010 年 11 月 24 日、皿井舞「作品紹介 京都神光院・地藏菩薩立像」／2011 年 12 月 17 日、皿井舞「平安初期神仏習合彫刻史試論 京都・神光院薬師如来立像をめぐる」）を開催し、調査成果を報告した。 前年度までに寄贈を受けた資料のうち、技法材料研究ととくに関わりの深い久野健旧蔵資料および秋山光和旧蔵資料の整理を進めた。			
【実績値】 彩色関係資料データベース 全約 6,500 件の校正並びに再整理 報告書数 1 件 ① 論文掲載数 2 件 ②～③ 発表件数 2 件 ④～⑤			
【備考】 ①『研究資料 脱活乾漆像の技法』 東京文化財研究所 11.3 ②津田徹英「研究資料 奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」『美術研究』401号 pp. 50-56 10.8 ③津田徹英「脱活乾漆技法覚書」『研究資料 脱活乾漆像の技法』 pp. 25-32 11.3 ④皿井舞「作品紹介 京都神光院・地藏菩薩立像」企画情報部研究会 東京文化財研究所 10.11.24 ⑤皿井舞「平安初期神仏習合彫刻史試論 京都・神光院薬師如来立像をめぐる」企画情報部研究会 東京文化財研究所 10.12.17			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4123

自己点検評価調書

研究所 No. 5

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書刊行数	論文掲載数	発表件数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行ってきた。計画最終年度として予定した成果を得られたため、Aと判断した

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。本中期計画で中心として扱った脱活乾漆技法以外にも問題は多岐にわたるため、次期中期計画においても本研究を発展継承していきたい。

業務実績書

研究所 No. 6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究((1)－②－エ)
【事業概要】 古都に所在する寺社等が所蔵する歴史資料や書跡資料について継続的、悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査をおこない、現存資料の実態の把握に努め、その調査成果を目録、データベース等により、また重要資料については翻刻をおこない公開する。このような文化財の総合的研究の基礎となる調査を基本とし、その上で記載内容を分析して文化財の歴史的性格・特徴等を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】 谷本 啓(任期付研究員)、渡辺晃宏(都城発掘調査部史料研究室長)、馬場 基、山本 崇(以上、同部主任研究員)、浅野啓介、桑田訓也(以上、同部研究員)、加藤 優(客員研究員)、吉川真司(客員研究員)	
【主な成果】 石山寺については、昨年度からの調査成果に基づいて、石山寺一切経の大智度論に関する論稿を公表できた。奈良時代の知識経として著名なものだが、後世に数種類の経典を取り合わせて現在の姿になったものを、詳細に調査することにより、その取り合わせ状況を明確にできた。また平城宮周辺等の旧家・自治会等が所蔵する資料の調査を進め、江戸時代から明治時代の平城宮跡の状況、その保存運動に関する資料を収集・公表できた。	
【年度実績概要】 本年度は、興福寺・薬師寺・仁和寺・東大寺・氷室神社大宮家・三仏寺所蔵の書跡資料・歴史資料調査を行った。興福寺調査は、第108函～111函の調書を作成した。写真は第4函・90函・91函を撮影した。薬師寺調査は、第45函・49函・51函～56函の調書作成と、第24函の写真撮影を継続して実施した。仁和寺調査は、御経蔵聖教第35函～41函の調書原本校正と、第33函～38函の写真撮影を実施した。 東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第4号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第5函・第15函の写真撮影を実施し、また第59函・61函～65函を調査して、目録データをパソコンに入力した。 また三徳山三仏寺の古文書調査を実施し、第1函・2函の調書作成・写真撮影をおこなった。 氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成巻文書仮第3函1巻～19巻の調書作成を実施した。 また、平城宮跡周辺の旧家等が所有する絵図・古文書や、明日香村の自治会が所有する典籍等について、調査・写真撮影を実施した。 その他調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。	
	
三仏寺古文書調査風景	
【実績値】 論文等数：論文2件(①②)、公刊図書1件(③) 収集資料点数 興福寺：調書作成資料点数163点、写真撮影資料点数226点 薬師寺：調書作成資料点数309点、写真撮影資料点数28点 仁和寺：調書原本校正資料点数886点、写真撮影資料点数417点 東大寺：調査データ入力資料点数624点、写真撮影資料点数324点 三仏寺：調書作成資料点数282点、写真撮影資料点数208点 平城宮跡周辺・明日香村諸家：調書作成資料点数169点・写真撮影資料点数125点	
【備考】 ① 吉川 聡「整備以前の平城宮跡」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6 ② 吉川 聡「石山寺一切経「大智度論」の基礎的検討」『石山寺資料叢書 史料篇第三』法蔵館 2010.6 ③ 奈良文化財研究所『明治時代平城宮跡保存運動史料集』奈良文化財研究所史料第87冊、2011.3	

自己点検評価調査

研究所 No. 6

1. 定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		
備考 古都に所在する寺社には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。そのため、着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、正確性・継続性に優れている。このような調査が今後の所蔵者の管理の基礎となり、また研究の基礎となるものであり、発展性がある。今年度は特に、石山寺・明治以前平城宮跡に関する成果を公表し、また、三仏寺の調査を実施することができた。以上より A と判定した。						

2. 定量的評価

観点	調査対象箇所数	論文等数	調査点数			
判定	A	A	A			
備考 調査対象箇所数は、年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。論文等数・調査点数は、それぞれ目標値2件・500件であり、実績値はそれと同等または上回っているため、Aと判定した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、氷室神社大宮家の調査は計画通り実施し、石山寺はその成果の一部を公表できた。また薬師寺・仁和寺のほか、三徳山三仏寺の調査も実施することができた。そして平城宮跡周辺や明日香村の諸家も調査して成果の一部を公表できた。以上の進捗状況を総合的に判定してAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査事業は堅調に実現できたと考える。三徳山三仏寺は、今年度初めて調査したが、まだ緒に就いたばかりであり、今後も継続的に実施する必要がある。他の寺社についても、成果を公表するまでには更なる調査が不可欠であり、地道な調査研究を継続する必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究 ((1) - ② - オ)
【事業概要】 わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復元に資するため、古代建築の技法についての再検証（調査研究）を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	建造物研究室長 島田敏男
【スタッフ】 箱崎和久 [都城発掘調査部遺構研究室長]、黒坂貴裕、大林潤、番 光、鈴木智大、海野聡、高橋智奈津 [以上、同部研究員]、清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、恵谷浩子 [以上、同部研究員]、松本将一郎 [同部特別研究員]、成田聖 [企画調整部任期付研究員]、増井正哉 [奈文研客員研究員]	
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する研究を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。	
【年度実績概要】 1. 所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1956 年度から 1958 年度分のワード文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板（愛知・三重・滋賀県分）を整理して、画像をデジタル化した（デジタル化は外注）。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 2. 古代建築の技法に関する調査研究では、昨年度に開始した法隆寺所蔵の古材調査を継続的におこなった。本年度は、かつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査をおこなった。なお、調査にあたっては、竹中大工道具館の協力を得た。 3. 建造物の基礎データ収集等を目的とした愛媛県松山市の晩翠荘、福井県若狭町の倉見屋荻野家および高知県高知市の竹林寺客殿の調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成・報告書編集をおこなった。 4. 海外関連事業として、日中韓の3国の文化財研究所における共同研究の一環として、2010 年 9 月 3・4 日に、奈良文化財研究所において、第 2 回日・中・韓建築文化遺産保存国際学術会議を開催した。研究発表をおこなうとともに、討議をおこなった。 5. 海外協力として、文化庁がおこなう協力事業の一環として、ベトナムフエ省フクティック村およびフーホイ村の調査をおこなった。また、奈良文化財研究所を主体として調査をおこなっている、カンボジア・アンコール遺跡群西トップ寺院について、建築的調査をおこなった。	
【実績値】 論文等数 20 件（公刊図書 9 件①～⑨、論文等 11 件⑩～⑳） 学会等発表件数 0 件 保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 2167 枚、現状変更資料入力等 1956～1958 年分 古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査 91 回 保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真 6 件 407 枚、建造物保存図 4 件 113 枚	
【備考】 ①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1956～1958（本文編）』2011.3 ②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1956～1958（図版編）』2011.3 ③奈良文化財研究所『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究 2 木部』2010.25 ④島田敏男他『ベトナム社会主義共和国 フクティック村 村落調査報告書』2011.3 ⑤大林潤他『晩翠荘調査報告書』2010.125 ⑥黒坂貴裕他『若狭町倉見屋建造物調査報告書』2011.3 ⑦島田敏男他『驚原八幡宮総合調査報告書』2011.3 ⑧黒坂貴裕他『奈良県近代和風建築総合調査報告書』2011.3 ⑨島田敏男他 1 名『山田寺とその遺物』 ⑩成田聖他 1 名「西トップ寺院の建築調査－2009 年度の成果－」 ⑪箱崎和久「ベトナム中部民家の特質－フエ省フクティック村の調査から－」 ⑫海野聡「法隆寺所蔵古材調査 1」 ⑬黒坂貴裕「奈良県近代和風建築とその設計者」 ⑭島田敏男「津和野町社寺建築調査」 ⑮鈴木智大「山木遺跡出土建築部材の調査」(⑩～⑮『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6) ⑯島田敏男「日本の遺跡における建物復元の考え方」 ⑰大林潤「日本における発掘遺構と復元研究」 ⑱清水重敦「平城宮第一次大極殿の復元と古代建築遺構研究の現在」(⑯～⑳『第 2 回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議予稿集』2010.9 ⑲島田敏男「魚梁瀬森林鉄道を歩く①～⑥」『高知新聞 2010.5.19～24 日』 ⑳島田敏男「大極殿の復元と研究」『毎日新聞 2010 年 5 月 12 日夕刊』	



法隆寺古材実測風景

自己点検評価調査

研究所 No.7

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	S	A	
備考 文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は継続的に実施しており、地味な作業ではあるが、適時性・継続性・正確性の上で高く評価できる。古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、新たに「技術・技法」等の視点を加え研究するもので、独創性のある研究内容といえる。特に、法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査おこない、成果を資料化することは、古代建築研究の展開におおきく貢献するものである。さらには、修理にともなっ取り替えられる古材の価値を明確にすることによって、その保存に資するものである。したがって、上記の5項目のすべての観点で高く評価できる。また、ベトナム・カンボジアにおける協力事業については、詳細な調査方法およびその成果を示すことにより、当該国における調査研究の水準を高めるとともに、当該国における文化財保存に貢献している。受託業務として行った松山市晩翠荘、若狭町倉見屋荻野家、高知市竹林寺客殿の調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にするとともに、その保存・活用方針を提案しており、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、おおきく貢献している。以上の点を総合的に判断し、特に古代建築関連で顕著な成果に結実し、今後もそれが期待される継続性についてはS評価とし、その他項目についてもA評価と判断する。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	資料整理数				
判定	A	A				
備考 論文等数は、20 件に達した。目標値に掲げた出版物のうち1件は諸般の事情で出版し得なかったが、予定出版物以外に受託調査成果の報告書2件および昨年度おこなった調査2件についても報告書の執筆編集をおこない、報告書が刊行された。また、予定をしていた国際学術シンポジウムを開催し、多くの研究者の参加を得た。総合的に判断して論文等数については、Aと判定した。資料整理数は特に目標値を掲げていないが、十分に成果が認められるので、Aと判定した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。古代建築の研究に関しては、法隆寺古材調査は、現段階ではまだ基礎的な作業であるが、今後高く評価されるものとする。受託の形態で行った松山市晩翠荘、若狭町倉見屋、高知県竹林寺の建造物調査において、諸建築の具体的様相を究明できたことは、委託者はもちろん、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査にも反映できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールしたい。後者は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として継続的におこない、随時その成果を報告書として刊行してゆく予定である。今年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

業務実績書

研究所 No. 8

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究（(1)～(3)）		
【事業概要】 わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。 また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的交流を推進するための協議を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、菊池理予（以上、無形文化遺産部）、森下愛子（客員研究員）			
【主な成果】 文化財保護委員会が作成した音声資料、戦前に開発・実用された音声記録媒体フィルモン、現在伝承されている狂言歌謡、能管の製作技法、文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録について調査研究をおこなうとともに、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこない、伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室との合意書に基づき、研究員の相互派遣を実施した。5 年間のまとめとして『無形文化財の伝承に関する資料集』を発行した。			
【年度実績概要】 現在伝承されている狂言小歌のうち、初期歌舞伎と交流のあった歌謡について検討し、現在でも江戸初期の音楽構造をそのまま伝えていることを検証した。成果は楽劇学会大会で口頭発表し、『楽劇学』18 号に掲載した。 金沢と名古屋で別個に伝承されている和泉流狂言の技法について調査をおこない、伝承の違いを明らかにした。成果は12月12日、石川県立能楽堂で開催した第5回無形文化遺産部公開学術講座で発表した。 明治2年に執筆された能管の製作方法に関する伝書の翻刻を行い、プロジェクトの報告書に掲載した。 戦前に開発・実用化された国産の音声記録媒体で、未だその全容が明らかとなっていないフィルモン音帯について、早稲田大学演劇博物館と共同で調査を行い、その成果を報告書に掲載した。 二世鶴沢清八による義太夫節の曲節に関する音声資料（1958年2月収録）について調査を行い、その成果をプロジェクトの報告書に掲載した。 工芸技術に関しては、実地調査を行いつつ文化財保護委員会及び文化庁が行った工芸技術記録、及び近世における染織技法書について調査・検討を行い、その成果をプロジェクトの報告書に掲載した。 連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、伝承が変化しつつある宝生流謡曲及び喜多流謡曲について、今井泰男師と喜多六平太師による実演記録を作成した。			
【実績値】 学会等発表件数 2件（①、②） 論文等発表件数 6件（③～⑧）			
【備考】 ①高桑いづみ「独吟一管「海道下り」の伝承再考」 楽劇学会第18回大会 10.07.18 ②高桑いづみ「和泉流：狂言小舞の音楽」 第5回無形文化遺産部公開学術講座 石川県立能楽堂 10.12.12 ③飯島満「フィルモン音帯に関する調査報告」『無形文化遺産研究報告』5 11.03 ④飯島満「資料紹介 二代目鶴沢清八『義太夫節の種類と解説』」『無形文化財の伝承に関する資料集』11.03 ⑤高桑いづみ「翻刻と解題『横笛細工試律便覧』」『無形文化財の伝承に関する資料集』11.03 ⑥高桑いづみ「独吟一管「海道下り」の伝承再考」『楽劇学』18号 11.03 ⑦菊池理予「工芸技術記録に関する研究－『江戸小紋工芸技術記録』を通じて－」『無形文化財の伝承に関する資料集』 11.03 ⑧菊池理予「我が国における工芸技術保護の歴史と現状－染織技術を中心として－」『無形文化遺産研究報告』5 11.03			

自己点検評価調書

研究所 No.8

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保護委員会の録音を継続して調査し、一般にその成果を公開したのは、高く評価できる。また、狂言歌謡の調査に関して、その成果を伝承地で開催した公開学術講座で公表した意義も大きい。伝承が危ぶまれる芸能の実演記録も他にない事業であり、適時性にかなうものである。また、公開学術講座は金沢大学と共催、フィルモンについては近代文化遺産研究室とともに早稲田大学演劇博物館の事業との協力であり、研究成果を広く外部と共有でき、今後の研究交流にも得るところが大きかった。なお狂言歌謡の調査、工芸技術記録の調査は緒に就いたばかりであり、本成果を踏まえ次期中期計画でも継続しておこなう予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	総合的評価で記した通り、多角的に無形文化財の伝承について成果をあげることができ、年度計画を100%達成できた。次年度計画ではこの方向性を保ちながら、さらに深く調査研究を行いたいと考えている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮跡東方官衙地区（第466次）の発掘調査（(1)－⑤－ア－1）
【事業概要】 平城宮東方官衙地区の学術発掘調査。中期計画にもとづき重点的に発掘調査を遂行している地区で、東西6m、南北111mの調査区を設定した。調査面積は約666㎡。調査期間は平成22年1月18日～4月28日。現地説明会を4月17日に開催し、750名の参加があった。	
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）
【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 渡邊晃宏、国武貞克、桑田訓也、海野聡、中村亜希子（以上、都城発掘調査部）、金田明大、山崎 健（以上、埋蔵文化財センター）、中村一郎（企画調整部）	
【主な成果】 基壇をもつ東西棟礎石建物が南北方向に3棟築地塀を挟んで建つことが明らかになった。また周辺の地中レーダー探査により、西隣にも同様の建物配置となる遺構が存在することも判明した。さらにこれらの建物群の南北でそれぞれ宮内道路とそれに伴うと推定される築地塀を検出した。以上により、ある官衙区画の南北範囲を確認することができた。その南には掘立柱建物による別の官衙区画を検出した。また礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。	
【年度実績概要】 主な調査成果は次の通り。 ①基壇を伴う東西棟の礎石建物が3棟、築地塀を挟んで建ち並ぶ様相が明らかとなった。礎石建物の構造は、規模や床の有無などで3棟それぞれが異なった様相をもつ。 ②今回の調査区の北方に位置する平城429次調査区の南端で想定された築地塀と、今回調査区の北端で検出した築地塀からなる東西中軸線は、東区朝堂院東門の中軸線と一致する。このため両築地間は東区朝堂院東門を中軸とする、南北約12m（40小尺ないし35大尺）の東西方向の宮内道路を想定できる。これは東方官衙地区が東区朝堂院と一体の配置計画に基づいていることを示すと考えられる。 ③レーダーによる地中探査の成果によると、基幹排水路SD2700から東の区画には、東西棟礎石建物が東西に2棟ずつ、南北方向に3列にわたって合計6棟並ぶとみられる。今回はその東の列の建物と築地塀を、調査したことになる。このようにレーダーによる地下探査によって未発掘区を含めた官衙区画の全体像を把握した。 ④礎石建物群の下層から神亀・養老年間の木簡が出土した。このうちの1点から『続日本紀』に登場する大伴直宮足の役職が武蔵国豊嶋郡大領であったことが判明した。	
【実績値】 論文等数：6件（備考欄参照） 発表件数：2件（報道発表1回、現地説明会1回） 出土品：金属器1点、石器1点、木器1箱、木簡1箱、土器10箱、鬼瓦1点、軒瓦5箱、丸瓦・平瓦90箱 記録作成数：遺構実測図（A2判）19枚、遺構写真（4×5）20枚	
【備考】 ①『平城宮東方官衙地区（平城第466次調査）記者発表資料』2010.4.15 ②『平城宮東方官衙地区（平城第466次調査）現地説明会資料』2010.4.17 ③国武貞克「平城宮東方官衙地区（平城第466次）の調査」『奈文研ニュース』No.37 2010.6 ④国武貞克・金田明大「東方官衙地区の調査―第466次」『奈良文化財研究所要 2010』2010 ⑤国武貞克「東方官衙地区の調査―第466次」『奈良文化財研究所要 2011』2011（予定） ⑥金田明大「土の中には何かがある?? 平城宮東方官衙地区の調査」『奈文研ニュース』No.39 2010.12	



調査区全景（南東から）

自己点検評価調書

研究所 No.9

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	適時性			
判定	A	A	A			
備考 正確性：複数の研究員による発掘調査を実施し、建物遺構を検出することができた。4月8日には都城発掘調査部員による現場検討会を実施して意見を集約し、その後の調査に活かすことができた。 継続性：中期計画にのっとり実施した第407次・第429次・第440次調査の成果とあわせて、東方官衙地区の全体構造の解明に寄与した。 適時性：調査成果を迅速かつ広く公表した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
備考 論文等数：『奈良文化財研究所紀要 2010』で調査成果の概要を報告した。調査の概要についてはほかに『平城宮東方官衙地区（平城第466次調査）現地説明会資料』などで、上記報告に先駆けて公開し、『奈文研ニュース』No.37において広く普及につとめた。これらに加えて『奈良文化財研究所紀要 2011』で調査成果の詳細を報告する予定である。 発表件数：報道発表や現地説明会で、調査の成果を国民に広くかつ迅速に公開した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東方官衙地区の構造およびその性格の解明に寄与し、その成果を論文として発表するとともに、現地説明会を開催し、新たな知見を広くかつ迅速に国民に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿ってすでに実施した第407次・第429次・第440次調査の成果を踏まえ計画をたてることで、的確な調査を遂行でき、東方官衙地区の様相をさらに一層明らかにすることができた。この調査により、次回に調査を予定している同じ区画の東西方向の調査計画の立案にも寄与した。

研究報告 No. 1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡東院地区（第469次）の発掘調査（（1）－⑤－ア－2）		
【事業概要】			
平城宮跡東院地区の学術発掘調査。調査区は東院地区の西北部に位置し、調査面積は850㎡。調査期間は、平成22年4月1日～10月29日である。7月15日に調査成果を報道発表し、7月17日には現地説明会をおこない、約1,000名の参加があった。			
【担当部課】	都城発掘調査部	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】			
箱崎和久、馬場 基、芝 康次郎、中村亜希子、小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、中村一郎・栗山雅夫・鎌倉 綾（以上、企画調整部）			
【主な成果】			
平城宮跡東院地区の西北部にあたる調査区で、建物跡、掘立柱塀、溝を多数検出した。これらは周辺の調査成果も参照すると6期以上に区分できる。おもな遺構としては、調査区中央部を東西に流れる新旧2条の石組溝、調査区北部の周囲を溝で区画された東西棟礎石建物、推定三面廂付の東西棟建物などがある。 周辺の調査成果と比較して、建物が小規模になる点や、食器類をはじめとする大量の遺物が出土する点から、東院地区のバックヤードとしての機能が推定できる。			
【年度実績概要】			
2006年度から計画的におこなっている東院地区の調査で、今年度の調査区は、昨年度の調査区の北方、および1965年に行われた第22次南調査区の東方に設定し、昨年度に検出した東西通路の北方にあたる地区の様相解明を目的とした。 検出遺構は建物8棟、掘立柱塀17条、溝10条などである。これらは少なくとも6期以上に区分できるが、時期を通して以下のような重要な所見を得ることができた。			
【南北を分断する数条の区画】 調査区中央部と北部で、数時期にわたって建て替えられた東西塀を確認した。中央部の東西塀に沿って幅約1mの石組溝が2条ある。これは当初の石組溝と、それを少し北に付け替えた溝である。これらの溝をまたぐ建物が存在しないため、塀の有無に関わらず、区画溝として機能していた可能性が高いと考えられる。各時期を通じ、この調査区中央部の溝と塀を境界として南北に建物群が配置され、北側の区画は、内部にある東西塀の存在から、時期によってさらに細かく区画されていたとみられる。			
【中央の区画施設を境とした南北で異なる建物群】 中央の区画施設（石組溝と塀）をはさんで南北では、建物群の規模と展開が異なる。南側の区画で相対的に大規模なものが多く、北側は小規模である。この差異は、遺物の出土状況や内容にも表れており、南側よりも北側での出土量が多い傾向がある。遺物の内容は、食器類や大甕が目立つことから、北側の区画でこれらを保管あるいは使用していた可能性がある。こうした状況は、今回の調査区より南方で見つかった大規模な総柱建物群が展開する空間では、認められない。遺物の内容と豊富さは、これらの空間とは性格が異なることを示し、この付近は東院での人々の生活を支えるバックヤード的機能を備えた空間であったと考えられる。			
			
		調査区中央部東西石組溝（東から）	
【実績値】			
論文等数：3件（①～③）			
発表件数：1件（報道発表1回）			
出土品：土器コンテナ162箱、軒瓦188点、丸瓦・平瓦2830.503kg、磚80.675kg、礎板、帯金具、佐波理碗、神功開宝			
記録作成数：実測図（A2判）50枚、遺構写真（4×5）43枚			
【備考】			
①『平城宮東院地区西北部の調査 平城第469次調査記者発表資料』2010.7.15			
②芝 康次郎・桑田訓也「平城宮東院地区西北部の調査（平城第469次）」『奈文研ニュース』No.38 2010.9			
③芝 康次郎・桑田訓也ほか「平城宮東院地区の発掘調査—469次」『奈良文化財研究所紀要2011』2011（予定）			

自己点検評価調査

研究所 No. 10

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 850 m²という比較的小規模な調査区であったのにも関わらず、東院地区の構造を知る上で、重要な成果を得ることができた。 適時性：平城京遷都 1300 年祭が開催されており、多くの来場者が訪れるなかで、調査区の西で発掘作業を間近に見ることができるよう、調査区のフェンスの位置などを工夫した。これには遷都 1300 年協会によるボランティアガイドの協力があつたが、毎日、遺構の概要と調査の進捗状況などをガイドへ説明した。これによってガイドの理解度も大きく増した。 発展性：調査成果は、平城宮をはじめとする都城研究に大きく貢献すると考えられる。 継続性：未調査の区域への建物や構造物の連続性が確認でき、次調査への足がかり的な成果を得ることができた。 正確性：遺跡は整地土層が複雑な谷部に立地するため、遺構の検出には困難を極めたが、複数の調査員による綿密な観察により、複雑な土層堆積を理解し、多くの建物跡を検出することができた。また都城発掘調査部員による現場検討会を7月8日とおこなって意見を集約し、その後の調査に活かすことができた。それ以外にも適宜都城発掘調査部員が現場を訪れて、検討をおこなった。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				
備考 本調査区では、東院地区のこれまでの調査区と比較してより多くの遺物が出土した。これは調査区の性格によるところが大きい、より上層の堆積層から作業員による掘削作業を開始したこともその要因かもしれない。出土遺物については整理・調査中である。 調査期間は平城京遷都 1300 年祭の期間中であり、調査区脇で間近に発掘調査を見ることができるよう、調査区を隔てるフェンスの位置を工夫し、公開施設とした。これには遷都 1300 年協会によるボランティアガイドの協力を得て、随時、来場者に解説をおこなっていただいた。これによって調査成果をリアルタイムで公表することができた。これにはその成果もあつてか、調査中盤におこなわれた現地説明会では、約 1000 人の聴衆を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまでの調査からうかがえる東院地区の性格とはやや異なる調査成果を得た。これは東院地区ひいては平城宮の研究を進める上で重要な成果である。また、平城京遷都 1300 年祭にあたり、調査を「フィールドミュージアム」として広く市民に公開できたことは、今後の平城宮跡の発掘調査のあり方を考える上で、一つのモデルケースとなったと思われる。今回の調査では、遺跡の立地から遺構の検出に困難を極め、調査期間を延長したが、調査成果を今後の調査へ活かすことができるようにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	構造物が多い点と土層堆積の複雑さから難しい発掘調査であつたが、2 現場体制で調査を終えることができた。今後、東院地区の発掘調査を継続していくためには、上記のことを念頭に置き、大胆かつ細心の調査を進めていく必要がある。

業務実績書

研究所 No. 11

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	西大寺旧境内（第473次）の発掘調査（(1)－⑤－ア－3）		
【事業概要】 個人住宅新築にともなう事前の発掘調査。調査面積は全体で約 15 m ² 。調査期間は平成 22 年 9 月 22 日～10 月 1 日。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 鈴木智大、小池伸彦、清野孝之、桑田訓也（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）			
【主な成果】 『西大寺資財流記帳』にみえる薬師金堂の回廊推定地の調査。今回の調査では、回廊の痕跡は検出されず、金堂院を囲む回廊は、当地よりも南に位置する可能性が高まった。			
【年度実績概要】 西大寺旧境内中枢部の基礎データを獲得した。層序は、地表から現代の盛土、耕作土、床土、灰褐色粘土（包含層。瓦片多含）となり、包含層の直下（現地表面から約 150cm 下、H=75.30m）で検出をおこなった。検出した面は、整地土が場所により異なり、東側は地山（黄褐色砂質土混青灰色砂礫土）であるが、西北隅ではその上に灰褐色粘質土層が、西南隅には灰色砂質土がのる。 上記の検出面においては、土坑 1 基、L 字型の溝 2 条を確認した。 〔土坑 S X 1〕直径 1.3m。埋土は、黄褐色粘土。直径 25cm ほどの花崗岩、凝灰岩が出土した。礎石の据付穴の可能性がある。 〔L 字型溝 S D 2・3〕埋土は黄褐色粘質土。南北溝 S D 2 が、西にまがり東西溝 S D 3 となる。深さは S D 2 に比べ、S D 3 は 10cm ほど深い。S D 2 の底からは、凝灰岩が出土、S D 3 は東壁で瓦を確認できる。 〔L 字型溝 S D 4・5〕埋土は黄褐色粘質土。南北溝 S D 4 が、東にまがり東西溝 S D 5 となる。S D 4 は S D 2 よりも新しい。 上記の遺構の詳しい性格は、不明であるが、その存在の有無が問われていた西大寺金堂院の回廊とは関わらないことが判明した。			
			
		調査区全景（東から）	
【実績値】 出土品：丸瓦 31 点 2.6 kg、平瓦 558 点 22.5 kg、凝灰岩 7 点 2.1 kg、土器 1 箱 記録作成数：実測図（A2 判）3 枚、遺構写真（4×5）4 枚			
【備考】			



調査区全景（東から）

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4151-3

自己点検評価調査

研究所 No. 11

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 本調査地区は、15 m²という小面積であったが、奈良時代に東大寺とならぶ大寺であった西大寺の中枢部の構成に迫る調査成果を得た。 適時性：緊急性の高い調査で、また限られた調査面積にもかかわらず、大きな成果をあげた。 発展性：調査成果は、西大寺にとどまらず古代寺院の伽藍構成の研究に大きく貢献すると考えられる。 継続性：今回の調査成果は西大寺旧境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、本調査の成果により、今後の調査の指針となる成果が得られた。 正確性：文献資料およびこれまでの発掘成果による知見を正確に把握した上で、あらゆる可能性を勘案した慎重な観察により得られた結果である。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					
備考 これまで未解明であった西大寺の中枢部の圍繞施設を知る上で、基礎的な図面および観察のための写真を採取することができた。また多数の瓦・凝灰岩・土器を収集することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査面積は限られており、回廊に伴う遺構は発見されなかったが、今後の継続的な調査の前提条件となる基礎的なデータを収集することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い発掘調査に対応し、調査期間も短いながらも、今後の西大寺旧境内地の主要部に迫る十分な情報を獲得することができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	薬師寺（第474次）の発掘調査（（1）－⑤－ア－4）		
【事業概要】 薬師寺境内の防災設備設置工事にともなう事前の発掘調査である。調査区は防災設備の設置位置を含む逆L字型のトレンチで、南北トレンチが幅約1m、長さ約4m、この延長部幅約2m、長さ9mと、東西トレンチ幅約2m、長さ約10m、この延長部幅2m、長さ21m、計80㎡を断続的に調査した。調査期間は平成22年8月16日（月）に着手し、10月21日（木）に終了した。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 小池伸彦、清野孝之、鈴木智大、桑田訓也、渡辺晃宏、森川 実、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、青木達司（文化遺産部）、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）			
【主な成果】 重機により地表より約165cm掘削し、そこから作業員による掘り下げを開始した。池の埋め土とみられる暗灰褐粘砂土層を検出し、池の岸を検出した。一部、地表から約250cmまで掘り下げて池の底の腐植土を確認した。検出遺構は、池1面、土坑6基、瓦土坑2基、東西溝1条、南北溝1条である。池の上の整地層から12世紀の瓦器皿が出土したが、各遺構の年代については不明である。			
【年度実績概要】 これまでの発掘調査・研究では、今回調査区の北側に僧房が存在したことは確認されていたが、この僧房の南側に建物が存在したかどうかについてはわかっていない。今回の調査の結果、池や排水にかかわる東西溝を発見した。 池の範囲では、自然木や松かさの混じる層があり、その下層には池の堆積、池底には水草の堆積があった。このことから池の周囲には松がたくさん生えていたものと考えられる。このあたりは中心伽藍から東に向けて標高が下がる地形で、この湿地状の地形を利用するために、池を何度も改修し、東西溝を掘って排水するなど、知恵を搾った様子が窺えた。 今回の調査では僧房南側の建物の存在は確認できなかったが、回廊の東側からわずか20mほどしかない伽藍中心付近まで池が広がっていたという、かつての伽藍中心部の環境の一端を明らかにすることができた。			
			
東西トレンチの様相（東から）			
【実績値】 論文等数：2件（①②） 発表件数：1件（報道発表1回） 出土品：軒瓦12点、丸・平瓦80箱、土器・陶磁器2箱、鉄釘1点、炉壁片1点、竹片1点、種子8点 記録作成数：実測図（A2判）14枚、遺構写真（4×5）22枚			
【備考】 ①海野 聡ほか「薬師寺の調査」『奈文研ニュース』No.39 2010.12 ②海野 聡ほか「薬師寺境内の発掘調査―第474次」『奈良文化財研究所紀要2011』2011（予定）			

(様式 2)

自己点検評価調書

研究所 No. 12

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積にもかかわらず、大きな成果をあげた。 発展性：調査成果は薬師寺伽藍のかつての様子を知る上で、建物以外の周辺環境の解明に大きく貢献すると思われる。 継続性：今回の調査成果は薬師寺境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与すると思われる。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				
備考 遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが、本調査では、偶然にも分析をおこなうために十分な量の遺物が出土した。遺物の整理・調査を進めている。また調査成果を記録保存するための図書類や写真は必要かつ十分な数を採取した。調査区が狭小のため、一般への現地説明会等はおこなうことができなかったが、奈文研ニュースにて成果の一部を公開した。1月13日には奈良新聞に取りあげられ、広く周知するにいった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既設管の埋設状況や安全性から判断して、掘り下げを断念した部分があったが、限られた調査範囲で、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営をおこなうことができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。

業務実績書

研究所 No.13

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	薬師寺（第475次）の発掘調査（（1）－⑤－ア－5）		
【事業概要】 薬師寺休ヶ岡八幡宮境内における防災施設設置にともなう事前の発掘調査。調査は八幡宮本殿の東側と西側との2箇所で行った。調査期間は平成22年10月5日～11月2日（社殿東側）と、同年12月1日～7日（社殿西側）である。調査面積は合計41㎡。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 森川 実、渡邊晃宏、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、 中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）			
【主な成果】 薬師寺休ヶ岡八幡宮における発掘調査。社殿の東側では奈良時代に開削されたとみられる段差と、この段差を埋める奈良時代の遺物包含層を確認した。出土土器は奈良時代前半のものである。また、社殿の西側では表土直下で現代の土坑4基を検出したが、明確な遺構は皆無である。			
【年度実績概要】 八幡宮社殿の東側では、管路に沿う細長い南北方向の調査区を設けた。防災設備（会所枡）の設置予定位置で調査区を拡張したところ、地山（白色シルトおよび橙色砂礫層）が八幡宮の社殿側（西側）で高く、東側へと急激に低くなることが判明した。この東落ちの段差は人為的に切り出されたものとみえ、地山の比高は最大で1.5mにおよぶ。また、段差を埋めている遺物包含層は「炭混土」・「灰色土」など都合8層以上に細分できる。これらの土層は西側で高く、現地地形を反映した堆積状況をみせる。ことに「灰色土」は奈良時代前半の土師器・須恵器を多く含んでおり、整理箱で土器9箱、瓦多数が出土している。土器の内容は土師器杯A、杯C、皿A、高杯、盤、甕、鍋、薬壺や製塩土器、須恵器杯A・Bとその蓋、各種の壺、平瓶、甕などである。土師器杯・皿類には1段斜放射暗文＋連弧暗文を施した例が目立つ。墨書土器には土師器皿の外底部に「十」と記したものなどがある。このほか、細片であるが三彩片が出土している。全体に細片が多いものの、器種構成が明らかな奈良時代前半の土器群である。休ヶ岡八幡宮の創建は9世紀末であり、段差の開削が八幡宮以前に遡るのは確実である。 八幡宮社殿の西側（参道側）では東西方向の狭長なトレンチを設定し、調査をおこなったが、表土直下で現代の土坑4基を検出したほかは、明確な遺構は皆無である。地山の傾斜は、八幡宮社殿の東側とは異っており、東側が高く西側が低い。この傾斜は厚い整地層で埋められているが、その時期を特定することはできない。			
【実績値】 論文等数：2件（①・②） 出土品：軒瓦61点、土器9箱 記録作成数：実測図（A2判）12枚、遺構写真（4×5）10枚			
【備考】 ①森川 実「薬師寺休ヶ岡八幡宮の調査」『奈文研ニュース』No.39 2010.12 ② 森川 実ほか「薬師寺休ヶ岡八幡宮の発掘調査―第475次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）			

自己点検評価調査

研究所 No. 13

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 薬師寺休ヶ岡八幡宮の本殿東側において、八幡宮創建以前の地形復原に必要な知見を得ることができた。 適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積にもかかわらず、八幡宮創建以前の地形改変の様子を明らかにした。 発展性：調査成果は、薬師寺休ヶ岡八幡宮についての研究に大きく貢献すると考えられる。 継続性：今回の調査成果は薬師寺境内において継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とし、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与するものと思われる。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					
備考 薬師寺休ヶ岡八幡宮の本殿東側で出土した奈良時代前半の土器は、この時期のまとまった資料として量的・質的に貴重である。調査の成果として必用かつ十分な量の実測図を作成し、大判写真を撮影した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで未調査地域であった薬師寺休ヶ岡八幡宮の境内地において発掘調査を実施し、①八幡宮創建以前の地形改変のありさまと、②八幡宮本殿が地形上の高所を選んでいることを確認した。緊急調査ながら学術的価値のある調査と考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果を挙げた。

業務実績書

研究所 No. 14

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	薬師寺（第476次）の発掘調査（(1)－⑤－ア－6）		
【事業概要】 平城京薬師寺金堂周囲における防災施設設置にともなう事前の発掘調査。調査区は大きく3箇所（A～C区）に分かれ、調査面積は全体で約60㎡。調査期間は平成23年1月17日～2月25日。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上 和人
【スタッフ】 浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部）、 中村一郎・栗山雅夫（以上、企画調整部）			
【主な成果】 調査区は金堂前庭部分にあたり、井戸や前庭に敷かれた河原石を検出した。			
【年度実績概要】 A区：金堂南面の東より東西1.6m、南北12mの調査区を設定し、A区とした。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表面より約80～90cmほど下で、複数の河原石を検出した。石の大きさは径15～40cmほどで比較的集中して出土した。石がない部分も石の採取が検出され、本来は調査区一面に敷かれていたものである。石の間はやや隙間があり、石の上面も平らでないことから、人が歩くための舗装ではなく、庭園的な景観を意図したものと思われる。透水層の上に厚さ40cmほどの粘土の整地をした上に石をすえており、薬師寺造営当初の奈良時代の遺構であると考えられる。石の間や石の上にかぶる砂層から瓦器片が出ており、中世のある段階には埋没したようだ。 B区：金堂南面の西より東西1.6m、南北12mの調査区を設定し、B区とした。現代の整備盛土、自然堆積層、遺物包含層を経て、現地表下70cmほどで、井戸とそれにとりなう溝を検出した。井戸は平面円形で2段掘である。上段は直径2.5m、深さ約70cmをはかる。その中央に直径1m、深さ約70cmの下段の穴をほり、木桶をすえていた。木桶の枠板は抜きとられており、竹のたがが残存していた。井戸の西北には溝があり、排水施設と考えられる。井戸本体と溝には上下2層の埋土があり、溝下層には中世の瓦器片が出土しており、中世以前に構築された可能性はあるが、構築と廃絶の年代は現在のところ不明である。 井戸掘り込み面の下層には粘土の整地層があり、その上面には河原石が数個据えられていた。その状況はA区と同様で、同時期の遺構と考えられる。調査区の北側で、この粘土の整地面から掘り込まれた土坑があり、中から鎌倉時代の軒瓦が出土した。したがって、この下層の遺構は、薬師寺の造営時期から、中世のある段階まで使用されていたものと考えられる。 ただし、A区、B区とも遺物は整理中であり、各遺構の正確な時期は、今後の整理をまって確定したい。 C区：南北1.8m、東西15mの調査を設定。現地表下80cmほどで瓦の廃棄土坑を検出。土坑は東西約6m、南北は1.8mの範囲におよぶ。土坑からは多量の瓦は出土し、ほとんどは奈良時代の薬師寺創建時の瓦である。土坑の位置や出土品からみて、金堂で使用していた瓦であろう。土坑の瓦は、室町時代に金堂が大風で倒壊したときに破損した瓦とみられる。			
【実績値】 出土品：瓦211箱、土器3箱。 記録作成数：実測図（A2判）6枚、遺構写真（4×5）20枚			
【備考】			

自己点検評価調査

研究所 No. 14

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 A～C地区は幅1.6m、長12～15mにおよぶ狭小な調査区であったにもかかわらず、薬師寺金堂前庭部に関する貴重な成果を得ることができた。 適時性：緊急性の高い調査に対応し、限られた調査期間と調査面積で大きな成果をあげた。 発展性：薬師寺ひいては古代寺院の金堂前の状況を研究するうえで大きく貢献すると考えられる。 継続性：今回の調査成果は薬師寺旧境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与すると考えられる。 正確性：発掘調査における緻密な観察と寺院前庭部についての知識に裏打ちされた成果である。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数					
判定	A					
備考 遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが、薬師寺金堂周辺の調査区では、偶然にも分析をするための十分な出土量を得ることができ、整理を進めている。また、調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。年度末の調査のため、出土遺物の整理が未完である。したがって検出した遺構の時代や意義付けを確定するには、さらに時間を必要とする。学術的評価の正確性を期するため、調査期間中の報道発表や一般への現地説明会等はおこなわなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査面積には限りがあったものの、これまで不明であった金堂前庭部の状況が明らかになり、今後、研究を進めていく上で必要十分な成果を得ることができた。また、適切に発掘調査を実施することができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。

研究資料 No. 10

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	春日東塔跡（第477次）の発掘調査（(1)－⑤－ア－7）		
【事業概要】			
春日東塔院は、1965年に奈良国立博物館が調査し、規模は東西約70m、南北約80mであることが明らかになっている。今回の調査は、1965年の成果をうけて、春日東塔院の北東隅を解明し、遺跡の範囲を押さえることを目的として、奈良国立博物館なら仏像館（本館）の南東に計219㎡（うち8㎡は北門推定位置）の調査区を設定した。調査期間は2010年11月15日～12月27日。12月16日には報道発表をおこなった。12月17～21日には現場公開をおこない、約300名が見学した。なお、今回の調査は独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館との初めての共同発掘調査である。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】			
渡邊晃宏、森川 実、中川あや、海野 聡（以上、都城発掘調査部）、中村一郎、鎌倉 綾（以上、企画調整部） 吉澤 悟（奈良国立博物館）			
【主な成果】			
春日東塔院の区画施設の外側の雨落溝（L字に折れ曲がる）、落ち込み（以上、東塔建設以降の遺構）、土坑3基・礎敷1ヵ所（下層遺構、東塔建設以前）、 なお外側の雨落溝と落ち込みの間に遺構（土坑・溝）を検出しているが、時期及び性格は不明。			
【年度実績概要】			
今回の調査によって、春日東塔院の北面及び東面の区画施設に伴う外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の北東隅の位置が確定し、当初の目的を達成することができた。外側の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根には瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられる。 また塔建設予定地は樹木を切らずに建てられる場所としたとする史料があり、その他、塔建立以前には興福寺別当坊の敷地であったという説が唱えられているが、今回の調査により、東塔建立よりも古い時期の遺構を検出したことによって、東塔院及びその北方周辺の一帯が、塔建立以前にすでに開発されていたことを発掘調査によって初めて明らかとすることができた。			
			
		区画施設北東隅（北東から）	
【実績値】			
論文等数：2件（①②） 発表件数：1件（報道発表：2010年12月16日、現場公開：12月17～21日、見学者300名） 出土品：瓦137箱、土器・陶磁器31箱、土製品3点、石器・石製品等18点、金属製品3点、鉄滓3点、木製品4点、木炭少量 記録作成数：実測図（A2判）11枚、遺構写真（4×5）21枚			
【備考】			
①海野 聡「春日東塔跡の調査」『奈文研ニュース』No. 40 2011.3 ②海野 聡ほか「春日東塔跡の発掘調査―第477次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）			

自己点検評価調査

研究所 No. 15

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：春日東塔跡の遺跡保存を十全に進めるために、1965年の調査遺構の測量上の位置確認の必要性もあり、大きな成果をあげた。 発展性：調査成果として春日東塔跡の北東隅を発掘し、この位置を世界測地系による座標によって示すことができた。このことで、春日東塔跡の範囲を定める上で重要なポイントを押さえることができ、今後の春日東塔跡の史跡整備及び発掘調査に貢献すると考えられる。 継続性：現在のところ、この周辺を継続して調査する予定はないが、今後おこなうための素地を十分に得ることができた。また奈良国立博物館と共同発掘調査をおこなったことで、両機関の共同調査の基礎を築くことができ、今後の共同調査体制に貢献すると考えられる。 正確性：複数の研究員による遺構検出とともに、12月13日には都城発掘調査部員による現場検討会を実施し、正確な発掘調査を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				
備考 本調査区では、偶然にも分析をするための十分な出土量を得ることができ、整理を進めている。また調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。また12月16日には記者発表をおこない、広く周知するにいたった。調査区の安全上の理由から、一般への現地説明会等はおこなうことができなかったが、12月17日～21日の間、調査区を隔てるフェンス越しに一般の方が見学する機会を設け、奈良国立博物館のボランティアによる現場解説をおこない、約300名が見学した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	一部、既設管によって遺構が壊されており、上層遺構の保護の観点から下層遺構の検出は一部にとどめたが、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営をおこなうことができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。また奈良国立博物館との共同発掘調査をおこなうことができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京左京三条一坊一・二坪（第478次）の発掘調査（（1）－⑤－ア－8）		
【事業概要】 平城京左京三条一坊一・二坪（奈良市二条大路4）における、平城京資料館（仮）の建設にともなう試掘調査。調査面積 1030 m ² （南北 103m、東西 10m）。調査期間は平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年 3 月 30 日。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上 和人
【スタッフ】 浅野啓介、今井晃樹、大林 潤、国武貞克（以上、都城発掘調査部） 中村一郎、栗山雅夫、鎌倉綾（以上、企画調整部）			
【主な成果】 三条条間北小路南北側溝、左京三条一坊一坪を南北に二分する坪内道路の南北側溝、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基など、奈良時代の遺構を確認した。平成 23 年 3 月 3 日には報道発表をおこなった。			
【年度実績概要】 調査区は、左京三条一坊一・二坪の東寄りに位置し、調査面積は 1030 m ² （南北 103m、東西 10m）である。遺構検出面は現地地表下約 2 m にあり、基本層序は上から、整備にともなう盛土、旧耕作土、旧床土、遺物包含層、黄色粘質土（整地土：遺構検出面）となり、それ以下のベース土は、砂と粘土が互層となる。調査区西半を、流路とみられる砂層が覆い、ベース土も粗砂や細砂が入り込むことから、整地以前は何度も水が流れたと考えられ、秋篠川の氾濫の跡とみられる。 検出遺構は以下のとおりである。 ・三条条間北小路…南北で幅約 1 m 程度の東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 6.2m。 ・坪内道路…左京三条一坊一坪を南北に二分する東西溝（側溝）。両側溝の心心間距離は約 9.5m。 ・掘立柱建物…調査区北端で掘立柱建物 2 棟を検出。一つは南北の柱穴 3 基で、径 25 cm 程度の柱痕跡を残す。柱間寸法は 3.9m（13 尺）。東西棟建物の西妻の柱筋とみられる。もう一つは調査区の東壁で断面を確認した南北の柱穴 3 基。柱間寸法は北から 6.0m、2.7m ととれる。抜取穴から円筒埴輪片が出土。 ・井戸…抜取穴の直径約 4 m、方形の木製井戸枠が出土。井戸の内法は 2.3m。埋土に多量の遺物を含む。 この他、掘立柱東西塀 1 条を検出した。			
			
		調査区全景（北東から）	
【実績値】 論文等数：2 件 発表件数：1 件（報道発表：平成 23 年 3 月 3 日） 出土品：瓦 60 箱、土器 37 箱、金属器 16 点、木簡 30 点。 記録作成数：実測図（A2 判）17 枚、遺構写真（4×5）100 枚			
【備考】 ①大林 潤ほか「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定） ②大林 潤「平城京左京三条一坊一・二坪の調査」『奈文研ニュース』2011（予定）			

自己点検評価調書

研究所 No. 16

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：緊急性の高い調査に対応し、奈良時代の遺構の残存状態を限られた面積・期間の中で確認、公開した。 継続性：1999年に奈良市教育委員会が調査した調査区の東に位置し、その際に検出された遺構の延長部分を確認している。今後予定される調査区東西の敷地における発掘調査につながる成果を得た。 正確性：複数の研究員による遺構検出とともに、都城発掘調査部員による現場検討会を1月28日に開催し、正確な発掘調査を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				
備考 資料収集数：今後の調査の参考となる奈良時代の大規模な井戸遺構を検出した。検出した井戸の井戸枠は、取り上げ後、整理室にて適切な記録を取る予定である。また、図面、写真など、必要かつ十分な数の記録を採取した。 発表件数：調査の成果が確定した段階で、記者発表をおこなった。なお、現地説明会は、試掘調査であることと、調査区の遺構検出面が現地表から深く危険であるためおこなわなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	試掘調査のために敷地の全貌を解明するだけの十分な広さが取れないなか、条間小路や坪内道路など、敷地の区画範囲示す遺構を検出することができた。また、大規模な井戸や掘立柱建物を検出し、敷地の使われ方を示す資料を確認している。今後継続される同敷地の調査につながる成果を適切に得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画どおり、調査をおこない、平城京左京三条一坊一・二坪の状況をあきらかにする成果を得た。今後、同敷地の調査は継続して行う予定であり、今回の調査成果をもとに、今後の調査計画を立案する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査（(1)－⑤－ア－9）		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究をおこなうものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は、わが国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、平成11年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 森先一貴、若杉智宏、山本 崇、石橋茂登、青木 敬、高橋 透、石田由紀子、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 朝堂院朝庭の発掘調査を実施し、朝庭の礫敷や排水のための暗渠を検出し、朝庭における整備状況を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営期に資材を運搬したと考えられる運河や、運河から北東方向に派生する斜行溝、資材搬入や加工に関わると考えられる沼状遺構、朝庭造営中に機能していたと推測できる東西・南北方向の複数の素掘溝を確認した。これらの変遷から、朝堂院の造営過程を復元する上で重要な手がかりを得た。			
【年度実績概要】 本研究は、朝堂院朝庭の整備・利用状況を明らかにすること、藤原宮の造営に関わる遺構の状況を明らかにすることを主な目的として実施した。調査期間は2010年4月2日～2011年1月24日、調査面積は1500㎡である。 調査の結果、調査区全面で径5～10cmほどの礫を検出し、朝庭が礫敷によって整備されていたことが再確認できた。また、調査区西半で南北溝を2条検出した。2条とも溝内に礫を詰めており、暗渠として機能していたと考えられる。 下層遺構の調査においては、過去の調査で確認していた南北方向に貫流する運河を南北の排水溝で確認した。過去の調査成果を合わせると運河の総延長は550m以上になることが明らかとなった。また、運河から北東方向に支流として派生する斜行溝（幅4～6m、深さ1m）を確認した。運河から派生する支流は、2008年度の調査（飛鳥藤原第153次）でも検出されていたが、今回の調査では、同じ様な大規模な支流がもう一条、朝庭部に存在したことが確かめられた。調査区の北東では、2008・2009年度の調査（飛鳥藤原第153次・第160次）で確認されていた沼状遺構の南西隅部分を検出し、この遺構の大きさが、南北44m・東西38m以上の規模であることが明らかとなった。また、運河など資材運搬用の溝を埋め立てた後にも、幾度かにわたり、排水や区画のための溝や塀を造っていることが確認できた。これまで考えられていたより、多くの作業工程が復元でき、より複雑な宮造営過程が明らかになった。 なお、2010年7月1日に記者発表、7月3日に現地説明会をおこなった。さらに11月18日に記者発表を実施し、調査成果の公表および7月の発表内容の訂正をおこなった。			
			
調査区全景（南から）			
【実績値】 論文等数 3件（調査報告1件①、その他2件②③） 発表件数 3件（現地説明会1件④、報道発表2件⑤⑥） 出土遺物 軒瓦221点、丸平瓦31,121点、土器49箱、木製品・加工木9箱、獣骨など 記録作成数 遺構実測図112枚、写真（4×5）249枚 現地説明会来場者数 423人			
【備考】 ① 若杉智宏・森先一貴・山本 崇「朝堂院の調査―第163次」『奈良文化財研究所紀要2011』2011年6月（予定） ② 森先一貴「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）」『奈文研ニュース』No.38、2010年9月 ③ 若杉智宏・深澤芳樹「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次）」『奈文研ニュース』No.39、2010年12月 ④ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査―飛鳥藤原第163次調査現地説明会資料」2010年7月3日 ⑤ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次調査記者発表資料）」2010年7月1日 ⑥ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第163次調査記者発表資料）」2010年11月18日			



調査区全景（南から）

自己点検評価調書

研究所 No. 17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	
備考 適時性・継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための継続的な計画調査である。 独創性：わが国最初の本格的都城の造営から解体までの一連の過程解明に寄与する。 発展性：藤原宮中枢部の造営過程を復元するための手がかりを得、さらなる研究課題への展望が生まれた。 正確性：調査自体は正確に実施されていたが、調査成果が確定する前に外部への発表をおこなった。 そのため、7月時の発表内容を11月に訂正することとなった。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考 調査成果は、研究所紀要をはじめとする紙面において、順調に公開することができた。また、現地説明会では、多くの参加者を得、盛況となった						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等、適切におこない、定性的・定量的評価においてほぼすべてがAと判定されるため、総合的評価もAと判定した。 計画調査として、次年度以降も継続的に調査をおこなう予定である。 ただし、公開・発表の時期については、調査成果をこれまで以上に慎重かつ十分に検討した上で決定することとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥地域の発掘調査 ((1) -⑤-ア-10)		
【事業概要】 日本における古代国家成立期の舞台である飛鳥地域は、6世紀末から8世紀初めの間、国家における政治・経済・文化の中心地としての役割を担っていた。本研究は、このような重要性をもつ同地域の具体像を復元するために考古学・文献史学・建築史学・保存科学などの分野からなる学際的な研究を行うものである。今年度は水落遺跡および石神遺跡の構造の把握にむけた調査を進めている。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 庄田慎矢、黒坂貴裕、玉田芳英、次山 淳、廣瀬 覚、木村 理恵、小田裕樹、諫早直人、番 光〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、降幡順子、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 水落遺跡第10次調査においては、斉明朝(7世紀中頃～後半)以前、斉明朝、天武朝(7世紀末頃)の3時期にわたる遺構を検出した。斉明朝以前では掘込地業および土器埋設遺構、斉明朝には施設群の地固めのための南北48m以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設(壺地業、東西棟建物、銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝など)、北側の石神遺跡から通路状に続く石敷などを確認した。			
【年度実績概要】 水落遺跡第10次調査(前半：東区)により、斉明朝以前、斉明朝、天武朝の遺構がそれぞれ検出された。斉明朝以前の遺構としては、何らかの施設の下部構造と考えられる掘込地業および土器埋設遺構が確認され、同時期にすでにこの一帯の利用が始まっていたことが分かった。土器埋設遺構は、土器の一部を打ち欠いて周囲に石を並べた特殊なものであったが、内部からは目立った遺物は検出されなかった。 斉明朝の遺構としては、石神遺跡から通路状に続く石敷と、基壇建物を含めた施設群の地固めのための南北48m以上に及ぶ掘込地業、そしてその内部に設けられた様々な施設が確認された。二か所で集中的に地固めを行った壺地業、小銅管や木樋を設置するために掘られた素掘溝、基壇建物の北側に東西9間(総長24.6m)以上に細長く延びる東西棟建物などがこれに該当する。中でも素掘溝は、間を中世以降の流路によって削平されているものの、調査区の南北両端で検出され、水落遺跡の中心部から石神遺跡へと続いていたことが把握された。これにより、水落遺跡と石神遺跡が密接に関連する遺跡であることが改めて確認された。 天武朝の遺構としては、以前の調査でその大部分が確認されていた7間×2間の東西棟建物の柱穴を検出し、この建物の規模を把握した。 出土遺物は多くなかったが、土器埋設遺構に埋められていた長胴甕、斉明朝以前の時期の素弁蓮華文軒丸瓦、細長い形状の青銅小破片などがある。調査成果を一般に公開するために2010年12月5日に現地見学会を開催し、1420名の見学者があった(写真)。 現在は第10次調査(後半：西区)が進行中であり、通路状の石敷きと、これに関連すると見られる細石敷を確認している。これらの成果から、石神遺跡と水落遺跡を一体的に捉えた研究への道筋がつきつつある。			
			
		現地見学会の様子	
【実績値】 論文等数 2件(調査報告2件①、その他1件②) 発表件数 2件(現地見学会1件③、報道発表1件④) 出土遺物 長胴甕1点、土師器・須恵器・瓦器碗片など13箱、軒瓦3点、丸平瓦249点、動物歯牙5点、青銅小片1点など 記録作成数 遺構実測図33枚、写真(4×5)107枚			
【備考】 ①庄田慎矢・玉田芳英・廣瀬覚・黒坂貴裕「水落遺跡の調査 第165次」『奈良文化財研究所紀要2011』2011.6(予定) ②庄田慎矢「水落遺跡の調査(飛鳥藤原第165次調査)」『奈文研ニュース』No.40、2011.3(予定) ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「水落遺跡の調査(水落遺跡第10次発掘調査現地見学会資料)」2010.12 ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「水落遺跡の調査(飛鳥藤原第165次(水落遺跡第10次)調査記者発表資料)」2010.12			

自己点検評価調書

研究所 No. 18

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：水落遺跡と石神遺跡の関連性の解明に向けた調査 継続性：計画調査の継続による遺跡全体の構造の解明 発展性：水落遺跡と石神遺跡の密接な関連性を確認し、両者を一体として保護していく見通しを得た						

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第165次調査では、北側の石神遺跡から続く通路状の石敷、南側の水落遺跡から続く掘込地業および関連施設群、そして両者をつなぐ木樋を設置した素掘溝を検出した。これにより、両遺跡の密接な関連性が裏付けられた。今次調査の成果によって当地域一帯の遺跡群を一体として把握することができるようになり、今後の調査研究および遺跡の保護に対して大きく貢献するものと考え、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに進行しており、課題であった水落遺跡と石神遺跡との相互関連性の把握が順調に進んでいる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等（(1)－⑤－イ）		
【事業概要】 平成 22 年度の発掘調査によって平城宮・京跡から出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦 磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の整理・分析研究を、年間を通じて実施し、昨年度以前の調査 で出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査をおこなった。また、出土遺物の 科学的保存処理を継続して実施した。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 小池伸彦、国武貞克、芝 康次郎、神野 恵、森川実、城倉正祥、中村亜希子、清野孝之、今井晃樹、 中川あや、渡辺晃宏、馬場 基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡 （以上、都城発掘調査部）、 中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部）			
【主な成果】 本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行 い、平成 23 年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要 2011』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調 査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『天平びとの声を聞く一地下の正倉院・平城宮 木簡のすべて』を開催した。			
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦 磚類・木簡などの整理・分析研究、出土遺構の図面作成・写真作成・分析研究、及び出土遺 物の科学的保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と 併行して、これを遅滞なく実施した。 ・平成 21 年度以前の出土遺物について 『平城宮発掘調査報告 XVI（第一次大極殿院）』、および『名勝大乘院庭園発掘調 査報告』の刊行に向けての再整理・分析を重点的に実施した。平成 23 年 3 月には、 『平城宮発掘調査報告 XVI（第一次大極殿院）』を刊行する予定である。 ・これまでに平城宮内から出土した木簡の中から優品を選び、平城宮跡資料館にて 特別企画展「天平びとの声を聞く一地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」を開催し、 広く公開した（平成 22 年 9 月 25 日から 11 月 7 日まで）。 ・報告書などの刊行について 『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十）』を刊行し、特別企画展「天平びとの声を 聞く一地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」に伴って、展示解説図録『天平びとの 声を聞く一地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』を作成した。			
			
展示リーフレット表紙			
【実績値】 論文等数：4 件（報告書等 3 件②～④、解説等 1 件①）			
【備考】 ①『天平びとの声を聞く一地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』2010.9 ②『平城宮発掘調査出土木簡概報（四十）』2010.11 ③『平城宮発掘調査報告 XVII（第一次大極殿院）』2011・3 ④『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定）			



展示リーフレット表紙

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4152-1

自己点検評価調書

研究所 No. 19

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	発展性	適時性		
判定	A	A	A	A		
備考 正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し公表した。 継続性：膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続した。 発展性：新出土の膨大な資料を活用してより高度な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求した。 適時性：新出土品の資料価値を明確にし、重要なものについては迅速に情報公開し、国民の文化財としての活用を図った。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
備考 論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡で出土した膨大な考古・文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上のさまざまな重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたことで、総合的にみてAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等（(1)－⑤－イ－2）
【事業概要】 本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 玉田芳英、次山 淳、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、廣瀬 覚、青木 敬、木村 理恵、小田裕樹、若杉智宏、高橋 透、森先一貴、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕、西口壽生（客員研究員）、豊島直博（文化庁）、高田貫太（国立歴史民俗博物館）	
【主な成果】 本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。	
【年度実績概要】 ① 本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木簡・木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2011』等で公表した。 ② 前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。藤原宮期以前の木簡 173 点は、これまでの調査成果をふまえて飛鳥資料館で開催した「木簡黎明」展に出展し、その研究成果を図録『木簡黎明』に紹介した。過年度調査で出土した瓦、高台・峰寺瓦窯の採集瓦、坂田寺 5 次調査（1985 年）出土の地鎮具、藤原京右京七条二坊（1986 年）の遺物の調査成果及び、昨年度実施した甘樫丘東麓遺跡の調査（第 161 次）の発掘調査概要を報告した。桜井市教育委員会と連携し、桜井市安倍寺遺跡出土木簡の保存処理後の再検討を行った。	
【実績値】 公刊図書等数 12 件（論文等 11 件①～⑩、その他 1 件⑪） 記録作成数 写真（4×5）1,544 枚	
【備考】 ①奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ②山本 崇「解説」（飛鳥資料館『木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち』展示図録）2010.10 ③青木 敬「掘立柱建物の検討視点」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ④石田由紀子「高台・峰寺瓦窯採集の瓦」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑤豊島直博「飛鳥池遺跡出土の銅製刀装具」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑥降幡順子「キトラ古墳出土遺物の保存処理」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑦石田由紀子「瓦補遺」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑧木村理恵「藤原京右京七条二坊の井戸について」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑨降幡順子・木村理恵「坂田寺出土の地鎮具」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑩番 光「甘樫丘東麓遺跡の調査—第 161 次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011.6（予定） ⑪番 光「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 161 次）」『奈文研ニュース』No. 37、2010.6	

自己点検評価調書

研究所 No. 20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 適時性：新出土資料の迅速な公開と活用 独創性：新たな資料分析方法の追究 発展性：蓄積された歴史資料の正確な資料化 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究及び保存 正確性：新出資料の正確な資料的性格と価値の公表						

2. 定量的評価

観点	公刊図書数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。また、成果物の刊行も計画通りに行い得た。

業務実績書

研究所 No. 21

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京・平城京などの古代都城の解明に資するために、古代官衙、集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する（（1）－⑤－ウ）		
【事業概要】 飛鳥・藤原京、平城京などの古代都城は、多くの古代官衙・集落遺跡との関連性の中にその歴史的特性を位置づけることが重要である。また、こうした古代官衙・集落遺跡の調査・研究は、各地で分散的に行われる傾向が強く、都城研究を背景としての総合的検討が地方自治体からも渴望されている。そこで、各地の古代官衙・集落遺跡の調査・研究集会を検討する研究集会を開催し、報告書を刊行することで、こうした研究課題や地方自治体の要望に答える。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 井上和人（副所長）、馬場 基、青木 敬、小田裕樹、小池伸彦（以上、都城発掘調査部） 清水重敦（文化遺産部）			
【主な成果】 第14回古代官衙・研究集落研究集会を開催（12/10・11）した。テーマは「古代官衙・集落と鉄」である。事例紹介のほか、自然科学的手法や文献資料からの分析が報告され、これらを踏まえての活発な討論がおこなわれた。 昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告4 官衙と門』（論考編・資料編）』として刊行した。			
【年度実績概要】 Ⅰ．古代官衙・集落研究集会の開催（12/10・11） テーマを「古代官衙・集落と鉄」とした。鉄は古代社会を考える上で重要な問題である。近年事例も増加してきており、これらを①鉄素材の生産と②鉄製品の生産、という2段階に分け、かつ自然科学的分析や文献資料からの研究も踏まえて総合的に分析することを目指した。 小池伸彦氏から飛鳥池遺跡の調査成果を踏まえた鉄生産総論、菅波正人氏から元岡遺跡群の調査成果と意義付け、曾根俊雄・小杉山大輔氏から鹿の子C遺跡の調査成果と意義付け、鈴木瑞穂氏は鉄滓等の分析からの鉄生産状況の分析、古尾谷知浩氏からは文献資料からの鉄生産についての報告、小田和利氏からは北九州地区における集落からの鉄出土状況の分析、という報告を得た。これらの中で、製鉄技術と炉の関係や、遺跡の性格などについて多くの新知見が公表された。こうした知見を踏まえ、松村恵司氏の司会により討論をおこない、遺跡相互の比較などが議論された。 Ⅱ．『奈良文化財研究所研究報告4 官衙と門』（論考編・資料編）の刊行 昨年の研究集会の報告集を『奈良文化財研究所研究報告4 官衙と門』として刊行した。2分冊からなり、報告編（192頁）には論考8編と討論記録を収録し、資料編（460頁）には全国の官衙遺跡で確認された門遺構を集成した。			
【実績値】 古代官衙・集落研究集会 参加者総数 126名 アンケート回答 109（回収率約87％） 大変有意義であった：62、有意義であった：40、普通：7、あまり有意義でなかった：0、有意義でなかった：0 収集資料数 約1,200点			
【備考】 『官衙・集落と鉄』第14回 古代官衙・集落研究会研究報告資料、奈良文化財研究所、2010.12 『奈良文化財研究所研究報告4 官衙と門 報告編』奈良文化財研究所、2010.12 同 記録資料編』 同上			

自己点検評価調査

研究所 No.21

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 今年度の実績については以下のような評価を与えることができている。 適時性：古代官衙や集落の研究を進めるうえで、適切な議題設定をおこなうことができた。 独創性：当研究所にとって、もっとも関心の深い分野である古代の官衙・集落について、全国的視野からの研究発表と討論をおこなうことができた。 発展性：発表と議論の内容は、今後の研究に対して大いに発展性が見込めることができる。 効率性：研究会の準備や資料集の作成には、各方面の助力を得て効率的に進めることができた。 継続性：平成22年度より当研究所の事業として研究会を継続させることとなり、当研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容の研究会を開催することができた。これは今後の開催に励みとなるものであった。 正確性：発表者による研究の成果を討論することによって、内容をさらに充実させることができたと同時に、正確性についてもさらに向上させることができた。						

2. 定量的評価

観点	成果報告	収集資料数				
判定	A	A				
備考 成果報告：昨年度の研究集会の記録を『奈良文化財研究所研究報告4 官衙と門』（論考編・資料編）として刊行することができた。論考編には8編の論文と研究集会における討論記録を収録し、資料編（460頁）には全国の官衙遺跡で確認された門遺構を集成した。今後の活用が大いに期待される。 収集資料数：今年度の研究集会予稿集『官衙・集落と鉄』を簡易製本にて作成した。ここには、当研究所内外7名の研究者による発表資料を収めており、発表で引用された遺跡数や文献数は膨大な数にのぼる。これらをもとに活発な討論をおこなうことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会には多くの参加者を得、アンケートの結果も報告書も好評である。また、各地方自治体からの参加者の評価も高く、継続的に研究集会を開催し、成果を公表することが望まれる。次年度以降は、研究集会の開催と報告書の発行とともに、継続性の基盤をさらに固めるためにも、編集作業等のさらなる効率化を進めていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究集会での報告や討論を通じて、古代都城の分析に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等の相互の調査・研究情報共有や質の向上にも寄与することができた。また、研究報告の刊行によって、これらの成果をしっかりと公表し、国民共有の財産とすることもできた。ただ、報告書刊行は、大部のものであったこともあり、予定よりも多くの業務量が発生することになってしまった。 本研究集会・報告書については、全国の地方自治体職員からもその継続を望む声も大きい。古代都城の分析にも非常に役立つものであり、今後もしっかりと継続する必要があると考える。そこで、継続性を担保するためにも、編集作業等のより一層の効率化を推し進めていく。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究（（1）―⑤―エ）		
【事業概要】 A：漢長安城桂宮発掘調査報告書および付篇の論文集の作成、漢魏洛陽城跡の発掘調査を中国社会科学院考古研究所と共同して実施し日本の都城との比較研究をおこなう。また、調査成果の概要を公刊する。 B：朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物について中国遼寧省文物考古研究所と共同で整理・比較研究し、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。 C：鞏義市黄冶唐三彩窯跡および当地出土をはじめとした製品の共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を総合的に考察し、成果を公刊する。 D：日本と韓国の都城・王京形成について韓国国立文化財研究所と共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡づける。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 A：井上和人、今井晃樹、城倉正祥〔以上、都城発掘調査部〕他9名（王巍、銭国祥他） B：井上和人、小池伸彦、清野孝之〔以上、都城発掘調査部〕他4名（李向東、呂学明他） C：深澤芳樹・玉田芳英・森川 実（以上、都城発掘調査部）他8名（孫新民・趙志文他） D：深澤芳樹、次山 淳、石橋茂登、庄田慎矢、諫早直人、若杉智宏〔以上、都城発掘調査部〕他18名（李熙濬 他）			
【主な成果】 A：漢長安城桂宮の発掘報告書の刊行。漢魏洛陽城3号門、西南隅で合計2800㎡の共同発掘を実施。 B：遼寧省における隋・唐代墓出土品についての調査成果の取りまとめを実施。 C：河南省および陝西省で生産した唐三彩の調査研究を実施。 D：日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究を実施。			
【年度実績概要】 A：漢長安城桂宮の発掘報告書は、報告編・論集編を編集し、2011年3月に刊行。漢魏洛陽城は、合計9名の研究員を派遣、2011年4～5月、8月、11～12月の5か月間で2800㎡の発掘調査を実施した。 B：平成22年6月に2名の研究員を派遣し、共同研究成果の取りまとめと次期五カ年計画について協議した。また、平成21年12月に文物考古研究所の3名を招聘、平成23年3月には遼寧省文化庁・文物考古研究所の3名を招聘して学術講演会を開催した。 C：2010年6月・2010年9月・2011年3月に研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区、漢魏洛陽城、陝西省揚州窯などより出土した唐三彩、北朝白釉・青釉などを調査した。同年10月には中国側から5名を招聘して、学術講演会を開催した。 D：韓国国立文化財研究所との共同研究では、『韓日文化財論集Ⅱ』（韓国語版）、『日韓文化財論集Ⅱ』（日本語版）を刊行し、発掘交流で1名の派遣、1名の招聘を実施した。また、共同研究に関連して研究報告会を開催し、調査研究協力等をおこなっている。			
【実績値】 論文等数：8件（①～⑧） 記録作成数：A 報告書・論文集計2部、遺構平面図28枚、フィルム115カット、デジカメ200カット、B 写真・3Dデジタイザ・調書・実測図等の記録多数、C 写真・調書等の記録多数、D 論文等4件			
【備考】 ① 奈良文化財研究所・中国社会科学院考古研究所編『漢長安城桂宮』奈良文化財研究所学報第85冊 2011.3 ② 城倉正祥「漢魏洛陽城 北魏宮城西南隅の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011（予定） ③ 小池伸彦「遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査」『奈文研ニュース』No.37 2010.6 ④ 玉田芳英「中国河南省文物考古局との共同研究」『奈良文化財研究所概要 2011』2011（予定） ⑤ 『韓日文化財論集Ⅱ』（韓国語版）大韓民国国立文化財研究所・奈良文化財研究所、2010.12 ⑥ 『日韓文化財論集Ⅱ』奈良文化財研究所学報第87冊、奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所 2011.3 ⑦ 若杉智宏「日韓発掘調査交流に参加して」『奈文研ニュース』No.40 2011.3 ⑧ 李熙濬「韓日発掘調査交流に参加して」『奈文研ニュース』No.40 2011.			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4154

自己点検評価調書

研究所 No. 22

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			
備考 独創性：東アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本古代史の再検討に貢献した。 発展性：海外の研究機関と連携し、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積を継続している。 適時性：成果報告を迅速に作成し、公表した。						

2. 定量的評価

観点	成果報告	記録件数				
判定	A	A				
備考 成果報告：速報性を重視した報告を行った。 記録件数：未公開の貴重な学術資料について多くの記録調書を作成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国および韓国で、関係研究機関との連携のもとに遺跡・遺物を調査し、相互の研究を向上させたほか、計画どおりに事業を実施できたので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施し、成果をあげることができた。国際共同研究は都城発掘調査部が担当しており、4本の研究を総合的に組み立てることにより、古代史の解明に資する成果を達成することを目指す。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	庭園に関する調査研究 ((1) -⑤-オ)
【事業概要】 平成18年度以降実施してきた平安時代庭園に関する研究について、各種補足調査を行うとともに、これまでの研究成果を踏まえつつ奈良文化財研究所学報『平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)』として取り纏めた。また、森・村岡資料の整理を進め、併せて国際的観点をも含め、次期中期計画に向けた準備を進めた。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 小野健吉(文化遺産部長)、青木達司(遺跡整備研究室研究員)、高橋知奈津(都城発掘調査部研究員)、恵谷浩子(景観研究室研究員)、エドワーズ・W(客員研究員)	
【主な成果】 平安時代の庭園・建築・文献等の研究に取り組んでいる研究者とともに検討会を開催し、その成果を踏まえつつ、平成18年度以来実施してきた「平安時代庭園に関する研究」について取りまとめ、奈良文化財研究所学報第86冊『平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)』を刊行した。また、日本庭園に関する国際的な情報発信検討の一環として『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。さらに、森・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するための基盤的環境を整えた。	
【年度実績概要】 1. 大学等の外部研究者とともに学報「古代庭園研究Ⅱ」検討会を、平成22年9月18日に開催した。 2. 上記検討のほか、平成18年度以来取り組んで来た平安時代庭園に関する調査研究成果を踏まえて、学報『平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)』を刊行した。 3. 森・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理・調査するための基盤的環境を整えた。 4. 日本庭園に関する国際的な情報発信検討の一環として、『Japanese Garden Dictionary』の校訂を進めた。 5. 発掘庭園データベースについては、新たな事例情報の収集を進めるとともに、情報項目充実の方向性について検討を進めた。 6. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課等に対して平成21年度に刊行した報告書の配布をおこない、過年度の成果の公表に努めた。 7. その他、国内外における庭園史及び歴史的庭園の保護等に関する調査研究に係る情報の収集・整理・検討を進め、現地調査・研究協議等をおこなった。	
 森・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料の整理・収納の状況	
【実績値】 1. 研究会等開催数：1回、参加者数：大学研究者等13名 2. 報告書等刊行数：1件(①) 3. 論文等数：19件(論文15件[①に所収のもの5件+②～⑪]、講演・発表等4件⑫～⑮)。	
【備考】 ①奈良文化遺産部遺跡整備研究室編(小野健吉・青木達司共編著)『平安時代庭園の研究(古代庭園研究Ⅱ)』、2011.3 小野健吉「平安時代庭園史の概観と研究の現状」 小野健吉「平安時代初期における離宮の庭園 ―神泉苑と嵯峨院をめぐる―」 小野健吉「臨池伽藍の系譜と浄土庭園」 高橋知奈津「屏風歌にみる平安時代の『山里』」 平澤毅「奈良時代までの庭園 ―平安時代庭園検討の前提として―」 ②小野健吉「発掘庭園に見る日本庭園の成立」、『考古学ジャーナル』No.599、ニューサイエンス社、2010.5 ③平澤毅・栗野隆、「東アジアにおける理想郷と庭園」、『奈良文化財研究所紀要2010』、2010.6 ④小野健吉「(都市の文化)庭園」『史跡で読む日本の歴史9・江戸の都市と文化』、吉川弘文館、2010.6 ⑤平澤毅「古代庭園の世界」、古代の都2『平城京の時代』、吉川弘文館、2010.7 ⑥小野健吉「(平城京の造営)庭園の姿」、『季刊考古学第112号・特集平城京研究の現在』、雄山閣、2010.8 ⑦青木達司「桂離宮と『桂垣』」、『遺跡学研究』第7号、2010.11 ⑧平澤毅「名勝庭園の指定名称」、『遺跡学研究』第7号、2010.11 ⑨青木達司「『桂垣』の補修に関する研究」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12 ⑩小野健吉「古代日本の宮苑」、『百済研究第53輯』、韓国忠南大学校百済研究所、2011.2 ⑪青木達司「『桂垣』と『桂垣』裏ハチク林に関する研究」、『ランドスケープ研究』第74巻第5号、2011.3 ⑫平澤毅「文化遺産としての池田氏庭園の保護とその意義」、秋田県史跡整備市町村協議会研修会他合同講演会、2010.10 ⑬小野健吉「古代日本の宮苑」、韓国忠南大学校百済研究所、2010.10 ⑭青木達司「『桂垣』の補修に関する研究」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12 ⑮小野健吉 Resurrecting the 12th-century Japanese Garden Estate of Aristocrat Fujiwara Toshimori(b.1120-) 米国コロンビア大学、2011.3	

自己点検評価調査

研究所 No.23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 第2期中期計画において、庭園に関する調査研究の中核的な調査研究テーマとしてきた「平安時代庭園に関する調査研究」については、平成18年度から平成21年度までの調査研究成果を踏まえつつ、新たに総括して報告書として取りまとめたことは、奈良時代の古代都城における庭園を検討する上でも極めて重要な成果である。さらに、日本庭園研究の基盤的資料として極めて重要な森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園史等関係資料の整理・研究の基盤的環境を整えたことなどを含め、調査研究の取組の成果は良好であると評価できる。また、次期中期計画において主軸とするべく日本庭園の研究成果を国際的に発信するための検討をおこなうとともに、海外における日本文化あるいは庭園に関する研究者等と今後の共同研究に関する協議を進めたことにより、今後における日本庭園史及び歴史的庭園の保護に関する研究の飛躍的な進展に資するものと考えられる。						

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	報告書等刊行数			
判定	A	S	A			
備考 平成18年度以来取り組んできた「平安時代庭園に関する調査研究」の成果として、学報『平安時代庭園の研究』の検討に伴う研究会を開催し、計画通り報告書として取りまとめて刊行したことは、基盤的な調査研究の具体的な成果の公表において、高く評価できる。さらに、発掘庭園に関する検討を継続的に重ねてきたこととともに、古代から近代に及ぶ種々の研究成果を15件の論文等、4件の講演・発表等として公表できたことは、研究成果の社会的還元であるとともに、古代都城における庭園研究を相対化し、かつ、それらの保存整備に対しても多くの示唆を与える重要な学術的成果の蓄積として評価でき、極めて有意義であったと言える。論文等件数については当初目標値を設定していないが、絶対数においてSと評価できる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき国際的な調査研究の方向性について検討を進めることができた。特に、「平安時代庭園に関する調査研究」においては、庭園史学のほか、考古学、建築史学、文献史学、文学等の学際的な検討の重要性を示すことができたとともに、このような庭園研究の取組は、さらに国際的観点からも推進していくべきであると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第1期中期計画からの取組も含め、第2期中期計画においては、特に古代後期に関する検討を中心として古代庭園に関する調査研究を様々な観点から進めることができた。これらの成果を踏まえつつ、また、国内外の庭園史に関する調査研究及び歴史的庭園の保護をめぐる諸々の現状を踏まえると、今後、学際的・国際的な観点から、外部の研究者等と調査研究協議を重ねていくことが極めて重要である。また、今年度に基盤的環境を整備した森蘊・村岡正・牛川喜幸等の庭園史等関係資料については、さらに整理を進め、庭園史及び歴史的庭園保護の基盤的な資料の整理・研究をさらに推進していく必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究 ((1) -⑤-カ)
【事業概要】 飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究をおこない、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、鑄造関連遺物を中心とした資料の調査をおこなうとともに、河南靈井遺跡出土品の研究に協力する。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺出土部材の研究をおこなう。	
【担当部課】	飛鳥資料館
【プロジェクト責任者】	学芸室長 加藤真二
【スタッフ】 成田聖、丹羽崇史[以上、飛鳥資料館]	
【主な成果】 飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、天文図を中心に研究を進め、関連文献の収集、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。 東アジアにおける工芸美術史・考古学研究のうち、鑄造関連遺物の調査は、藤原京出土の資料に関し、集成と調査を行った。靈井遺跡出土品の研究協力は、成果の一部を企画展で示した。また、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査をおこなうとともに、内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。 山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年も計測を継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。	
【年度実績概要】 飛鳥地域の壁画古墳の研究：関連する文献資料を収集するとともに、天文図を中心に研究を進め、高松塚・キトラ両古墳の天文図の比較、成田市稲荷山遺跡出土七星刀の調査などを実施した。キトラ古墳の天井天文図は、実際の天文図をもとにしたものと思われることから、天文図等の厳格な管理が大宝律令で規定される以前にキトラ古墳壁画が描かれたことが想定された。この研究成果は平成23年度春期特別展、およびその展示図録の基礎となる。なお、昨年度の研究成果を飛鳥資料館図録第52冊として刊行した。 鑄造関連遺物の調査研究：藤原京出土の資料に関し、集成と調査をおこない、研究図録第13冊を刊行した。 靈井遺跡出土品の研究協力：河南省文物考古研究所で研究協力を実施した。また、研究協力の成果を夏期企画展で展示し、飛鳥資料館カタログ第22冊を刊行した。さらに、来日した河南省文物考古研究所ほかの研究者と同行し、東北大学、明治大学等での調査を行うとともに、「The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia」、「北アジア調査研究報告会」など内外の学会、シンポジウムで報告をおこなった。 山田寺出土部材の研究：第2展示室で常設展示中の重要文化財山田寺出土部材について、ひずみ計を設置して、その経年変化を計測している。近年、春期のキトラ古墳壁画の特別公開にともない、多数の来客があることから、その影響の有無に特に注意を払っている。計測によれば、大きな変化は生じておらず、展示を継続している。	
	
サハリン州立大学国際シンポジウムでの報告	
【実績値】 飛鳥地域の壁画古墳の研究 図録1冊 (①) 鑄造関連遺物の調査研究 研究図録1冊 (②) 靈井遺跡出土品の研究協力：カタログ1冊 (③)、研究報告 2回 (④・⑤) 山田寺出土回廊部材 経年変化計測値	
【備考】 ①キトラ古墳壁画四神』飛鳥資料館図録第52冊 2010年4月 ②『飛鳥の冶金関連遺跡』飛鳥資料館研究図録第13冊 2011年3月 ③『小さな石器の大きな物語』飛鳥資料館カタログ第22冊 2010年7月 ④加藤真二 “The Microblade industry of Lingjing, Xuchang, Henan province, China” International Symposium “The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia” Sakhalin State Univ. 2010年9月 ⑤加藤真二「靈井遺跡の細石刃技術」第12回 北アジア調査研究報告会 於札幌学院大 2011年3月	

自己点検評価調査

研究所 No. 24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 壁画古墳についての調査研究は、天文図に関わる新たな知見を打ち出し、キトラ古墳、高松塚古墳の造営年代に関わる議論に影響を与えた。 鑄造関連遺物の調査研究は、飛鳥地域における鑄造関連遺跡とそこからの出土品を集成し、飛鳥・奈良時代の金工技術の解明のための貴重な基礎データを提供した。 河南霊井遺跡出土品の研究協力は、展覧会をひらくとともに、内外の学会、シンポジウムに参加し、その成果の一部を広く公開し、当該遺跡出土の資料の重要性が内外に浸透しはじめた。 山田寺の出土部材の研究で行っている、保存処理済み大型部材に関する継続的なデータは、従来我が国になかった長期的なデータとなり、保存科学および大型木製品の展示保管に大いに資している。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考 当初計画どおり、研究図録1冊を刊行するとともに、展覧会の開催やカタログ1冊の刊行などをつうじて、成果を広く公開することができた。調査・分析についても必要な回数を実施し、成分分析データ、画像データ等を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の研究計画通り、壁画古墳の調査では、春期特別展示およびその図録刊行に必要な成果をあげることができた。鑄造関連遺物の調査では、飛鳥地域における資料を集成でき、それを研究図録として刊行できた。霊井遺跡出土品の研究協力でも順調に調査が進行した。 また、山田寺の出土部材についても、継続的な調査を推進し、展示・保存にかかわる異常変化を見出すこともなく、順調に展示を継続するとともに、保存処理を行った大型木製品の展示・保存に関するデータを蓄積することができた。 以上の進捗状況を総合的に評価し、Aと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定どおり遂行するとともに、中期計画全体を通じて、所定の成果をあげることができたことから、当事業は達成できたと判定した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究 ((1) -⑥-ア)
【事業概要】 遺跡の調査・保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、遺構の露出展示を伴う整備事例の資料収集・現地調査を踏まえたデータベース構築に取り組み、管理マニュアル等を含む遺構露出展示に関する調査研究の成果の取り纏めを進めた。また、遺跡整備・活用研究集会（第5回）『地域における遺跡の総合的マネジメント』を開催した。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 小野健吉（文化遺産部長）、青木達司（遺跡整備研究室研究員）、黒崎直（客員研究員）	
【主な成果】 遺跡等における遺構露出展示について、個別事例の情報収集をおこない、データベース構築の作業を進めるとともに、露出展示遺構の保存管理に関するマニュアルの検討をおこなった。また、過年度の成果について、『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり』[平成21年度遺跡整備・活用研究集会（第4回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。	
【年度実績概要】 1. 国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。また、文化遺産の保護と遺跡整備との関連について検討した。 2. 2011年1月21・22日に、「地域における遺跡の総合的マネジメント」をテーマとして、平成22年度遺跡整備・活用研究集会（第5回）を、平城宮跡資料館講堂で開催した。発表内容は「研究集会の開催趣について」のほか、「地域と遺跡」に関する基調講演2件、「社会振興と遺産」に関する講演2件で、これらを踏まえ総合討議をおこなった。なお、研究集会参加者からアンケートの回収率は出席者の96%で、うち95%から有意義であったとの回答を得た。 3. 研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等をおこなった。 4. 昨年度の研究集会「遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～」の成果について、「奈良文化財研究所紀要2010」に報告するとともに、報告書を編集・刊行した。 5. 全国における遺構露出展示に関する現状と課題を詳細に把握するため、個別事例の整備情報収集に基づきデータベース構築を進め、管理マニュアルの作成など、露出展示における問題点の分析と今後のあり方について具体的な検討を進めた。 6. 昨年度の研究集会における成果を踏まえつつ、文化庁が実施している歴史文化基本構想の取組や、国土交通省が主に所管している歴史まちづくり法に関わる取組に関する情報収集を行った。 7. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課等に対して平成21年度に刊行した報告書の配布をおこない、過年度の成果の公表に努めた。 8. 遺跡の調査保護に関するアーカイブ事業として2011年1月14日に鼎談『奈文研と遺跡の調査・保護』を実施した。	
	
遺跡整備・活用研究集会（第5回）	
【実績値】 1. 研究集会等開催数：2回（資料集①：参加者数：地方公共団体職員等約80名） 2. 報告書等刊行数：1件（②） 3. 論文等数：10件（論文3件③～⑤、講演・発表等3件⑥～⑧）。	
【備考】 ①奈良文化財研究所遺跡整備研究室編『平成22年度遺跡整備・研究集会（第5回）講演資料集』2011.1 ②奈良文化財研究所遺跡整備研究室編（平澤毅編著）『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～』2010.12 ③平澤毅「遺跡整備と地域づくり」、『奈良文化財研究所紀要2010』、2010.6 ④小野健吉「大極殿復元」、古代の都2『平城京の時代』、吉川弘文館、2010.7 ⑤平澤毅「名勝及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12 ⑥平澤毅「自然と文化の多様性をめぐる最近の国際的な動向と視点」『グローバルランドスケープ通信』、2011.1 ⑦平澤毅「造園学が取り組むべき『遺産』について」、『ランドスケープ研究』第74巻第4号、2011.2 ⑧平澤毅「浦富海岸の名勝地としての価値とその保護」、名勝及び天然記念物浦富海岸保存管理計画報告書、2011.3 ⑨平澤毅「名勝の保存管理計画策定に関する考察」、『ランドスケープ研究』第74巻第5号、2011.3 ⑩HIRASAWA Tsuyoshi “Protection of the Cultural Properties in Japan”, George Town, MALAYSIA, 2010.9 ⑪平澤毅「地域における遺跡の総合的マネジメント」、遺跡整備・活用研究集会（第5回）、2011.1 ⑫平澤毅「名勝及び天然記念物浦富海岸の価値とその保護」、平成22年度日本造園学会関西支部大会、2010.12	

自己点検評価調査

研究所 No.25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 遺跡整備分野の中期計画事業における中心的な課題である遺構露出展示に関する調査研究においては、特に平成19年度以降、全国的な現状把握を進め、平成20年度に開催した研究集会『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』における検討を踏まえて、平成21年度以降、さらに個別具体的な事例における詳細な状況把握を進める中で、遺構の適切な保存と活用のために把握すべき情報項目に関する検討が予想以上に複雑であることが明らかとなり、事例の条件を絞って当該遺構の管理者等への照会を行ったところであるが、遺構の種類や環境条件・管理条件等の整理・検討と、その分析に基づく管理マニュアルの検討を進めた。昨年度開催した研究集会のテーマである遺跡整備と地域づくりとの密接な関連は、文化庁が推進している「歴史文化基本構想」、文部科学省・農林水産省・国土交通省の三省共管による「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」の動向とも関連して、近年極めて注目されている研究課題であり、研究集会『遺跡内外の環境と景観 ～遺跡整備と地域づくり～』の報告書を取りまとめ、公表したことは極めて高く評価できる。また、国際的な動向も踏まえて開催した研究集会『地域における遺跡の総合的マネジメント』をはじめ、時宜に合った調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。						

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	報告書等刊行数			
判定	A	S	A			
備考 国内外の動向を踏まえ、地域の視点から遺跡の保護とそのための総合的な保存管理の在り方を検討するために開催した研究集会は、全国各地及び様々な分野から約80名の参加が得られ、その情報や課題の共有等において高く評価できる。また、近年の遺跡整備をめぐる発展動向を踏まえ、遺跡の調査保護に関するアーカイブ事業について新たに検討し、鼎談『奈文研と遺跡の調査・保護』を企画・実施したことは、遺跡保護の根本理念を確認し、将来にわたる遺跡整備の方向性を検討する上で極めて重要な事業であったと評価できる。一方、年度当初において、取り纏めを計画していた遺構露出展示に関する調査研究においては、全国各地の個別事例の照会に係る詳細な情報項目の検討について検討を進めてきたが、予想以上にその組立に時間を要し、また、照会事例の回答収集にも時間を要し、分析と報告書等の刊行が年度を跨ることとなった点については、計画立案・実施の見通しの点で課題を残したものの、今後の成果公表において、正確性等を確保するために適切な判断であったと考える。 なお、国内外の動向を踏まえつつ、論文・講演等を通じ、文化遺産の保護に関して、保存管理対象の理解、保存管理手法及び技術的事項を含む遺跡等の整備に関わる調査研究成果等の公表・普及を行った件数も極めて高く評価できる。論文等件数については当初目標値を設定していないが、絶対数においてSと評価できる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内容としては当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、第5回を迎えた研究集会については、地域における遺跡の総合的マネジメントを検討することで総括し、大枠において次の段階に向かって、さらに充実を図っていくべき事業のひとつであると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会の成果を踏まえ、地域における遺跡のマネジメントについて検討したことは、時宜に合った成果として評価できる。次期中期計画の初年度となる次年度については、国内外の動向を踏まえて各種記念物が所在する地域における総合的な保存管理・公開活用手法を検討するための具体的課題の明確化を進めていく必要がある。

業務実績書

研究所 No.26

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究（(1)－⑥－イ）
【事業概要】 遺構の安定した公開・展示をおこなうことを目的とした事前調査法、保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土中の水分移動や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員）、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員）	
【主な成果】 遺構の露出展示をおこなった場合の水分移動変化、および塩類による劣化を予測するために、水分移動および溶質移動の推定をおこなった。さらに、塩類による土質遺構の劣化を抑制するために、水による溶質除去の可能性についても検討した。 覆屋を伴わない屋外に位置する遺構において、気象台による限定的な気象観測データ（気温、湿度、日射量、降水量、風速）をもとに、遺構表面からの水分浸潤量および蒸発散量を推定し、土中における水分移動について検討をおこなった。	
【年度実績概要】 1）土質遺構の露出展示を実施した場合、遺構の劣化を引き起こす要因として、塩類の析出が挙げられる。そこで、遺構を露出展示した場合の水分・溶質移動を推測し、さらに水による遺構の安定化および溶質除去の可能性を検討するために、シルト質土壌をもちいた土壌カラムを作製して、鉛直一次元の水分・溶質移動に関する室内実験を実施した。実験結果からは、遺構の安定化を図りつつ、溶質が鉛直下方へと移動して除去可能なことが明らかとなった。 2）岡山市に位置する千足古墳では、石障の表層剥離が著しく進行しているため、表面に施された線刻が失われる危険性があり、その対策が急がれている。石障の劣化を引き起こしている要因の一つとして、石室内へ流入し、内部に溜まった水が石障底部で吸収され、石材表面で蒸発することの繰り返しが生じられる。そこで、石障劣化の基礎的なデータを得るため、墳丘土壌の不飽和水分移動特性を把握すると同時に、限られた気象観測データに基づいて、墳丘表面からの水分の浸潤量および蒸発散量を推定し、降雨時の雨水の移動に関する数値実験をおこなった。その結果、豪雨時には墳丘土中に浸潤した雨水が石室内でしみ出すことが示唆されたことから、千足古墳で観察された水たまりは降雨によるものと推測された。	
【実績値】 発表件数：1件 論文等数：2件	
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照	



千足古墳石障の劣化状況

自己点検評価調査

研究所 No. 26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 遺構を露出展示する際の水分と溶質の移動を推測するための実験をおこなった結果、用いたシルト質土壌について遺構の安定化を図りつつ、溶質を鉛直方向へと移動させて遺構表面からの析出を抑えることができることを明らかにした。また、岡山市の造山古墳の陪塚である千足古墳の石障の表層剥離の問題に対して、墳丘土壌の墳丘土壌の不飽和水分移動特性、墳丘表面からの水分の浸潤量および蒸発散量を数値実験により推定したところ、豪雨時には墳丘土中に浸潤した雨水が石室内でしみ出すことが示唆されたことから、千足古墳において観察された水たまりは降雨によるものと推測した。これらの知見は、石障の保存対策上、重要な知見として、委員会で検討されている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				
備考 日本文化財科学会第27回大会において発表1件をおこなった。また、『日本文化財科学会第27回大会発表要旨集』に1件、『奈良文化財研究所研究紀要2010』に1件、『史跡ガランドヤ古墳—史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う調査報告書—』に1件の、合計3件の論文を発表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をAと判定した。土質遺構を露出展示するためには、水蒸気移動を含めた遺構土壌の不飽和水分移動特性および溶質の移動を定量的に把握する必要がある。そこで次年度は、熱・水分・溶質の同時移動解析をおこない、遺跡土壌安定化の最適条件について検討する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度より新たな中期目標・中期計画の下、事業を展開していくが、新たな中期計画のもとで、次年度は熱・水分・溶質の同時移動解析をおこない、遺跡土壌安定化の最適条件について検討する予定である。

業務実績書

研究所 No. 27

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言（(1)－⑥－ウ）		
【事業概要】 平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づく具体的整備に対して専門的・技術的な援助・助言を行うため、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や国土交通省の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 井上和人
【スタッフ】 渡辺晃宏、小池伸彦、箱崎和久、大林 潤、鈴木智大、海野 聡（以上、都城発掘調査部） 小野健吉、島田敏男（以上、文化遺産部）、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾（以上、企画調整部） 今西康益、宮本隆行（以上、研究支援推進部）			
【主な成果】 昨年度に完成した第一次大極殿正殿の完成記録写真撮影をおこなった。また4月24日に開幕した平城遷都1300年祭の準備のため、大極殿正殿内の展示の内容等について援助・助言をおこなった。1300年祭開催期間中は、各方面からの来訪者への対応、あるいは見学客の質問等の対応をおこなった。開催中あるいは開催後はイベント用の仮設建物の建設・撤去や旧状復旧にともなう工事に対する立会をおこなった。 それとともに、平城宮跡の国営公園化にともない、第一次大極殿を中心とした大極殿院内の諸建物を復原することとなった。このための文献資料や発掘遺構等の検討をおこない、またそのための資料収集のほか、類例を抽出して調査をおこなった。検討成果は国土交通省が組織した「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」で発表した。			
【年度実績概要】 第一次大極殿の完成記録写真については、建物の外観は高所作業車を導入して4×5判の写真撮影をおこなった。建物内部については、内部の全景写真のほか、中心に設置された高御座の内外写真、正殿内小壁に描かれた上村淳之画伯による壁画の写真撮影をおこなった。 大極殿正殿内の展示施設について、その内容等について援助・助言をおこなった。皇太子殿下が列席された4月23日の完成記念式典、天皇・皇后両陛下がご列席された10月8日の記念祝典に際しては、関係各方面の助力を得て準備等を進め、つつがなく終了することができた。このほか開催期間中は国内外の要人や研究者への対応に追われた。 遷都1300年祭の開催期間中および終了後は、イベント用仮設建物の建設や撤去にともなう掘削部分、および旧状復旧にともなう要請に応じて、立会等を精力的におこなった。 一方で、国土交通省がおこなう第一次大極殿院の復原整備に向けて、奈良時代の大極殿院の建物、すなわち大極殿院南門、東西楼、南面・東西面の築地回廊、内庭部の様相について、平成13・14年度におこなった研究成果を吟味しつつ、その後の発掘調査成果を加味して復原原案作成のための資料収集をおこなった。これにともなう復原検討会を14回実施して、大極殿院復原のための研究をさらに深化させた。これらの成果を『第一次大極殿復原検討会記録』としてまとめた。また「第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」にオブザーバーとして参加し、上記の検討成果を発表した。			
【実績値】 大極殿正殿完成記録写真：4×5、124点。 記念式典等、国内外の要人に対する対応：4/23、10/8をはじめとして、20回以上。 平城宮跡の遷都1300年祭関係を中心とする立会対応：平成23年1月より計20回以上。 大極殿院復原にむけての復原検討会開催：平成22年7月23日～平成23年3月10日まで計14回開催。 第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会への出席：平成22年9月23日・12月9日、23年2月14日 収集資料数：約8,000点			
【備考】			

自己点検評価調書

研究所 No. 27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 平成 22 年は平城遷都 1300 年の記念すべき年であり、第一次大極殿正殿の復原事業もこれに向けておこなわれてきた。平成 21 年度末で完成した大極殿正殿の完成記録写真撮影、および各種イベントに対する応対あるいは、協議事項等に対する対応を迅速におこなったことは、適時性の評価を満たすと考えている。 また平城宮跡の国営公園化にともなう第一次大極殿院内の建造物および内庭部の復原にあたっては、これまでの発掘調査成果を活かし、またその成果を分析することで、研究を深化させることができた。ここからさらに詳細な研究を継続し、建物の復原につなげていくことができると考えている。独創性・継続性・発展性・正確性の評価は、上記のような諸点から十分満足させられると考えている。						

2. 定量的評価

観点	記録件数	応対数	収集資料数			
判定	A	A	A			
備考 竣工した第一次大極殿正殿の記録写真は、必要十分な数の写真撮影をおこない、当研究所の出版物などに利用することができた。このほかにもデジタルカメラによる平城遷都 1300 年関係のイベントの写真撮影をおこなった。 平城遷都 1300 年祭関係で平城宮跡を訪れた国内外の要人、研究者への対応は膨大な数にのぼる。またイベント会場の撤去にともなう立会も平成 23 年に入って増え、関係者は多忙を極めたが、つつがなく終了することができた。 第一次大極殿院復原のための検討では、平成 13・14 年度の先行研究を参照しつつ、再度十分な検討をおこなうための資料収集をおこない、検討会を開催することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	100 年に一度の大イベントが举行された年度であったが、関係各方面の助力を得て、無事に乗り切ることができた。このイベントの裏では、第一次大極殿院の復原に向けた検討をおこない、これまでの検討成果から問題点を洗い出し、研究計画を構築し、それに基づいて復原研究を進めることができた。これらを次年度にも引き継いでいきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に掲げた第一次大極殿正殿とその周辺の復原・整備に関する業務は、大極殿正殿の完成とその記録をもって、ほぼ当初の予定を完遂することができたと考えている。今後は引き続きおこなわれる第一次大極殿院の復原建物、あるいはその周辺の整備に関する調査・研究にシフトしていきたい。復原研究に関しては、第一次大極殿正殿以来の事業であり、その頃から当研究所の研究体制が変化したこともあって、やや準備と経験が不足していた感もあったが、次年度以降は今年度の成果や収集資料を活用して、円滑な検討をおこなうことができるよう工夫したい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4211

業務実績書

研究所 No.28

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究 (2)-①		
【事業概要】 前の中期計画5カ年中に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、1) 光に対する物性の検討、2) 光物性の画像化に関わる技術開発、3) 形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子(以上、企画情報部)			
【主な成果】 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録—蛍光線画像編』として刊行した。また、奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。さらに、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現験記絵巻」の調査撮影、奈良国立博物館との共同調査研究として「信貴山縁起絵巻」、徳川美術館との共同研究として「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影を行った。			
【年度実績概要】 1. 他機関との共同研究・報告書の刊行 本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。デジタルコンテンツの多目的利用の一環として、平成17年度に行った平等院との鳳凰堂仏後壁の共同研究成果のうち『平等院鳳凰堂調査資料目録—蛍光線画像編』を刊行した。また、平成21年度に行った奈良国立博物館との共同研究成果を『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行した。 2. 今年度の他機関との共同調査研究 1) 宮内庁三の丸尚蔵館(「春日権現験記絵巻」の調査撮影 12/13-17, 20-22) 2) 奈良国立博物館(「信貴山縁起絵巻」の調査撮影 5/9-15、研究協議会 11/1) 3) 徳川美術館(「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査撮影 6/14-18, 11/22-27) 3. デジタルコンテンツの多目的利用の一環としての徳川美術館との調査成果の公表を行うための報告会と、これに併せて高精細デジタル撮影による実物大画像の展示を行った(1/29)。			
【実績値】 報告書の刊行 2件 (①、②) 学会研究会等での発表件数 1件 (③) 画像展示の件数 1件 (④)			
【備考】 ①『平等院鳳凰堂仏後壁調査資料目録—蛍光線画像編』11.03 ②『大徳寺五百羅漢図報告書』11.3 ③江村知子「歌舞伎図巻の描写について」『近世風俗画共同研究調査報告会』11.01.29 ④「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の高精細デジタル撮影による実物大画像の展示、東京文化財研究所 11.1.29			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4211

自己点検評価調書

研究所 No.28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査箇所数	論文数	画像展示件数	発表件数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	他館との共同研究により、各時代の日本美術を代表する作品（「春日権現験記絵巻」、「信貴山縁起絵巻」、「歌舞伎図巻」、「本多平八郎姿絵屏風」）の調査・撮影を行い、「歌舞伎図巻」「本多平八郎姿絵屏風」の調査成果中間報告会を開催し、併せて、高精細デジタル撮影による実物大画像の展示を行うとともに、これまでの成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録—蛍光線画像編』『大徳寺五百羅漢図報告書』として刊行するなど、デジタルコンテンツの多目的利用の成果を上げたのでAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿って各年ともに調査・研究を実施し、その成果報告書についても順調に刊行することができた。また、他館との共同研究の成果公表の一環として、共同研究相手館における展覧会に際してパネル展示等を行い、高精細デジタル画像の文化財への応用研究についての周知と関心を喚起することができた。次期中期においても文化財への高精細デジタル画像の応用と研究をすすめ、積極的に成果公開に努めることにしたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の非破壊調査法の研究 ((2)-②)
【事業概要】 文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器に関する調査・研究と、その応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対する元素分析法、および染料など有機化合物の物質同定を目的とした分光学的手法の調査・研究を中心に行い、絵画・彫刻・工芸品など実資料への適用を図る。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊（客員研究員）	
【主な成果】 蛍光X線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはX線透過撮影装置など複数の可搬型調査機器を用いて、博物館・美術館等の所蔵作品の材質・構造の非破壊調査を実施した。また、これら調査技術の高度化を目指して、さまざまな検討を行い、実資料への適用を図った。	
【年度実績概要】 5年計画の最終年度として、以下に示す成果を得た。また、5ヵ年の研究成果を報告書として刊行した。 (1) 可搬型非破壊調査機器を駆使した文化財の材質・構造調査 蛍光X線分析装置、反射分光分析装置、デジタル顕微鏡さらにはX線透過撮影装置などの可搬型調査機器を作品所蔵館に持ち込み、さまざまな文化財資料の材質や構造の調査を非破壊で安全に行った。複数の機器を駆使することで、単一機器だけでは特定できない材料の分析を行うことが可能となった。今年度は、国宝阿弥陀聖衆来迎図（高野山）、重要文化財泰西王侯騎馬図（サントリー美術館）、重要文化財元禄国絵図（国立公文書館）などの日本絵画を中心に、重要文化財住之江蒔絵硯箱（静嘉堂文庫美術館）や沖縄県所在のガラス資料（沖縄県）などの工芸品についても調査を実施し、新たな情報を多数得ることができた。 (2) 有機染料の高精度分析に関する検討と実資料への適用 反射分光分析によって得られたデータから二次微分スペクトルを作成する方法により、有機染料を中心とした色材の分析確度を高める研究を行った。染料を含む青色色材に関する実用性が確認でき、江戸期から明治初期の絵図資料の分析に適用して、有益な分析結果を得た。また、多くの色材に関する二次微分スペクトルを収集し、基礎データの蓄積を図った。 (3) 非破壊調査法の高度化に関する研究 非破壊調査手法をより高度化し、安全にかつ最小の照射条件での調査を実現するために、いくつかの検討を行った。 ・蛍光X線分析による空気中で軽元素測定法の検討 ・実験的手法とコンピュータシミュレーションの両者を用いてX線透過撮影の最適条件を求める方法の検討 ・新たな照射光（近赤外LED）撮影による色材判別の可能性の検討	
【実績値】 論文等数 2件 (①、②) 発表件数 2件 (③、④) 報告書 1件 (⑤)	
【備考】 ①早川泰弘：「ポータブル蛍光X線分析装置による沖縄県所在ガラス製品の現地調査」 『保存科学』50、pp.217-227、11.03 ②吉田直人：「可視反射スペクトルと二次微分スペクトルによる青色色材の判別に関する検討」 『保存科学』50、pp.207-215、11.03 ③早川泰弘、城野誠治、黒田泰三：「国宝伴大納言絵巻の彩色材料調査」 日本文化財科学会第27回大会、関西大学 10.6.26-27 ④吉田直人、間瀬創：「近赤外LEDを光源とした資料撮影で得られる情報」 文化財保存修復学会第32回大会 長良川国際会議場 10.6.12-13 ⑤『文化財の非破壊調査法の研究 平成18～22年度 研究成果報告書』、11.03	

自己点検評価調査

研究所 No. 29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への 掲載論文等数	学会研究会等 での発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高い水準でさまざまな文化財資料の材質・構造調査を実施し、迅速にその結果を報告して、作品の保存・修理等に有益な情報を多数提供することができた。各地の博物館・美術館等と協同して作品調査を推進し、その調査技術の普及や調査結果の説明にも努めた。さらに、より高度な文化財非破壊調査の実現を目指し、さまざまな改良や研究にも取り組んだ。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本中期計画の5ヵ年において、文化財の材質・構造調査をその場で行う基礎的技術はほぼ確立したと考える。各地の博物館・美術館あるいは寺院・神社などにもその情報が普及し、これまで調査されたことのない多くの文化財資料の非破壊調査が実施され、貴重なデータを多数得ることができた。すべての調査に対して、迅速に調査結果の報告を行い、特に重要な成果については、書籍・論文・学会発表などでの公表を図った。当初に計画した通りの研究進捗状況であったと考える。 今後は、より安全に、より高精度に調査できる手法の確立をめざし、従来技術の改良、新技術の開発を推進する。また、調査データの蓄積とその公開を積極的に進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開（(2) ー③ーア）		
【事業概要】 官衙関連遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査において抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析をおこない、一般公開する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 山中敏史（客員研究員）、森本晋（企画調整室長）、馬場基（都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、青木敬（以上、都城発掘調査部研究員）、清野陽一（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）			
【主な成果】 官衙関係遺跡の建物データについて、各遺跡における建物群の性格・建物の性格を細分化して追加した。とくに、官衙および都城における門遺構のデータを重点的に収集し、『官衙と門』の資料集成を刊行した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方の一部まで公開した。さらに、井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。			
【年度実績概要】 1. 各地の官衙関連遺跡について、建物群の性格と個々の建物の性格に関する属性データを追加入力した。 2. 建物規模について、より詳細な数値を入力し、データ化した。 3. 平成21年度以前刊行の都城および官衙関係遺跡に関する報告書のめくり作業をおこない、門遺構に関する資料を収集整理した。 4. 門遺構のデータに関して、昨年度に開催した研究集会「官衙と門」の資料集成を編集・刊行した。 5. 平成18年度以降刊行された報告書のめくり作業をおこない、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関連遺跡等の資料を収集整理した。また、平成20年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業をおこなった。 6. 新たに収集した資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 7. 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理をおこない、近畿地方以西のデータについて、奈良文化財研究所ホームページで一般公開した。 8. 平成21年度以前刊行の都城および官衙関係遺跡に関する報告書のめくり作業をおこない、新たに井戸のデータベースを作成し、データ収集を開始した。			
 古代寺院建物データ入力画面（部分）			
【実績値】 官衙関係遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約150件、文献データ約800件、 建物データ約400件、画像データ約400件、 井戸データ約300件 古代寺院遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約200件、文献データ約2,000件、 建物データ約620件、画像データ約900件 公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡数約1,450件、文献データ約13,900件、建物データ約16,100件など 古代寺院遺跡：遺跡数約1,300件、文献データ約8,600件、建物データ約1,700件など 研究集会報告書：1件（①）			
【備考】 馬場基ほか編『第13回古代官衙・集落研究集会報告書「官衙と門」資料編』奈良文化財研究所研究報告第4冊、奈良文化財研究所、2010.12			

自己点検評価調書

研究所 No. 30

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 情報の共有化が要望されてきた古代寺院遺跡について、データ数の拡大をともなうデータベースを充実させている点で、適時性と発展性が認められる。また、毎年増加する官衙関連遺跡に関するデータを逐次補足・補充することにより、正確性と継続性、適時性を確保している。						

2. 定量的評価

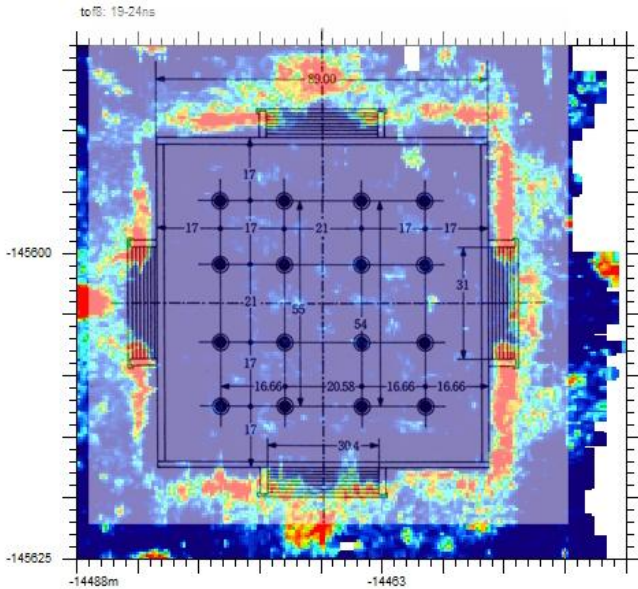
観点	データベース 入力件数	データベース 公開件数				
判定	A	A				
備考 毎年増加する官衙関係遺跡のデータの追加入力に加えて、新たに都城を含めた門遺構を全国的に集成し、データベースの充実化を図るとともに、門遺構の資料集成を編集・刊行した。また、寺院遺跡データの収集・入力作業を進め、データの公開も着実に達成した。さらに、井戸のデータベースを作成し、資料収集を開始した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を大幅に上まわったほか、都城および官衙関係遺跡における門遺構資料収集とデータベース化をおこない、資料集成を刊行した。古代寺院遺跡のデータベースを、近畿地方の一部を除く西日本について一般公開できたことは、とくに各地で寺院遺跡の調査研究にあたっている者にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。今後、新発見の官衙関係遺跡データを継続的に収集・整理するとともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し、公開していくことにしたい。また、これにくわえて、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析をおこない、整理・収集とデータベース化を始めることにより、官衙関連遺跡の調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開するとともに、宮・都城の門についてもデータ収集を開始し、データベースの一層の充実化を図っている。一昨年度に構築した寺院遺跡のデータベースについては、近畿地方の一部を除く西日本のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開することができた。今後は、官衙関連遺跡および寺院データの収集とデータベース化を継続し、利用しやすいかたちでの一般公開をさらに推進していくことが必要である。さらに、集落遺跡など、官衙以外における廂付建物についてもデータ収集を開始し、発掘調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究（(2)－③－イ）		
【事業概要】 遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、方法の検討と実地での実践によるデータの収集と分析をおこなう。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、新たな技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大（埋蔵文化財センター主任研究員）、西村康、西口和彦（以上、客員研究員）			
【主な成果】 遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践をおこなった。測量では、三次元レーザースキャナーおよび写真測量の技術的検討をおこない、遺跡や遺物の図化法の検討、安価で導入可能な機器の実践と普及を実施した。探査では、GPRおよびEM法の走査方法改善と新たな機器の試作、GPSによる位置精度向上実験をおこない、多様な条件下で遺構の確認に成功した。			
【年度実績概要】 探査分野では、小坂城（茨城県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（以上、群馬県）、松本城（長野県）、平城宮、藤原宮、東大寺、赤田横穴（以上、奈良県）、鋼山製鉄所、苗代川窯（以上、鹿児島県）、大宰府（福岡県）、クランコー村遺跡（カンボジア）などで地方公共団体や大学と共同調査をおこなった。なかでも、東大寺東塔院では、基壇内の礎石などの残存状況や回廊、門の配置を明らかにすることができた。 測量・計測分野では、低価格の三次元レーザースキャナーの実用化を達成し、従来の記録法に加えて三次元計測が現実的に導入可能なことを示し、連携した行政内や企業の研究者とともに、解説書を刊行した。くわえて、東大寺東塔院、中宮寺（奈良県）、平城宮・京出土遺物、遼寧省出土遺物（中国）などの計測をおこない、三次元計測の有効性を検証することができた。 このほか、考古学情報の流通改良を目的とする、SVGおよびXMLを利用したデジタル実測図の流通に関する研究、平城京条坊の既往の発掘成果の整理、遺跡の位置情報データの活用などをおこない、その成果の一部を発表した。			
			
		東大寺東塔基壇のレーダー平面図と過去の復元案との比較	
【実績値】 講演件数：3件 発表件数：4件 論文等数：8件 遺跡探査実施件数：15件 三次元計測資料数：52点 研修実施件数：3件 大学講義件数：1件			
【備考】 論文・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			

自己点検評価調書

研究所 No. 31

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：技術革新が進行するなかでの確な指針を欠く現況の改善。 発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力。 効率性：時間的投資・人的投資の効率化。 継続性：事業中断以前を含めた、黎明期以来のデータの継続的収集と蓄積。						

2. 定量的評価

観点	探査実施件数	計測実施件数	発表件数	研修件数		
判定	S	A	A	A		
備考 いずれの項目も当初の目標値を上回っている。とくに探査実施件数はそれが著しい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	測量・探査ともに、作業の迅速化や結果の向上、地方公共団体などへの協力と成果の還元が達成できたため、Aと判定する。反面、新たな多方面からの要求に応えるための研究補助者の確保が必要だが、現状では充分に対処できていないことから、スタッフの負担が大きくなっており、これ以上の研究の拡大は事実上困難である。また、漏水事故や機器の老朽化により、かなりの機材が使用できない状況となり、これらの機器を必要とする作業には対応できない点が大きな問題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現状では、新しい方法や機器の導入と試行、成果の蓄積という点では、当初の予想を超える進展をみせており、全国各地からの依頼や問い合わせも急増している。三次元データや探査データの処理は時間を要する作業であるが、研究補助者の入れ替わりもあって、研究員の負担が増大している。探査については、RTK-GPSの導入などが進み、今後、さらなる進展が期待できる。しかし、依頼の急増や、機器の老朽化や漏水事故による故障のため、新しい技術を利用した効率化が難しい状況であり、調査で得られた新たな方法の試験や改良に取り組む時間がないことは問題である。したがって、すみやかな対応を図るとともに、次年度の調査研究の計画や依頼の受諾を大幅に見直す必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究 (2)－④)
【事業概要】 遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスX線CTやデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査に大変有効であるので、実施事例の拡充を図る。これらの研究成果を、学会、学術論文、各種報告書として発表する。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	年代学研究室長 大河内隆之
【スタッフ】	国武貞克（研究員、年代学研究室兼務）・児島大輔（特別研究員〈アソシエイトフェロー〉） 光谷拓実・伊東隆夫・藤井裕之（以上、客員研究員）
【主な成果】 2 県下2遺跡の出土木製遺物、2 県下4棟の木造建造物、3 府県下3 軀の木彫像に対して年輪年代測定調査を実施した。このうち、1 軀の木彫像に対してプロジェクト研究者らが開発したマイクロフォーカスX線CT装置を用いた年輪年代測定調査を実施している。これらの調査・研究成果の一部を論文等8件、学会発表等7件として公表した。このうち、1 件の学会発表ではポスター賞を受賞している。	
【年度実績概要】 1. 文化財の年輪年代調査：上記の年輪年代調査実績のうち、奈良・法隆寺金堂の年輪年代測定調査は一昨年度までの継続的な研究成果を昨年度に公表したが、良好な状態で保存されている同寺同堂古材の年輪年代調査をなお継続して実施しているほか、同寺大講堂の屋根替えに伴い同堂の部材および半解体修理の行われた同寺中院の部材を対象に年輪年代測定調査を実施している。また、島根・西川津遺跡出土の弥生時代の木製品に対して年輪年代測定調査を行い（右図参照）、結果として紀元前71年の年輪年代を得ている。 2. 年輪年代測定対象樹種の拡大：奈良文化財研究所ではスギ・ヒノキ・コウヤマキ・ヒバに対して年輪年代法を応用し年代測定調査を行ってきたが、近年の調査研究では近世の建造物に多用される榿（トガ）に対しても年輪年代法が有効であることがほぼ明らかになってきている。こうした研究成果に対して日本文化財科学会においてポスター賞が授与された（参照：【備考】欄⑩）。 3. 木簡の樹種同定：昨年度までに継続的に実施してきた奈良・平城宮跡出土木簡の樹種同定結果を公表した（参照：【備考】欄②）。 4. マイクロフォーカスX線CT装置の活用：同装置は年輪年代調査を主たる目的として開発されたものであるが、貴重な文化財の不可視情報を非破壊かつ高解像度で可視化するという特徴を活かし、年輪年代測定以外の文化財調査にも活用している。一例として、愛知・朝日遺跡出土の石鏃の刺さった動物骨を同装置で撮影し、骨内部に石鏃が貫入している状況を非破壊で確認した事例を挙げる。	
【実績値】 論文等数：8件（①～⑧）、学会発表件数：4件（⑨～⑫）。	
【備考】 論文等：①国武貞克・藤井裕之・吉岡直人・浅野啓介「檜扇の製作に関わる新知見」②山本崇・藤井裕之「平城宮木簡の樹種」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6 / ③大河内隆之・光谷拓実「年輪年代法による補訂」『中世禅宗様建築の研究』関口欣也著作集2010.9 / ④大河内隆之「年代をはかる」『図説 平城京事典』2010.12 / ⑤Mechtild MERTZ, Takao ITOH「Analysis of Wood Species in the Collection」In, ed. D. P. Leidy and D. Strahan “Wisdom Embodied: Chinese Buddhist and Daoist Sculpture in The Metropolitan Museum of Art” 2011.1 / ⑥光谷拓実「府中石田遺跡出土木材の年輪年代」『福井県埋蔵文化財調査報告 第121集 府中石田遺跡—舞鶴若狭自動車道建設に伴う調査—』2011.3 / ⑦光谷拓実「木崎遺跡出土木材の年輪年代」『福井県埋蔵文化財調査報告 第122集 木崎遺跡—一般県道小浜インター線道路改良工事に伴う調査—』2011.3 / ⑧光谷拓実「曲物底板の年輪年代測定」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXVI 古渡路遺跡』2011.3 学会発表等：⑨大河内隆之「日本年輪年代学研究史話—アリゾナ大学年輪研究所に保管されている故渡辺直経氏収集の木曾ヒノキ資料をめぐる—」⑩藤井裕之・光谷拓実「日本産ツガ属の年輪年代測定（その3）—現生材による基準パターンの作成と既存データの再検討—」日本文化財科学会第27回大会、2010.6 / ⑪児島大輔「正倉院宝物・金剛智の袈裟について」第66回彫刻史研究会、2010.7 / ⑫伊東隆夫・Mechtild MERTZ「中国における木の文化研究の2、3の事例—樹種同定からのアプローチ—」第61回日本木材学会大会、2011.3	



西川津遺跡出土木製品の年輪年代調査風景

自己点検評価調査

研究所 No.32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 適時性：建造物や木彫像の解体修理あるいは木製遺物の出土に際しては、迅速に対応して調査研究に及び、建築史・美術史・考古学等の歴史学・文化財科学関連諸分野に年輪年代情報を提供することができた。昨年度以上の成果を上げたため、高い評価とする。 独創性：ツガ（トガ）に対して年輪年代法が有効であることを示した研究成果は、学会で受賞したことにも端的に表れているように、独創的な成果として認めることができる。 発展性：マイクロフォーカスX線CT装置の利用価値を多角的に認め、不可視の情報を可視化することにより、年輪年代調査だけではなく、文化財の非破壊調査を一層進めることができた。また、上記の年輪年代法の適用樹種の拡大も発展性のあるテーマとして認められる。 効率性：十分に効率的な調査・研究を行っている。 継続性：年輪データを継続的に収集しているほか、法隆寺建造物の年輪年代調査等も継続的に行っている。 正確性：多くの自然科学的年代測定法の中で、年輪年代法は1年単位の年代を測定できる点できわだった存在である。公表する年代は統計学的にきわめて正確な数値である。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				
備考 公表した研究成果は論文等数・発表件数ともに当初の目標値を上回っており、A評価に値すると判断した。なお、発掘調査報告書や解体修理報告書など発行主体がほかにある場合、当研究室における担当分の結果報告が済んでいても、報告書自体が刊行されていないために未だ日の目を見ていない調査研究成果が数多く存在していることを付言する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的にも、定量的にも高い評価に値すると判断したため、総合的にA判定を与えた。とくに、若い研究者が年輪年代法の適用樹種の拡張に努め、美術作品の年輪年代調査を積極的におこなっていることは、年輪年代学の今後の発展に大きく寄与するものであり、高く評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の中期計画の調査研究事業を順調に遂行できた。次期中期計画においても、年輪データの蓄積、適応樹種の拡大、さらにはマイクロフォーカスX線CT装置の活用といった継続的かつ発展性のある調査研究事業を推進するとともに、発掘調査や解体修理事業に即応できる体制を整えて研究に適時性をもたせ、従前の正確性をさらに高めることで、質的にも量的にも豊かな成果を上げられるよう努力したい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡出土の動物遺存体や古土壌の考古科学的分析による環境考古学研究 ((2) -⑤)
【事業概要】 動植物遺存体による環境考古学的研究を継続して行う。また、出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。日本の先史時代の動植物利用と対比できる中国、韓国、台湾、北米北西海岸などの遺跡の発掘調査に積極的に参加し、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行う。そして、東アジアや環太平洋地域の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】 山崎健（研究員）、丸山真史・橋本裕子（以上、客員研究員）、菊地大樹（特別研究員）、樋廻理恵子、藤田英美（以上、派遣職員）、納屋内高史（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）、金原裕美子（京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程）	
【主な成果】 土壌選別作業を積極的に実施して、これまで出土事例の少なかった内陸部や日本海側の遺跡から動植物遺存体を回収して、分析を進めた。査読誌2本を含む30本の論文や報告書を執筆し、学会や研究会で8本の発表を行って研究成果を発表し、研究交流を深めた。藤原宮のウマに関する連携研究を立ち上げて、次年度につながる良好な成果を得た。また、研究の基礎となる現生動物骨格標本についても継続的に収集した。	
【年度実績概要】 屋代遺跡（長野県）、水汲遺跡（愛知県）、池島・福万寺遺跡（大阪府）、旧練兵場遺跡（香川県）および奈良文化財研究所が実施した発掘調査で出土した動物遺存体の分析を行った。長野県の屋代遺跡群では、水洗フルイ選別法とフローテーション法を実施して微細遺物を回収し、非常に多くの焼骨片を抽出した。これらの焼骨片を分析した結果、屋代遺跡群ではサケ・マス類を集中的に獲得したことが明らかとなった。また、掘立柱建物の火床と付属する土坑からサケ・マス類の椎骨破片や歯が集中して出土しており、捕獲したサケ・マス類の保存処理に伴うものと考えられる。こうした屋代遺跡群における分析をつうじて、貝層が形成されない内陸部においても、適切な土壌選別作業を実施すれば、食料残渣となった動植物遺存体が採取できることを明らかにできた。 研究成果の発信としては、人間文化研究機構の公開講演会、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）に関連して開催された国際学術ワークショップ、野生生物保護学会・日本哺乳類学会の合同大会、弥生時代のシンポジウムなどで講演・発表を行った。 継続的に実施している現生動物骨格標本の収集と公開では、オオカミ、ロバ、セキショクヤケイ、トウカイハマギギ、コクチイシナギなどの希少な骨格標本を含む、65点を収集した。他にも、春から秋までの袋角の成長段階に合わせてニホンジカの頭蓋骨標本を作成した。 また、連携研究では、同位体科学分析の予備分析として、藤原宮から出土したウマの骨のコラーゲン抽出率を推定した。その結果、多くのコラーゲンが残存する可能性が示唆され、藤原宮跡の土壌環境は骨や歯の有機分析に適しているものと推測された。今年度の分析結果を踏まえて、来年度に同位体科学分析を実施し、藤原宮におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討する予定である。	
【実績値】 標本作製・収集数：魚類29点、鳥類16点、哺乳類15点、両生類・爬虫類5点 論文等数：30件 発表件数：9件	
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照	



屋代遺跡から出土したサケ科魚類の椎骨

自己点検評価調書

研究所 No.33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：国や地方公共団体からの要請を受けて、発掘調査や整理事業、報告書作成における環境考古学関係の協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。 独創性：動植物遺存体の出土事例が少ない内陸部の遺跡において土壌選別を積極的に行い、動植物遺存体の蓄積に努めることで、生業活動を明らかにするための基礎研究を進めた。 発展性：今年度より東京大学との連携研究として、藤原宮におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討するための同位体科学分析を実施した。 継続性：研究の基礎となる動物骨格標本を、継続的に収集・作製・管理・公開している。また、国内外の埋蔵文化財担当職員や研究者に対して環境考古学の研修を行っている。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数	標本収集数			
判定	A	A	A			
備考 査読誌2本を含む30本の論文等の刊行、学会や研究会で9本の発表を行った。また、動物骨格標本65点を収集したことから、評価をAとする。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、これまで出土事例の少ない日本海側や内陸部の遺跡で土壌選別を積極的に実施し、生業活動や食生活の歴史を明らかにするための貴重な資料を検出した。また、連携研究を実施して、古代におけるウマの飼育形態や長距離移動を検討するための研究を進めている。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学に関する研究について、国内外で数多くの論文や学会発表等を行った。以上の点から、総合的にAと評価するのが妥当と考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も多くの学会や研究会などで研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。また、新規に連携研究を実施して良好な結果を得ることができ、次年度以降も継続的に分析を進める予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の生物劣化対策の研究 ((3)-①)
【事業概要】 歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は生物被害を受けやすいが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況についてデータを集め、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発などの研究を行う。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 木川りか、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、川野邊 渉、林 美木子（以上、保存修復科学センター）、藤井義久、小峰幸夫、間渕 創（以上、客員研究員）、鳥越俊行、今津節生、本田光子（以上、九州国立博物館、保存修復科学センター併任）、吉川也志保（日本学術振興会特別研究員）、トム・ストラング（カナダ保存研究所）	
【主な成果】 本年度は、日光二社一寺の歴史的建造物約 70 棟について、粘着トラップを用いて木材害虫の棲息状況を調査した。その結果、これまで文化財建造物の被害例が知られていない複数のシバンムシ類が認められ、また調査結果よりこれらは周囲の屋外で棲息している可能性が示唆された。虫害の著しい建造物を調べるのにこのような調査手法が有効であることが示され、レジストグラフなどの手法を用いて建物強度などの調査が行われている。また、漆塗装のある建造物に適した殺虫処理についても検討を進めた。調査、検討結果は、研究報告会で専門家、関係者に報告し、今後取り組むべき課題と問題点を明らかにした。	
【年度実績概要】 （１）日光二社一寺のおよそ 70 棟の国宝、重要文化財を含む歴史的建造物において約 27000 本のハエトリリボンを仕掛け、加害虫について詳細な調査を行った。また、シバンムシ類に加害された漆塗装のある建造物の殺虫方法の策定のため、被害材や漆塗りのケヤキ材試験ブロックなどを用いて、二酸化炭素やフッ化スルフルルなどによる殺虫効果の試験を実施し、高い効果が得られる処理方法を検討した。 （２）高湿度環境における微生物活性についての基礎研究 これまで浮遊菌数、付着菌の調査を行っていたが、それらとあわせ、温度と相対湿度から絶対湿度算出による環境の評価や、微生物に由来する生体活性から微生物の量や活性を検出する ATP 発光法についてもより多くの事例で検討し、培養による結果と環境条件、ATP 発光量との相関を検証した。 （３）歴史的建造物の害虫調査、殺虫法に関する研究報告会の開催 平成 23 年 1 月 27 日(木)於：(財)日光社寺文化財保存会 テーマ：「日光の歴史的建造物における昆虫調査・劣化調査等結果報告会」 プログラム：原田正彦 日光の歴史的建造物を対象とした捕虫テープによる広域害虫調査について/ 林美木子 日光の建造物において粘着トラップに捕獲された甲虫の集計方法と調査結果/ 小峰幸夫 日光の建造物で確認された木材害虫（シバンムシ類）の種類と生態/ 藤井義久・藤原裕子・原田正彦 輪王寺三仏堂の主要構造部材に見られる虫害の調査結果と今後の展望/ 鳥越俊行 X 線 CT による部材内部の虫害の調査と害虫の活動の有無の調査/ 木川りか 修理に伴う処置法の検討、および今後の対策について	
【実績値】 論文数 2 件 (①, ②) 学会研究会等での発表件数 2 件 (③, ④) 研究会 1 回	
【備考】 ①日光の歴史的建造物において粘着トラップ（ハエトリリボン）に捕獲された甲虫の集計方法と調査結果（林美木子、小峰幸夫、木川りか、原田正彦、川野邊渉、石崎武志）「保存科学」50 pp.123-132 11.03 ②日光の歴史的建造物を加害するシバンムシ類の殺虫処理方法の検討（木川りか、小峰幸夫、鳥越俊行、原田正彦、今津節生、本田光子、三浦定俊、川野邊渉、石崎武志）「保存科学」50 pp.141-158 11.03 ③X 線 CT による被害材の調査(2)害虫活動の検出（鳥越俊行、木川りか、今津節生、本田光子、原田正彦、小峰幸夫、川野邊渉、）文化財保存修復学会第 32 回大会 岐阜 10.6.12-13 ④文化財公開施設等における ATP 拭き取り検査の活用について（間渕創、木川りか、佐野千絵）文化財保存修復学会第 32 回大会 岐阜 10.6.12-13	



日光の歴史的建造物の加害虫調査

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4311

自己点検評価調書

研究所 No. 34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 歴史的建造物や古墳など、生物被害を受けやすい文化財の生物劣化対策は急務である。 本研究は時宜を得たテーマであり、研究を進めるなかで従来あまり知られていなかった害虫の存在や、歴史的建造物特有の問題点が明らかになり、具体的な検討とともに今後の方向性を探ることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			
備考 研究成果は、論文、学会での研究発表を通して、すみやかに公表することができた。 また、研究会では、今年度得られた多くのデータに基づいて問題点を共有し、議論をすることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の実施、専門家間の交流、すみやかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本課題において重大な虫害が検討している歴史的建造物を絞り込むための調査法について貴重な成果が得られた。また、それと併せて、部材の強度調査に関する基礎調査も取り入れて劣化状況を検討することができた。さらに、大きな漆塗装のある歴史的建造物において、どのような殺虫方法が適しているか、十分なデータに基づいて考察することができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究 ((3)-(2))
【事業概要】 文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、犬塚将英、早川泰弘、木川りか、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、呂 俊民（客員研究員）、小椋大輔、三村 衛（以上、京都大学、客員研究員）、白石靖幸（北九州市立大学、客員研究員）	
【主な成果】 本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を行うと共に、熱・換気回路網計算プログラムによる解析や三次元熱流体解析システムによる気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を行った。博物館施設の環境に関する研究については、新築の九州歴史資料館を調査対象として、内装材料が福岡県八女産の杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて3種類の内装材料で構成される収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による空気質の違いについて検討した。文化財の保存環境に関する研究会を3回開催した。	
【年度実績概要】 本年度も、文化財展示・収蔵施設の環境調査を行うと共に、熱・換気回路網計算プログラムによる解析や三次元熱流体解析システムによる気流シミュレーションを行い、環境改善に関する研究を行った。 博物館施設の環境に関する研究は、新築の九州歴史資料館を調査対象として、内装材料が福岡県八女産の杉、熊本県小国産の杉、無機質系調湿材、のあわせて3種類の内装材料で構成される収蔵庫をモデルとして、各種計測評価方法の比較試験、および内装材料による空気質の違いを検討した。その結果、木材由来の成分について大きな相違があり、八女産の杉は低分子量の揮発性物質が多いこと、小国産の杉はやや分子量の多いヤニ成分が多いこと、無機質系調湿材は外壁のコンクリートからの放出物質量に依存することなど、それぞれの特徴を把握することができた。 また消火薬剤の顔料への影響や紙の中性化に用いられるアルカリの影響、収蔵資料の殺虫処理薬剤による変色事故の原因や現状の調査など、文化財と直かに接触する化学物質の影響とその変化について研究した。 平成22年4月15日、東京文化財研究所で、「博物館環境－環境モニタリングの結果から－」というテーマでノルウェー大気研究所のエリン、ダーリン氏にお話を頂き研究会を開催した。参加者は、33名であった。平成22年10月19日、九州国立博物館を会場に、九州、中四国地方の博物館美術館等保存担当者を対象に、文化財の保存と活用に関する研究会「ガス燻蒸剤の現状と今後」を開催し、126名の参加を得た。平成23年2月25日、東京文化財研究所で「文化財施設の環境解析と博物館の省エネ化」というテーマでドレスデン工科大学のグルネワルド教授、プラーゲ研究員にお話を頂き研究会を開催し、50名の参加を得た。 本年度は、中長期計画の最終年度にあたるので、報告書を作成した。	
【実績値】 論文等数 3件 (①、②、③) 発表件数 3件 (④、⑤、⑥) 報告書 1件 (⑦) 研究会開催 3件	
【備考】 ①犬塚将英、多比羅菜美子、佐野千絵：「収蔵庫内の温湿度環境とスチール棚の表面温度」『保存科学』50、pp. 91-100、11.03 ②呂俊民、佐野千絵、加藤和歳：「内装材の異なる収蔵庫の空気環境の比較」『保存科学』50、pp. 3-12 11.03 ③吉川也志保、佐野千絵、石崎武志：「亜寒帯湿潤大陸性気候における資料保存環境調査、付着菌・空中浮遊菌のサンプリングを中心として」『保存科学』50、pp. 101-110、11.03 ④呂 俊民、佐野千絵：書物から発生するガスの空気環境への影響、文化財保存修復学会第32回大会、10.06.12-13 ⑤佐野千絵、呂 俊民：文化財を収納する保存箱の環境の評価方法について、文化財保存修復学会第32回大会、岐阜10.06.12-13 ⑥石崎武志、犬塚将英、ルドルフ・プラーゲ：凝灰角礫岩の乾燥過程のシミュレーション解析、文化財保存修復学会第32回大会、岐阜、10.06.12-13 ⑦『文化財の保存環境の研究 平成18～22年度 研究成果報告書』、11.03	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4321

自己点検評価調書

研究所 No. 35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第5年度として、環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究も行い、研究は予定通り進んだ。

業務実績書

研究所 No.36

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究 (③) - ③-1)
【事業概要】 屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）、朽津信明（文化遺産国際協力センター）	
【主な成果】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、（１）臼杵磨崖仏における劣化要因の解明および劣化防止対策を含めた保存管理計画の提案、（２）厳島神社における木材充填材料の現地曝露試験、（３）大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会等を実施した。	
【年度実績概要】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境計測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。今年度の主な成果は次の通りである。 （１）臼杵磨崖仏で行ってきた劣化要因調査および保存修復技術および材料に関する研究をまとめ、「臼杵磨崖仏保存環境調査報告会」（2010（平成22）年11月6日、於：臼杵中央公民館）において成果報告および保存管理計画に関する提案を行った。また、殺菌灯照射による着生生物除去施工の実用化試験、冬期寒冷時の凍結防止対策に関する調査を実施した。 （２）厳島神社など海浜環境で使用可能な木材充填材料について評価するため試験体を製作し、修復材料として使われる樹脂の発熱量と比重測定、圧縮強度測定、紫外線照射試験及び冷熱サイクル試験、現地曝露試験を行った。 （３）今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2010（平成22）年12月7日、大韓民国・国立文化財研究所にて研究発表会を開催した。また、2010年夏には臼杵磨崖仏（日本）および雲住寺（韓国）にて、凝灰岩強化材料に関する現地曝露試験の経過観察を共同で行った。	
【実績値】 報告書：2件（①、②） 論文等：3件（③～⑤） 発表等：7件（⑥他）	
【備考】 ①日韓共同研究報告書 2010 国立文化財研究所／東京文化財研究所 51p 11.2 ②臼杵磨崖仏保存環境調査報告書 東京文化財研究所 225p 11.3 ③イ・チャンヒ、チョ・ジヒョン、キム・ジョン、森井順之、イ・ミョンソン、キム・サドク 日本・大分県臼杵磨崖仏の損傷度評価と微気候環境分析 日韓共同研究報告書 2010 pp.28-33 11.02 ④イ・ミョンソン、イ・ジェマン、森井順之 臼杵磨崖仏に対する保存処理剤の適用研究 日韓共同研究報告書 2010 pp.34-42 11.02 ⑤森井順之 国宝及び特別史跡・臼杵磨崖仏の次期保存修理計画 日韓共同研究報告書 2010 pp.43-51 11.02 ⑥森井順之、川野邊渉、柏谷博之 石造文化財着生生物のクリーニング手法の開発 2010 韓国文化遺産保存科学会第32回大会 扶余ロッテリゾート 10.10.08	

自己点検評価調書

研究所 No. 36

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究について、石造文化財の劣化要因解明および保存管理計画の提案が出来た。また、木材充填材料に関して室内実験による評価が出来た。また、大韓民国・国立文化財研究所との共同研究では、情報交換のみならず共同成果を意識した研究交流を継続できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。特に石造文化財の保存修復では、劣化要因解明とともに保存管理計画の提案まで行うことができた。また、木造建造物に関しても充填材料に関する評価研究を開始するなど、新たな研究テーマも生まれた。今後、次期中期計画においてもこれらの研究を継続して進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する調査研究 ((3)-③-2)
【事業概要】 阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、平成10(1998)年の台風7号による倒木被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財被害の甚大さは記憶に新しい。本調査研究では、文化財の地震防災対策として、東大寺に安置される仏像群を対象に基礎的調査を行うとともに、文化財防災情報システムから地震や台風など過去の災害を対象に調査を行う。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 中山俊介、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）	
【主な成果】 平成22年度は、(1) 東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、対象となる仏像の三次元計測、重心など三次元計測から得られた情報を用いた地震時転倒予測を継続した。また、仏像模型を使った振動台実験を三重大学の協力のもと行った。(2) 地理情報システム（GIS）に基づいた文化財防災情報システムについて、地方公共団体における活用実験を継続した。	
【年度実績概要】 平成22年度の成果は次の通りである。 (1) 東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像（戒壇堂所在）の耐震対策を講ずるため、重量や重心などを推定するために三次元形状計測を行った。計測には、凸版印刷株式会社にて開発中の「ステレオカメラの移動撮影に基づいた簡易形状計測システム」を使用した。今年度は、修理のため美術院奈良国立博物館工房に移動した状態で撮影・解析を実施した。またその結果をもとに地震時転倒予測を行い、低重心ゆえ転倒しにくい（例えば乾漆金剛力士像（阿形）で奈良東縁断層を震源とする地震を想定した場合、転倒確率が0.6%）という結果が得られた。 また、地震時転倒予測手法の妥当性について確認するため、三次元計測結果より仏像模型を製作し、三重大学工学部建築学科にある振動台にて実験を行った。その結果、採用した地震時転倒予測手法の妥当性を確認するとともに、仏像の像高・底面摩擦係数の違いにより仏像の挙動が変化することがわかった。 (2) 地理情報システム（GIS）に基づいた文化財防災情報システム運用において、鎌倉市役所世界遺産登録推進担当および教育委員会文化財課の協力のもと、問題点の把握を行った。詳細には、①本システムを活用した広域地震ネットワーク構築のための基礎調査として、国宝・鎌倉大仏およびその周辺地盤の調査を行い、地震計による長期連続観測の可能性を検討、②文化財防災情報システム（地方版）運用に関する問題点の整理、を行った。	
【実績値】 報告書：1件 (①) 論文等：2件 (②、③) 発表等：2件 (④、⑤)	
【備考】 ①文化財の防災計画に関する研究報告書 東京文化財研究所 78p 11.03 ②HANAZATO Tohsikazu, MINOWA Chikahiro, NIITSU Yasushi, NITTO Kazuhiko, KAWAI Naohito, MAEKAWA Hideyuki and MORII Masayuki Seismic and Wind Performance of Five-Storied Pagoda of Timber Heritage Structure "Advanced Materials Research" Vols. 133-134 pp.79-95 10.10 ③中村豊、斎田淳、立花三裕、森井順之、井上修作、大町達夫 鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査 第13回日本地震工学シンポジウム論文集（PDF版） 10.11 ④運天弘樹、巽英之、増田智仁、猪瀬健二、安藤真、森井順之、久世めぐみ ステレオカメラを用いた密集仏像群の形状計測手法に関する研究 日本文化財科学会第27回大会 関西大学100周年記念会館 10.06.26-27 ⑤中村豊、斎田淳、立花三裕、森井順之、井上修作、大町達夫 鎌倉大仏およびその周辺地盤の常時微動調査 第13回日本地震工学シンポジウム つくば国際会議場 10.11.17-20	

自己点検評価調書

研究所 No. 37

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の防災計画に関して、文化財防災情報システム運用における問題点抽出など、実用化に向けた取り組みを進めた。また、仏像群の耐震対策に関する研究では、仏像群の三次元計測結果に基づく地震時転倒予測手法を開発した。今後は、地震時転倒予測の精度向上のため、更なる調査研究の推進が求められる。

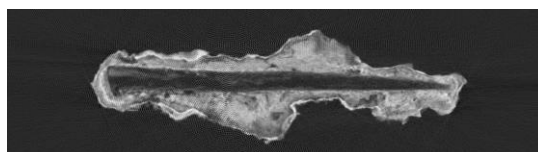
4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。今後は、文化財防災情報システムを活用した、文化財建造物の地震モニタリングおよび広域ネットワーク化、また仏像彫刻の地震対策に関する調査研究を推進してゆきたい。

業務実績書

研究所 No.38

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	考古資料の材料・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究（(3)－④）		
【事業概要】 標記プロジェクトに関して、1）考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、2）高エネルギーX線C T法およびX線C R法の応用研究、3）繊維製遺物や漆製遺物などの分析法の実用化とデータベース作成、4）木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化、5）古代の玉に関する最新の保存科学的研究に関する研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存・修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎（埋蔵文化財センター研究員）、田村朋美（埋蔵文化財センター研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、佐藤昌憲（客員研究員）、肥塚隆保（客員研究員）			
【主な成果】 1）ガラス製品の標準試料のスペクトルを集積するとともに、ガラス製遺物のスペクトルを取得した。 2）海洋出土鉄製遺物の現状調査としてX C T撮影することにより、その劣化状態を明らかにした。 3）木造建造物の塗装の材質分析をおこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を明らかにした。 4）貧溶媒真空凍結乾燥法による新規の保存処理法の開発に着手した。 5）「古代の玉ー最新の保存科学的研究の動向ー」をテーマとした研究集会を開催した。			
【年度実績概要】 1）ガラス製品の着色技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究をおこなった。本年度は、古代ガラスの着色技法を解明するため、古墳時代に出土したガラス玉類のラマンスペクトルを取得・収集した。 2）海洋出土鉄製遺物の現状調査としてX C T撮影することにより、海洋出土鉄製遺物の内部が著しく低密度化していることを明らかにした。 3）談山神社および霧島神宮の塗装材料の材質分析（顕微鏡観察、蛍光X線元素分析、顕微鏡観察、テラヘルツ分光イメージング）をおこない、漆塗装、チャン塗りおよび膠彩色を区別できるようになった。 4）マンニトール含浸後、貧溶媒として種々の有機溶剤に投入し、マンニトールを材内で析出させた後、真空凍結乾燥処理をおこなったところ、高い寸法安定性を示すことが明らかとなった。 5）、「古代の玉ー最新の保存科学的研究の動向ー」と題した研究集会を開催し、ガラス製、石製および琥珀製の玉類を対象に、新しい研究成果の報告と総合討議をおこない、出土玉製品の分析法やデータ解釈に関する問題について議論した。			
【実績値】 発表件数：9 件 論文等数：17 件 研究集会参加者数：105 名			
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			



海洋出土鉄製品の XCT 画像

自己点検評価調書

研究所 No. 38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 レーザーラマン分光分析の応用研究の一環としてガラス製遺物への応用を継続し、標準試料および考古遺物のラマンスペクトルの蓄積をおこなった。木製品の保存処理法の開発研究では、含浸処理法に貧溶媒法を適用し、その後真空凍結乾燥する方法についての基礎研究を実施した。建造物塗装材料の材質分析をおこない、漆塗、チャン塗りおよび膠彩色の3種類を区別することが可能となった。また、継続して遺物の調査分析を実施し、多くの遺物について重要な知見を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	A	A	A			
備考 文化財保存修復学会で1件、日本文化財科学会で6件、国際シンポジウムで2件の、合計9件の学会発表をおこなった。また、『文化財保存修復学会研究発表要旨集』に1件、『日本文化財科学会研究発表要旨集』に6件、『奈良文化財研究所紀要』に5件、『月刊文化財』に3件、『考古学と自然科学』に1件、『国際シンポジウムプロシーディングス』に2件の、合計18件の論文を発表した。なお、研究集会では105名の参加者を得て、研究事例報告に加え、総合討議でも活発な議論をおこなうことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をAと判定した。次年度より新たな中期目標・中期計画のもとで事業を展開していくが、基本的には遺物の劣化と保存処理に関する基礎研究、ミリ波およびテラヘルツ波の文化財資料への応用に関する研究に重点をおくことになる。これらの事業は、これまでの中期計画において展開した事業の成果をベースとするものである。また、保存修復科学分野において、東京文化財研究所や東京国立博物館、九州国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館などとの共同研究も今後さらに推進していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度より、新たな中期目標・中期計画のもとで事業を展開することになるが、基本的には遺物の劣化と保存処理に関する基礎研究、ミリ波およびテラヘルツ波の文化財資料への応用に関する研究に重点をおいた事業を推進していきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究 ((3)-(5)-1)
【事業概要】 日本ではこれまで和紙、糊、膠、漆などのなどの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。このような伝統的修復材料や合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また海外の文化財保存修復担当者を対象に、日本の修復材料の使用や修理技術に関する研修を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存修復に反映させる。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 北野信彦、加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター）	
【主な成果】 漆などの塗装材料に関する調査研究では建造物における過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。合成樹脂に関する調査では、過去使用した樹脂の劣化などの問題点解決に向けた基礎実験を行った。また、研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理作業では、データベースの目録作成についてはこれを終了させた。紙本絹本文化財の修復材料に関しては、裏打層の開発、表具裂見本目録の作成、和紙の調査を行った。	
【年度実績概要】 1. 建造物に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた基礎実験を進めるとともに、PY-GC/MS 分析装置を用いた塗装材料をはじめとする各種修復材料の基礎分析を継続して進めた。さらにこのような調査実績を国宝都久夫須麻神社本殿蒔絵修理作業などの実践的な施工指導に役立てた。 2. 掛軸の裏打材料として三軸織物を使用した新たな裏打層の開発を行った。 3. 表具裂見本のデジタル目録を作成し、データベースの基本構成を作成した。 4. 劣化したポリビニルアルコールの現地調査および再現実験を行い、劣化機構についての研究を行った。また、酵素を用いたポリビニルアルコールの分解除去の手法を試験し、良好な結果が得られた。 5. 研究所が所蔵する過去の合成樹脂を用いた修復事業の資料を分類整理、目録作成、ネガフィルムのデジタルデータ化は継続してこれを進め、データベースの目録作成についてはこれを終了させた。 6. 「膠（I）」というテーマで、2011 年 6 月 21 日に東京文化財研究所の地下会議室で第 4 回伝統的修復材料及び合成樹脂に関する研究会を開催し、計 40 名の参加を得た。 7. 手漉き和紙産地の現地調査を行った。	
【実績値】 研究会開催数：1 回 参加者数：40 名 報告書：1 冊 (①) 論文数：3 件 (②～④) 研究発表件数：3 件 (⑤～⑦)	
【備考】 ①『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2010 年度』pp. 127、東京文化財研究所、11. 03 ②加藤雅人、君嶋隆幸、酒井良次、川野邊渉：「三軸織物・紙貼合シートの特性—紙本絹本文化財の裏打を想定して—」『保存科学 vol. 50』p. 83-90、11. 03 ③北野信彦・本多貴之・松尾昭子・高妻洋成：「鷹島海底遺跡出土の元寇関連漆製品に関する調査」『保存科学 vol. 50』p229-238、11. 03 ④北野信彦・原島誠：「厳島神社摂社(重要文化財)大元神社本殿及び玉殿の旧塗装・彩色材料に関する調査」『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2010 年度』p. 43-51、東京文化財研究所 ⑤岡田祐輔・平井利博・藤松仁・滝沢辰洋・川野辺渉・早川典子・坪倉早智子・中條利一郎：「顔料剥落止めとして利用されたポリビニルアルコールの白化原因とその再現」『文化財保存修復学会 第 32 回大会』、岐阜、10. 06. 13 ⑥北野信彦・竜子正彦・川口洋平・川村紀子・本多貴之・宮腰哲雄「桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査」、『日本文化財科学会 第 27 回大会』、大阪、10. 06. 27 ⑦早川典子「修復材料としての膠の物性」『膠（I）— 第 4 回伝統的修復材料と合成樹脂に関する研究会』東京文化財研究所、10. 06. 21	

自己点検評価調書

研究所 No.39

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文数	刊行書発行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建造物などに使用する屋外塗装の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験、紙・絹などの分析手法、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を継続してすすめ、終了させた。これにより成果の公開が容易になると考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行してきた手法の有効性が明らかになってきており、それに伴い重要な知見の蓄積と実際の保存修復作業への還元もなされつつあることから、計画の実施状況は順調であり、当初目的を達成することができた。これらの成果を踏まえて、次年度以降に行う次期五カ年中期計画では、文化財に用いられた伝統的な材料・技術や建造物や合成樹脂に関する調査研究をさらに推進し、その成果を個々の事例に則した文化財修復や人材育成に活用すべく、基礎的知見の収集と資料目録化をさらに推進する予定である。

業務実績書

研究所 No. 40

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国際研修「紙の保存と修復」((3)-⑤-2)		
【事業概要】 日本絵画などの日本の紙本文化財は海外の美術館・博物館でも所蔵されている。所蔵館には修復部門が存在するものの、日本の紙本文化財の修復の専門家が所属していることは稀であり、そのため海外の保存担当者や学芸員、修復技術者からの修復についての問い合わせも多い。そこで文化財研究所は、ICCROM と共同で10カ国10人の参加者を募り国際研修会を開催し、日本紙本文化財の保存と修復についての研修を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター）			
【主な成果】 2010年8月30日～9月17日の期間で10カ国から10名を迎え入れて研修を行った。紙本文化財の修復理念、材料学の講義を行った。実習では、掛軸修復、和綴じ冊子製作、屏風・掛け軸の取扱などを行った。またスタディーツアーでは美濃を訪れ、和紙の原料・製造から流通までを和紙産地の歴史とともに学習し、和紙の抄造を体験学習した。和紙を使用した文化、紙文化財を徳川美術館、熱田神宮で見学した。修復工房を訪れ現状を視察した。			
【年度実績概要】 期間：2010年8月30日～9月17日 参加者（研修生）：DIDIK Joanna（アイルランド国立公文書館・アイルランド）、HASHIM Fauziah（マレーシアイスラム美術館・マレーシア）、HOEVEL Claire（インディアナポリス美術館・USA）、KOCIS Marika（クイーンヴィクトリア博物館&美術館・オーストラリア）、KOKOĆ Joanna（ニコラウスコペルニクス大学トルン・ポーランド）、MAZZARINO Sara（大英図書館・UK）、NUÑEZ GAITAN Angela（バチカン図書館・バチカン市国）、STORACE Maria Speranza（文書書籍遺産修復保存研究所・イタリア）、XU Wenjuan（上海博物館・中国）、CHARLES Catherine（ナミュール大学モレトスプランタン図書館・ベルギー） 研修内容（講義）：「装幀概念」岡泰央（岡墨光堂）、「紙の基礎知識」加藤雅人（東京文化財研究所）、「日本画修復に使われる接着剤について」早川典子（東京文化財研究所）、「紙の文化財をめぐって一古写経を中心に」赤尾栄慶（京都国立博物館）、「日本の紙文化財の保存と修理」池田寿（文化庁）（以上、講義順） 研修内容（実技）：「卷子修復」、「和綴じ製作」、「紙本文化財の形態・構造と取り扱い」以上、国宝修理装幀師連盟 研修内容（見学・視察・体験）：紙文化財関連個所（美濃和紙の里会館、長谷川和紙工房、美濃史料館、美濃市美濃町伝統的建造物群保存地区、徳川美術館、熱田神宮、国宝修理装幀師連盟工房）			
【実績値】 研修会開催数 1回 報告書数 1件 ①			
【備考】 ①「International Course on Conservation of Japanese Paper 2010」、35 pp、11.01			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4352

自己点検評価調書

研究所 No. 40

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研修会開催数	報告書数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者に依頼したアンケート結果では、満足度 100%であったのでAとした。アンケート中のさらなる要望としては、研修期間の長期化、上級クラスの開設、他の形態の紙文化財の保存修復コースの開設など、原状を拡大する方向のものであった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5ヵ年の中期計画がつつがなく終了した。

業務実績書

研究所 No. 41

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業（(3)-⑤-3）		
【事業概要】 海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 中山俊介、北野信明、加藤雅人、早川典子（以上、保存修復科学センター）、井手真二（以上、研究支援推進部）、中野照男（副所長）、田中 淳、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、江村知子、城野誠治、勝木言一郎、（以上、企画情報部）、清水真一、岡田 健（以上、文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 平成22年度は、9館10点の作品（絵画4点、工芸品6点）を修復した。うち4点（絵画2点、工芸品2点）が21年度からの継続、3点（絵画1点、工芸品2点）を海外で修復した。絵画の事前調査はケルン東洋美術館1館22点の調査を行った。また、平成21年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 平成22年度は、9館10点の作品を修復した（うち4点が21年度からの継続、3点が海外での修復（◆印））。 ＜絵画＞ 1) 「伯牙弹琴図屏風」 2曲1隻 ヴィクトリア・アルバート美術館 2) 「源平合戦図屏風」 6曲1双（裏に、竹に雀図） ベルン歴史博物館（2年計画の2年目） 3) 「四季花鳥図屏風」 6曲1双 ブルックリン美術館（2年計画の2年目） 4) ◆「山水図」 1幅 ベルリン国立アジア美術館 ＜工芸品＞ 1) 「螺鈿鶴形合子」 1基 アムステルダム国立博物館 2) 「花鳥螺鈿枕」 1基 ライデン国立民族学博物館 3) 「菱繋文螺鈿箆」 1基 国立ナールプステク博物館（2年計画の2年目） 4) 「花樹鳥蒔絵螺鈿箆」 1基 アシュモリアン美術館（2年計画の2年目） 5) ◆「瀧蒔絵鼓箱」 1合 ケルン東洋美術館 6) ◆「折枝散蒔絵喇叭」 1本 ライデン国立民族学博物館 平成22年度、絵画の事前調査はケルン東洋美術館で1館22点の調査を行った。加えて、欧米の各美術館、博物館に対して、修理が必要と思われる作品に関するアンケート調査を実施した。 また、平成21年度に修復した絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。			
【実績値】 事前調査 1件 修復件数 10件 ケルンにおけるワークショップ 1件 ベルリンにおけるワークショップ 1件 報告書刊行数 1件（①）			
【備考】 ①『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書 平成22年度（絵画／工芸品）』 163p 東京文化財研究所 11.03			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4353

自己点検評価調書

研究所 No. 41

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修復件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は9館、10点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施したとともに海外の修復家、学芸員などを対象にしたワークショップを開催した。このように海外における日本絵画や工芸品を修復したり、ワークショップを開催することによりその技術、取扱い方法を伝えるだけでなく再び展示することができるようになりその価値を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後はより広範囲な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。また、海外において修復技術を伝えることにもなお一層の努力を傾注する。

業務実績書

研究所 No.42

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究 ((3)-⑥)		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 川野邊 渉、加藤雅人、森井順之、中村明子（以上、保存修復科学センター）、朽津信明（文化遺産国際協力センター）、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行、坪倉早智子（以上、客員研究員）			
【主な成果】 今年度は近代化遺産の中でも2年続けて重要文化財指定された映画フィルムや音楽テープ、ガラス乾板など音声・映像記録メディアの保存に関する関係者を招き、研究会を開催しそれぞれの立場から音声・映像記録メディアの保存と活用に関する発表、問題点の整理や解決法についての討論を行った。また、設計図面などに多く使われている青図の保存に関する研究も行った。屋外展示されている鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。黎明期の日本の航空機の写真データベースをホームページ上で公開した。 昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 今年度は近代化遺産の中でもここ2年連続で重要文化財指定を受けた映画フィルムに代表される、音声・映像記録メディアの保存と修復に関する手法や問題点をテーマとして研究を行った。保存修復に実際に携わっている担当者の方々四人と国外の方一人を招き、利活用を考えた保存と修復方法に関する手法や問題点に関する研究会を平成23年1月14日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。さらに、フランス及びスイスにおいて、国立鉄道博物館や国立自動車博物館、交通博物館における展示物の保存方法や材料の分析手法について現地にて情報交換を実施した。また国内においては、新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市の韮山反射炉、山口県萩市の反射炉などの現地調査を実施した。さらに、屋外展示されている鉄道車両や航空機等の金属を主体とした文化財に関しても同様に現地調査を実施した。加えてそのような屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても調査している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。設計図面あるいは明治後期から大正前期にかけて記録された航空史関連資料などの保存手法に関しても現地で状態を調査し研究している。			
【実績値】 論文数 4件 (①～④) 発表件数 2件 (⑤～⑥) 報告書刊行数 2件 (⑦～⑧)			
【備考】 ①中山俊介 「Conservation and Utilization of Steel Structures」 Preservation and Utilization of Steel Structures, pp.5-17、11.03 ②中山俊介 「コンクリート構造物の保存と修復」 『コンクリート構造物の保存と修復』、pp.5-14、11.3 ③中山俊介 「鉄構造物の保存と修復」 (社)日本防錆技術協会、『防錆管理』54号 pp.1-10、10.9.1 ④飯島満、永井美和子、中山俊介 「フィルモン音帯に関する調査報告」 『無形文化遺産研究報告』5号 pp.53-76、11.03 ⑤中山俊介 「音声・映像記録メディアの保存と修復」 音声・映像記録メディアの保存修復に関する研究会、東京文化財研究所、11.01.14 ⑥坪倉早智子、加藤雅人、中山俊介 「劣化したシアノタイプの修復(2)ーアルカリによるシアノタイプの劣化・再発色実験ー」 文化財保存修復学会第32回大会、長良川国際会議場・岐阜、10.06.12-13 ⑦『Preservation and Utilization of Steel Structures』 東京文化財研究所 65p 11.03 ⑧『コンクリート構造物の保存と修復』 東京文化財研究所 85p 11.03			

自己点検評価調書

研究所 No. 42

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することが出来た。それらの現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点なども新たに掴むことが出来た。特に、建造物関連で、明治期から大正期に使用されている油性塗料に関して、修理の際などに国内で調達困難な状況の把握、また、油性塗料かどうかの判定手法の開発など研究すべきテーマを把握した。来年度以降に取り組むべき課題である。また音声・映像記録メディアの保存・修復に係る専門家を招いた研究会を開催し多くの知見、新たな研究者との連携の可能性も得ることが出来た。さらに今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。 現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識していただいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第5年次として、継続している現地調査から重要な調査結果を収集することが出来た。現地調査に関しては、今後も続けて行くことでさらに重要な成果が期待できると考えている。また、研究会を通じて新たな知見をうると共に、多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次期中期計画でも今次中期計画の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

業務実績書

研究所 No. 43

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 ((4)-①-1)
【事業概要】 高松塚古墳：壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究を実施 キトラ古墳：石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施	
【担当部課】	保存修復科学センター
【担当部課】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人（以上、保存修復科学センター）、間渕 創、坪倉早智子（以上、客員研究員）	
【主な成果】 高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天2の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。 キトラ古墳では4月12日～4月30日、5月10日～5月28日、10月12日～10月29日、11月8日～11月25日の4期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。	
【年度実績概要】 高松塚古墳 昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天2の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層について、透明シートへの描き込みとデジタル化を完了した。また完成した、図面の点検も引き続き行っている。天1・東男子・青龍・西女子については常温抽出布海苔にて脆弱化した漆喰層の1度目の強化を行った。これにより一昨年度より行っていた1度目の強化作業は全石終了した。天2はクリーニング後に精製布海苔による2回目の漆喰層強化を行っている。また、より適切な処置方法を検討するために、模擬漆喰を用いた実験を行い、作業道具の作成・改良も行った。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。 平成のカビの発生の発端となった2001年の分離株を含む重要な菌株約450株についてアンプルの生育確認、メンテナンスを実施している。古墳壁画仮修復施設においては、ひきつづきムカデ、クモなどのモニタリングのためのトラップ調査を実施し、必要に応じて物理的な侵入防止対策など講じた。	
キトラ古墳 4月12日～4月30日、5月10日～5月28日、10月12日～10月29日、11月8日～11月25日の4期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用し、北壁・東壁・西壁・南壁の取り外しを行い、石室内の漆喰すべての取り外しが完了した。集中取り外し期間中で作業のない土曜日・日曜日、及び取り外し期間外は石室内に紫外線灯を設置し、週に1回のカビ点検を行っている。これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行い、「朱雀」については平成22年5月の公開のための額装を完成させた。また、昨年度までに剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法の検討、漆喰上の泥の処置のための実験を行っている。これらの作業についての記録、資料整理も随時行っている。 石室内の微生物の調査を5月、10月に実施し、おもに間欠的な紫外線照射でカビなどの被害を防止している環境において、従来と比較して菌類や細菌などの微生物相に変化がみられるかどうかについて調査した。目視ではほとんど被害はみられなかったが、培養すると微生物は検出され、分離された微生物の種類は昨年までとあまり変化はなかった。壁画の修復材料として使用されている樹脂などの材料について、本年度は、酵母や細菌などによる資化性（栄養源として利用できるかどうか）について調査した。その結果、細菌などによって、一部の材料は資化される場合があることがわかった。	
【実績値】 論文 2件（①、②）	
【備考】 ①三村衛、長屋淳一、石崎武志：「動的解析による高松塚古墳の損傷要因の検討」『保存科学』50、pp. 13-22, 11.03 ②木川りか 他：「キトラ古墳の微生物調査報告(2010)」『保存科学』50、pp. 193-198, 11.03	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4411

自己点検評価調書

研究所 No. 43

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数				
判定	A				
備考					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、本年度の計画を予定通り遂行し、良好な成果を上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

業務実績書

研究所 No. 44

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 ((4) -①- 2)
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査および保存・活用に関して技術的な協力を行った。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 玉田芳英、降幡順子、廣瀬 覚、青木 敬、若杉智宏、番 光、石田由紀子〔以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛、辻本与志一〔以上、企画調整部〕	
【主な成果】 文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施工されるよう協力するとともに、刊行予定の『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』に関する執筆・編集作業を行い、文化庁へ提出した。 今年度のキトラ古墳壁画の剥ぎ取り作業を支援するとともに、今後のキトラ古墳壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を議論・検討するための技術的な支援・協力を行った。	
【年度実績概要】 春・秋の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員（のべ 5 名）を派遣した。『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の刊行にむけて、これまでの一連の調査成果を検討したものを執筆・編集作業をおこない、文化庁へ提出した。 キトラ古墳では、春・秋の壁画の集中剥ぎ取り作業に研究員（1 名）を派遣して、これを支援した。さらにキトラ古墳壁画の取り外し終了後は、2 週間に 1 回、研究員による古墳壁画等のカビ点検作業を実施した。 キトラ古墳壁画の保管、活用については、今後予定されているキトラ古墳墳丘の整備に関し、遺構図に標高を表示した図面の作成をおこなった。また実際の整備案を参考とするため、墳丘の復原に関する検討会を 2 回開催し、キトラ古墳墳丘復原案を作成した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。	
【実績値】 論文数：1 件（①） 制作物：2 件（②～③）	
【備考】 ①松村恵司・廣瀬 覚「発掘調査からみた壁画の保存環境」『月刊文化財』第 563 号 2010. 8 ②「キトラ古墳遺構編集図」 2011. 3 ③「キトラ古墳墳丘復原案」 2011. 3	

自己点検評価調書

研究所 No. 44

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 適時性：現地への緊急事態等に対して迅速かつ適切に対応することができた。 独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・活用に助言を行うことができた。 発展性：緊急性を有する文化財の保存・活用に対する今後の方向性を示すことができた。 効率性：高松塚古墳の発掘調査の成果を、整備、公開に直結させることができた。 継続性：高松塚古墳の実績を基に、今後、キトラ古墳の整備・活用を進めていく見通しが得られた。 正確性：古墳や壁画に関する学術的成果を高い精度で得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	制作物				
判定	A	A				
備考 『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の執筆・編集をおこない文化庁へ提出した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳壁画の恒久保存対策に係る一連の発掘調査に関する報告書を執筆・編集し、高松塚古墳に関する適切な情報公開の準備が整った。その実績に基づいて、今後のキトラ古墳の保存・活用・整備等の事業が円滑に進められることが期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	壁画古墳という重要かつ緊急性の高い文化財に対して、保存・活用に関するモデルケースを構築することができ、今後の方向性を示すことができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力 ((4) - ②)
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、我が国国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を復元すべく、遺跡周辺の調査をおこなうものである。檜隈寺は、飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、この遺跡の実体解明および保存活動に資するため、2008年度より発掘調査を実施している。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 石田由紀子、森先一貴、石橋茂登、若杉智宏、高橋 透、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕	
【主な成果】 2008年度の試掘調査および2009年度の発掘調査成果をもとに、檜隈寺講堂北50mの丘陵頂部から西側斜面にかけて2カ所の調査区、東側斜面裾部に5カ所の試掘坑を設定し、調査をおこなった。1区では瓦組暗渠1基と奈良時代以降の整地土を確認し、2区では、7世紀前半の遺構面と、7世紀前半から奈良時代後期にかけての断続的な整地を層位的に確認した。また試掘坑では、古代の石敷を検出した。今回の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半以降も大規模な整地をおこなっていることを確認し、これまで不明な点の多かった7世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の土地利用状況を考えるうえでも重要な資料を得た。	
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、2008年の試掘調査および2009年度の発掘調査の成果をもとに、檜隈寺北方の丘陵頂部から西側斜面にかけて2カ所(1区・2区)、丘陵部東側斜面裾部に5カ所の試掘坑を設け、発掘調査を実施した。調査期間は2010年8月24日～2010年12月27日。調査面積は、計655㎡である。 講堂の北方約50mに位置する1区では、後世の削平が著しかったものの、素掘り溝2条、瓦組暗渠1基、谷1条を検出した。瓦組暗渠は、7世紀後半の檜隈寺創建瓦を用いており、先端部分のみが残存する。調査南西で検出した、北西に入り込む谷筋の谷頭部分に暗渠を設置し、排水していたものと思われる。 2区では、素掘り溝2条、沼状堆積層、およびその下層から7世紀前半の土坑を1基確認した。2区には大規模な整地層を確認しており、整地層に含まれる遺物から7世紀前半、7世紀末～8世紀初頭、8世紀後半にかけて断続的に大規模な整地をおこなっていることを層位的に確認した。 また、丘陵東側斜面裾部では、人頭大の石を用いた石敷を確認しており、遺構の様相や土器の年代から6世紀末から7世紀までの所産と考えられる。 今年度の調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった7世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺に関する重要な資料を得ることができた。	
	
1区出土瓦組暗渠 北から	
【実績値】 論文等数 2件(論文1件①、その他1件②) 出土遺物 軒丸瓦 25点、軒平瓦 26点、丸瓦 2630点(380.0kg)、平瓦 9325点(762.5kg) 土器 15箱、鉄製品 3点、鉄片 1点、鉄釘 2点、銭貨 1点、鉄滓 14点 羽口 4点、種子 2点、加工木 1点、自然木 1点 記録作成数 遺構実測図 50枚、写真(4×5) 136枚	
【備考】 ①石田由紀子・石橋茂登・高橋透「檜隈寺周辺の調査－飛鳥藤原第164次」『奈良文化財研究所紀要 2011』2011. 6(予定) ②石田由紀子「檜隈寺周辺の調査(飛鳥藤原164次)」『奈文研ニュースNo.39』2010. 12	

自己点検評価調書

研究所 No. 45

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：檜隈寺周辺の遺構状況解明への寄与 継続性：2008 年度から実施している発掘調査の成果を受け、檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査をおこなった。 発展性：これまで不明な点の多かった7世紀前半および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる重要な資料を得た。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半の資料のみならず、これまで不明な点の多かった7世紀前半、および奈良時代以降の檜隈寺の動向が確認できる資料、および土地利用状況に関わる重要なデータを得ることができたため、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、課題であった檜隈寺の全体像復元の解明に向けての有益なデータを得ることができた。

研究 No. 16

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力（(4)－③）		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・文化の中心地であった。本研究は、国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう本地域の埋蔵文化財の調査・研究に対して協力・支援を行うものである。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 廣瀬 覚、小田裕樹、玉田芳英、次山 淳、廣瀬 覚、木村 理恵、若杉智宏、高橋 透、庄田慎矢、諫早直人、石田由紀子、黒坂貴裕、番 光〔以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）〕、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【主な成果】 大和平野支線水路等その3（県営飛鳥2号幹線（右岸）その3）改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京左京七・八条一坊（橿原市上飛驒町）にあたる。総長 325.520mの工事区域のうち、既設管と完全に重複する中央約130m分は立会で対応し、残りの北区（約156m×2m）、南区（約45m×2m）を発掘調査した。その結果、古代を中心とする遺構（柱穴・溝等、一部中世を含む）を検出、記録した。			
【年度実績概要】 北区では、大部分が既設管の設置範囲と重複しており、遺構および遺構面の残存状況は良好ではなかったが、柱穴約10基、溝1条を検出した。遺構の検出面は、調査区北側に隣接する飛鳥藤原第115次調査区の遺構検出面と層位、および標高がほぼ一致しており、出土遺物からも概ね7世紀中頃から藤原宮期のものと理解できる。ただし、衛門府と想定されている第115次調査区内の遺構群との対応は、調査区間の距離が大きいため十分な検討を行うことができなかった。 南区では、柱穴約30基、溝2条を検出した。溝は埋土出土遺物から6世紀代に開削されたものと理解できる。一方、柱穴には一部に形状から中世段階のものと推定できるものを含むが、その他は古代の建物に伴うものと推定でき、掘方埋土から7世紀中頃の土器が出土したものもある。ただし、建物の全体像を復元的にできたものはない。 以上のように、本事業では、水路付け替え工事に伴う限られた調査範囲の中ではあったが、埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。 なお調査期間は、平成22年11月29日～平成23年3月3日であったが、調査終了後も、調査地外の既設管撤去工事の立会を実施し、工事が埋蔵文化財に影響を与えないよう監視した。			
			
		北区完掘状況	中央区立会風景
【実績値】 論文等数 1件（①） 出土遺物 土器14箱、瓦類31点、木製品3箱、動植物遺存体2箱 記録作成数 遺構実測図43枚、写真（4×5）101枚			
【備考】 ①廣瀬覚・小田裕樹「藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査―第166次」『奈良文化財研究所紀要2010』2011.6（予定）			

自己点検評価調書

研究所 No. 46

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
備考 適時性：工事の状況に応じて迅速に対応して文化財を保護・記録することができた。 継続性：飛鳥・藤原地域の遺跡情報を継続的に収集することができた。						

2. 定量的評価

観点	援助・助言数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう埋蔵文化財への影響について、迅速かつ適切に対応・処理することができ、遺構の保護・記録を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査について効率良く対応し、藤原地域の基礎資料を蓄積することができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①-iii)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳
【スタッフ】 浅見龍介(調査研究課東洋室長)、安藤香織(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、池田宏(上席研究員)、伊藤信二(博物館教育課教育普及室長)、井上洋一(企画課長)、猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、今井敦(博物館教育課長)、及川穰(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、大橋美織(調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、沖本明子(保存修復課アソシエイトフェロー)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、川村佳男(調査研究課東洋室研究員)、神庭信幸(保存修復課課長)、木島隆康(東京藝術大学)、鬼頭智美(企画課国際交流室長)、後藤健(上席研究員)、佐々木佳美(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)、澤田むつ代(特任研究員)、鈴嶋富士子(東京藝術大学)、鈴木晴彦(保存修復課アソシエイトフェロー)、関紀子(博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、高梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員)、高橋裕次(博物館情報課長)、竹内奈美子(調査研究課工芸・考古室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、谷豊信(列品管理課長)、塚本鷹充(調査研究課東洋室研究員)、土屋裕子(保存修復課保存修復室主任研究員)、冨坂賢(保存修復課保存修復室長)、富田淳(調査研究課長)、原田明夫(博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)、日高慎(保存修復課保存修復室主任研究員)、古谷毅(列品管理課列品情報整備室長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、松本伸之(学芸企画部長)、三笠景子(保存修復課保存修復室研究員)、望月幹夫(特任研究員)、米倉乙世(保存修復課アソシエイトフェロー)、			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・考古学・博物館学の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種の発表をした。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会で、各種の発表をした。 ・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。			
【実績値】 学会・研究会等発表件数：23名29件。 高橋祐次(博物館情報課長)「日本・中国・朝鮮半島の料紙について」墨跡研究会ほか。 論文等掲載数：36名59編。 松本伸之(学芸企画部長)「中国古代の工芸品に表わされた花と鳥」『平城遷都1300年祭特別展 花鳥画—中国・韓国と日本—』ほか。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適宜性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 東京国立博物館『MUSEUM』をはじめとする各種学会誌・紀要等の学術誌や学会・研究会において、平素の調査研究で得た成果や、平常陳列・特別展に係る業務・他館への協力の中で得た最新の学術情報を、多岐の分野にわたって発表しえた。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等				
判定	A	A				
備考 学会・研究会等発表件は海外を含み 23 名 29 件、論文等の掲載は 36 名 59 編。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)特別調査法隆寺献納宝物（第 32 次）「聖徳太子絵伝」第 6 回（(5)-①-iii）		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和 54 年より、31 次にわたって献納宝物の調査を館内および館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。献納宝物は、経年によって脆弱化しており、各分野の研究者が直接的な調査をすることは難しい。本事業はすべての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。毎次の調査研究については「法隆寺献納宝物特別調査概報」を発刊している。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】島谷弘幸(学芸研究部長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、澤田むつ代(特任研究員)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、瀬谷愛(列品管理課研究員)、小林達朗(調査研究課主任研究員)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、若杉準治(京都国立博物館列品管理室長)、朝賀浩(文化庁文化財調査官)、村重寧(元早稲田大学教授)、松原茂(根津美術館学芸部長<当館客員研究員>)、東野治之(奈良大学教授<当館客員研究員>)、岡本明子(早稲田大学助手)、谷川ゆき(金城学院大学非常勤講師)			
【主な成果】 本年度は、国宝聖徳太子絵伝 10 面のうち第 7 面と第 8 面を調査対象とした。経年の劣化、補修によって判別の困難な図様の細部について明らかにできた。また、剥落や劣化などにより画の見えないところについて、現法隆寺絵伝に嵌められた吉村法眼周圭充貞の模写(天明 7 年＝1787)を比較検討することによって、その内容を新たに確認した。			
【年度実績概要】 高精細デジタルカメラによって 1 面 132 カット(2 面合わせて 264 カット)撮影し、それを合成することによって原寸大以上に引き伸ばすことが可能となったことから、実作品に基づいて、これとも細部を照合しつつ、各事跡場面の特定と、描かれたモチーフの形状、描写について詳細な客観的記述を回を重ね、各研究者共同で、確認、確定を行った。高精細画像の各場面の拡大図とともにこれを公表することにより、事業概要で述べたとおり、すべての研究者に対して通常の状態では観察の困難な詳細な本図の詳細な客観的情報を提供する下地ができたものとする。平成 22 年度に実施した第 32 次特別調査は、報告書として、『法隆寺献納宝物特別調査概報 31』『聖徳太子絵伝 4』によって刊行する予定である。			
【実績値】 調査回数 2 回 調査概報発行 1 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 年一回のケース内展示のみの公開となっている本絵伝のこれによつては把握できない詳細な情報を公開することができた。本調査開始以来蓄積した光学的資料等と調査方法にもとづき、今年度はポイントをしばって調査をすすめることができた。多方面の専門研究者の知見を得ることができ、今後の成果の反映を効率的におこなうことができるようになった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査概報				
判定	A	A				
備考 実物を前にしながら、必要にして十分な調査を計6日間にわたって行うことができた。またこれをまとめた調査概報を刊行できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当該調査は、絵画史、工芸史だけでなく、歴史の専門家を含めた調査であり、各場面の検証、用絹、絵具など総合的な作品評価が可能である。改良点としては、今後は絵具の分析や赤外線写真撮影なども取り入れて科学的な側面からのアプローチも図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	23年度は当該調査研究の成果を公表する概報の発刊を行う予定である。また引き続き、これまでの成果をふまえ、第9、10面の同様の調査を行ってゆく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」第8回 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 本年度は断続的に行われてきた当館書跡収蔵品の中の奈良～安土桃山時代にかけての古写経・仏典について、情報の整理・統合と整備の完成を目指し、古写経調査を実施。特に断簡写経の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに法量計測、写真撮影など基礎データを収集する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸
【スタッフ】 島谷弘幸（学芸研究部長）、富田淳（調査研究課長）、田良島哲（書跡・歴史室長）、高梨真行（書跡・歴史室主任研究員）、富坂賢（保存修復課保存修復室長）高橋裕次（博物館情報課長）、赤尾栄慶（京都国立博物館学芸部副部長）、羽田聡（京都国立博物館学芸部企画室研究員）、野尻忠（奈良国立博物館学芸部情報サービス室研究員）、斎木涼子（奈良国立博物館列品室研究員）、藤田励夫（九州国立博物館学芸部博物館科学課保存修復室長）、丸山猶計（九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員）、酒井芳司（福岡県立アジア文化交流センター展示課研究員）			
【主な成果】 当館所蔵の古写経について法量計測・写真撮影を実施し、書写された文字の筆致、卷子装の軸端や料紙の材質分析、奥書記載内容の検討により書写年代推定を行った。掛幅装や手鑑装の古写経断簡については、書写経文の検討によりその原典を可能な限り特定し、当館所蔵古写経の基礎データを整理し、その成果を東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録古写経篇』として刊行。			
【年度実績概要】 対象:当館書跡収蔵品について卷子装 67 件、掛軸装 12 件、冊子装 5 件、折帖 14 件、手鑑装 7 件、屏風装 1 件、その他 2 件の調査を実施 結果: 卷子装 130 点、掛軸装 13 点、冊子装 17 点、折帖 18 点、経切 195 点、屏風装 1 件、その他 2 点の写経および写経断簡に関して計測し、軸端材質、使用された料紙の材質分析、奥書記載事項など抽出し書写年代推定した。また経切などの写経断簡については原典確認を行った。 - 必要と判断された重要な写経については撮影を実施した 撮影対象 写経 50 件 撮影写経 77 点 - 調査データをデータベースとして整理した			
			
(手鑑装古写経断簡の調査風景)			
【実績値】 調査回数 全 1 回 第 1 回 平成 22 年 8 月 4 日(水)～6 日(金) 調査日数 3 日間 調査員・調査補助員 のべ 44 人 採取データ数 写経および写経切の調査総点数 375 点 撮影画像 114 カット (情報量 1 カット 3M) 刊行物 上記調査写経のデータと画像を掲載 「東京国立博物館図版目録古写経篇」(300 頁) 刊行予定			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考 当館所蔵の古写経および古写経断簡の基礎的データ採取と画像の取得により、図版目録出版の準備が整った。この刊行によって、他の研究機関や研究者に今回の調査により取得されたデータが公開されることとなり、仏教学・仏教思想・日本書跡・歴史学等の分野に研究進展に資するところが大きいと考える。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	採取データ数	刊行物			
判定	A	A	A			
備考 平成18年度からの継続的な調査の実施により、当館収蔵品の古写経および古写経断簡について、今回の事業で基礎的データと画像については整理し終えた。その結果、研究の成果物として図版目録の刊行につながることに成功した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	所蔵する古写経・古写経断簡についての整理が完了し、またその成果としての図版目録の刊行につながったため、目的を達成したと判断される。また目録掲載という制限から撮影した画像の内、未掲載のものも多い。こうした画像を公共に資する為、次年度以降はデータベース公開を目指したい。一方、今回の調査ではまた、一部の聖教類について基礎データが未整理のも明らかとなったため、次年度以降にこうした仏典・聖教などを主な対象とした調査を継続・実施していく必要を感じた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	図版目録の刊行とデータベース公開の準備が整えられたことから、中期計画の目的は達成されたと判断される。今後は、得られた基礎データをより公共に資するためにその方法を模索していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 特別調査「工芸」第2回 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人文化財機構国立博物館4館および文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示公開の向上に結びつけることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸・考古室長 竹内奈美子
【スタッフ】 小松大秀（副館長）、今井敦（博物館教育課長）、伊藤信二（博物館教育課教育普及室長）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、猪熊兼樹（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、酒井元樹（調査研究課工芸・考古室研究員）、横山梓（列品管理課平常展調整室研究員）、尾野善裕（京都国立博物館学芸部工芸室長）、永島明子（京都国立博物館学芸部企画室主任研究員）、内藤榮（奈良国立博物館学芸部長補佐）、清水健（奈良国立博物館学芸部教育室研究員）、伊藤嘉章（九州国立博物館学芸部長）、川畑憲子（九州国立博物館学芸部企画課特別展室研究員）、齋藤孝正（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官）、伊東哲夫（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）			
【主な成果】 東京国立博物館の金工・陶磁・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。特に金工調査では舍利容器の1件に新たな事実が判明し、陶磁調査では中国清朝の磁器が日本の文化や作陶に与えた影響に関する議論が深まった。漆工調査では現在では不明とされる一部の香道具の使用法について推測可能になり、その成果を東京国立博物館の展示に活用することができた。			
【年度実績概要】 ◆金工調査 実施期間 平成22年8月12日（木）・13日（金） 金工列品のうち、鏡像・懸仏、及び舍利容器などの荘厳具について調査を実施し、図像的特徴や美術史的な価値などについて検討を行った。表裏に金剛界・胎蔵界の尊像を描いた鏡像について、形状面で特異な特徴がみられるものの、尊像描写が優れていることなどから平安時代末期の作例であろうとの結論に達した。また、従来舍利容器として考えられていた列品が、能作生（如意宝珠）を塔下に納めるための容器であることが判明し、こうした作例は他に例を見ないことが分かった。 ◆陶磁調査 実施期間 平成22年11月16日（火）・17日（水） 東洋陶磁および陶磁列品のうち、白磁・青花・五彩・粉彩など清朝磁器の各種と初期伊万里の代表作例を一堂に集めて調査を実施し、比較検討を行なった。中国清朝の磁器が日本の文化や作陶に与えた影響について、議論を深めた。 ◆漆工調査 実施期間 平成22年12月2日（木）・3日（金） 漆工列品のうち香道具をテーマとし、今年度は香を聞き当てる遊び、組香に用いる道具類をとりあげて調査を実施した。特に組香に用いる道具を一括して収める十種香箱の構成は多様で、内容品の中には現在では使用法が分からないものもあるが、調査の中で討議を重ねて意見を集約し、用途を推測するに到った。その成果は特集陳列「香を楽しむ一香道具一」（平成23年1月2日～2月20日）に反映することができた。			
【実績値】 調査回数 3回 調査日数 6日 調査員 16名 調査対象作品 67件		調査風景（陶磁・金工） 	
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っている。 また工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化機構ならではの事業であり、独創性や正確性・効率性が高い。本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができ、作品調査の中で新知見を得た例もあった。 さらにこの調査事業を継続的に行うことにより、研究推進や展示公開に寄与するところは多く、発展性も大きい。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員人数	調査作品数		
判定	A	A	A	A		
備考 計画通り、それぞれ2日間にわたる金工・陶磁・漆工の調査会を実施した。早期に日程調整を行い、各分野の各機関専門家がそれぞれほぼ全員揃って調査を行った。昨年度の改善計画にもとづき分野に分かれて作品調査を実施し、きわめて効率良く多数の作品を調査できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができ、作品調査の中で新知見を得た例もあった。今後の研究推進および展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く相当数の作品を調査している。今後は刀剣・染織分野についても調査も行っていくことが望ましく、22年度以降も継続する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与している。本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことにより、工芸分野の文化財に関する研究の推進をはかる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究—尾形光琳風神雷神屏風を中心に ((5)－①－iii)		
【事業概要】 尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA 美術館蔵)の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が注目されている。これをうけて、当館が収蔵する光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を、同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、大橋美織(調査研究課絵画彫刻室員)			
【主な成果】 当館収蔵の尾形光琳筆「竹梅図屏風」と「風神雷神図屏風」に加え、同時代の土佐光祐筆「栄華物語図屏風」、狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」を対象として、エックス線、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査を行ない、データの集積を行った。			
【年度実績概要】 当館収蔵の絵画作品の中から、尾形光琳筆「風神雷神図屏風」を改めて蛍光エックス線により調査し、また「竹梅図屏風」他の作品を選び、金色部分の化学分析を行なった。 本年度は作品調査を4回実施し、データの検討会を1回行なった。 これまで行なった屏風作品の調査と同様に、肉眼観察で金箔の厚さが異なって見える部分数箇所を選んで、顕微鏡観察と蛍光エックス線により金箔と想定される部分のサンプル調査・成分分析を行なった。 また、調査結果をふまえて分析結果の検討を行った結果、調査箇所により金の存在を示す蛍光エックス線の強度に違いのあることが確認できたが、そのデータの客観性と有意性を確認するためには、さらなる作品の調査を実施する必要とされることがあらためて認識された。			
			
蛍光エックス線による調査		印章部分の観察	
【実績値】 調査回数 ・分析調査 4回 蛍光エックス線調査 4作品 51箇所 顕微鏡写真 なし エックス線撮影 なし ・分析結果検討会 1回(2月25日開催)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	B	
備考 本調査は、現在注目されている金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めることで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。21年度におこなった光琳と同時代に活動した絵師の作品の調査結果の正確性をさらに確認するため、本年度は、あらためて光琳作品で調査、データ収集をおこなった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				
備考 実作品を対象とした調査を4回行ない、調査結果を検討する機会を設けた。今後は、蛍光エックス線分析装置によるデータ収集を進めることはもちろんのこと、さらにデータの有意性を高めるために外部機関の作品の調査も働きかけ、サンプル数を増やしデータの客観性を高めるための確認調査を行なっていきたい。						

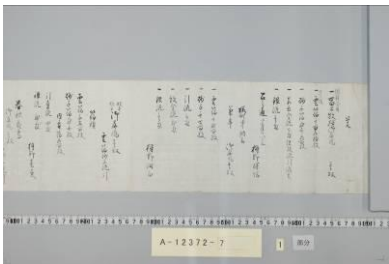
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の4回の調査により、データ集積数を伸展することができた。さらに内部調査を実施して、サンプル数を増やすこととあわせ、今後は、他の機関による同種の調査と連動できるようなデータ収集を行い、共通の分析ができる体制を確立したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	検討会での分析により、今後は、さらにサンプル数を増やすことで、調査データの客観性が高める必要性があらためて確認された。そのためには綿密な計画を立て、さらに調査回数を増やすことで、データ集積をさらに進め、基準となるデータを求める必要がある。 今後は、同様な調査・データ集積を行なっている機関と連携した検討を行なうことで、調査内容の検討を充実させ、結果の外部公開を目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 特別調査「江戸幕府御用絵師板谷家関係資料」((5) - ① - iii)		
【事業概要】 板谷家関係資料は、安永2年(1773)住吉家の門人広当が御用絵師に取り立てられたことに始まる、江戸幕府御用絵師・板谷家に伝来した資料群である。本事業は、平成21年度東京国立博物館に一括寄贈された、粉本・下絵などの絵画、御用絵師叙任前後から明治維新後の新政府役人としての活動までを記録した古文書類、ガラス乾板や歴代の印章など総数1万点を整理調査し、公開に備えることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 池田宏(上席研究員)、富坂賢(保存修復課保存修復室長)、小野真由美(企画課出版企画室主任研究員) 瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、大橋美織(調査研究課絵画・彫刻室研究員)、山下善也(京都国立博物館連携協力室長)、金井裕子(九州国立博物館文化交流展室)、田中潤、長倉絵梨子、森道彦(以上、整理作業補助)			
【主な成果】 外部閲覧に備えた資料整理(1万点以上の資料一点ずつに枝番号タグを付し、形状別に箱に収納する)をすべて終了。この整理に平行し、絵画資料の調査、古文書の撮影・翻刻を行った。また、スタッフによる合同調査会を開き、物語絵、風景画、土佐派など各スタッフがテーマを設け、資料調査を行った。以上で得られた成果により、平成23年10月25日～12月4日に「板谷家伝来資料(仮称)」の特集陳列を行う。			
【年度実績概要】 対象 ・ 板谷家伝来資料 10,629点(古文書858点、絵画資料9413点、印章ガラス乾板など資料358点) 成果 ・ 資料全点の養生・封入を終了し、箱詰めした(85箱)。 ・ 古文書を中心に画像撮影を行い(990点)、うち重要文字資料の翻刻を行った(27点)。 ・ 東京国立博物館にて合同調査会を行った(調査員のべ23名、1回)。			
 資料保管箱  古文書画像撮影  合同調査会風景			
【実績値】 整理資料点数 10,629点 85箱 画像データ作成点数 990点 古文書調査・資料整理日数 124日(平成22年5～12月) 合同調査会 1回 日程 平成22年9月28日(火)～30日(木) 調査日数 3日間 調査員 のべ23名			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	B
備考 平成 21 年度東京国立博物館に一括寄贈された本資料群は、江戸幕府御用絵師のひとつの家の成り立ちから明治以後の転身までを含むきわめて珍しい資料で、江戸時代の絵師を研究する上でたいへん貴重なものである。できるだけ早く一般公開して公共に資するため、簡易で安全な出納を可能にする必要があり、本年度はこの基盤となる整理を第一の目標としてこれを終えることができた。また古文書資料の画像撮影と一部の翻刻まで進むことができたので、次年度以降の調査研究の一步をすでに踏み出していると思われる。 本資料群研究の進展は、当館が所蔵する板谷家、住吉家の本画理解を促進することは疑いない。またこれまで等閑視されてきた近世やまと絵の一側面が明らかになることによって、世界中に眠る板谷家作品の再評価へつながる可能性を秘めている。 1 万点以上に及ぶ膨大な資料の整理に、平成 22 年度 4 人の整理作業補助員が当館研究員とともに作業にあたり、一人あたり約 2500 点もの資料を確認し保存容器に収める作業を無事終了した。次年度以降はこのデータをもとに再度各資料に関する情報を精査し、より利便性の高いデータベースの作成を目標としていきたい。						

2. 定量的評価

観点	調査点数	調査回数	研究発表数			
判定	A	A	B			
備考 当初目標であった、1 万点以上に及ぶ本資料すべての保存容器への収納と整理については、目標値を 100% 達成した。またこの整理作業と古文書解読などの調査に 124 日、絵画資料をふくむ当機構研究員の合同調査に 3 日をあてることができた。本事業は基盤となる資料確認にあるため、これの研究については十分な発表ができていないが、平成 23 年度に本資料と当館所蔵の板谷家・住吉家作品とを比較する特集陳列を予定している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の当初目標を達成し、次年度以降の明確な調査・作業予定の見通しがたっている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100% 達成した。 次年度以降の目標である調査研究の基盤ができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書にはドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋 裕次
【スタッフ】 田良島 哲(調査研究課書跡・歴史室長)			
【主な成果】 * 明治時代前期に博物館が収集した漢籍のうち、医学関係のものについて、調査を行った。 * 江戸時代の幕府医学館収集の漢籍とそれに関連した人物についての特集陳列を企画して展示を行った。			
【年度実績概要】 * 本年度は、明治前期に博物館が旧江戸幕府医学館から引き継いだ漢籍類とその伝来に関する調査を行った。 * 平成23年2月1日から3月11日まで本館第16室を会場として、特集陳列「医学館の漢籍」を開催し、調査を行った及び漢籍および関連資料35件を公開した。			
【実績値】 展示への反映：1回(35件)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B
備考						

2. 定量的評価

観点	展示への反映					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで十分に内容を把握できなかった館蔵の漢籍について、調査の結果、一つのテーマで展示を構成するまでに、内容を確認できたが、予定していた医学関係の専門家との連携が実現できなかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	洋書・漢籍ともその保存の状況を把握することは進展しており、その結果、特集陳列に反映して、資料を公開することが可能となった。一方で内容の詳細について、外部の専門家を活用することについて、課題を残している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進							
プロジェクト名称	8) 博物館の環境保存に関する研究((5)－①－i)							
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。								
【担当部課】	学芸研究部		【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸				
【スタッフ】 和田 浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木 臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)								
【主な成果】 これまで継続して行ってきた展示、収蔵空間に存在する空気汚染物質濃度測定の結果を整理した。その結果から、東京国立博物館における空気汚染物質の許容濃度に関する暫定基準を改訂し、東京国立博物館の状況に合致する現実的な新たな基準を策定することができた。								
【年度実績概要】								
1. 建物毎の特性評価 東京国立博物館内には建築年代が異なる複数の展示施設、収蔵施設が存在する。新たな資材等が追加されぬ限り、古い施設に用いられている木材や塗料などは長年月を経ることで”枯れて”いるため、それらから揮発する物質の濃度はゼロではないが、相対的に低いことがこれまでの測定結果から判明した。また、現実的な結果として、そのような収蔵場所に保管された作品に汚染空気を原因とする大きな劣化は見出されない。このことは、比較的新しい施設内の比較的高い汚染物質濃度をどのレベルまで低減させるのが現実的に妥当な数値目標であるのかという課題に対して解答を導き出す一つの根拠になりうると考えた。そこで、建物毎あるいは測定箇所毎の改修履歴等を調査し、新基準の目安となる場所の選定を行った。								
2. 暫定基準の見直し 暫定基準は平成17年度に制定したものであるが、既に公立研究機関や省庁が提示している基準よりも低い数値を採用していた。人間の生活環境ではなく、文化財の保存を目的とした基準であるため、厳格であることは妥当と考えていたが、実測値との比較から、さらに暫定基準値を引き下げるべき汚染物質濃度も存在することが判明した。上記1.で評価した建物毎の濃度特性を参考に、アンモニア、ギ酸、酢酸の各濃度値を大きく見直した。								
3. 新基準の制定 新たに制定した濃度規準は下表の通りである。								
汚染物質	NO	NO ₂	SO ₂	NH ₃	HCO	CH ₃ CHO	HCOOH	CH ₃ COOH
濃度	5.0ppb	.0ppb	5. ppb	5. ppb	60.0 μg/m ³	19.0 μg/m ³	10.0ppb	50.0ppb
【実績値】 研究会発表件数 3件 文化財保存修復学会(岐阜) 「資料保存と四大元素」に関する国際会議(北京) French-Japanese Workshop “Science for Conservation of Cultural Heritage” (パリ) 論文掲載件数 0件 調査回数 本年度2回、のべ34箇所(本研究に用いた前年度までの調査回数11回のべ213箇所)								
【備考】								



【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 博物館が独自の許容濃度基準を制定することは極めて稀である。特に開館から長い年月を経た施設と新しい施設が混在する環境下で測定を行い、得られた情報は今後施設の新築や改修を行う際に有益なものである。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	B	A			
備考 新基準を制定するために現在まで定期的に行ってきた調査回数(本年度2回のべ34箇所、前年度までの調査回数11回のべ213箇所)は統計的な処理を行うにあたり十分な数量である。論文は発表の予定で、現在準備中である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たな施設を新築、改修する際、全く揮発性物質が発生しない資材を使用するのが理想的であるが、現実的にはそのような施工は不可能である。従って、竣工後の空気環境をどれだけ清浄に保つかが予防保存において重要な視点となる。吸着フィルターなどを用いて汚染物質を除去する場合でも何らかの現実的な目標値がなければ永遠にその作業は継続し、コストの面からも結果的に全ての場所に対処できない。本研究により、基準を制定したことで、機能的かつ効果的にそのような対処ができるようになったことは大きな成果である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究をおこなう。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 谷豊信
【スタッフ】 谷豊信（列品管理課長）、川村佳男（調査研究課東洋室研究員）、丸山清志（客員研究員）			
【主な成果】 東洋民族の収蔵品のうち、南太平洋の生活および宗教儀礼にかかわる代表的なものについて、形状材質の面で従来よりも詳細な調査をおこなった。その結果、形状材質の新知見を得ただけでなく、一部の作品については、不詳だった制作地推定の手がかりも得ることができた。研究成果は、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」（平成 23 年 3 月 29 日～4 月 24 日）とリーフレットで公開した。			
【年度実績概要】 作品調査 東京国立博物館が所蔵する南太平洋の民族資料から、代表的な作品の形状材質を調査した。 文献調査 国立民族学博物館、天理大学附属天理参考館、南魚沼市立今泉博物館、早稲田大学、南山大学、大英博物館、メトロポリタン美術館、ピーボディー・エセックス博物館、ケ・ブランリー美術館などが所蔵する南太平洋民族資料の図録等から、類例を抜粋し、形状材質にかかわる画像と記載を収集・整理した。 上記の調査の結果、形状品質について当館の台帳には記載されていなかった知見を得ることができた。一部の作品については、形状品質の新知見をもとに、不詳だった制作地を推定する手がかりも得られた。その成果は、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」とリーフレットで公表する。			
【実績値】 調査回数：7 回。作品調査件数：155 件。データベース更新件数：55 件。撮影点数：約 200 カット。 陳列回数：特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」1 回。 冊子刊行数：リーフレット 1 冊。			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	B	A	B
備考 当館が所蔵する南太平洋の民族資料は、ほとんどが19世紀後半から20世紀初頭にかけて将来されたものであり、なかには現地ですでにみられなくなったものも含まれている。世界的にみても貴重な価値を有していながら、これまで公開される機会は非常に少なかった。特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」と同名のリーフレットでは、少なくとも約30年ぶりの公開となる展示品が全体の約7割を占める。今年度の当館では、より開かれた博物館を目指して平常展を「総合文化展」と改称したが、本特集陳列の実施とリーフレットの刊行により、時宜にかなった成果を示すことができたといえる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	データベース更新件数	撮影件数	陳列回数	冊子刊行数
判定	B	B	A	A	A	A
備考 東洋館リニューアルオープンの準備や特別展にかかわる業務などが集中し、所期の調査回数と作品調査件数には至らなかった。しかし、形状材質についてこれまで以上に詳細な調査を実施できたことで、多くの新知見をデータベースに反映させることができた。また、調査時のメモ的な写真撮影だけでなく、スタジオで本格的な撮影を様々なカットで行えたことは、当館所蔵の東洋民族資料のさらなる公開・活用につながる。						

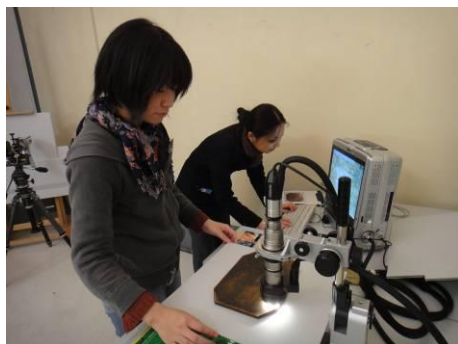
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	もともと本年度は台湾の民族資料の調査研究を計画していたが、他の業務との兼ね合いにより、基礎的な調査を済ませている南太平洋の民族資料をより詳しく調査することとなった。調査の実施回数や件数も目標を下回ったが、きめ細かな調査は少なからぬ新知見をもたらした。特集陳列やリーフレットの内容のさらなる充実につながった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	南太平洋の民族資料については、成果を積み上げることができた。しかし、南太平洋と同様に重要な台湾の民族資料に対して、調査研究を進めることが次年度の課題である。しかし、台湾の民族資料の大半は前年度に基礎的な調査を済ませているうえ、次年度は東洋館リニューアルオープン準備や特別展にかかわる業務のさらなる増加が見込まれる。そこで次年度の数値目標は、今年度をやや下回る範囲とする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 油彩画の材料・技法に関する共同調査((5)－①－i)		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 70 件を調査対象とする。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考ええる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、鈴鴨富士子(東京芸術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画彫刻室長)、土屋裕子(保存修復室主任研究員)、荒木臣紀(環境保存室主任研究員)			
【主な成果】 平成 20 年 11 月から開始し、可能な限り月 1 回のペースで調査を進めてきた。調査は朝 10 時から午後 17 時までであり、1 回の調査では終了しない調査もあるが、これまでのところ調査が終了した作品は、11 点におよぶ。次第にデータが蓄積されているが、その中から、今年度は 3 点についての調査内容を発表する紀要(45 号)を出版する予定である。			
【年度実績概要】 平成 22 年度に調査が終了した作品は、①A-698 P. D. ヘール筆《風景》、②A-705 筆者不詳《風景》、③A-708 筆者不詳《風景》、④A-715 J. B. フランク筆《シバの女王とソロモン王》、⑤A-732 筆者不詳《遠望富岳図》、⑥A-11690 原撫松筆《影の自画像》、⑦A-11789 原撫松筆《老婆》であり、それぞれについてのデータを CD に保存し、カルテを作成した。なお、今年度は、透過デジタルX線写真を以下の作品について撮影した。①A-11690 原撫松筆《影の自画像》、②A-11789 原撫松筆《老婆》、③A-11261 フォンタネージ筆《風景》、④A-11687 フォンタネージ筆《不忍池》、⑤A-11752 高橋由一筆《最上川舟行の図》			
【実績値】 調査回数 : 10 回 調査作品数 : 7 点 論文掲載 : 1 件 神庭信幸、木島隆康、土屋裕子、鈴鴨富士子、中安知佳「東京国立博物館および東京藝術大学による油彩画の共同研究(一)―東京国立博物館所蔵 原撫松筆《老婆》 《影の肖像》の高額調査―」『MUSEUM』631 号、2011 年にて、成果の一部を公表予定。 研究発表 2 件 ①2010 年 6 月文化財保存修復学会第 32 回「会ポスター発表 (『油彩画の材料・技法に関する共同調査―東京藝術大学と 東京国立博物館の学術共同調査―』) ②2010 年 11 月フランス・パリ French-Japanese Workshop”Science for Conservation of Cultural Heritage”(日仏 ワークショップ“文化財の保存科学”)にて口頭発表 (『日本における油彩の発展と保存修復』)			
			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-10

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 今年度は、東京芸大が集積しているデータベースに追加情報をもたらす作家の作品についての調査およびX線透過撮影の一部を行なうことができた(高橋由一、フォンタネージなど)。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数	調査件数		
判定	A	A	A	A		
備考 本調査の意義などについて、国内外の学会などで紹介を行ない本調査の結果として得たデータの一部は、平成23年4月出版の『MUSEUM』第631号を皮切りに順次掲載予定である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味でその存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、芸大作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。今後の調査の進捗が更なる可能性を開いていくものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 荻原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鑄造に関する共同研究((5)－①－iii)		
【事業概要】 東京藝術大学と共同で実施する共同研究で、東博所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鑄造を計画している。これまで試みられたことのない大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程について実証的な調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 北郷 悟(東京藝術大学美術学部副学長)、古田 亮(東京藝術大学大学美術館准教授)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、田良島哲(調査研究課書跡・歴史室長)			
【主な成果】 鑄造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010年10月23日～12月5日までの間「明治の彫塑 ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催した。			
【年度実績概要】 ・2体目の鑄造による鑄造プロセスの検証 ・東京国立博物館所蔵「女」石膏像と東京芸術大学美術館所蔵「女」石膏像の比較検討 ・東京国立近代美術館所蔵、碌山美術館、東京芸術大学がそれぞれ収蔵するブロンズ製「女」との比較検討			
【実績値】 調査回数 東京藝術大学にて3回 研究発表・論文：公表に向けて準備中		 当館銭谷館長と芸大宮田学長が 完成した「女」鑄造を確認	
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-11

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 3次元デジタルデータを用いたブロンズ鑄造に向けた準備、及びブロンズ鑄造の実施など、当初の計画に従い所定の成果を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	B	B	A			
備考 特別展を開催することによって、今回鑄造を行った作品と、東京国立近代美術館、芸大、礒山美術館などの既存のブロンズ像との比較を直接行うことができた。今後これら一連の調査研究工程を学会等で発表し、かつ論文として公刊するための準備中である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石膏原型と今回制作したブロンズ像を基準にしながら、様々なブロンズ像との定量的な比較を実施し、石膏原型とブロンズ像との関係が明らかになった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本に現存する木彫像の樹種について調査研究し、日本と中国の木彫像の用材観の相違や、日本特有の木の文化、歴史の理解を深めることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 金子啓明
【スタッフ】 浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、岩佐光晴(成城大学教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域樹種識別担当チーム長)、藤井智之(森林総合研究所関西支所長)、			
【主な成果】 今年度は、東京国立博物館保管の中国の木彫像、埼玉県桂木寺の釈迦如来像及び木彫像群、を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。また、京都府広隆寺の著名な 2 軀の菩薩半跏像の木片プレパラートを取得するなど貴重なデータを収集することができた。また、当該研究の蓄積による研究成果の一部を研究論文としてまとめることができた。			
【年度実績概要】 東京国立博物館保管の中国の木彫像の 3 軀を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。樹種の分析については森林総合研究所の能城が担当し、3 軀のうち唐時代に遡る可能性のあるその (1) についてはカキノキ属、やや時代の下がる (2) はキリ属、(3) はトチノキ属であることが判明した。中国の木彫像で唐時代に遡る作例は少なく、現存像の多くは檀像かその系統の像である。今回の像はそれとは種類の異なる中国の木彫像で、日本の像には例のないカキノキ属と判明したことの意義は極めて大きい。 また、埼玉・桂木寺の木彫像はいずれも平安時代の作例で、釈迦如来像は 9 世紀に遡る可能性がある。この像の樹種はカヤと識別され、この時期の地方作例においても一木彫像をカヤで作る奈良時代以来の伝統が踏襲されたことが判明した。一方、桂木寺の他の一木彫像は 10 世紀以後の作と考えられカツラ、ヒノキ、サクラ属等であることが判明した。関東においても 10 世紀以後の一木彫像の樹種選択については多様であったことが確認された。 また、広隆寺菩薩半跏像は宝冠弥勒、宝髻弥勒と呼ばれる著名な 2 軀で、いずれも 7 世紀の作であるが、小原二郎氏の分析で前者がマツ、後者がクスノキであることが判明した。これはその後の木彫像の樹種同定の先導的研究として評価が高い。当該研究はそれをさらに発展させ、用材観研究という新しい視点を提示したものであるが、小原氏は当該研究を評価し所蔵の貴重な木片プレパラートを当方に寄贈された。これにより当研究班の木片プレパラートの集積はより充実したものになったといえる。 また、これまで調査した木彫像のうち、樹種データが未公表の 8・9 世紀の木彫像及び鉈彫像について論文をまとめ、東京国立博物館研究誌『MUSEUM』(平成 22 年 4 月)に掲載した。また、これまで調査した仏像、神像等については、その研究成果を来年度以後も引き続き論文として報告していくことを協議した。桂木寺像の研究については研究誌『国華』に掲載予定である。			
【実績値】 調査作品件数 全 10 件 中国木彫像 3 件 日本木彫像 7 件 写真データ 130 点 木片資料 50 点 論文掲載数 1 件 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之 「日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅲ—八・九世紀を中心に(補遺)—」東京国立博物館研究誌『MUSEUM』(平成 22 年 4 月)			
			
			菩薩立像(当館)
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

中国木彫像は遺例がきわめて少なく、今回唐時代に遡る像の樹種を同定できたことの意義は大きい。今回の中国木彫像は当該研究によりはじめて注目された作例である。本年度は中国木彫像に視点を変更し研究を進展させることができた。また、桂木寺のように地方寺院等に所蔵の作例については、調査の許可を得るまでに時間がかかり、日程調整等に非効率なところがある。従って、早い段階での所蔵者との交渉と日程調整が必要である。

2. 定量的評価

観点	調査作品件数	収集資料数	論文掲載数			
判定	B	B	B			

備考

今年度は中国木彫像の貴重な事例について調査研究を実施できたが、さらに広範囲の情報を収集する必要がある。日本と中国の木彫像の比較検討のため、中国での調査が必要であるが調整の制約から実行には至らなかった。論文作成はこれまでの調査に基づく 1 本を研究誌に掲載したが、桂木寺像は平成 23 年度に公表とすることとした。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	唐時代に遡る中国の木彫像の遺例は少なく、美術史的研究、樹種同定の科学研究は不十分である。今回その貴重な作例を美術史的観点から見出し、樹種同定ができた意義は大きい。また、小原二郎氏から寄贈の貴重な木片プレパラートの活用方法は今後の課題として残されている。当該研究は本年度をもって終了するが、その蓄積に基づく研究はさらに多方面に発展させることが可能であり、その成果は十分に期待できる。また、樹種の同定については顕微鏡分析の他にも、放射性炭素年代測定や年輪年代学をはじめ当該研究で試行を重ねている。それらの成果に基づく研究論文も今後は期待することができる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4 年計画の調査研究は順調に進展させることができた。今後もこのペースを維持しつつ、蓄積に基づく美術史的、科学的な調査研究の充実を計りたい。そのため科学研究費による研究の継続が必要である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 目録学の構築と古典学の再生 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本独自の目録学を構築し、「知のネットワーク」で結ばれた公家社会の文庫群 (=データベース) の復原や伝統的知識体系を解明することにより日本古典学の研究基盤を再生する (研究代表者 東京大学史料編纂所教授 田島公)			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸 (学芸研究部長)、恵美千鶴子 (調査研究課アソシエイト・フェロー)			
【主な成果】 * 館蔵の古典籍、特に国宝「九条家本延喜式」に関する調査研究を行った。 * 館蔵の古筆切類について、古典籍学的な視角から調査を行った。			
【年度実績概要】 * 「九条家本延喜式」紙背文書の釈文作成のための研究会を14回行い、釈文の確定を図った。 * 「九条家本延喜式」の影印本刊行のための準備を進めた。 * 「九条家本延喜式」紙背をより詳細に調査するため、透過光写真の撮影 (476画像) を行った。 * 館蔵の古筆切類の詳細調査を継続している。(1月末現在66点調査)			
【実績値】 研究会の開催: 14回 画像の作成: 476画像 作品の調査: 66点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会の開催	画像作成				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究において当館の寄与する最も大きな役割である館蔵の「九条家本延喜式」の調査研究に関して、継続的に紙背文書の釈文作成を実施して、成果公開の準備を整えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	上記総合的評価のとおり、当館の研究上の責務を果たすとともに、館蔵文化財に関する情報の蓄積と公開のための準備が順調に進んでいる。次年度も研究の継続に努め、成果公開を果たしたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-14

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 本研究は、原三溪旧蔵作品の基礎的調査、および原三溪を中心とした当時の美術家ネットワークの調査を目的としている。本年度は、そのうちの後者にあたる原三溪によるパトロネージの問題について、調査研究を行う。			
【担当部課】	企画課特別展室	【プロジェクト責任者】	任期付研究員 植田 彩芳子
【スタッフ】			
【主な成果】			
【年度実績概要】 プロジェクト責任者が、平成22年7月31日付で退職したため、年度実績なし。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点						
判定						
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
F	

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15) 博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究 (科学研究費補助金) ((5)-①-iv)
【事業概要】 保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 土屋裕子 (保存修復室主任研究員)、和田浩 (環境保存室研究員)、荒木臣紀 (環境保存室主任研究員)、大場詩野子 (研究支援者)	
【主な成果】 これまでに集積した各種データを、博物館の空間と関連付けながら保管・検索することが可能な管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」を構築してきたが、本年は館内に約50か所配置した温湿度センサー及び所在管理のための2次元バーコードを用いたセンサーサブシステム、収蔵品管理のために館内ですでに開発済みの列品検索データベースシステム (プロトDB) とのネットワークを構築し、各種データを統合的に扱うことが可能になった。	
【年度実績概要】 平成22年度は、これまでに構築したシステムとシステムにおける4つの基本段階、すなわち測定 (Measure)、分析 (Analysis)、改善 (Improve)、管理 (Control) の中から、温湿度センサー及びデータ管理サブシステムとのネットワークの構築を行った。 ・ 温湿度の測定を行うセンサーを館内に約50か所配備し、センサーサブシステムの構築を行った。 ・ 2次元バーコードを用いた移動・管理を記録するセンサーサブシステムと管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」とネットワークを構築した。 ・ 収蔵品カルテ、点検調書を整備し、症例検索システム情報をネットワークから管理できるようにした。 ・ 博物館既存の列品検索データベースシステム (プロトDB) と管理分析サブシステム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」のネットワークを構築した。	
【実績値】 研究会発表件数 資料保存と4大元素シンポジウム発表1回 (北京) (2010. 06. 23) 文化財保存修復学会ポスター発表1回 (岐阜) (2010. 06. 13) 大エジプト博物館保存修復センター講演1回 (カイロ) (2010. 09. 29) 日仏保存科学ワークショップ講演1回 (パリ) (2010. 11. 04) 図書館総合展展示発表1回 (横浜) (2010. 11. 24 - 26) ルーブル美術館臨床保存ワークショップ (パリ) 講演1回 (2011. 01. 11) JSPS 学術セミナー講演1回 (ストラスブール) (2011. 01. 13) 論文掲載件数2件	
	
ルーブル美術館でのワークショップ風景	
【備考】 地震対策としての文化財の転倒防止に関する検討、神庭信幸、長嶋文、J. P. ゲッティ美術館・国立西洋美術館共催国際シンポジウム「美術・博物館コレクションの地震対策」報告書、2009年7月21日、国立西洋美術館、67-76、2011年2月 展示の工夫、神庭信幸、月刊文化財、571、16-17、2011	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-15

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 作品の状態、履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	研究計画・方法			
判定	A	A	A			
備考 科学研究費補助金（基盤（S）（平成20年～24年））を活用して、各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」に昨年までに整備したデータを用いて構築したサブシステムや温湿度センサーネットワークなどのネットワークを構築して、博物館内に蓄積したデータを包括的に活用する実用実験を実施した。また、一部成果を学会などで4回の発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学の具体的な機能が明確化できた。現在構築中の支援システムの精度の向上を図ると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能のように、目標とするシステムの確立を目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	16) 東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に― (科学研究費補助金)((5)―①―iii)
【事業概要】 東京国立博物館(以下、東博)が所蔵する約1,300点余りの上代裂(法隆寺の染織品と正倉院の染織品〈正倉院裂〉)のうち、主に正倉院裂の調査とデータの収集を目標とする。東博は明治5年(1872)から昭和22年(1947)まで正倉院宝物の管理に関わってきたため、明治時代の正倉院宝物の修理、模写、模造、古写真、出版物等を所蔵する。それら東博所蔵の調査を中心に奈良国立博物館などが所蔵する資料も調査とデータ収集を行なう。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 澤田むつ代
【スタッフ】 高橋裕次(博物館情報課長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、浅見龍介(調査研究課東洋室長)、西山厚(奈良国立博物館学芸部長)	
【主な成果】 撮影した各作品のデジタル画像について、個々に番号を付けるとともに、各作品については、現状、法量、品質、技法、文様染色、用途等についての詳細を記録化する作業を継続した。 東博が所蔵する上記の正倉院関係資料についても、デジタル写真撮影を継続し、詳細なデータを収集した。	
【年度実績概要】 ① デジタル撮影した画像に番号と名称等を付け、画像データの整理を継続して行った。 ② 撮影した各作品について、報告書刊行に向けて調査カード用のデータ整理を継続して行った。 ③ 東博所蔵の正倉院裂の模写、模造、模織作品のデジタル写真撮影の継続と、それらの資料に関するデータの収集を行なった。一部の分野(模写、裂帖)については補足撮影と調査も行なった。 ④ これらの調査の成果を踏まえ、昨年度に引き続き今年度は、「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」というテーマで特集陳列を行ない、昨年同様、図録を刊行した。また、昨年同様列品解説も行なった。	
  今年度制作した図録の表紙(左)と内容(右)	
【実績値】 1. 資料収集(写真撮影と調査カードのデータ化) ① 調査カードのデータ整理は全体の90パーセント程度完了。 ② 模写の追加撮影と裂帖作品の写真撮影 180枚余り。 2. 研究発表、論文発表、展示への反映 研究発表 1回、論文掲載数 4件、 ① 澤田むつ代 特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」を実施した。：平成22年11月2日～11月28日(東京国立博物館・平成館企画展示室) ② 澤田むつ代 特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」にかかる『東京国立博物館所蔵 正倉院の染物』と題した図録を刊行し、同タイトルの論文他1件の論文と9件のコラム解説を掲載した。 ③ 澤田むつ代 特別展『東大寺大仏一天平の至宝』(平成22年10月8日～12月12日)の展覧会図録において、各論「天平の染織」を執筆。 ④ 澤田むつ代 ②の展覧会図録において「天平古裂は正倉院から頒布された〈正倉院頒布裂〉」というコラムを執筆。 ⑤ 澤田むつ代 国際シンポジウム「陵山里出土遺物」(於：韓国・国立扶餘博物館)において「藤ノ木古墳出土の織物から法隆寺の織物」というテーマで、古墳から法隆寺・正倉院の綾織物の技法・文様の変遷等について発表し、レジュメ(40～63頁)を執筆した。 ⑥ 澤田むつ代 科学研究費補助金による研究成果として報告書『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究―「正倉院裂」を中心に―』(平成23年3月)を刊行し、「東京国立博物館所蔵 正倉院の染織品と裂帖、模織品、模写」という論文を執筆した。 3. 調査回数 9回 4. 補足撮影 3回	
備考	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 裂帖、模写、模織においても研究代表者の澤田が以前執筆した「正倉院頒布裂」記述項目等のデータをもとに、効率よく作品の撮影の継続とデータの収集、データの入力等を行なうことができた。本年度が最終年度にあたるため、これまで撮影した「正倉院頒布裂」の画像データと各作品の詳細データ、また、上記の裂帖、模写、模織の画像データと作品のデータ等を整理し、報告書の執筆、編集等を行ない、報告書を刊行した。						

2. 定量的評価

観点	論文数	調査回数	収集資料数	特集陳列		
判定	A	A	A	A		
備考 正倉院裂の調査と関連する裂帖等の調査を9回行ない、正倉院頒布裂と裂帖に貼られている作品にあっては、正倉院宝物との比較において、同種の裂の確認とともに、裂の使用年代や用途等について検討した。また、模写や裂帖の補足撮影もすることができた。さらに、今年度も昨年度（「東京国立博物館所蔵 正倉院の織物」）に引き続き、特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の染物」を開催し、昨年同様、図録も刊行した。さらに、3月には研究成果として、『東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究「正倉院裂」を中心に一』を刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	正倉院頒布裂と裂帖に貼られている作品にあっては、正倉院宝物との比較において、同種の裂の確認とともに、正倉院のどのような作品に用いられているかを類推し、裂の使用年代や用途等について検討した。また、特別展『東大寺大仏一天平の至宝一』に出陳された染織品について、由来が不明であったが、正倉院から頒布された「正倉院裂」であったことを確認し、コラムを執筆できたことは予想外の成果といえる。これまで撮影した各作品の画像と、これらの調査データ等を盛り込んだ論文をまとめ、3月にはカラー版の報告書を制作して刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの成果を昨年同様、特集陳列で一般に公開することができ、調査研究は順調に進んでいる。これらを総合的にまとめ、報告書を刊行する準備を進め3月にはカラー版の報告書を刊行した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館は、明治4年(1871)の「古器旧物保存」や、同5年に博覧会の出品物考証に備えるために行った文化財調査「壬申検査」をはじめ、「臨時全国宝物取調」など文化財保護に関する多くの資料を所蔵している。こうした文化財保護の歴史に関わる情報、資料などを広く収集、整理し、そのデータを公開することを目標とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 浅見龍介(調査研究課東洋室長)、丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、島谷弘幸(学芸研究部長)、恵美千鶴子(調査研究課任期付研究員)			
【主な成果】 東京国立博物館が収蔵する文化財保護に関連する作品や資料について、展示履歴などの情報を参考にして作成した調査対象リストをもとに、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ収集を行った。また、海外の博物館との交流にともなって海を渡った内外の資料に関連して、作品および当時の記録類などの調査を実施した。			
【年度実績概要】			
1. 東京国立博物館所蔵の関係資料の調査 文化財保護に関連する戦後の資料について、その収集と整理を継続して行った。			
2. 特集陳列の開催による資料の公開 本年度、特集陳列「東京国立博物館の模写・模造—平家納経—」において、当館が、明治5年(1872)の創立・開館以来、制作あるいは購入した多くの模写・模造のうち、平家納経に関する模写・模造および関係資料の公開を行った。			
			
特集陳列で公開した平家納経(模本)			
3. 他機関への調査 今年度は、国立国会図書館が所蔵する関連資料の調査を行った。海外では、東京国立博物館が、草創期にモデルとし、あるいは交流した英国の博物館(大英博物館、ビクトリア&アルバート博物館、ケルヴィングローブ博物館)を対象に、文化財保護に関する公文書およびその管理状況の他、併せて東京国立博物館より当該博物館に寄贈された作品などの調査を実施した。いずれも公文書、作品の保管・整理状況は良好で、日本からの作品に貼付されたラベルの記載内容などから、輸出にいたるまでの経過などが明らかになるであろうと考えられた。作品の伝来、保管、展示などに関する各館の公文書をとおして、博物館活動における文化財保護のあり方を検討することが、今後の課題である。			
【実績値】			
○資料公開回数 1件 特集陳列「東京国立博物館の模写・模造—平家納経—」 作品数 20点 期間 10月19日～11月28日			
○調査件数 100件、写真撮影点数 1500点、データ入力点数 300点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-17

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考 文化財に関連する資料には、未整理のものも多く、効率性の面から、調査方針の検討も必要である。しかし、科学研究費の協力者が、関係機関との連絡を密にしたことで、より多くの情報が得られ、調査・研究において成果をあげることができた。						

2. 定量的評価

観点	公開回数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	A	A	A		
備考 国会図書館の調査では、東京国立博物館所蔵作品の伝来について新所見があった。英国のケルヴィングローブ博物館では、日英の博物館の間で交換された作品約50件の調査が実施できた。また、大英博物館、ビクトリア&アルバート博物館では、文化財保護に関する公文書の収集・管理などの状況について担当者より説明をうけるなど、多くの情報を収集できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保護の歴史に関する資料は、国内では東京国立博物館が最も多く所蔵しているが、その収集・管理については、英国の博物館に学ぶべき点が少なくないことが明らかになった。今後は、情報の収集・整理のあり方を検討すると同時に、調査・研究の成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、英国の3博物館において調査を実施することができた。こうした調査を継続的に行っていく必要がある。また、国内外の関連資料を総合的に調査するために、所在情報や、調査方法について、博物館を中心に相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金)((5)-①-i)		
【事業概要】 工芸文化財デジタルデータの活用法について、復元職人の実制作空間の情報化を行うことにより、従来にはない視点から文化財閲覧デバイスを開発することを目的とする。復元作業に精通した職人の制作空間を参考にすることで、制作者の作業意図や技能に合わせた文化財デジタルデータ閲覧デバイスの開発を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課 河内晋平
【スタッフ】	河内晋平(列品管理課登録室アソシエイトフェロー)		
【主な成果】 昨年度に調査、データベース化した職人の制作空間に関する映像と取得した3Dデータ(高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究:代表佐藤雅彦)について調査検討し、実際に閲覧デバイスの設計と実装をおこなった。			
【年度実績概要】			
1. 閲覧デバイス設計 表示ディスプレイと各種センサーについて調査を行い、実際にコンピューターディスプレイとiPadを用いて開発実験を行った。またセンサーについてはジャイロセンサーを始め、既存のデバイス(wiiコントローラー、iPhone等)に使用されているセンサーについて各種起動ソフトとともに検討と実験を行った。			
			
		デバイス使用時の調査風景	
2. 閲覧デバイス開発 まずはコンピューター画面上で動かせるコンテンツを使用し、予想される閲覧者(職人)の動作に合わせて開発実験を行った。その後iPadを使用し制作空間の中でのユーザービリティをより考慮したデバイス開発を行った。 また、デバイス内で表示する3Dデータの形式や容量についてもデータ編集を行った。			
3. 開発したデバイスを使用しての実験 開発したデバイスを実際に使用してもらい、改良点などについて検討を行った。その結果を反映し改良を加えたデバイスを開発した。その後、新たに出てきた要望についても開発のための調査を行っている。			
【実績値】 ソフトウェア開発 2件 ・閲覧デバイスソフトウェア bata 版完成 1件 ・閲覧状況記録デモ機能 1件			
【備考】			
			
Apple社iPadを使用したデバイス操作図			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-18

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 文化財閲覧に関するデジタルデータの活用法についての考察と、実際に使用するデバイスを開発しその利用効率について様々な実空間において調査することは今後より必要となってくる。本研究は文化財デジタルデータ活用について職人の視点から考察しているが、文化財復元や博物館展示での文化財閲覧の新たな方向性を探る上でも有益であり、将来に結びつく重要な情報の取得であると考えられる。						

2. 定量的評価

観点	ソフトウェア 開発件数					
判定	A					
備考 情報収集に関してはデバイス設計のために予定していた機器の調査、開発後の職人への調査とその改良を十分に行い、実際に使用する3D閲覧デバイスができた。また、今後の研究発展もふまえ、閲覧だけでなく閲覧状態を記録するデータ収集についても研究、開発を始めることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	職人が文化財復元に際して実際にどのような情報を必要としているのかについての調査を実際のデバイスを開発し実施できた。これらの成果を踏まえつつ、文化財閲覧時の必要情報について記録する手法の検討を行い、それらの結果を今後のデジタル閲覧デバイス開発に活かしていく。本研究での職人の視点から考察するという手法はこれまでとは違う文化財情報提示の可能性について考察できる有効な調査方法であった。今後、より多くの制作者の意見を収集し、これまでにない閲覧デバイス開発へと継続させていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	復元職人の作業記録映像から実際のデバイス開発ができた。デジタルデータ編集プログラムや閲覧デバイスのハードウェアについても実際に運用されている状況を参考にし、いくつかのプロトタイプが制作が行え、それらの情報をもとに完成品を開発した。今後は本研究で開発したデバイスを多くの方に使用してもらい、その成果を調査し資料としてアーカイブを構築していくことが必要となる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19)狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)
【事業概要】 江戸時代後期の幕府御用絵師・狩野晴川院養信は、古画・古絵巻の模本制作に積極的に取り組んだと知られているが、絵画だけでなく古器物等を含む宝物の模写もしており、中でも東京国立博物館の所蔵する「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」と「法隆寺什物図」は比較的規模が大きい作例と言える。前者は既に報告書の刊行にまで至っているため、まず本研究では後者の基礎的な調査研究をし、今後、養信による寺社宝物模写の全容を明らかにすることを目的とする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	列品管理課 安藤香織
【スタッフ】安藤香織(列品管理課登録室アシリエイトフェロー)	
【主な成果】 昨年度、予定していた「法隆寺什物図」の調査とデジタル撮影を終えたことを踏まえ、本年度は東京国立博物館が所蔵する狩野家模本類のうち、「法隆寺什物図」の研究にも重要と思われる作品を選別し、2月1日現在「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」をはじめとする37点を撮影した。また、養信自筆の「公用日記」について、法隆寺什物の模写に関する記事を探し、該当部分を翻刻した。昨年整備した「模写された宝物の一覧表」と「画中の墨書翻刻」については点検の上で手直しをし、論文に付して発表するために適した状態にした。以上の成果は調査報告としてまとめ、2011年4月発行の『MUSEUM』631号に発表する。	
【年度実績概要】 1、撮影 本年度は、養信による宝物模写の全容を論じるのに必要な周辺作品として、「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」をはじめとする31点の狩野家模本類をデジタル撮影した。撮影にはカメラマンと作業補助の協力者を依頼し、利便性と普及性を考えて、当館における基本的な撮影条件を満たすかたちで実施した。 2、「公用日記」翻刻 昨年度は着手できなかったため、今年度改めて、「公用日記」の記事のうち「法隆寺什物図」にかかわる記述を抜き出し、翻刻を行った。同様に、受け入れ時の状態がわかる館史資料に関しても該当部分の翻刻をした。以上は、古文書を専門とする協力者の確認を得ながら行った。 3、調査結果とりまとめ 昨年度の成果である作品のデジタル画像、模写された宝物の一覧表、墨書の翻刻を適宜編集し、上述した「公用日記」翻刻など本年度の成果も反映させて、調査結果を報告できるよう取りまとめた。以上を2011年4月発行の『MUSEUM』631号に発表する。	
【実績値】 調査・撮影日数：8日(協力者：撮影者1名、撮影補助1名) 撮影件数：37件 撮影枚数：448枚 翻刻作業：2日(協力者：1名)	
【備考】	



自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
備考 独創性をBとしたのは、今回は基礎的な調査の段階であるため、独創性が認められるというまでには至っていないと判断したためである。ただし、今回の綿密な調査で得られた基礎的情報は、発展的に活用できるため、今後の研究には非常に有益である。また、本年度も必要に応じて専門の研究協力者を依頼したが、これにより作業効率が上がり、正確性も増していると考えられる。						

2. 定量的評価

観点	撮影作品数	撮影枚数	翻刻作業日数	作業協力者数		
判定	A	A	A	A		
備考 撮影した作品数は当初の予定よりも若干多く、十分に評価できると考える。撮影枚数、翻刻作業の日数、全体の作業協力者数も、過不足なく適当であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度、「法隆寺什物図」の基礎的調査・撮影を終えた際、同筆の「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」やその他の周辺作品を調査し検討する必要性を感じた。そのため本年度は方針をやや修正し、周辺作品の撮影に取り組み、基礎情報の収集に着手することができた。また昨年度実施予定であった「公用日記」の翻刻は本年度無事に終了することができ、昨年度の成果物を修正したものと併せて、論文に生かすことができた。「法隆寺什物図」を十分な情報、画像とともに一般に紹介することは、今後の狩野派研究の発展につながると期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、本年度で終了である。「法隆寺什物図」の基礎的調査をし、充実した情報とともに紹介することを目標とした本研究は、十分達成できたと考える。同時に、本研究はより広い視野を持つ、養信の寺社宝物模本制作に関する研究を推進するための第一歩であり、今後は別の課題としてこれらの研究に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究(科学研究費補助金)((5)－①－ii)		
【事業概要】 国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を検証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、個々の作品に関する歴史的・文学的調査を進める。これらによって、書の作品を、料紙と書風という二つの側面から解明し、複合的・総合的なデータ作成を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(調査研究課長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、恵美千鶴子(学芸研究部調査研究課任期付研究員)、赤尾栄慶(京都国立博物館副部長)、羽田聡(京都国立博物館学芸部企画室研究員)、丸山猶計(九州国立博物館学芸部主任研究員)			
【主な成果】 装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、展示履歴等によって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリストを作成した。国内では、東京国立博物館・九州国立博物館・三の丸尚蔵館等、海外ではフランスの国立図書館、アメリカ・クリーブランド美術館等に収蔵されている作品について、デジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する調査を実施した。			
【年度実績概要】 1. 東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化 東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。今年度は、東京国立博物館において、本研究成果を生かした特集陳列「日本・中国・朝鮮の料紙」(9月18日～10月24日)を実施し、解説のパンフレットを配布した。 2. 特別展に関係する作品の調査とデータ化 2013年度に東京国立博物館で開催予定の特別展「和様の書」(仮称)においては、本研究と関係の深い作品が一堂に展示される予定である。その展示準備を兼ねて、関係作品の詳細なデータを収集した。 3. 他機関への調査 国内では、九州国立博物館、宮内庁三の丸尚蔵館、筆の里工房、ハラ・ミュージアム・アーク、個人所蔵者宅へ出張し調査を行った。海外では、フランス・国立博物館、韓国・国立中央博物館、アメリカのクリーブランド美術館、フィラデルフィア美術館、フリア・ギャラリー、アメリカ・個人所蔵者宅へ出張、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実をはかった。			
		 書風を検討するために、文字の拡大写真を撮影。蝶下絵和歌巻(光悦筆、ハラ・ミュージアム・アーク所蔵)より。	
【実績値】 ・研究会などでの発表 島谷弘幸「古筆における伝統と創意」(日本書芸院展記念講演会)平成22年4月20日ほか計9件 ・論文掲載数 島谷弘幸「古筆における伝統と創意」(『公益社団法人 日本書芸院会報』150号、公益社団法人日本書芸院発行、平成22年8月)ほか計6件 調査件数 約70件、写真撮影点数 約1500点、データ入力点数 約300点、文献資料のデジタル化 3件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	S	A
備考 本研究はすでに三年間の基礎研究を行っており、実質的には四年目にあたる。継続して行っていることで、基礎的なデータを確実に収集できた。オリジナリティの高い調査内容であるが、調査方針の再検討も行った上で、その調査方法は確立したと言える。その方法にしたがって他機関においてもすみやかに調査を進めることができた。科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数	文献資料のデジタル化	研究会発表
判定	A	A	A	A	B	A
備考 本年度は当初より他機関への調査を行っており、調査件数や調査データの入力点数は増加している。調査の成果を論文や研究会、特集陳列等で年間を通して定期的に公表できた。文献資料のデジタル化のみ、昨年度に比較して件数を増やすことができなかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は継続的に行ってきたことで、調査効率が上がり、その成果の公表についても、論文や特集陳列等で確実に行うことができた。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータをさらに収集して、調査の内容を充実したものにすると同時に、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、海外においても中国やフランス、アメリカなど東アジアの書道史に関わる資料の調査を行うことができた。その調査を継続的にしていく必要がある。また、これまで収集した調査データや成果をひろく公表するとともに、所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 中国書画の表装に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究は、中国の諸文献から表装に関する記述を整理し、歴史的な様式の変遷を明らかにしつつ、日本および中国に収蔵される中国書画を実際に調査し、「中国表装」および「日本表装」の双方について、時代や地域ごとの様式や素材のデータを網羅的に収集・整理し、表装の変遷に関する体系的な調査研究を進めようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳
【スタッフ】 富田淳(調査研究課長)、鍋島稲子(台東区立書道博物館主任研究員)			
【主な成果】 『歴代名画記』唐・張彦遠などの中国歴代の文献から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。また、北京故宮博物院・香港中文大学文物館・京都国立博物館・大阪市立美術館・五島美術館・三井記念美術館・東京国立博物館に所蔵される主として中国の書画を調査し、表装の諸データおよび画像データを収集した。			
【年度実績概要】 文献調査 ・『歴代名画記』唐・張彦遠、『書史』『画史』北宋・米芾、『南村輟耕録』元・陶宗儀等から、書画の表装に関する記載を収集・整理した。 作品調査 ・北京故宮博物院「清宮善本碑帖特展」を視察、清朝宮廷作品 46 件を調査した。 ・香港中文大学文物館の所蔵する漢碑「夏承碑」「西嶽華山廟碑」2 件を調査した。 ・三井記念美術館の所蔵する中国書跡 14 件を調査した。 ・五島美術館の所蔵する中国書跡 2 件を調査した。 ・京都国立博物館の所蔵する中国書画 8 件を調査した。 ・大阪市立美術館の所蔵する中国書画 11 件を調査した。 ・東京国立博物館の所蔵する墨蹟(日本表装)8 件を調査した。 上記の成果に基づいて、研究会発表(清宮蔵善本碑帖特展專題座談会)や論文(『拓本とその流転』)として発表した。			
【実績値】 調査回数：海外 2 回、国内 4 回。調査作品：91 件 撮影点数約 180 カット。 論文発表：「華夏と安国」(『拓本とその流転』)など 3 編。 研究会発表：「日本に現存する清朝宮蔵の拓本について」(北京故宮博物院) 1 回。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適宜性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考 本研究において得られた成果の一部を、東京国立博物館と台東区立書道博物館の連携企画展である「拓本とその流転」に反映させた。将来的には、毎年継続して実施している中国書画の修理において、修理方針を検討する際の基礎データとして有効な資料となりうる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	論文等				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データは当初の研究計画にそって蓄積・整理が進んだ。また本研究で得られた成果の一部を、論文や学会発表として公開することもできたためAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は当初の研究計画にそって、順調にデータの蓄積・整理・発表ができたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 清時代末期の訪中調査における写真資料に関する調査研究（科学研究費補助金） ((5) -①- ii)		
【事業概要】 東京国立博物館が収蔵する写真資料のうち、清末民初に中国において文物、史跡の撮影を行った小川一眞及び早崎稜吉、関野貞の写真資料に焦点をあて、他機関が所有する文献資料および実地調査によって、写真が撮影された行程、未詳な被写体、被写体が選択された背景を明らかにし、当時における写真撮影の実態を解明する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課 関紀子
【スタッフ】 関紀子（博物館情報課情報管理室任期付研究員）、富田淳（調査研究課長）			
【主な成果】 東京国立博物館が所蔵する『支那写真帖』に添付される山東地方の写真をもとに、現地で実地調査を行ない、撮影された場所の特定と現状との比較を行なった。調査の過程で、これまで不明であった撮影地を特定することができ、明治時代に行なわれた考古、美術、建築、金石と幅広い分野に渡る訪中調査の一端を確認することができた。			
【年度実績概要】 東京国立博物館が所蔵する『支那写真帖』は、中国の史跡、文物、風景写真を添付した写真帖であるが、目録には簡単な撮影地が記されているのみで、撮影者、撮影時期等が不明であった。近年の調査で、一部に茨城県天心記念五浦美術館が所蔵する早崎稜吉が撮影した原板と一致する写真が含まれていること、また関野貞の『支那仏教史蹟』に掲載される写真が含まれることが明らかとなった。 今年度はこのうち、関野貞が明治 40～41 年に行なった山東地方の調査に関わる写真に注目し、『支那写真帖』及び『支那仏教史蹟』に掲載される写真が撮影された場所の特定と調査の行程を追うため、2 回にわたり山東省で現地調査を行なった。 第 1 回目は、泰安、兗州、済寧、嘉祥県、肥城県、青州地方を調査。この調査では、主に漢時代の石碑や画像石、北魏～唐時代の石窟を調査した。 第 2 回目は、曲阜を中心に孔廟や孟廟など明～清時代の建築群と、撮影当時には孔廟にあった石碑群を漢魏碑刻陳列館で調査し、関野の建築や石刻史料考証の足跡を追った。			
			
「孟廟・復聖殿」 平成 22 年撮影		明治 40 年撮影 『支那写真帖』より	
【実績値】 第 1 回目山東調査…泰山、岱廟、普照寺、蒿里山冥福寺、兗州興隆寺塔、京杭大運河、智照禪師塔、済寧文廟、鉄塔寺塔（現済寧市博物館）肥城県孝堂山石室、嘉祥県武氏石室、青州雲門山石窟、駝山石窟を調査し、1,090 画像撮影。 第 2 回目山東調査…孔廟、孔府、孔林、孟廟、孟府、孟林、重興寺塔を調査、966 画像撮影。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-22

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 これまで、あまり行なわれてこなかった古写真の撮影地の特定と、実地調査による現状との比較によって、すでに失われ、写真でのみ知りうる事ができる史跡や文物の実状を把握することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	写真撮影数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査地を山東地方に焦点を絞り、明治時代に行われた山東地方の各分野の調査地をほぼ網羅することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は3年計画であり、順調に進んでいる。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-23

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23) 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究 (科学研究費補助金) ((5) -①-ii)		
【事業概要】 本研究は、占領期 (1945 年から 1952 年) の連合国軍最高指令官最高司令部 (GHQ/SCAP 以下 GHQ) による歴史教育政策を調査し、国立博物館を中心に据えた歴史教育事業の成果とその意義について考察することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課 神辺知加
【スタッフ】 神辺知加 (博物館教育課教育講座室主任研究員)			
【主な成果】 本研究は、博物館関係文書データベース構築のための CIE 文書の調査を行った。 文書検索は国立国会図書館が資料選別のため付けた分類記号 (十進分類) 及び分類記号ごとの文書目録 (荒敬、内海愛子、林博史『国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書目録』全 11 巻) を手がかりに、本研究に該当する文書を探し出し、和訳を行い、データを蓄積した。			
【年度実績概要】 1 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書 博物館関係の資料を選別、和訳を行った。 2 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書 和訳のデータの蓄積を行なった。			
【実績値】 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書 博物館関係の資料和訳 200 枚 国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書 博物館関係の資料データ化 200 枚			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-23

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 本研究の基本資料となる国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書 博物館関係の資料を選別、和訳、データ蓄積を行った。これによって必要資料が整理でき検索ができるようになった。						

2. 定量的評価

観点	情報収集					
判定	A					
備考 マイクロフィルムを購入し携帯型パソコンを活用することにより、効率的にデータ収集を行なうことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、膨大な文書1枚1枚に目を通す必要があるが、国立国会図書館のマイクロフィルムを活用し迅速に、関係文書を選別することができた。しかしながらマイクロフィルム撮影時の状態によって、内容が判別しづらい文書もあり和訳に予定より時間がかかった。次年度には、今年度蓄積したデータを分析し調査研究を進める予定である。また蓄積したデータはデータベース公開にむけて準備する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の計画では、博物館関連の全データを選別し、和訳する予定であった。今年度は、ほぼ予定通りに進行した。来年度は蓄積、検索のためのスキャナーを活用し、速やかにデータベースを構築したい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-24

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	24) 宮廷工芸に関する物質文化的研究—生活感のある工芸史の構築をめざして—(科学 研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究は、日本の宮廷で用いられた建築・服飾・調度品などの工芸資料について、生活様式を反映する物質文化の見地から研究し、公家階層の生活様式に基づいた宮廷工芸の分類体系を構築するものである。本研究は、日本の公家階層が用いた宮廷工芸という特定事例を対象とするが、その成果は、歴史研究の物質文化的側面を深化させて、人間の生活感を反映する歴史の構築に資する工芸史研究の試論とすることを念頭におく。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課 猪熊兼樹
【スタッフ】 猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)			
【主な成果】 本年度は、本研究の基本資料となる東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。それとともに同図画帖の関連史料となる宮内庁書陵部蔵『公事録』その他の文献を複写し、その内容を検討した。また京都葵祭に赴き、その祭礼に関する調査を行なった。			
【年度実績概要】 1. 東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。 2. 宮内庁書陵部蔵『公事録』その他の史料を複写し、その内容研究を行なった。 3. 京都葵祭に赴き、その祭礼に関する調査を行ない、静止画と動画による祭礼記録を行なった。			
			
『旧儀式図画帖』の一部		葵祭の牛車	
【実績値】 宮内庁書陵部所蔵史料複写(A4紙焼き) 9312枚 国立公文書館所蔵史料複写(A4紙焼き) 450枚 京都葵祭祭礼資料(静止画・動画)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-24

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本研究の基本資料となる東京国立博物館蔵『旧儀式図画帖』の内容研究を行なった。そして同図画帖の関連史料となる宮内庁書陵部蔵『公事録』をはじめとする文献を複写した。これによって前近代の宮廷における建築・服飾・調度などの工芸資料について、図画的かつ文献的な観点から検討するための有力な資料・史料が充実した。また京都葵祭に赴き、同祭礼の静止画・動画による記録を行なった。これによって前近代の工芸資料について、用例的な観点から検討するための有力な記録が充実した。						

2. 定量的評価

観点	情報収集					
判定	A					
備考 史料の所蔵機関や祭礼の実行組織から懇切な協力を得ることができ、本研究に必要な史料や記録を充実させることができた。携帯型パソコンを活用することにより、調査地における効率的なデータ整理を行なうこともできた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、膨大な文献複写を必要とするが、幸いにして、史料所蔵機関の懇切な協力を得ることができ、調査の早い段階で史料が充実した。また祭礼の調査についても、実行組織および関係者の厚情によって、円滑な調査を行なうことができた。次年度には、予算的事情によって見送った文献史料や現地記録などを一層充実させ、それらの分析に努める予定である。大容量のハードディスクや史料をデータ化するスキャナーなどを活用すれば、より充実したデータを収集できるものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の計画では、初期段階で史料を収集し、記録を蓄積してのち、すみやかに分析にかかる予定であった。今年度は、ほぼ予定通りに進行した。紙媒体にせよデジタルにせよ、大容量のデータを収集するため、ハードディスクやスキャナーなどを活用すれば、より充実したデータを収集できるものとする。

業務実績書

中期計画の項目	文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25)近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）（(5) -①-ii）		
【事業概要】 本研究は、近現代に形成された古日本染織コレクションがいつ、どのような形態のものが、どのような経路で、どのような形状の変化を伴いながら移動し、コレクションとして集積されたのかを調査することによって、染織史研究の基盤となる古日本染織コレクションの形成過程を明らかにし、古日本染織が近現代に形成された美術史の中でどのように価値付けられたのかを明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課 小山弓弦葉
【スタッフ】 小山弓弦葉（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】 本年度は、当館に所蔵される日本で最初の小袖コレクションである野口彦兵衛旧蔵コレクション、及び、洋画家・岡田三郎助が蒐集した小袖および小袖裂コレクションの内、現在埼玉・遠山記念館に所蔵されている未公開分を含む染織資料を調査し、明治後期から大正初期にかけて蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。			
【年度実績概要】 本年度は、東京国立博物館に所蔵される、染色作家・野口彦兵衛が蒐集した古日本染織コレクション、および、洋画家・岡田三郎助が蒐集したものの内、現在、埼玉・遠山記念館に所蔵される古染織コレクションを調査し、その画像付きデータベースをファイルメーカーで作成した。調査内容としては、まず、画像のないものに関しては、新規撮影を行って画像で閲覧可能なデータの集積を目指した。また、不明なコレクションの伝来や 古日本染織の古美術品としての流通経路を所蔵館や国会図書館に所蔵される資料によって可能な範囲で調査した。岡田三郎助コレクションの画像については、遠山記念館の協力を得て画像のあるものについては画像資料をご提供いただいた。また、画像のない未公開の小袖裂についてはデジタル画像の撮影を行った。さらに、同コレクションの所蔵リストや目録を提供いただき、それらの基礎資料を元にリストをデータ化するとともに、コレクションの全容を調査しその形態や形態の変化、墨書やラベルといった記録を中心に調査を行った。以上の調査によって、東京国立博物館に所蔵される野口彦兵衛コレクションの構成や形成過程とその由来を明らかにするとともに、ほぼ同時期に形成されたと考えられる岡田三郎助のコレクションとの比較検討が可能となった。 古日本染織コレクションデータベースの入力、および、調査で得られたデータについては検索がしやすいようにそれぞれのコレクションについてリストを作成し、非常勤調査員がデータの入力と整理を担当した。また、本調査の一部は東京国立博物館研究誌『MUSEUM』627号において、その成果を論文「近代染織史研究における『辻が花』の受容について」で発表した。			
【実績値】 野口彦兵衛旧蔵古染織コレクションデータ（調査データ入） 119 件 岡田三郎助旧蔵古染織コレクションデータ（調査データ入） 217 件 長尾欣弥旧蔵古染織コレクションデータ（未調査分） 268 件 野村正治郎旧蔵古染織コレクションデータ（未調査分） 460 件			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	データ集積					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、近代に形成された古日本染織コレクションの内、その最初期と考えられる野口彦兵衛および岡田三郎助のコレクションに重点を置き、初期におけるコレクションのデータを集積することによって、その全容をコレクターの視点からうかがうことが可能となったかつてない試みが達成できた。次年度以降も同様の手法によって、順次、近代コレクターの古日本染織コレクションのデータを集積し比較検討資料をさらに充実させたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	近代の日本人コレクターによって蒐集された主要なコレクションは、今回データを集積した野口彦兵衛、岡田三郎助の他に、古美術商である野村正治郎、実業家・長尾欣弥、実業家・根津嘉一郎、日本画家・吉川観方などがあげられるが、本年度は、その初期段階における二人の主要な蒐集品を調査し、データを集積することができた。次年度以降は、同様の手法によって、日本のコレクターによるコレクションの調査を進めるとともに、海外に流出し、蒐集されることになったコレクションについても調査を進め、より幅広い視野で古日本染織コレクションの形成過程を概観できるよう、情報の集積を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	26) 東京国立博物館所蔵古文書データベース (科学研究費補助金) ((5) -①- ii)		
【事業概要】 文部科学省科学研究費補助金(公開促進費データベース)を利用して、東京国立博物館で所蔵する古文書について、書跡収蔵品を対象に調査を実施。古文書学によって記載内容の検討、形式・様式の分類、使用された料紙の素材分析を行い、1通ごとの古文書名称の特定、法量計測、写真撮影など基礎データを収集した。記載された文字を翻刻し最終的に画像とテキストを統合したデータベースを東京国立博物館情報アーカイブスで公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課 高梨真行
【スタッフ】 高梨真行 (調査研究課書跡・歴史室研究員)、高橋裕次 (博物館情報課長)、丸山猶計 (九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員)			
【主な成果】 博物館が所蔵する古文書の内、B1715 伏見天皇綸旨 (1 幅)、B1738 足利尊氏御判御教書 (1 幅)、B1739 織田信長朱印状 (1 通)、B1740 徳川家康朱印状 (1 通)、B1972 前田利家朱印状 (1 通)、B3175 豊臣秀吉朱印状 (1 通)、B1746 江戸幕府老中奉書 (1 通)、B3045 藤原為氏自筆譲状 (1 通)、B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰 (62 通)、B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本 (48 通)、B1878 民政裁判所触書 (1 通)、B1879 会計官民政所触書 (1 通) 等。			
【年度実績概要】 平成19から21年度に行った古文書調査におけるデータを基礎として、対象古文書について、古文書名検討、差出・宛所の特定、作成時代特定、様式・検討、料紙・内容分析、釈文翻刻、1点 (1 通) ごとの写真撮影を行った。 九州国立博物館に長期管理替となっている古文書 (B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰5 通、B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本17 通) について、平成22 年11 月16 日から18 日にかけて出張調査を実施。 本年度調査・整理が完了したデータに関しては2011 年6 月から東京国立博物館情報アーカイブス (http://webarchives.tnm.jp/archives/cat/database) にて公開予定。 調査対象古文書 掛軸装 50 点、卷子装 19 点、非表装(まくり) 183 点 対象総計252 点			
データベースの形式 ・古文書1通を1レコードとする。 ・1レコードは古文書、差出・宛所、年代、様式、料紙・内容、釈文(フルテキストデータ)と数カットの本紙画像で構成			
 			
【朝鮮国王李湍国書 (B1768 徳川幕府朝鮮国王往復書翰の内)】		【中山王尚貞書状 (B1769 徳川幕府琉球往復書翰模本の内)】	
【実績値】 調査対象数 列品 103 件、古文書点数では282 点 (通) 撮影画像数 1,040 カット 内整理済公開予定 1,047 カット 翻刻釈文テキストデータ数 282 点 (通) 1レコードあたりの情報量 約3M バイト(画像とテキストデータ)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
備考 古文書の年代も、平安時代から明治にわたり、時代的にも広い範囲を対象とし得たため、日本史各時代を専攻とする研究者や大学生・大学院生のニーズにも対応できると判断される。また、朝鮮および琉球関係の外交古文書も対象としたため、交際交流の歴史に寄与することが可能と思われる。						

2. 定量的評価

観点	調査対象数	撮影画像数	テキストデータ数			
判定	A	A	A			
備考 科研費の有効的使用に成功し、計画通りのデータ整理が完了し得た。古文書に記された文字をフルテキストデータ化しての公開により、歴史学や書跡など関連諸分野の研究推進に対して良質な情報を提供することができたと思われる。また本年度で当館が所蔵する古文書については約6割の情報整備が完了したことになる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	生涯学習機会の増加から、学生はもとより多くの層からの利用が期待できる。古文書の画像と積文を総合化した本データベースの公開によって、国民全体の資源としての有効利用に資することができたと判断される。次年度以降は残る4割の館蔵古文書の情報整備に着手したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	古文書という東アジア圏に共有される漢字で記されたテキストデータについて、科学研究補助金の導入により調査・研究を実施し、原典の高精細画像を準備して、データベース化して公開したことは、法人全体としての計画にある「我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化」および当館の年度計画にある「博物館情報アーカイブを運用し、収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る」という事項に対応した事業であると思われる。特に本年度は科学研究費の有効利用に成功して、その整備と公開に更なる推進がはかられたと判断される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	27) 東京国立博物館所蔵印譜データベース (科学研究費補助金) ((5) - ①-iii)
【事業概要】 東京国立博物館では、漠南印譜コレクション、懷玉印室コレクションなどの印譜を所蔵する。歴代の主要な印譜を網羅するこれらのコレクションには、製作部数の少ない原鈴本や、編者自らが注記を書き加えた稀観本が多数含まれており、内外からの閲覧希望が多い。しかしながら、これまで保存上の問題から必ずしも十分な公開が行われてこなかった。本事業では、東京国立博物館が所蔵する印譜およそ 2,300 件約 7,500 冊の画像データベースを作成する。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	博物館情報課 関紀子
【スタッフ】 関紀子 (情報課情報管理室任期付研究員)、富田淳 (調査研究課長)、高梨真行 (調査研究課書跡・歴史室研究員)	
【主な成果】 小林斗盒 (庸浩) 氏寄贈による懷玉印室コレクションのうち中国古銅印譜について撮影を行いデータを入力した。 平成 22 年 10 月から「東京国立博物館情報アーカイブ (http://webarchives.tnm.jp/archives/) において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として公開を開始した (平成 23 年 2 月現在、15,527 画像)。	
【年度実績概要】 平成 22 年度は、平成 14 年に小林斗盒 (庸浩) 氏から寄贈を受けた懷玉印室コレクションのうち、張廷済『清儀閣古印偶存』や、吳雲『二百蘭亭齋古銅印存』、陳介祺『十鐘山房印舉』など中国古銅印譜の撮影およびデータ入力を行った。 本データベースの撮影は、印譜の体裁、装丁を明らかにするため、表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影、半丁 1 カットを原則とし、レコード数は半丁 1 カットを 1 件とする。また、データの項目は、画像番号、資料番号、名称、作者・編者、時代、員数、形質、法量、備考である。	
【実績値】 ○データ作成件数 25,470 件 (内訳) 張廷済『清儀閣古印偶存』 清・道光 8 年 (1828) 500 件 朱為弼『鋤經堂集古印譜 (朱為弼手注本)』 清・道光 8 年 (1828) 86 件 潘季彤『聽颿樓古銅印彙』 清・道光 12 年 (1832) 401 件 張廷済『古印綴存 (張廷済手注本)』 清・道光 14 年 (1834) 50 件 吳式芬『双虞壺齋印存』 清・19c 758 件 胡之森『青琅玕館摸古印譜』 清・道光 22 年 (1842) 401 件 陳介祺『簠齋印集』 清・咸豐 1 年 (1851) 2092 件 凌壇『采柏園古印沢存』 清・咸豐 7 年 (1857) 193 件 何昆玉『吉金齋古銅印譜』 清・同治元年 (1862) 854 件 吳雲『二百蘭亭齋古銅印存』 清・同治元年 (1862) 1502 件 陳介祺『十鐘山房印舉』 清・同治 3 年 (1864) 2186 件 吳大澂『十六金符齋印存』 清・光緒 17 年 (1891) 4516 件 など ○公開画像 28,098 画像	
吳大澂『十六金符齋印存』	
【備考】 「東京国立博物館情報アーカイブ」 (http://webarchives.tnm.jp/archives/) において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として平成 22 年 10 月から公開。	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 表紙、見返し、裏表紙、序文、跋文等の撮影も行い、装丁の状態や、文字データが確認できるよう、撮影に配慮した。						

2. 定量的評価

観点	データ作成 件数	公開画像数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定画像数 25,000 を超える 28,098 画像の撮影とデータ入力を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	6年計画で、撮影、データ入力は順調に進んでいる。 23年度もこのペースを維持しつつ、撮影をすすめ、あわせて諸データの充実をはかり、より完備されたデータベースとして公開したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金）（(5)-①-iii）		
【事業概要】 本調査研究は隋唐時代の舎利荘厳に注目し、その実際を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が詳細に調査し、総合的に考察を加えようとするもので、本年度は山東省、河北省、山西省、陝西省において現地調査を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課 和田浩
【スタッフ】 松本伸之（学芸企画部長）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）、東野治之（奈良大学）、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、泉武夫（東北大学）、長岡龍作（東北大学）			
【主な成果】 中国山東省、河北省、山西省、陝西省において現地調査を行い、仁寿舎利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。			
【年度実績概要】 1. 文献収集 中国側研究者と協力し、中国国内でこれまでに発表、出版された、仁寿舎利塔起塔寺院跡から出土した遺物の報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査地点の絞込み、現地との連絡調整、旅程の決定を行った。 2. 現地調査の実施 2010年8月に中国側研究協力者の協力のもと、中国山東省、河北省、山西省、陝西省において18日間に及ぶ現地調査を実施した。これにより現地における①仁寿舎利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舎利塔出土遺物と隋代関連遺物、③関連岳廟、等に関する詳細なデータを収集することができた。 3. 国内関連調査の実施 2011年3月に東京国立博物館所蔵の関連遺物（舎利容器）の調査および、奈良県、京都府、岐阜県において国内関連遺跡及び遺物の調査を行なった。			
			
舎利石函出土地の調査（2010. 8. 11 山東省）			
【実績値】 仁寿舎利塔起塔寺院に関する地理的データ 27 点、記録画像 13, 000 枚、収集資料（青州勝福寺遺物仁寿元年舎利塔下銘拓本）1 点、調査時の調書記録 5 冊 156 枚			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が中国山東省、河北省、山西省、陝西省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集した。これにより、中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察をくわえる基礎が構築された。						

2. 定量的評価

観点	収集情報数					
判定	A					
備考 今年度は特に実資料を調査する機会に恵まれた。また、多くの制約が存在する中で地理的データが相当数収集できた成果は大きいと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、中国山東省、河北省、山西省、陝西省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集することができた。集積された基礎的データは従来にない重要な新知見を数多く含んだものである。本年度の調査により次年度以降の現地調査が着実に実施される基礎が確立されたので、次年度以降の調査による基礎データが集積されれば各分野の研究発表及び研究論文が成果と数多くなされるものと確信している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳の実際について、現地調査や研究会等を通じて、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学的見地からのデータ収集を当初計画の通り進めることができた。本年度の成果を受け、次年度以降も、中国現地調査及び国内関連調査による基礎資料の収集とそれにもとづいた研究のとりまとめを進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査および研究の推進		
プロジェクト名称	29) 前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合（科学研究費補助金）((5)-①-iii)		
【事業概要】 本研究は日本列島の国家形成期にあたる古墳時代について、中央から遠く離れた「周縁地域」が中央の意思決定にどのように対応し、どのようなプロセスを経て国家段階の社会に進化したかを、常陸を具体例としてモデルとして提示することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課 日高慎
【スタッフ】 佐々木憲一（明治大学教授）、田中裕（茨城大学准教授）、倉林眞砂斗（城西国際大学教授）、日高慎（保存修復課保存修復室主任研究員）			
【主な成果】 茨城県かすみがうら市折越十日塚古墳（前方後円墳）の測量調査および横穴式石室の実測調査を行い、詳細な実測図を作成した。 また、3月に茨城県小美玉市塚山古墳（円墳）の発掘調査をおこない、墳丘の確認および埴輪の詳細を調査した。			
【年度実績概要】 1. 現地調査の実施 2010年9月にかすみがうら市折越十日塚古墳の測量調査および横穴式石室の実測調査をおこなった。茨城県かすみがうら市折越十日塚古墳は、以前から列島最後の前方後円墳の一つとして注目されてきたものである。しかしながら、測量図も石室実測図もないことから、今回測量調査および横穴式石室の実測調査をおこなった。この調査を通して、霞ヶ浦沿岸地域の前方後円墳の墳丘および内部主体の基礎的データを蓄積することができた。また2011年3月に茨城県小美玉市塚山古墳の発掘調査をおこない、墳丘の確認および埴輪の詳細を調査した。 2. 文献収集 関連する研究論文や報告書等を収集した。 3. 国内関連調査の実施 近畿や関東地方の関連する遺跡・遺物等の調査をおこない、常陸地域の首長墓との比較資料を蓄積することができた。			
【実績値】 基礎的情報の収集 3件 ・ 前方後円墳の測量 1件 ・ 実測調査 1件 ・ 円墳の発掘調査による確認調査 1件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 本年の調査により、常陸のなかでも霞ヶ浦沿岸地域の首長墓の墳丘測量図を整備できたことは、今後の古墳研究において中央と周縁地域を比較する基礎が築かれたといえる。						

2. 定量的評価

観点	基礎的情報数					
判定	A					
備考 本年は考古学研究の基礎的情報である、古墳の測量調査、石室の実測調査を予定通り実施することができた。これまで古墳の形状が未詳であったものを明らかにした点で極めて重要である。						

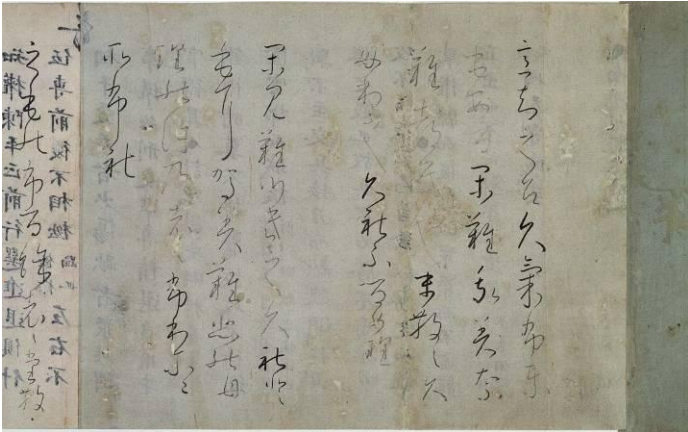
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで重要視されながら、形状が未詳であった古墳の測量図・石室実測図を作成することができた。この成果により、次年度以降に測量図・石室実測図の検討をおこなう。また、古墳時代中期の状況を知るため、茨城県小美玉市塚山古墳、石岡市舟塚山古墳の調査をおこなっていき、古墳時代を通した常陸の古墳の具体的様相を明らかにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の成果を踏まえ、次年度以降も継続的に常陸の古墳の測量調査、実測調査等をおこない、最終的な研究のとりまとめを進めていく。また、研究成果を研究会等により広く公開していくことも必要であり、次年度以降に進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	30) 古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
【事業概要】 紙文化財の修復技術に関して、用語・名称に着目して研究を行うものである。紙文化財の修復技術には様々な系統があり、それぞれの系統によって、手法・工程、道具、材料をはじめ、用語・名称が異なっていることがある。そこで、工程全体の流れ、手法・各工程の内容と名称、道具と材料の使用法や名称を調査して分類することにより、紙文化財および無形文化財である装こう(表具、表装、装丁)技術に対する理解をより深めることを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 プロジェクト代表者：加藤雅人(東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員)、川野邊 渉(東京文化財研究所保存修復科学センター副センター長)、稲葉政満(東京芸術大学美術学部教授)、半田正博(東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター教授)			
【主な成果】 東京国立博物館に収蔵されている古典籍を中心に、形態、料紙などについてデータを収集した。また、料紙の製作技法に関する成果の一部を、全国漢文教育学会の『新しい漢字漢文教育』第50号、および第51号において公開した。			
【年度実績概要】 調査対象とすべき作品を選定し、その装丁形態、使用している料紙の種類や材質などについて調査を実施した。デジタルカメラや顕微鏡を用い、細部にわたって記録撮影を行った。そのデータにもとづき、作品の構造や、過去の修理において施された手法・工程などを検討した。			
			
【実績値】 論文掲載 高橋裕次「漢籍善本紹介－東京国立博物館(2)－」、「同一(3)－」、『新しい漢字漢文教育』第50号、第51号(全国漢文教育学会、平成22年5月、11月) 調査回数 5回、調査件数 30件 収集資料 30件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-30

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 作品の構造を具体的に検討し、その手法・工程などを明らかにする点で成果があった。用語・名称などの情報の照合について作業を進める必要がある。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	調査件数	収集資料数		
判定	A	B	A	A		
備考 東京国立博物館には、古典籍がまとまっており、時代や種類なども多岐にわたっている。調査回数は5回で、作品30件について調書を作成し、所定の成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査において、光学機器の導入により、客観的なデータの収集を効率よく多く行うことが可能となり、研究を質量ともに向上させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査を継続的に行い、総合的に検討するために、内外の関連資料などの情報を収集していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	31) 彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用（科学研究費補助金）（(5)-①-iii）		
【事業概要】 芸術分野における立体表現として、アナログ的な造形彫刻の新しい表現研究に伴い、デジタルによる造形表現の可能性を相互反映し、その両面における可能性について探り、アーカイブとしてのデータベース研究活用と教育研究としての新しい芸術表現の獲得を目的とした基礎研究を行う。 今年度は特に、東京国立博物館所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鑄造を実施し、大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程について実証的な調査研究を実施する。また、その成果を教育研究に活用し、「触れる彫刻」の展覧会を開催し、最終年度の報告書をまとめる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
【スタッフ】 プロジェクト代表者 北郷悟（東京芸術大学副学長）、プロジェクト協力者 木戸修（東京芸術大学美術学部教授）、橋本明夫（東京芸術大学美術学部教授）			
【主な成果】 東京芸術大学美術館所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究ならびにコンピューター造形システムによる各入力プロセスの造形表現の研究を継続的に行ってきた。こうした研究におけるさまざまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。今年度は研究の最終年度として鑄造した原寸大ブロンズ像を用いて、2010年10月23日～12月5日までの間「明治の彫塑 ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催し、好評を得た。			
【年度実績概要】 ①東京芸術大学美術館等の所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究 ・東京国立博物館所蔵・荻原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鑄造を実施。これまで試みられたことのなかった大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程について実証的な調査研究を実施した。 ・東京国立博物館所蔵「女」石膏像と東京芸術大学美術館所蔵「女」石膏像の比較検討を行った。 ・東京国立近代美術館、礒山美術館、東京芸術大学が収蔵するブロンズ製「女」との比較検討を行い、彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成し、これを如何に教育的に利用すべきかを検討した。 ②①の成果をもとに、2010年10月23日～12月5日までの間「明治の彫塑 ラグーザと荻原守衛」展を東京芸術大学美術館にて開催した。			
【実績値】 調査回数 東京芸術大学等にて3回 研究発表・論文 公表に向けて準備中			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-31

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 本研究において作成したさまざまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。こうした研究は、その成果を展覧会の中に組み込むことなどで社会利用の可能性が増幅するとともに仮想空間の造形表現の展開と表現の可能性の広がりについても多面から期待されている。 3次元デジタルデータを用いたブロンズ鑄造の実施、それらをもとにした展覧会の実施など、当初の計画に従い所定の成果を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	C	B				
備考 彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成するとともに「触れる彫刻」の教育的利用のための調査を行った。 特別展を開催することによって、今回鑄造を行った作品と、東京国立近代美術館、芸大、礒山美術館などの既存のブロンズ像との比較を直接行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	彫刻研究のためのアーカイブとしての三次元高精細データの取得と解析出力による作品制作が良好に進展。こうした成果をもとに展覧会の中での「触覚展示」の可能性が大幅に広がったことは大いに評価される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は概ね研究計画にそったかたちで順調に進められたと考える。この研究成果をまとめ、特に教育的利用に関しての具体的な提案を行っていきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-32

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	32) アジアの木地螺鈿—その源流、正倉院宝物への道をたどる— (科学研究費補助金) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 本年度はインドにて現地調査を行った。インドは東方アジアとイスラム圏をつなぐ狭間の位置にあり独自様式の螺鈿制作が行われているが、その制作地や製作実態などについて調査すべき余地を多く残してきた。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課 猪熊兼樹
【スタッフ】 研究代表者：小林公治（九州国立博物館）、研究協力者：原田一敏（東京芸術大学教授）ほか			
【主な成果】 インド調査は現在螺鈿制作が比較的盛んにおこなわれているインド西北部、特にウダイプールの工房を中心に調査を行い、現代インドにおける螺鈿制作技術を中心とした情報が得られた。			
【年度実績概要】 正倉院宝物として残されている螺鈿器は技法的に木地螺鈿、漆地螺鈿、樹脂地螺鈿の三種に分類される。インドは東南アジアまでの東方アジアと西方アジアとをつなぐ接点でもあるが、その螺鈿技術についてはほぼ不明と言って良い。こうした状況のなか、今回調査を実施し、インドの螺鈿は、木地螺鈿と同じく象嵌技術を多用する技法と、樹脂地螺鈿のように貝文様を地に貼り付け、その段差を漆などの素材で埋めていく技法との2種が存在することを明らかにした。			
【実績値】 ○調査回数 インド1回 ○収集資料数 15件 記録画像CD 1枚、貝片14枚 ○調査概報 1部			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-32

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 従来の研究ではほとんど行われていない視点から研究を実施できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	A			
備考 調査対象者との関係から、収集資料を十分に収集できたとは言いが、それ以外については当初計画同等ないしはそれ以上の成果を上げることができた。						

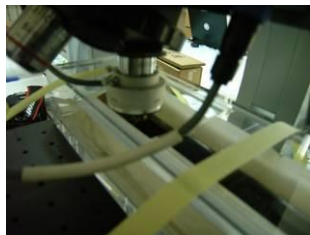
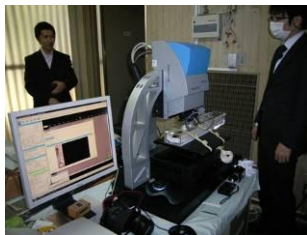
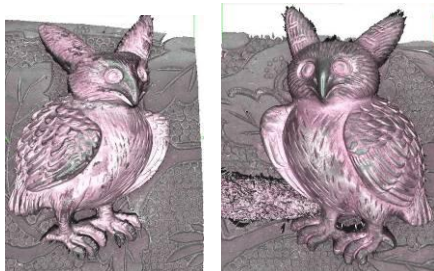
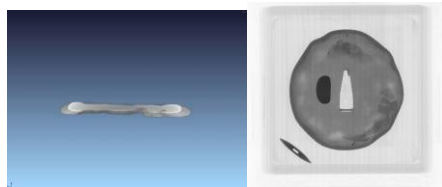
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にない新たな視点による調査成果を上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	21年度の中国調査や外国人研究者招聘、また今年度の調査などを通して順調に計画を達成している。こうした成果を受けて、最終年度となる23年度は木地螺鈿の調査を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	33)高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究（科学研究費補助金）（(5)-①-iii）		
【事業概要】 高精細3次元デジタル測定技術と復元作業に精通した職人の知識を融合させて、従来にない制度と視点を持って、主に刀剣と刀装具の工芸文化財復元を行う手法を開拓する研究（2年間）の2年目である。最新の高精細3次元デジタル測定技術を用いることで、これまでのように目視だけでは十分に分析できなかった技巧を解明して復元作業に活用することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課 河内晋平
【スタッフ】 佐藤雅彦（東京芸術大学教授）、桐山孝司（東京芸術大学准教授）、桂英史（東京芸術大学准教授）、河内晋平（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 本年度は、昨年度に試撮影にて使用したテックサイエンス社の Alicona 機を用いて奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の撮影、計測とデータ処理を行った。また、Tesco 社 X線 CT スキャン機器での刀身と刀装具（鐔）の撮影、計測、データ処理を行った。撮影計測結果とともに本研究で用いた治具の安全性と撮影精度、作業手順について、考察と再検証を行った。			
【年度実績概要】 1. 奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の計測撮影 昨年度開発した治具とテックサイエンス社 Alicona 機を使用して計測撮影を行い、その後撮影時の安全性についての考察を機器操作技術者とともに考察、検討した。 2. Tesco 社 X線 CT スキャン機器においては、刀と刀装具（鐔）の撮影を行い、制作した治具の安全性についての考察と検証を行った。 3. 計測データの処理、計測治具の改良点をふまえて治具の再設計を行った。			
		 春日大社での撮影	
【実績値】 計測撮影 テックサイエンス社 Alicona 機を使用して奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の計測撮影 取得データ：奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」の目釘金具の 3D データ、6 種類のデータ取得 Tesco 社 X線 CT スキャン機器においては、刀と刀装具（鐔）の計測撮影 取得データ：刀身内部の情報、刀装具（鐔）断面画像情報、正面 X線画像情報取得、4 種類×3 データ取得			
【備考】 取得データ画像			
 春日大社宝物測定 3D データ（1部）		 X線 CT 測定データ（1部）	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-33

自己点検評価調査書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 文化財撮影に関しての安全性を検討し奈良県春日大社御宝物「柏木菟腰刀」撮影、測定を行った。本研究で使用する機材での安全性を重視した治具製作の有効性が確認できた。また今後使用を検討する撮影機材においても有効に活用できる形状や性能について検討ができ継続性に期待ができる。実際に今年度の早い時期に撮影を実施できたことにより確認、修正すべき点がより詳細に明らかとなった。これらの情報の蓄積が研究を進める上で重要となるため、今後の発展性にも期待ができる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	情報収集				
判定	B	A				
備考 調査回数に関しては、Alicona 機、Tesco 社 X 線 CT スキャン機器での計測撮影で取得したデータについて、データ処理に有する時間が当初の予想より必要となった。目標とする文化財 3D 情報は取得し研究の目的は達成できたが、今後の研究に直接繋がるための発展版の撮影パターン実験まで進行できなかった。その他、処理した 3D データ、撮影手順についての考察を整理し、情報のアーカイブ、論文等の発表資料整理を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財デジタル測定機器での撮影について、撮影測定、データ処理、手順や治具の考察を行った。これらの結果により、今後はより汎用性を持った撮影治具、手順についての開発を引き続き行っていくことができる。今後は本年度の撮影測定手順の評価をもとに、より安全性を備えたその他の方法も念頭におきながら研究を発展させていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	デジタル測定機器に合わせた治具開発を実施し測定、撮影を行い、調査手順の検討が行えた。今後これらの結果をもとに、より多くの文化財での撮影を目標にして調査意義、方法についての意見交換を職人、学芸員、撮影技術者の方々と相談していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	34) 日本近世実景図研究((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する実景図を中心に、館外の実景図も視野に入れ、作品調査・実地調査・文献資料に基づき研究することにより、近世における実景表現の制作態度を明らかにする。日本絵画の実景表現を広く東アジアの中で捉えるため、中国絵画・朝鮮絵画も研究の対象とし、その影響関係を探る。特集陳列としての公開として寄与できる研究を目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課 大橋美織
【スタッフ】 大橋美織（調査研究課絵画彫刻室任期付研究員）			
【主な成果】 本年度は、主に東京国立博物館所蔵実景図作品を中心に検討・調査を行った。その結果、日本絵画だけでなく中国絵画・朝鮮絵画を含める東アジアを視野に入れた陳列案の提示を決定した。中でも韓国国立中央博物館研究官、イ・スミ氏の協力により朝鮮絵画の調査を行った成果は、特集陳列公開前に Museum にて報告を予定している。			
【年度実績概要】 1. 作品検討及び調査 東京国立博物館所蔵品のうち、特集陳列での公開意図に合った作品の選定及び調査を行った。また、関連する作品については、館外の作品も調査を依頼した（田辺市立美術館（脇村奨学会）、和歌山県立博物館、個人）。 2. 実地調査 実景の絵画化を検討するに際して、現地に足を運ぶ作業は不可欠である。現在の景観との比較により、作品の強調点や景物の再構成を指摘することも可能となる。陳列予定作品をもとに、描かれた場所（和歌山・韓国）への実地調査を行うとともに、特集陳列時のパネル制作を想定した写真撮影を行った。			
 北岳山（ソウル）からの眺望  耶馬溪図巻 部分（個人蔵）			
【実績値】 1. 作品調査（館外）：2回（和歌山、兵庫） （館内の作品調査は、業務の合間に幾度にもわけて行ったため、正確な回数を出すことは難しい。） 2. 実地調査：2回（和歌山、韓国〔ソウル〕）			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 「東アジアの中での日本」という視点は、美術史研究の上でも近年特に活発化している。その視点を取り入れ、かつ実際の風景を描いた作品という一般の人にも馴染みやすいテーマで特集陳列を組むことが、本研究の特徴といえる。東京国立博物館所蔵品の中でも、今まで陳列されることのなかった実景図作品を公開し、その位置付けを Museum 等で報告することにより、近世絵画史研究へ寄与することができる事業となると考えている。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	実地調査				
判定	B	A				
備考 当初予定していた九州への作品調査を行うことができなかったため、作品調査はBとした。しかし本事業は二年計画であるため、今年度の主な予定である基礎調査や実地調査は、概ね実行することができたと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は二年計画であるため、今年度は主に基礎調査に比重を置くことを予定していた。そのため、館内の実景図作品の選定・調査が順調に進んだことは望ましいことと考える。しかし、選定作品を陳列する上での関連作品の調査、実地調査を来年度に集中して行わねばならないため、より計画性を持って調査にあたる必要があるといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度の予定は順調に消化された。引き続き来年度の調査計画を立て、それに基づき資料紹介や論文執筆を進める予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査		
【事業概要】 京都を中心とした近畿地方の社寺のうち、文化財を多数保有している社寺をとりあげて、所蔵文化財の悉皆調査を行う。調査に際しては、各分野の専門研究員が極力、同時に参加し、相互に情報・意見を交換しながら、調書の作成・写真撮影を行い、当該社寺保有の文化財に関する基礎情報の蓄積に努める。 今年度は京都府南部の木津川市域に所在する岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺の三箇寺の文化財調査を行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	考古室長 宮川禎一
【スタッフ】 西上実(学芸部長)、赤尾栄慶(上席研究員)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、久保智康(企画室長)、山下善也(連携協力室長)、浅湫毅(主任研究員)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、大原嘉豊(研究員)、羽田聡(研究員)、呉 孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)、比嘉飛鳥(列品管理室技術職員)			
【主な成果】 対象寺院は有名であり、過去に複数機関による文化財調査が実施されている。しかしそれぞれに新たな文化財の発見や未調査文化財が見つかった。その点で成果はあった。 岩船寺では未調査の金工品・陶磁器・古瓦・仏画などに見るべきものがあった。 浄瑠璃寺では本坊大日如来像の詳細な調査および工芸作品の詳細な調査を行うことができた。 海住山寺では桃山時代の屏風などに新出資料が発見された。また仏像・陶磁器・漆工芸品などに見るべき作品があり、調書をとることができた。			
【年度実績概要】 事前に調査対象寺院である岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺へ伺って調査方法などの打ち合わせを行った。 平成23年2月7日（月）に岩船寺で本調査を行った。 平成23年2月8・9日（火・水）に浄瑠璃寺で本調査を行った。 平成23年2月14～16日（月～水）に海住山寺で本調査を行った。 平成23年末の刊行予定で、長岡京市光明寺（平成21年度調査分）の文化財調査の報告書を準備している。			
【実績値】 調査日数 のべ6日間 調書作成件数 約300件（整理中）			
【備考】 この調査報告書は、平成23年末に刊行を予定。 海住山寺については一部分野（金工・絵画）の調査を完了できなかったため、平成23年度前半中にも補足調査を実施する予定である。			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 この南山城地域の古寺伝来文化財の悉皆調査研究は将来、当館で開催する予定である「南山城の古寺」(仮称)に関する事前調査の意味も含むものである。引き続き行われる個別寺院の調査成果を合わせ、将来的に展覧会という形で社会に還元できるものである点は意義が高い。この南山城地域の寺院は奈良と京都の中間に位置し、独特の仏教文化を開花させている。京都府内であるが奈良の影響もまた大きいのである。このような観点での調査ですでにいくつかの独特な作品が見いだされてもおり、その発展性は高い。さらに京都国立博物館から1時間余という距離はその調査のアクセスを容易にしている。京都国立博物館が調査することで継続性も高い。さらに年度各に調査報告書を刊行しており、情報の公開も進展している。今年度調査の岩船寺・浄瑠璃寺・海住山寺については来年度の刊行を予定している。なお地元の各寺院もこの調査に積極的に協力いただいている。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査件数				
判定	A	A				
備考 いずれも山間部の寺院ということで、交通の事はやや不便であったが、調査対象となる文化財・作品の分量を勘案し、岩船寺1日間、浄瑠璃寺2日間、海住山寺3日間の調査時間を取った。その結果、ほぼ所期の調査対象作品の調査を終えることが出来た。 調査件数約300件は昨年度の西山光明寺の調査件数とほぼ同数であり、日数的にもほぼ順当な調査件数であると思えることができる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会が目白押しのなか、2月という極寒期の調査であったが、調査対象を拝見し、調書を取り、撮影を行うことが出来たのは所期の目的をほぼ達成したと考える。 今後は次年度において整理作業・報告書の刊行作業を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	京都を中心とする社寺伝来の文化財の調査は京都国立博物館の長い伝統のある調査である。引き続き、その調査の質を落とさないようにすることが必要である。この南山城地域の寺院文化財の調査は次年度においても対称寺院を代えて行っていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 鎌倉仏教とその造形に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。 報告書の刊行、シンポジウム(研究座談会)の開催により、成果を公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、羽田 聡(研究員)、浅湊 毅(主任研究員)、久保智康(企画室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、中村 康(文化財管理監)、村上 隆(保存修理指導室長)、呉 孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 仏教美術研究上野記念財団の助成によって、鎌倉仏教に関する資料の調査・撮影を実施し、『図像蒐成XⅡ』を刊行した。			
【年度実績概要】 鎌倉仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する中で、源空(法然)の弟子である証空らが中心となって仁治四年(1243)に造立されたと考えられる「阿弥陀如来立像」(重文、京都・大念寺蔵)の像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。また、源空(法然)の『選択集』を厳しく批判した明恵の『摧邪輪』三卷(重文、京都・仁和寺蔵)の書誌学的調査を実施し、今後の資料とするために全巻のデジタル撮影を行った。 図像資料の収集、整備としては、「曼荼羅集 経弁本」(京都国立博物館蔵)の翻刻を行い、解題も付して翻刻付き図版集として刊行した。			
【実績値】 ○調査 2件 ・重文「阿弥陀如来立像」(京都・大念寺蔵)の仁治四年(1243)の紀年がある像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。 ・明恵が著した『摧邪輪』三卷(重文、京都・仁和寺蔵)の調査と全巻の撮影を実施した。 ○撮影 2件 ・重文「阿弥陀如来立像」(京都・大念寺蔵)の仁治四年(1243)の紀年がある像内納入品の全点を調査し、撮影を行った。 ・明恵が著した『摧邪輪』三卷(重文、京都・仁和寺蔵)の調査と全巻の撮影を実施した。 ○刊行 1件 『図像蒐成XⅡ』として「曼荼羅集 経弁本」(京都国立博物館蔵)の解題・翻刻付きの図版集を刊行した。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 鎌倉仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集している。これらの成果は、平成23年3月26日（土）から開催される、特別展覧会「法然—生涯と美術—」の展示に活用される。『図像蒐成』の刊行は、持続性のある活動であり、仏教美術分野のみならず、宗教史など幅広い分野から注目されている。						

2. 定量的評価

観点	調査	撮影	刊行			
判定	A	A	A			
備考 調査と撮影を、各々2件ずつ行い、『図像蒐成』の刊行も行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業「鎌倉仏教とその造形に関する調査研究」の第2年度として、本研究成果を早速、平成23年3月からの特別展覧会「法然—生涯と美術—」に反映することができ、また来年度の会期中に研究発表・座談会を開催する運びとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究資料を広く公開することで、仏教美術研究の発展に資することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金（5）-①-ii）		
【事業概要】 先史時代より明治時代に至るまでの、樹木を素材・主題とした美術工芸遺品を通じて、従来蓄積されてきた歴史学の諸成果をフィードバックしながら、日本の木の文化を、他の東アジア諸国との比較史的視座を援用しつつ、跡づけることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長 佐々木 丞平
【スタッフ】 西上実（学芸部長）、若杉準治（列品管理室長）、山本英男（美術室長）、山下善也（連携協力室長）、大原嘉豊（研究員）、赤尾栄慶（上席研究員）、羽田聡（研究員）、浅湊毅（主任研究員）、中村康（文化財管理監）、久保智康（工芸室長）、尾野善裕（主任研究員）、山川暁（主任研究員）、永島明子（主任研究員）、宮川禎一（考古室長）、村上隆（保存修理指導室長）、呉孟晋（研究員）、水谷亜希（アソシエート・フェロー）			
【主な成果】 平成21年度に補足調査を行なった静岡建徳寺本尊の観音像についての論考を当館発行の『学叢』第32号（平成22年5月発行）に発表した。また、建徳寺で行なった調査の結果にもとづく展覧会が静岡市のフェルケール博物館で開催され（平成22年4月）、展示作業および図録作成、講演会等に全面的に協力した。また4年間にわたる研究調査の成果を集成した報告書を二篇（考察編と調査報告編）発行した（平成22年12月・23年3月）。			
【年度実績概要】 事業4年度（最終年度）の本年は、昨年度までの調査地の補足調査を行なうとともに、四年間の調査研究成果の集成として調査報告書の発行を行なった。 具体的な調査事例としては、初年度に購入したファイバースコープを援用することにより静岡建徳寺の千手観音像の像内より、室町時代の鎌倉仏師長勤の銘文を発見し、本像が長勤の現存する作例としては最晩年のもので、関東以外で造立された唯一の作品であることが判明した。 社寺における組織的な調査としては、浜松市の黄檗寺院で補足調査を行なった。本館の調査の結果、同市宝林寺の本堂安置像が黄檗宗初期の事例として貴重であることが再確認され、次年度に静岡県指定文化財となる運びである。 これと平行して、各研究分担者は、自事業目的にそって個人研究を遂行した。たとえば、二年度に予備調査を行なった島根県出雲市の大寺薬師において本調査を行ない、これまで紹介されてこなかった彫像群が平安時代に遡るものであることが確認された。その成果は、平成24年に当館で開催する予定の『出雲大社展（仮称）』において公表する予定である。 過去の社寺調査データの整理としては、昨年度に続き、これまで京都国立博物館が収集してきた京都社寺の所蔵品に関するデータの再整理および、昨年度あらたに調査で得られたデータを、事業目的に即して順次データベース化していった。			
【実績値】 調査実績データベース化 2000点 補足調査 国内2件（浜松市宝林寺・出雲市大寺薬師） 個人研究出張調査 国内1件（東京・三井記念美術館） 科研調査による成果の公表 刊行物6件 口頭発表3件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	A	A	A	
備考 適時性については博物館事業における公開性及び緊張性を増す環境問題と絡む点、独創性・発展性については適時性での理由をもとにした人文系では先駆的综合研究である点、効率性に関しては各研究分担者の本務である博物館事業が多忙を極める中で効率的に調査しその成果を好評したという点、正確性についてはデータの収集という点からみて、それぞれ評価を下した。また、発展性は、本科研により各地の社寺および博物館と良好な関係が構築されたことは、当館が調査研究および展覧会を行なう上で今後の発展継承が期待されるという観点から判断した。						

2. 定量的評価

観点	調査実績 データベース化	調査機材整備	研究分担者による 個人研究（出張調査）	成果公表		
判定	A	A	A	S		
備考 4年間にわたる事業全般として、目標は概ね達成されている。 機材整備の面では、初年度に購入したファイバースコープは極めて有用であり、本年度も1件の新規銘文を仏像の像内より発見した。今後にも有効に活用できるものと考えられる。 成果公表の点では予定していた報告書の刊行に加えて、当館が刊行する『学叢』32号に二篇の論考（浅湫・永島）を発表し、フェルケール博物館での展覧会に際しては図録の発行および講演を浅湫が行った。また、出雲市で開催されたシンポジウム「神々の姿の変遷」において浅湫が「神像とは何か」と題して発表するなど、成果の速やかかつ活発な公表が行われた点を考慮し判断した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第4年度（最終年度）にあたる22年度は、前年度までの調査によって得られた成果を基に、その補足をする方向で、発展的調査を行なった。それとともに、最終年度として、これまでの調査結果をまとめることを目的とする調査研究も行なった。その目標はほぼ達成されたが、博物館業務の多様化にともなう時間的制約のある中で、上記の通りの成果をあげることができた。また、本科研の調査成果は平成24年度に開催する予定の『出雲大社展（仮称）』などで発表するとともに、さらにあらたな形で調査を継続していきたいと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全研究職員を研究分担者とする競争的資金の導入によって、館全体の研究を活性化している点で意義が深い。 成果公表の点では、極めて速やかかつ活発な公表が行われたのは上述のとおりである。その公表が、専門家向けの論文のみではなく、一般の人々を対象とした展覧会やシンポジウムで行われたということは、科研による研究成果を広く一般に公開するという点でも、極めて意義深いことと考えられる。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究(科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類を順次調査し、それらの調書を作成し、それらの目録を作成する(科学研究費)。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 (当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田 聡(研究員)、西上 実(学芸部長)、山本英男(美術室長) (外部研究者)興膳 宏、米谷 均、山城喜憲、藤本幸夫、井上 進、川本慎自、堀川貴司、宇都宮啓吾、梶浦晋、金 文京、柳田征司、住吉朋彦			
【主な成果】 5月、7月、10月と都合3回の調査を実施し、全体180箱のうち、第161箱から第180箱までの調査を終了した。2月に最終的な研究打ち合わせ会を実施し、報告書刊行の準備を行い、度末には報告書を刊行する。			
【年度実績概要】 全体180箱のうち、第161箱から第180箱までの調査を実施し、各々の箱に納められている書跡・典籍類に関して、一冊ごとにその書名・法量・装訂・外題・首題・尾題・版式・行数・訓点・奥書・刊記などの書誌学的調査と内容に関する調査を実施し、それぞれを調書に記入した。 それらの調査内容を入力し、報告書刊行の準備を行い、年度末に報告書を刊行し、最終年度のまとめを行った。			
【実績値】 全体180箱のうち、第161箱から第180箱までの20箱についての調査をし、調書を作成した。年度末には報告書を刊行する。 ○調査回数 3回 ○調査箱数 全180箱中20箱 ○研究打合せ 1回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 各方面から、蔵書目録の作成が望まれている状況にある。						

2. 定量的評価

観点	終了箱数	調査回数				
判定	A	A				
備考 20箱の調査を終了し、予定している全体の調査を無事に終了した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業のうち、最終年度である第4年度の事業計画について達成し、全体の予定を完了した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年次計画を予定通り実施し、4カ年継続の調査を計画通りに行った。報告書も刊行した。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((5)-①-v)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 村上隆
【スタッフ】 浅湫毅(主任研究員)、伊東史朗(調査員)			
【主な成果】 平成22年度に新規搬入された作品の「修理計画書(設計書)」にもとづき、データを入力し、平成20年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書(報告書)」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成17年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第6号に掲載し、修理時に発見された銘文12件を「銘文集成」として報告した。 また、平成18年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第7号に掲載し、修理時に発見された銘文6件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報(作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など)を収集し、分析を行なった。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第6号に掲載する平成17年度修理作品のデータと第7号に掲載する平成18年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解説作業を行なった。 また、これらの業務に調査員伊東史朗氏の協力を得た。			
【実績値】 ○データ収集件数 22年度は106件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、データベースへの登録を行なった。 ○データ追加更新件数 過去のデータに関して2227回追加、更新を行なった。 ○調査回数 修理所の巡回を12回行なった。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行なった。 ○報告書 22年12月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第6号(17年度分)を発行した。 23年3月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第7号(18年度分)を発行した。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行い、データ収集に努めた。 制作年や制作者など、文化財の制作時に関わる情報は、解体修理の折に発見されることがほとんどであり、作品を多角的に評価する上での基準となりえる。ここで得た情報を「銘文集成」として記録にとどめる意義は大きいといえよう。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数	調査回数	報告書	
判定	A	A	A	A	
備考 修理に関するデータの蓄積は順調であり、今年度は『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第6号と『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第7号の2冊を完成した。これにより、これまで滞っていた情報公開のスピードを速めることができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行なわれる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	22年度に収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながらさらなる情報の収集をはかりたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 文化財の保存・修復に関する調査研究(奈良文化財研究所との共同研究) (5)－①－vi)		
【事業概要】 奈良文化財研究所が保有するさまざまな科学分析装置を用いて、特に金属製文化財を中心にした材質と製作技術の調査を行う。また、その成果を踏まえた保存処理法の開発と実践を実施する。独法内の既存施設を横断的に活用することにより、効率的な調査研究の推進を図ることも視野に入れている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 村上 隆
【スタッフ】 高妻洋成(奈良文化財研究所) 難波洋三(")			
【主な成果】 長野県中野市柳沢遺跡出土の銅鐸と銅戈の材質分析から、銅鐸や銅戈のタイプ別に成分の配合比が変化していることが明らかになった。これはこれまで蓄積されてきた古代青銅器の考古学的見解を科学的に検証する意味でも重要な成果である。			
【年度実績概要】 長野県中野市柳沢遺跡から出土した銅鐸は計5個、銅戈は8本である。本年度は、このうち、銅鐸2個の成分分析と保存処理を行った。また、銅戈5本に対して、成分分析と保存処理を行った。また、同時に将来実施予定の鉛同位体比分析に備えて、分析試料のサンプリングを行った。			
【実績値】 調査件数：7個 収集資料数：7件 調査概報：1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考 東日本において銅鐸と銅戈が同時に出土するという大発見に対して、最新の科学的調査と保存処理をタイミング良く実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	B			
備考 本年度は調査途中であるため、公開できる情報を蓄積している段階である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	弥生時代を代表する銅鐸や銅戈の正確な分析はこれまでにほとんど行われてきていない。本調査研究は、歴史的金属製品の材質研究の専門家が考古学者とともに協議し、様々な観点から多角的な調査を行うことが特徴である。古代青銅器研究の基準となる研究と位置付けられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	独法内の機関が、相互の特徴を生かした共同研究を行うことは、相互の活性化のためにたいへん重要である。ただ、作品を移動させなくてはならないというリスクを伴うため、実際に実施できる研究内容に制約を伴う。今後とも、少しずつでも事例を増やしていくことを考えている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 近世絵画に関する調査研究 ((5)-①-iv)		
【事業概要】 京都文化の一端を明らかにすることを目的として、客員研究員である大阪大学教授奥平俊六氏に、京都を中心とした風俗画研究、近世絵画に関する作家研究、作品研究、とくに狩野山楽・山雪をはじめとする京狩野の研究の実施を依頼した。「狩野山楽・山雪展」等、開催を予定している展覧会の助言を依頼し、当館連携協力室長と協力して展覧会に関わる研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 山下 善也
【スタッフ】 山下善也（連携協力室長）、奥平俊六（客員研究員）			
【主な成果】 京都を中心とした風俗画研究、近世絵画に関する作家研究、作品研究については、着々と研究が進んでいる。 「狩野山楽・山雪展」（平成 24 年度）等について、当館連携協力室長に、作品情報をはじめ、さまざまな助言を行った。近世絵画の寄託品について、当館連携協力室長に、調査助言を行った。			
【年度実績概要】 奥平俊六客員研究員の洛中洛外図、風俗画をはじめとする近世絵画研究は年々深化しているが、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値がいつそう高まってきている。とともに、客員研究員から当館近世絵画担当研究員への適切な指導・助言が連携協力室長の調査研究の諸活動に対して実に大きな刺激と力を与えていることは、特筆される。さらに、同客員研究員および近世絵画担当研究員の著作活動をつうじて、一般の人々の京都文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めている。			
【実績値】 調査回数 12 回 収集資料数 150 点 調査概報 2 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-07

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「狩野山楽・山雪」展（平成24年度3～4月）の準備は順調に進んでおり、その進捗に客員研究員の助言等が大きな役割を果たしている。 近世絵画寄託品・館蔵品の調査研究は、順調に進んでおり、客員研究員の助言等が大きな役割を果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	客員研究員の京都国立博物館の諸活動に対する指導・助言等及び近世絵画担当研究員と同客員研究員との協力により、近世絵画に関する調査研究は順調に進んでいる。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-8

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 訓点資料としての典籍に関する調査研究((5) - ① - ii)		
【事業概要】 訓点資料のうち、平安時代の古写経や漢籍に付された訓点に関する調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 (当館研究者) 赤尾栄慶(上席研究員)、羽田 聡(研究員) (客員研究員) 宇都宮啓吾			
【主な成果】 貞観十九年(877)に一校され、元慶(879)に再校して科点を加えた『華嚴経』六卷(重美、本館蔵)の白書を調査した結果、注釈書である『華嚴経探玄記』からの引用であることが確認された。また、永保二年(1082)五月の加點奥書がある『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』(重文、本館蔵)について、その朱書の仮名や朱点を調査した。			
【年度実績概要】 古写経の訓点を中心とし、平安時代の訓点の調査研究を実施し、貞観十九年(877)に一校し、元慶(879)に再校して科点を加えた『華嚴経』六卷(重美、本館蔵)の白書を調査と永保二年(1082)五月の加點奥書がある『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』(重文、本館蔵)について、その朱書の仮名や朱点を調査した。 これと関連して、中国・南宋時代の版本で、高山寺旧蔵の『清凉国師礼讃文』(本館蔵)を調査し、角筆点を確認した。日中間相互の関連については、今後の検討が必要となっている。 また、韓国の口訣学会の研究者とは、7月と2月の2回にわたって交流を行い、意見交換を行った。			
【実績値】 ○調査 10回 ○国際交流 2回(7月、2月)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 平安時代の古写経の訓点に関して、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究は、非常に有益であり、関連する資料を使つての調査は、当館の客員研究員にふさわしい内容である。						

2. 定量的評価

観点	調査	国際交流				
判定	A	A				
備考 基本的に毎月1回の調査日を設定し、調査及び意見交換会を実施している。 韓国の口訣学会の研究者と2回にわたる意見交換を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代の古写経の訓点に関して、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究は、非常に有益であり、訓点語学会を中心とした研究者から注目を集めている。韓国・口訣学会との交流をさらに深めていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館蔵品の訓点資料を順次、調査し、日本・韓半島・中国という漢字文化圏を視野に入れた研究へと発展している。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-9

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 彫刻に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 当館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 浅湊 毅
【スタッフ】 井上一稔（客員研究員）			
【主な成果】 特別展覧会「法然」展出品作品に関して研究を進め、その成果を同展目録に作品解説として発表した。また、平成21年度に科研による調査を行なった、静岡県建徳寺の仏像についての考察を、当館発行の学叢第32号に執筆した。			
【年度実績概要】 当館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。 社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行なった。 上記調査作品の関連文献、史料の収集および研究を行なった。その成果に基づき島根県主催のシンポジウム「神々の姿の変遷」において、「神像とは何か」と題して口頭発表を行なった。 これらの調査に際し、客員研究員の井上一稔氏の協力を得た。 過去の研究データに基づき特別展覧会の作品選定、展示、解説執筆を行なった。			
【実績値】 [展覧会展示企画および図録執筆] 3件 フェルケール博物館で開催の『建徳寺の仏像』展において図録執筆、講演、展示協力を行なった。これは科学研究費補助金『日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察』による成果の公表として行なったものである。 特別展覧会『永青文庫の至宝』展の開催（本館では次年度に巡回）の開催にあたり、図録に概説、作品解説の執筆を行なった。 特別展覧会『法然』展の開催にあたり、図録に作品解説の執筆を行なった。 [展覧会準備] 2件 将来の特別展準備のための調査を島根県立古代出雲歴史博物館において行なった。 次年度開催の『細川家の至宝』展準備のための調査と打ち合わせを永青文庫において行なった [調査] 3件 長岡京市の勝龍寺において彫刻作品2件の調査を大阪大学と共同で行なった。 科研による調査を静岡県浜松市の宝林寺、島根県出雲市の大寺薬師において行なった。 社寺調査を南山城の岩船寺、浄瑠璃寺、海住山寺でおこなった。 [論文等] 4件 「宝慶寺から請来された石仏群」『永青文庫の至宝』展覧会図録 「まぼろしのおおでら建徳寺の仏たち」『建徳寺の仏像』展覧会図録 「静岡・建徳寺の観音菩薩立像 仏師長勤作」『学叢』32号 「神像とは何か」『神々の姿の変遷』シンポジウム資料集 [口頭発表等] 4件 「建徳寺の仏たち」フェルケール博物館 「三十三間堂の諸仏」『シンポジウム 美を伝える』 「神像とは何か」『シンポジウム 神々の姿の変遷』 「アンコール期石造彫刻の編年に関する一試案」東南アジア学会・東南アジア考古学会合同例会			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会の作品展示および、図録、解説等により公開できた。また、次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	論文数	口頭発表	調査			
判定	S	S	A			
備考 科研その他で、彫刻作品に関して計画的に調査を行い、その成果を報告書、展覧会図録および口頭による発表等に、速やかにかつ活発に反映させることができた。具体的な件数に関しては【実績値】の欄に記したとおり。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。引き続き特別展覧会等で成果を公開したい。 一方、平常展示館が長期閉館することにより、平常展示においてこれまで行ってきた成果の公開が当面できなくなったが、報告書、論文等それにかわる成果公開を従来にまして行ってきた。次年度以降も継続したい。また、今年度は科研の調査成果に関して報告書を執筆・編集するとともに、口頭による成果の発表も行なった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的に、順次彫刻作品に関する情報は、順調に収集されている。 これらの調査において客員の井上一稔氏ほかの彫刻研究者と随時協力して行っており、今後も各研究者と協力して事業の継続を行ない、研究の充実を目指したい。 本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-10

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 日本国内で伝世・出土した陶磁器について総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、近い将来に予定されている特別展覧会（平成25年度『(仮) 清朝陶磁』）出品作品の候補選定を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 谷口愛子（調査員・京都工芸繊維大学准教授）・橘倫子（調査研究支援ボランティア・茶道資料館学芸員） ・梶山博史（調査研究支援ボランティア・兵庫陶芸美術館学芸員）・森下愛子（調査研究支援ボランティア・泉屋博古館分館職員）			
【主な成果】 当館で所蔵している仁清御室窯跡出土陶片について、平成22年度からの継続事業（西田記念東洋陶磁史研究助成事業）として行っていた実測図作成作業を引き続き実施し、130点の図化を完了した。そのほかに、泉屋博古館分館（東京）・板橋区立郷土資料館（東京）・野崎家塩業歴史館（岡山）にて伝世古陶磁、東京大学埋蔵文化財調査室・新宿区教育委員会にて出土品の調査を行い、400件あまりの調書を作成した。			
【年度実績概要】 所蔵陶磁の悉皆調査を依頼されている野崎家塩業歴史館の所蔵品調査をのべ8日、その他の施設については各1日の調査を実施し、デジタルカメラでの資料写真撮影と共に、調書の作成を行った。最も力を割いた野崎家塩業歴史館での調査は、これまで調査の手が及んでいなかった膨大な資料群の情報化に主眼があり、それ自体は必ずしも研究として独創性をもつものではないが、文化財の保護・調査・研究上必要不可欠な基本情報の整備として行っている。泉屋博古館分館（東京）・板橋区立郷土資料館（東京）・東京大学埋蔵文化財調査室・新宿区教育委員会では、平成25年度に開催予定の特別展覧会『(仮) 清朝陶磁』に向けての予備調査も兼ねて、中国清朝陶磁やその影響を受けたと考えられる日本陶磁中心に調査を行い、従来指摘されている以上に両者の関係が密接であることを確認した。 昨年度からの継続事業である館蔵の仁清御室窯跡出土陶片図化については、納品された実測図の点検を行うと共に、調書の作成を行った。また、特別展覧会『(仮) 清朝陶磁』に向けての予備調査も兼ねて、館蔵品・寄託品についても39件について改めて調書の作成を実施した。			
【実績値】 調査日数（館外） のべ12日 調書作成件数 454件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	B	A	A
備考						
大きく力を割いた野崎家塩業歴史館の所蔵品調査は、今後の調査・研究のための基礎情報の整備が中心である以上、そもそも際立った独創性が求められるものではなく、遠隔地（岡山）での調査であるがゆえに、移動などに要する時間も少なからず必要であり、京都近郊での調査と較べて効率性はどうしても低くならざるをえない（昨年は2日で155件、一昨年は5日で261件）。しかし、既に300件の調書作成を終えており、第一次分として予定している約1300件の悉皆調査に向けての展望は明るい。						

2. 定量的評価

観点	調書作成件数	調査日数	成果公表			
判定	A	A	C			
備考						
昨年はわずか2日、一昨年でも5日しか確保できなかった館外調査日数が、のべ12日も確保できたことは喜ばしく、450件あまりという調書作成件数也大いに満足できるが、事業責任者である尾野が特別展覧会（『高僧と袈裟』展）の副担当を兼ねていたこともあって時間をとれず、証書を作成はしたもの、爾後の資料整理がほとんど手付かずになっていることが大きな悩みである。 また、他の用務に追われて、研究成果としては過年度の研究成果を口頭発表する機会を1回持ったのみで、蓄積した情報を基にした研究成果の公表がほとんどできていないことは、無闇に短期的成果を求めるべきではないとはいえ、対外的な説明の上ではいささか苦しいものがある。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究成果公表の面ではいささか物足りないかもしれないが、本来の目的である調査（情報の蓄積）自体は着実に進んでおり、調査・研究では短期的成果ばかりを追求すべきではない、という観点からAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	調査自体は着実にすすんでおり、本年度だけの評価であれば十分にAと評価できるが、報告書の作成や特別展覧会の開催など、最終的な成果公表を視野に入れるならば、資料整理が遅れていることは些細な問題とはいえないため、「ほぼ順調」と評価する。資料整理を進めることが、来年度以降の大きな課題であるが、法人化後各種業務が繁忙化している中で、飛躍的に状況が改善される見通しは決して明るくない。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-11

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 近代建築に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 重要文化財・旧帝国京都博物館建築資料を調査研究し、その成果に基づいた図版目録を発行する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	文化財管理監 中村 康
【スタッフ】 中村 康（文化財管理監） 登谷伸宏（調査員）			
【主な成果】 これまでの調査の成果を踏まえて基本的な図面を比較検討するとともに、建築自体の調査を行い、並行して工事が施工された帝国奈良博物館の建築資料と宮内庁に所蔵される帝国京都・奈良博物館工事録、さらには設計の参考とされた近世以前の建築を調査し、美術としての建築の形成過程とその原状とを総合的に明らかにした。			
【年度実績概要】 建築図面の内、基本的な構造と意匠の設計に関わる平面図・立面図・断面図・矩計図、詳細図等を比較検討し、設計と建築の実際の形成過程を明らかにした。 躯体外壁の花崗岩と凝灰岩による石造部分、地下の遣方・地業・基礎・レンガ積について建築資料と対照した調査を行い、その原状と伝統的な技法・技術についての知見を得た。 奈良国立博物館所蔵の旧帝国奈良博物館建築資料と宮内庁書陵部に所蔵される内匠寮の京都・奈良博物館新築工事録を閲覧し、設計と工事の進行形成の過程と制作に関わる人と組織についての知見を得た。 東寺の講堂および金堂、平等院鳳凰堂、二条城書院を調査して、外観意匠と室内構成を設計する上の参考とされた建築遺品とそれが及ぼした影響を解明した。			
【実績値】 調査回数 39回 調査件数 10件 調査建築図面数 134枚			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 適時性：美術の優れた鑑賞空間でありそれ自体卓越した美術建築である京都国立博物館本館についての関心の高まりに応える研究である。 独創性：建築図面が美術制作と建築造営に果たした重要な役割を明らかにした。 発展性：建築資料の創造的、芸術的意義を究明する新しい研究分野を開拓した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査件数	調査図面数			
判定	A	S	A			
備考 当初予定した建築図面調査が達成できた上に、躯体壁石造部分の清掃・保存処置、免震工事計画に関わる埋蔵文化財調査を利用して建築構造についての精細な調査ができた。また旧帝国奈良博物館建築資料の閲覧も奈良国立博物館の調査と連携して効率的に進めることが出来た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	20年に及んだ建築資料調査を統括する調査研究ができた。次年度はその成果をまとめた図版目録を編集する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施 ((5)-①-ii)
【事業概要】 近隣社寺等へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）	
【主な成果】 奈良を中心とする諸社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを行った。	
【年度実績概要】 ① 「大遣唐使展」において史上初公開となった安祥寺十一面観音像の調査研究を前年度以来継続して行い、その成果は展覧会図録の論考、及び会期中に行われた国際学術シンポジウムにおける研究発表等に反映された。 ② なら仏像館（本館）における特別展「至宝の仏像」及び名品展「珠玉の仏たち」における東大寺法華堂金剛力士像の展示に際し、それ以前から同像について行ってきた調査研究の成果を、会場における解説・パネル及び『なら仏像館 名品図録』に反映させた。 ③ 平成14年以来取り組んできた東大寺戒壇堂四天王像・法華堂執金剛神像の構造・彩色等に関する調査研究の成果をとりまとめた報告書『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版、12月刊）を刊行した。同書には東大寺の塑造神将像の比較材料として、新薬師寺十二神将像のX線透過画像及びその描起こし図等（従来未公開であったもの）を付載し、研究者の参考に供することができた。 ④ 平成23年夏の特別展「天竺へー三蔵法師三万キロの旅」開催に向け、同展の中核をなす藤田美術館所蔵の国宝「玄奘三蔵絵」全12巻を主たる対象として、関連文化財の調査研究を藤田美術館及び薬師寺の協力のもとで進めた。 ⑤ 平成23年夏の特別陳列「初瀬にまずは与喜の神垣ー與喜天満神社の秘宝と神像」開催に向け、同社において天神坐像、男神像、狛犬、御輿等の文化財調査を実施し、所蔵品リストを作成した。 ⑥ 将来の特別展・特別陳列の実施に向けて当麻寺（葛城市）、海住山寺（木津川市）等と交渉を行い、総合的な文化財調査の計画を立てた。うち当麻寺中之坊については、23年1月に予備調査、3月に本調査を行った。 ⑦ 東大寺・醍醐寺における聖教調査への参加 ⑧ 東大寺金堂鎮壇具の実測・光学調査等（科研） ⑨ 東大寺法華堂諸像の彩色文様関連資料の調査（科研） ⑩ 薬師寺・藤田美術館所蔵大般若経（魚養経）の基礎調査（科研）	
【実績値】 社寺等における調査回数 7回 学会等発表回数 5回 論文等 17本	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 南都諸社寺等に蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会等 発表回数	論文発表本数			
判定	A	A	A			
備考 着実に調査活動を進めており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近隣社寺を中心とした所蔵品の調査を着実に行って資料の蓄積を進めており、その成果を展覧会図録や報告書に反映させて注目を集めるなど、大きな実績をあげることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。22年度も特別展で借用した作品などを中心に調査活動を行い、将来、展覧会を開催するための資料蓄積を行うことができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 仏教美術の光学的調査研究(東京文化財研究所との共同研究) ((5)-①-vi)
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、①高精細フルカラー画像の作成、②可視光励起による高精細蛍光画像の作成、③高精細反射近赤外線画像の作成、④高精細透過近赤外線画像の作成、⑤蛍光エックス線による非破壊分析、を実施する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 [奈良国立博物館]: 岩田茂樹(美術室長)、稲本泰生(企画室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、北澤菜月(研究員)、原瑛莉子(アソシエイトフェロー) [東京文化財研究所]: 田中淳(企画情報部長)、津田徹英(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、江村知子(研究員)、城野誠治(専門職員)	
【主な成果】 前年度から実施している重要文化財五百羅漢図(大徳寺蔵)82 幅のうち一部の画幅に対して追加の光学調査を実施し、顔料や絵絹について高精細画像及び基礎データを入手した。そしてこれらの基礎データをもとに討論を重ね、本年度中の刊行を目ざして調査報告書の作成を進めている。さらに、今年度から新たに当館の寄託品である信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)に対する光学調査を開始し、全3巻について高精細デジタルカメラを用いて基礎的な画像データを入手することができた。	
【年度実績概要】 前年度から継続的に調査を実施してきた重要文化財五百羅漢図82 幅(京都・大徳寺蔵)のうち、京都国立博物館寄託分20 幅について追加調査を実施し、高精細デジタルカメラを用いて絵絹組成の撮影等を実施した(7/30)。そして、前年度の調査及び今年度実施した追加調査で得られた画像データの分析結果をもとに、両機関研究員の間で検討会を重ね、特に共同研究メンバー以外から東洋史研究の専門家を招へいして画中の金泥銘文の解読を試みた(11/4)。その成果は本年度中の刊行を目ざして作成中の調査報告書に掲載する予定である。一方、本年度から新規に当館の寄託品である平安絵巻の名品・国宝 信貴山縁起絵巻を調査対象に加え、今後3 ヶ年にわたる継続的な調査の前提となる基礎的な画像データの収集に努めた。具体的には、1 週間にわたる調査を2 度行い(5/10～5/14、8/2～8/7)、山崎長者巻・延喜加持巻・尼公巻の全3巻全紙について、高精細デジタルカメラを用いてカラー画像、近赤外線画像、可視光励起による蛍光画像の撮影を実施した。年度内はこれらのデータを加工・分析を行い、次年度に実施予定の蛍光エックス線を用いた顔料分析に具える。	
【実績値】 作品調査実施回数 3 回: 5/10～5/14、7/30、8/2～8/7 研究会開催件数 2 回: 東京文化財研究所で10/4、奈良国立博物館で11/4に実施。 調査概報 1 件: 『大徳寺伝来五百羅漢図調査報告書』(3月25日刊行) 調査作品数 2 件28 点: 重文 五百羅漢図(大徳寺蔵) 25 幅 国宝 信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵) 3 巻	
 高精細デジタルカメラを用いた 信貴山縁起絵巻調査(8/2)	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 前年度に初の本格的な光学的調査を実施した南宋仏画の名品・大徳寺所蔵五百羅漢図 82 幅について、本年度も継続的に追加調査を実施し、東洋絵画史あるいは東洋史研究など学会に裨益する貴重なデータを調査報告書として年度内に刊行する目途が付いた。また、国宝 信貴山縁起絵巻の新たに光学調査の対象に加えこれまで十分に検討されてこなかった同絵巻の顔料・絵画技法の解明に向けて、基礎データの収集を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 両機関研究員の日程確保が難しい状況の中で、本年度はすでに1週間にわたる調査2度を含む4度の調査を実施することができた。特に信貴山縁起絵巻は全3巻の全紙にわたって光学調査を実施したことにより、膨大なデータを収集することができた。また前年度から引き続き大徳寺五百羅漢図の追加調査も実施し、これらのデータを踏まえた研究会を2回行い、両機関研究員の討議を重ねた結果、本年度中に報告書刊行が刊行できる見込みである。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。特に本年度は中国南宋時代と平安時代の重要絵画作品について詳細な調査を実施し、そこで得られたデータをもとに研究会を重ね、着実に報告書刊行につなげることができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施することができた。今年度調査したものうち、信貴山縁起絵巻については基礎的データの収集に努めたが、次年度には新たに蛍光エックス線を用いた顔料分析も行う計画であり、追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は1週間程度かかる1回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現するとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 仏教美術写真収集及びその調査研究 ((5)-②-ii)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品および展覧会等に際して館外から借用した仏教美術を中心とする文化財について、写真撮影をおこなう。図録や美術書などには通常掲載されていない、作品の側面、背面、内側などの撮影を多数おこなうことにより、作品の構造理解や製作技法の解明に資する情報を収集することを目的とする。写真資料の整理にあたっては、文化財の基本情報を整備するとともにデータベースへの登録を行い、学術研究や保存を目的とした利活用に対応できる体制を整える。			
【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎 幹子
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稲本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室員)、齋木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、永井洋之(企画室員)、北澤菜月(企画室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 当館内外の文化財の撮影を多数実施し、構造や製作技法の理解に関して貴重な情報資源となりうる写真資料を豊富に蓄積することができた。これらはデータベースに登録して管理運用するとともに、インターネット通して外部にも情報提供をおこなっている。今年度は本格的なデジタル撮影が可能な機器を揃え、データベースもデジタル画像対応のものにリニューアルを進めるなど、デジタル撮影を中心とした体制整備を推進することができた。なお、写真資料は特別観覧により、研究者・学術出版界・一般の利用に供している。			
【年度実績概要】 今年度は、展覧会や調査に際して数多くの写真撮影をおこない、仏教美術を専門とする当館ならではの貴重な写真資料を蓄積することができた。以下に特筆すべき成果について述べる。 ① 特別展『大遣唐使展』では、寺外では初公開となる十一面観音立像（安祥寺蔵）の撮影をおこなった。同像は、遣唐使らがもたらした盛唐前期の様式の影響が認められる奈良時代の一木彫刻で、像高2メートルを超える大型の立像である。通常は堂内に安置されているため、本格的な写真撮影が殆どおこなわれてこなかったが、当館での撮影により学術的にも貴重な写真資料を蓄積することができた。 ② 特別展『至宝の仏像』では、収蔵品・寄託品の彫刻について膨大な数の新規撮影をおこなった。これまで纏まった撮影の機会には恵まれていなかったが、今回の撮影により仏像彫刻の基礎資料の充実が叶った。 ③ 同展覧会では、修理を機に当館へ寄託されている金剛力士立像（東大寺蔵）の撮影もおこなった。同像は東大寺法華堂須弥壇に安置される二軀一对の、3メートルを超える巨像である。堂内から移動するこの貴重な機会を捉え、奈良時代の乾漆像について細部の文様も含めた詳細な撮影をすることにより、学術的にも極めて価値の高い写真資料を蓄積することができた。 ④ その他、館外では、地蔵菩薩像厨子扉絵（東大寺知足院蔵）、当麻曼荼羅（根本曼荼羅）（當麻寺蔵）等、いずれも実見や調査の機会の極めて限られる貴重な文化財の撮影をおこなった。 ⑤ また、当館寄託の仏涅槃図（永慶寺蔵）の撮影を、奈良文化財研究所の写場と機材を借用して実施した。本品は一辺4m余りの巨大な仏画で、当館の施設では撮影が不可能であったが、この機会に法人内での連携協力、人的交流、情報交換を更に深めることができた。 デジタル化に関しては、昨年度に引き続き写真原板のデジタル画像化を推進した。また、本格的なデジタル撮影に対応出来る体制整備を進めると同時に、写真情報システムのリプレイスも進行している。来年度以降も引き続き体制の拡充に努め、デジタル画像の利活用が可能な環境整備を推進させると同時に、仏教美術の研究拠点として、学術的価値の高い写真資料の充実に努める。			
【実績値】 ○収集資料数 収集した写真枚数は以下の通り（収集資料数）。 カラー・ポジ(4×5)：840枚、モノクロ：763枚、X線：122枚、デジタル撮影：9,959カット			
【備考】			



安祥寺十一面観音立像撮影風景



安祥寺十一面観音立像撮影風景

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 本事業は継続性の高いものであり、短期的な成果や個別の画期性を期待すべきでなく、間断なく質の高い写真資料の蓄積を続けている点が評価できる。その中でも、当館の特別展や調査研究と密接に連携することで、重要領域の貴重な資料を重点的に収集し、全体として質の高い独自のコレクションを形成していることは、特筆に値する。今年度刊行された学術報告書『奈良時代の塑造神将像』は、本事業で蓄積された執金剛神立像・四天王立像（ともに東大寺蔵）の写真資料が内容の中心となっており、今後もこうした研究の基礎資料となるべく、優れた写真資料の収集に努める。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数					
判定	A					
備考 撮影回数や収集資料数は多ければ良いというわけではないが、質や継続性を鑑みても、本年度は十分な調査と撮影をこなしており、資料の収集も豊富であった。当館の規模やスタッフ数を勘案しても、他機関と比較して遜色のない撮影数をこなしているといつてよく、仏教美術の研究拠点に相応しいコレクションの形成に寄与している。また、貴重な写真資料を当館刊行の図録や学術報告書に掲載するなど、独自の研究成果を多数公表することにも大いに貢献した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	写真撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均撮影枚数との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、学術的に重要であり、撮影および調査の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施し質の高い写真資料の収集が叶うことの意義は大変大きい。今後も調査や展覧会の開催と密接に連携した写真資料の蓄積を続け、仏教美術写真の一大コレクションとしての質の維持に努める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実績概要でも述べたとおり、ポジフィルムの生産中止により、来年度には本格的なデジタル撮影への移行が必須となっており、鋭意準備を進めているところであるが、機材と人材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必須であると思われる。 仏教美術分野では国内唯一と言つていい貴重なコレクションを維持しつつ、引き続き内外の研究者や学術出版界の利用に供する体制を整備することと、今日的な要請をふまえたデジタルアーカイブシステムの構築、情報公開への対応が必要である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究 (5)-①-ii)		
【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館等との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究をわが国の文化財との比較という観点に立って進め、その成果を展示・図録・国際シンポジウム等に反映した。			
【年度実績概要】 ① 学術交流協定を結んでいる韓国・国立慶州博物館に研究員1名を派遣した。また、中国・河南博物院から2名、慶州博物館から2名の研究員を受け入れた。正倉院展開催に際して慶州博物館から館長ほか1名を受け入れた。また慶州博における特別展「元暁」開催時に、当館から館長以下3名を、また特別展「皇南大塚」開催時に研究員2名を派遣した。 ② 「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」開催に際し、中国で制作された文化財を中・米両国から借用し、クーリエとして研究者計12名（米国6名、中国6名）を、また中国・陝西省の文化財関係者5名を代表団として受け入れ、文化財を介した日中間の交流に関する情報交換を活発に行った。またクーリエとして3名の研究員を中国に派遣（うち2名は前年度末）し、併せて今後の両国における文化財調査に向けた情報収集を行った。同展では中国の仏教文化がわが国に与えた影響に関するこれまでの調査研究の成果を、会場のパネル、展覧会図録、各種講座等に反映させた。展示構成の面では唐と日本の文物の比較だけでなくアジア全域を視野に入れ、同時代の新羅、渤海、南詔、吐蕃、突厥などの諸国家に関連する文物も陳列し、より厚みある文化交流の様相を浮き上がらせることに努めた。また会期中の6月5日に実施した国際学術シンポジウム「東アジアの造形芸術と遣唐使の時代」では、米国人研究者1名と当館研究員2名を含む計4名が遣唐使の時代の文物に関する研究発表を行い、学術的にも有意義な討論を行うことができた。 ③ 中国・河南省の文物を一堂に展観した特別展「誕生！中国文明」（東京国立博物館：7月6日～9月5日、九州国立博物館：10月5日～11月28日）の図録に研究員2名が仏教美術関係の作品解説を執筆し、これまで当館が行ってきた河南博物院との交流の成果が反映された。また東京会場に研究員2名、福岡会場に同3名を派遣して会場の状況視察、作品の点検等を行い、23年度における同展の当館での開催に備えた。 ④ 特別展「第62回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。会期中の10月24日には正倉院宝物の制作地をテーマとする学術シンポジウム「正倉院宝物はどこで作られたか」を開催した。当館研究員1名を含む4名のパネリストが研究発表を行い、唐代併行期の文物における唐・新羅・日本それぞれの製品の区別の問題等を中心に、議論が深められた。			
【実績値】 研究員の派遣 7名 研究員の受入 24名 学会、研究会等発表件数 3件 論文掲載件数 4件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。						

2. 定量的評価

観点	研究員の派遣人数	研究院の受入人数	学会、研究会等発表件数	論文掲載件数	
判定	A	A	A	A	
備考 展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	河南博物院（中国）・国立慶州博物館（韓国）と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「平城遷都 1300 年記念 大遣唐使展」では、7～9 世紀における仏教文化を介した日本と大陸の交流の様相を多角的に紹介し、中国・米国・日本国内から中国の文化財を借用し、展覧会の内容を充実させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 22 年度特別展「平城遷都 1300 年記念大遣唐使展」の内容を充実させることができた。23 年度以降も中国・韓国との交流を内容に含む特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 当館所蔵品についての調査研究(客員研究員)((5)-①-iii)		
【事業概要】 従来からの収蔵品について継続的に調査研究を実施する。なお、新収蔵品については具体的な公開等を見越して重点的にこれを行う。調査研究の成果は、展覧会、印刷物、インターネット等を通じて公表し、広く斯界の学術的発展に資する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】 鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稲本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、原瑛利子(企画室員)。客員研究員：根立研介(京都大学大学院文学研究科)、板倉聖哲(東京大学東洋文化研究所)、井手誠之輔(九州大学大学院人文科学研究院)、木村法光(元宮内庁正倉院事務所)、森郁夫(帝塚山大学人文学部) 調査員：藤岡穰(大阪大学大学院文学研究科)、高梨純次(滋賀県立近代美術館)、黒田泰三(出光美術館)、橋詰文之(和泉市久保惣記念美術館)、稲城信子(元財団法人元興寺文化財研究所)、渡邊智山(関西大学文学部)			
【主な成果】 新収蔵品に対する調査研究を重点的に実施し、名品展での公開と併行して研究成果を広く発信することができた。収蔵品についても継続的に調査研究を行い、その成果を展示及び刊行物などに反映することができた。長く寄託されてきたものの展示される機会がなかった作品群が、展示会場のリニューアルや作品の修理完了に伴って、多数展示されたことも本年度の成果として特筆される。			
【年度実績概要】 ① 特別展「平城遷都 1300 年記念 大遣唐使展」開催に向けて行った関連収蔵品調査の成果を、展示及び展覧会図録等に反映した。 ② 当館で目下進めている新納忠之介旧蔵美術院資料(当館所蔵)のデジタル画像化事業の過程で行った調査研究の成果を「仏像修理 100 年展」会場における解説・パネル、及び展覧会図録に反映した。同展では同資料の展示も行われたが、中でも関東大震災後における仏像修理の状況を物語る資料群が整理を経て初めて公開され、その歴史上の価値が再認識された意義は大きい。 ③ 阿弥陀如来坐像(歓喜寺)、釈迦如来立像(法明寺)、十一面観音立像(西光院)など、長年寄託されているものの、調査が不十分であったがゆえにほとんど紹介されることのなかった平安時代の諸像の調査研究を重点的にを行い、その成果をリニューアル以降の本館(なら仏像館)における展示及び『なら仏像館名品図録』等に反映した(彫刻部門)。 ④ 長年寄託されてきた優品であるものの、状態不良のため展示されることがなかった奈良豆比古神社の能装束(狩衣)を、修理完成に伴って西新館の名品展で初公開し、修理時の調査で得られた知見等を展示に反映した(工芸部門)。また「慈円僧正懷紙」(当館)「策彦周良墨跡探春」(慈濟院)等についても、修理完了を承けて名品展で公開し、修理時の知見等を展示に反映した(書跡部門)。 ⑤ 長く寄託されてきたものの、これまで紹介されることのなかった大画面浄土変相図「当麻曼荼羅」(三重・西来寺蔵)を調査し、大型の壁付展示ケースが西新館に新造されたのを機に初めて公開し、研究成果を展示に反映した(絵画部門)。 ⑥ 前年度の新収品「祐頭和歌懷紙」を、購入前後における調査研究をふまえ、初めて展示した(書跡部門)。			
【実績値】 展覧会図録 3 冊 収蔵品の調査研究成果の展示への反映 1 2 回 論文掲載数 1 本			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 収蔵品の調査研究は各部門による定期的継続的な点検調査を通して、平常展等で新たな成果を公開している。また、新収蔵品等についても集中的な調査を実施しており、この成果を公開しているのは前述の通りである。						

2. 定量的評価

観点	図録の作成	論文掲載数	展示への反映			
判定	A	A	A			
備考 調査研究成果について、質の高い図録等として発表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品の調査研究を進め、その成果を特別展・名品展及び各種刊行物等に反映させた。諸般の事情で長く公開されてこなかった作品が、調査研究を経て会場のリニューアルや修理の完了を機に展示され、真価が再認識された例が多いことも、本年度の成果として特筆される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来からの収蔵品及び新収蔵品についての調査が継続的に実施され、その成果は評価の高い展覧会を生み、また展覧会図録等の出版物やインターネット等を通じて公表された。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) 奈良時代の仏教美術と東アジアの文化交流 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)
【事業概要】 奈良時代においてわが国で制作された、あるいは中国・朝鮮半島から舶載されたと考えられる仏教関連の美術工芸品の中から特に重要なものを選定し、綿密な調査と様々な角度からの検討によって、今後の議論の基礎となる資料を学界の共有財産として提供する。同時に唐・新羅との活発な交流が生んだこの時代の文化の国際性に特に留意し、東アジア文化交流史の全体像の中に奈良時代の仏教美術工芸史を位置づける。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	館長 湯山賢一
【スタッフ】 研究代表者：湯山賢一 研究分担者：西山厚、鈴木喜博、岩田茂樹、内藤栄、稲本泰生、吉澤悟、谷口耕生、宮崎幹子、野尻忠、清水健、岩戸晶子、斎木涼子、北澤菜月、永井洋之（以上当館学芸部） 連携研究者：有賀祥隆（東京藝術大学）、東野治之（奈良大学）、前園実知雄（奈良芸術短期大学）、根立研介（京都大学）、藤岡穰、高橋照彦（以上、大阪大学） 研究協力者：杉本一樹、成瀬正和、尾形充彦、西川明彦（以上、宮内庁正倉院事務所）、山崎隆之（前愛知県立芸術大学）、梶谷亮治（東大寺ミュージアム）、中島博（前当館）	
【主な成果】 平成 20 年度から 3 ヶ年の計画で進めてきた①蛍光X線分析装置による光学調査を中心とした東大寺金堂鎮壇具（国宝）についての基礎データ収集と、その体系化。②東大寺法華堂諸像の修理時に（財）美術院によって撮影された彩色文様写真の研究資料化と、これに対する文様史的検討。③館蔵及び寄託の古写経に関する基礎データの集積と料紙分析。などの調査研究を完了させ、その成果をとりまとめた研究成果報告書を刊行した。	
【年度実績概要】 ・「大遣唐使展」に出陳された海獣葡萄鏡（香取神宮蔵、国宝）の蛍光X線分析、高精細画像による撮影等を実施した。同鏡は「第 62 回 正倉院展」に出陳された鳥獣花背円鏡と同型であり、比較検討の成果の一端を同展図録の「宝物寸描」で報告した。 ・東大寺金堂鎮壇具（国宝）の高精細画像による撮影、実測、三次元計測、X線透過撮影（一部）、蛍光X線分析（一部）などを実施し、データの蓄積を行った。 ・秋田市立赤れんが郷土館に研究員 2 名を派遣し、文様史研究の一級資料であるにもかかわらず全貌が紹介されていない「小場恒吉資料」（同館所蔵）のうち、東大寺法華堂諸像に関連する描起こし図の調査を実施した。併せて当該資料と、前年度に作成した同堂諸像の彩色文様画像目録に掲載された文様写真の照合を行った。 ・唐代併行期の東南アジア仏教美術の様相を今日に伝える藤井有鄰館所蔵「南詔図伝」を一時的に借用し、全巻の写真撮影及び光学調査等を実施し、基礎データを収集した。 ・奈良朝写経の代表作である藤田美術館所蔵「大般若経」（薬師寺伝来、通称魚養経、国宝。総数 387 巻）全巻を借用・搬入して集中的に調査・撮影を行い、全巻分の基礎データ収集を完了した。 ・当該テーマに即して研究分担者各人が進める調査研究の成果を、各種学会・学術論文等で発表した。 ・本研究の成果の一部を当館編『奈良時代の塑造神将像』（中央公論美術出版、12 月刊）に反映させた。 ・これまでの三年間にわたる成果をとりまとめ、二分冊からなる研究成果報告書を完成させた。	
【実績値】 調査回数 25 回、延べ 120 日 学会等発表回数 7 回 研究成果に基づく報告書の刊行 3 冊 論文発表本数 8 本	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
仏教美術の研究において、名実ともに日本を代表する機関として内外の学界をリードしてきた当館の伝統と実績をふまえて企画された他ではなしえない研究であり、古代東アジア文化に関わる全ての学問領域の研究者の待望する、重要作品の精査に基づく基礎資料の整備を順調に進めている。また東アジアの文化交流史上に奈良時代の仏教美術を位置づけるという視点を堅持して研究を進めており、最終年度である本年度末に結実する成果が、国際的規模で学界に貢献するとの展望をすでに得ている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会等 発表回数	論文発表本数			
判定	A	A	A			
備考 彫刻・絵画・書跡・考古の各部門において当該テーマに相応しい作品（ないし写真資料）の調査・撮影を計画的・継続的に進めており、質量ともにきわめてすぐれた基礎資料が整備されつつある。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	3年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。蓄積した資料をとりまとめるだけでなく、多角的な観点から分析・考察を加え、充実した研究成果報告書の刊行に結実した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	規模・内容ともに国内最大の仏教美術の研究拠点である当館に相応しいプロジェクトであり、計画にそって着実に実績を挙げている。23年度以降も継続して競争的資金の獲得に努め、拠点としての体制・設備をさらに充実させ、関連学界の要請に応える総合的な研究活動を展開する必要がある。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 統一新羅期の道具瓦集成(科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 日本の瓦生産に大きく影響を与えたと考えられる朝鮮半島の様相を日本と比較検討することを目的として、特に研究が遅れている道具瓦を取り上げる。これまで文様の分析に偏りがちだった鬼瓦と鷗尾について出土数が多い統一新羅の資料を対象に集成を行い、これまで研究・調査によって明らかにしてきた技術的観点から見た古代日本の鬼瓦の様相とを比較検討しつつ、製作技術など技術的観点にもとづくデータを採取し、基礎的資料を作成する。			
【担当部課】	学芸部工芸考古室	【プロジェクト責任者】	工芸考古室員 岩戸 晶子
【スタッフ】 工芸考古室員 岩戸 晶子			
【主な成果】 平成20年度から3ヵ年の計画で、韓国国内で最も多い所蔵資料数を誇る韓国国立慶州博物館(以下、慶州博)ほか、韓国国立中央博物館や東国大学校博物館などの所蔵資料を中心に、実測や写真撮影、熟覧を行い、資料化を進めてきた。			
【年度実績概要】 平成20年度から3ヵ年の計画で進めてきた調査であったが、昨年度は慶州博所蔵の雁鴨池出土の一括資料について集中的に調査を行う予定であったものの、先方とのスケジュールが合わず、今年度8月まで繰越して調査を完了させた。今年度は、慶州博での資料調査では雁鴨池遺跡出土の道具瓦について悉皆調査を完了し、データと写真の整理を終えた。 行った調査は、実測と写真撮影である。 実測は断面を中心とし、写真撮影は文様面だけでなく、側面文様や裏面、製作技術の一端を示す痕跡、範傷などについて詳細に記録し、莫大な雁鴨池出土の鬼瓦について型式分類を行うことができた。 このデータを研究資料として最大限活用するためにはどのように公表すべきかについても所蔵機関と協議を進めることができ、今後、順次公表していく予定である。			
【実績値】 調査回数：17日間 収集資料数：約70点			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 雁鴨池出土品の報告は古いものしかなく、遺物の再調査は韓国だけでなく関連する日本の研究者にとっても待望するものである。昨年度から今年度は、道具瓦特に鬼瓦についての悉皆調査であったが、雁鴨池は統一新羅を代表する遺跡であり、ここでの遺物の再整理の端緒となる研究であり、今後もさらに発展させた研究が可能となると思われる。また、本調査は、奈良国立博物館における慶州博との学術交流などの人的交流の成果を基に可能となったものである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考 先方とのスケジュール調整がうまくいかず、年度繰越を行ったが、その結果、確実に予定していた調査を完了することができた。これまでの調査データの整理や分析も順調に進められた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎資料の蓄積と大量の調査データの整理を果たし、今年度も相応の評価が得られると思われる。最終年度であったため、韓国人研究者との検討も行いつつ、成果の公表への準備を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の調査の目的を果たし、雁鴨池出土の大量の道具瓦の悉皆調査を終え、統一新羅期の道具瓦についての基礎データと概要をほぼ把握することができた。今後はこの成果を基にして、日韓の比較研究など検討を深めていきたいと考える。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)-①-ii)		
【事業概要】 平成19年度より継続的に実施してきたJICA草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」によるタイ国との文化財保存活用に関する交流の成果として、タイ国バンコク国立博物館において海外日本古美術展「日本とタイーふたつの国の巧と美」を開催した。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 小泉恵英
【スタッフ】 原田あゆみ（文化財課主任研究員）、小泉恵英（企画課長）、赤司善彦（展示課長）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）			
【主な成果】 平成23年1月15日より、タイ国バンコク国立博物館において、海外日本古美術展「日本とタイーふたつの国の巧と美」を開催した（～3月13日）。展覧会の内容は日タイ共同で構築し、両国の歴史をたどりながら、文化の共通点と差異を示すことをめざした。展示はふたつの国のはじまり、仏教、出会いというテーマで構成し、両国の文化財107点を展示した。また両国の伝統工芸も紹介した。			
【年度実績概要】 タイ国での特別展開催に向けての準備として、8月26～31日に、日本より2名を派遣し、展示施設、展示内容、図録編集にかかる協議を行なった。10月28～11月1日に、日本より3名を派遣し、同展ならびにワークショップにかかる協議を行なった。1月4～3月7日に、日本よりのべ13名を派遣し、文化財輸送、展示作業をタイ国バンコク国立博物館、タイ芸術局職員と共同で実施した。1月15日に、九州国立博物館を愛する会、ボランティア、タイ国在住ボランティアの協力を得て、日本の伝統的な遊戯を紹介するワークショップを実施した。同日に、両国の博物館ボランティア活動における意見交換会を実施した。1月29～30日に、日本の伝統工芸の1つである久留米絣の制作に関して、日本より招聘した絣制作作家の協力を得てバンコク国立博物館内でワークショップを実施した。 3月5～21日に、研究員4名を派遣し、来年度に九州国立博物館で実施予定の同展の帰国展に向けて、バンコク国立博物館で作品の集荷、輸送を行なった。同時にタイ国より点検、展示に携わる研究員2名を招聘した。			
【実績値】 ○調査回数 3回 ○研究員海外派遣数 のべ22名をタイ国に派遣。 ○研究員受入数 2名をタイ国より受け入れ。 ○論文掲載数 展覧会図録Artisanship and Aesthetic of Japan and Thailandを刊行し、同図録に研究員が作品解説56点、テーマ解説10点を執筆した。			
【備考】			



バンコク国立博物館での
展示風景

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	S	A
備考 博物館がもつ使命である文化財の活用と、地域との共生とを関連させた事業は、高い公共性を持つもので、今後の博物館のあり方を考える上で極めて重要な取組である。交流の成果を合同出品の展覧会の形で結実し、諸外国との文化を比較研究することは独創的な取組であり、その成果はアジアの文化財行政の多角的な取組に新たな視点を提示し、今後の文化交流にも寄与するところが大い。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
備考 派遣、招聘とも、文化財行政の現場の第一線で活躍するメンバーで行なわれ、展示会準備、ワークショップなど具体的な成果をあげている。また、図録執筆にも多くの職員が関与している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の展示活用を通じての諸外国との交流は、国立博物館の活動として文化財行政の観点で極めて大きな貢献であるといえる。展覧会を通じて、広く市民に対してもその成果が還元されている。相互の文化理解に対して与える影響はきわめて大きく、展示準備を通じて相互の信頼関係も構築され、今後の文化財活用への足がかりとなる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3 ヶ年にわたるタイとの交流を通して博物館の地域共生という問題についての成果をあげ、それを展覧会の形で結実した。予定されている九州国立博物館での帰国展へ向けての準備も順調に進められており、次年度はタイ国の文化を日本へ紹介する格好の機会を得ることになる。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財の材質・構造等に関する共同研究((5)-①-v)		
【事業概要】 九州国立博物館において、X線CTを用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の健康状態や制作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津節生
【スタッフ】 臺信祐爾（文化財課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、坂元雄紀（展示課研究員）			
【主な成果】 稲荷山古墳出土辛亥銘鉄剣の保存状態、金象嵌文字の調査を実施した。辛亥銘鉄剣は窒素ガス封入状態で保管されてきた。調査の際にも、辛亥銘鉄剣を窒素ガス封入したケースに入れて非接触で調査した。調査の結果、鉄剣の表裏にある117文字の象嵌文字を表裏分離して記録することができた。			
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1年間で約250点のCT調査を実施した。得られた成果は、文化交流展での展示の際に活用している。 また、特別展で借用した埼玉県稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣などの調査を実施した。辛亥銘鉄剣は保存処理を終了して30年を経過していた。外観調査とX線CT調査の結果、新たな錆による変形は観察されず、健康状態を保っていることが確認された。また、初めて鉄剣の表裏に書かれた117文字の金象嵌文字の表裏分離をおこなうことができた。象嵌文字の表裏分離によって象嵌の施工順序も明確になった。また、象嵌文字以外にも柄に金属が使用されていることが初めて判明した。さらに、辛亥銘鉄剣の三次元情報を3Dプリンタで出力することによってデジタル複製品を製作した。この複製品は“触れる国宝”として埼玉県教育委員会が公開して地元の博物館教育に活用している。このように、本研究の成果は修理ための基礎情報や製作技法を解明する学術的な基礎情報として役立つことが期待される。 その他、外部との連携としては、東京国立博物館・興福寺国宝館との連携調査の成果として、国宝阿修羅像のCT調査についてデジタル文化財創出機構主催のシンポジウムで発表した。参加者は約500名であった。また、泉屋博古館の所有する中国古代青銅器について調査を実施した。その結果、青銅器の製作技術を非接触で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会とアジア鑄造技術史学会で発表した。			
【実績値】 調査件数 約100件			
○調査回数	60回	 CT画像（正面・側面） 文字摘出 デジタル複製品 稲荷山古墳 国宝・辛亥銘鉄剣の調査	
○資料収集数	250点		
○学会研究会等発表数	5件（日本文化財科学会、アジア鑄造技術史学会、デジタル文化財創出機構）		
○論文掲載数	2件（日本中国考古学会・泉屋博古館紀要）		
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 効率性では、安全・敏速に計測できる体制が整った。国内各博物館・寺社・教育委員会等からの調査要請が多く、我が国の文化財科学情報のセンターとしての期待が高まっている。得られたデータを展示で活用する機会も増えており、活用の応用範囲が全国的に広がっている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
備考 保存修復学会には約 650 名、文化財科学会には約 500 名の研究者が参加した。また、アジア鑄造技術史学会には約 200 名の研究者が参加した。日本中国考古学会、泉屋博古館紀要に論文を発表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。泉屋博古館、徳川美術館、等に加えて埼玉県立さきたま史跡の博物館など国宝・重要文化財を保有する機関との連携研究も進んでいる。 23 年度も、より幅広い他機関との連携を目指すと共に多方面でのデータの活用を進めると共に展示への活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置で文化財所蔵者と共同調査し成果を上げることで、他の博物館・研究機関との連携が進みつつある。23 年度はさらに連携を強化して広い範囲で調査・展示を実施したい。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館における文化財保存修復に関する研究 ((5)-①-v)		
【事業概要】 当館文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 志賀 智史
【スタッフ】 篠崎悠美子(別府大学教授)、藤田励夫(保存修復室長)、松尾かをる(研究補佐員)、藤岡春樹(国宝修理装こう師連盟九州支部長)、木村愛(国宝修理装こう師連盟九州支部主任技師)、井口茉也・平河智恵(国宝修理装こう師連盟九州支部技師)			
【主な成果】 吉備国際大学から2名、九州産業大学から1名、別府大学から1名の合計4名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。			
【年度実績概要】 別府大学の篠崎悠美子教授を招聘し、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを平成17～21年度の実績を踏まえ検討、改善した。成果は8月16日(月)～20日(金)の5日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、吉備国際大学と九州産業大学、別府大学の学生4名に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。研修では障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深めた。			
【実績値】 ○研修開催数 6回目(平成17年度より) ○参加者数 4名			
			
研修風景			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 近年、文化財修理についての関心が高まっているが、九州で文化財修理に関する研修をおこなっている機関は他に無く、独創的で発展性のある研修といえる。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				
備考 短期の実習としては適切な数である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を伝えるため修復技術者の育成は必要不可欠である。将来を担う学生・大学院生に対して実践的な研修の場を提供することにより、修復技術者の育成を目指す。このような研修を行っている機関は極めて少ない。少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業であり、平成23年度以降も実施する計画である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成17年度より少人数の実習を継続的におこなっており、参加者数も安定している。平成23年度以降も同様な研修を実施する計画である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究 ((5)-①-ii)
【事業概要】 今年度も文化庁の受託事業、平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業「市民と共に ミュージアム IPM」を実施した。昨年度はモデル事業として「策定・実施」の段階であり、22 年度からはモデルを完成するため、さらに順次検証・検討・策定・実施・改善する構想である。 今年度はミュージアムにおける資料保存の一部について、市民の直接参加を可能にするため、館の設置形態や規模にとらわれない支援者人材育成プログラムを策定し研修をおこなった。また今年度も公開シンポジウムを開催し、地域や市民への普及に努めた。	
【担当部課】	博物館科学課
【プロジェクト責任者】	博物館科学課長 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、森田稔（副館長）、宮本裕一（交流課長）、神谷真美（総務課長補佐）、今津節生（環境保全室長）、鳥越俊行（環境保全室主任研究員）、上野知彦（交流課主任研究員）、秋山純子（アソシエイトフェロー）、上野敦子（研究補佐員）	
【主な成果】 研修会は、全国の美術館・博物館の学芸員の参加が大半を占め、ミュージアム IPM の関心の高さがうかがえた。また美術館・博物館でのミュージアム IPM 取り組みについての意見を聞け、今後のミュージアム IPM 支援者育成プログラム案策定に充分活かすことができ、来年度の研修を具体的に進める目途が得られた。 公開シンポジウムでは市民の活動報告と専門家の講演、また意見交換会では専門家の意見交流の場となり、昨年度より充実した内容となり、市民の理解を深めることができた。	
【年度実績概要】 1. 人材育成プログラムの策定 専門家や有識者による会議を開催し、前年度の本事業による策定案に基づきモデルプログラムを策定、実施し参加登録者の意見を加え、検討協議をかさね、設置目的や館の形態を超えてプログラム案を策定する。 2. モデル研修会の実施 IPM ボランティア導入検討館が推薦する者の中から事前に申し込みを受け、20～30 名程度の登録制とする。 3. 公開シンポジウムの開催 市民協同型ミュージアム IPM の必要性・重要性を広く社会へ紹介するとともに、その担い手であるボランティアや NPO 法人等支援者達からのメッセージを地域社会へ直接伝える場とする。	
【実績値】 ○検討会等開催回数・・・・・・8 回 ・プログラム策定会議：2 回 ・地域協力者会議：2 回 ・ワーキンググループ検討会：4 回 ○支援者育成研修会開催回数・・・・・・1 回 ○支援者育成研修会参加者数・・・・・・160 名 1 日目(ガイダンス・講義 3 回)：63 名 2 日目(ワークショップ I II III IV)：80 名 3 日目(施設見学・総合討議)：17 名 ○シンポジウム開催回数・・・・・・1 回 ○シンポジウム参加者数・・・・・・236 名	
【備考】	



プログラム策定会議



公開シンポジウム



ミュージアム IPM 支援者育成研修

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	検討会等	支援者育成研修会開催回数	支援者育成研修会参加者数	シンポジウム開催回数	シンポジウム参加者数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 モデル研修会等参加登録者は毎回 20 名前後であり、各回とも 90%以上の出席であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の事業が、IPM をひとつの切り口とした、九博の着実な取組を多くの方々に理解していただく契機になるとともに、館の規模や設置形態を超えて、広く参考となるモデルを示すことができた。次年度には、本プログラム案を基にした研修を定型として実施すると共に、ステップ研修会の計画を検討、開催する。特に、地域文化施設との連携を深めながら、より広範な普及をはかるようにする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の支援者層の拡大充実を図ることで、市民や機関との連携を深めながら、より積極的に文化財に関する調査及び研究を推進した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCO との共同) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 絵画、書跡、古文書等の文化財修復には、伝統的な材料と技術を用いた手漉き紙が不可欠である。東アジア各国では、伝統手漉き和紙の技術が廃れ、良質の手漉き紙を入手することが困難になってきており、いずれは消滅してしまう危機に瀕している。そこで、日本、中国、韓国を中心とする手漉き紙の技術について、現地調査を実施し、保存策策定のための資料を得る。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田 励夫
【スタッフ】 森田稔(副館長)、本田光子(博物館科学課長)、志賀智史(博物館科学課主任研究員)、秋山純子(アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 中国においては UNESCO との共同調査により、甘肅省博物館にて第4回紙文化財保存修復国際シンポジウムに参加すると共に、漢時代の出土紙文化財について調査した。 日本においては、高知(2カ所)、山口、島根(5カ所)、岡山の手漉き和紙製作現場9カ所を調査した。昨年度までに調査して得た調書、映像記録を総括した。			
【年度実績概要】 日本および中国の調査地においては、動画撮影、写真撮影、聞き取り調査、調書作成、サンプル収集などを実施した。 また、中国の調査地においては、中国各地および韓国、日本から集まった文化財関係者とともに国際シンポジウムを開催し、主に中国各地の手漉き紙製作についての発表が行われた。日本から九州国立博物館のスタッフのほか、高知県立紙産業技術センターの研究員、紙文化財の修理技術者の代表が出席した。 第4回東アジア紙文化財保存修復国際シンポジウム (2010/12/6-12/8 甘肅省博物館にて開催)			
【実績値】 調査地 海外：中国 2件(甘肅省博物館、甘肅省文物考古研究所) 国内： 9件(高知(2カ所)、山口、島根(5カ所)、岡山)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 ほぼ計画通りに実施されている。						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査				
判定	A	A				
備考 ほぼ計画通りに実施されている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国、国内共に効率的に手漉き地生産地を調査し、資料を入手することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ほぼ計画通りに実施されている。次年度以降、昨年度までの調査結果に加えて、今年度収集した調査結果を集約し、修理現場へ還元していくことが望まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金） ((5)-①-ii)
【事業概要】 本研究では、日本列島に分布する装飾古墳を対象とし、写真測量技術を応用して壁画に影響を与えることなく、石室全体を客観的に記録する方法を開発した。この技術を活用して装飾古墳の記録・管理の事業を展開し、博物館やweb上で展示・公開するためのデジタルアーカイブを構築する。これにより装飾古墳を3次元的に記録する研究基盤を確立する。また、装飾古墳の現状記録としては、石室構造や文様の写真を高精細画像として撮影する。	
【担当部課】	企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
【スタッフ】 研究分担者 赤司善彦（九州国立博物館） 研究協力者 安村俊史・北野重（柏原市教育委員会）・吉田東明（福岡県教育委員会） 武廣正純・天賀光広・村上浩明（(株)とっぺん） 小堀昇（(財)日本地図センター）	
【主な成果】 今年度の研究では、装飾古墳のうち大阪府高井田横穴墓の3基を対象とした。その結果、本研究によってデジタルアーカイブされた装飾古墳の総数は、石室12基・横穴墓9基に達し、近畿地方ではじめてのVRデータが成功裏に作成された。また、日本の装飾古墳を海外の事例と対比するため、イタリア中部のエトルリア彩色壁画墓の実地調査も行なった。また、昨年度に引き続き報告書の作成も継続している。	
【年度実績概要】 本研究は、人手による実測図や写真によって記録・管理されてきた装飾古墳に対して、写真測量技術を応用して、非接触によって壁画に影響を与えることなくVR画像を作成し、石室全体を客観的に記録するための方法の開発と実践の研究である。これにより、石室と壁画の記録方法が従来の実測図の作成と比べて飛躍的にスピードアップしただけではなく、壁画とカビ等の汚損や石室の崩壊などの石室内における位置関係を3次元的に記録できるようになり、装飾古墳の保存のためのデータ基盤が確立した。本年度は、昨年度に引き続き九州以外の横穴墓の調査として、大阪府高井田横穴墓群の計測を実施した。特に、脆弱な凝灰岩に掘り込まれた横穴墓を安全かつ迅速に計測することが課題であったが、大きな問題も無く終了した。これらの方法で製作したVR画像データは、通常は内部に立ち入れない装飾古墳を博物館で映像展示することにも活用できる。VR画像は文化財の保存・普及に新しくかつ最適な記録手段であるという評価が定着しつつある。 また、今年度は4ヶ年の研究期間のうち最終年度であり、今までの研究成果の総仕上げとしての報告書の作成と海外事例との比較研究のため、イタリアのエトルリア彩色壁画墓やポンペイのフレスコ画等の実地調査を行った。日本の装飾古墳との類似や相違点が明確となり、画題や墓室構造の比較研究に益する部分が少なくなかったのみならず、保存方法等にも参考となる部分が大きかった。	
【実績値】 ○調査回数 大阪府高井田横穴墓 3基(7日間) ○VR画像数 VRデータ3基分 ○資料収集数 3基 ○調査概報 1冊（科学研究費調査報告書） ○学会研究会等発表数 1回	
 高井田横穴墓 正射投影図面	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 概ね当初の計画通り、目標を達成することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	V R 画像数	資料収集数	調査概報	学会研究会等 発表数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 概ね当初の計画通り、目標を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	順調に当初計画に沿って、目標を達成することが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度が最終年度ではあるが、順調に当初計画に沿って、目標を達成することが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）（(5)－①－ii）		
【事業概要】 907年の唐滅亡後、遼、宋、高麗、日本の諸国は、唐の制度・文化を規範としつつ、それぞれに独自の文化を醸成してきたことはよく知られている。まだ十分な基礎的研究条件が整っていなかった遼代文化についても、ようやく近年、内蒙古自治区トルキ山遼墓など、各地で重要な発掘が相次ぎ、考古学的情報を伴う実物資料が飛躍的に増えた。現地で調査研究を実施している内蒙古文物考古研究所と工芸技術の変遷を軸に遼代文化研究の基礎固めとなる共同研究を実施するものである。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	文化財課長 臺信祐爾
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課環境保全室長）、市元壘（企画課特別展室研究員）			
【主な成果】 内蒙古自治区の諸機関所有の遼代文物の特別展を台北故宮が開催したため、これまでの調査期間中に観察できなかった作品について調査した。 内蒙古文物考古研究所、内蒙古博物院、新築移転した赤峰博物館はじめ巴林右旗博物館など各地で現地調査を実施し、新知見を得た。 共同研究者である内蒙古関係者を招へいし、中尊寺に代表されるわが国平安時代浄土教仏教美術作品を調査するとともに、当館において国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」を開催し、共同研究の成果について、一般市民向けに発信した。			
【年度実績概要】 4月29日-5月2日 台北故宮 遼展調査 8月12-19日 現地調査 12月13日-15日 東京国立博物館・中尊寺など調査 12月16日 長崎県松浦市鷹島埋蔵文化財センター調査 12月17日 国際シンポジウム「契丹帝国（遼王朝）の美術と文化」			
【実績値】 ○調査回数 日本国内外で4回 ○収集資料数 写真資料 500点 ○学会研究会等発表数 国際シンポジウム 4本（中国側3本・日本側1本） 保存修復学会 1本 ○論文掲載数 3本 ○研究員海外派遣数 延べ5名 ○海外研究者招へい 4名			
			
国際シンポジウム			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 わが国平安時代平行期にあたる遼代工芸作品について、これまでほとんど実施されてこなかった現地コレクションの実物調査により、その技術的特性の諸様相が明らかとなりつつある。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	学会研究会等 発表数	論文掲載数	研究員海外派 遣数	海外研究者招 へい
判定	A	A	A	A	A	A
備考 研究計画に沿って順調に進んだ。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	唐王朝滅亡後の東アジアにおいて、北宋と並び立つ大勢力であった遼王朝の実態に工芸品を通じて迫ろうとする計画に対して、一定の成果を挙げることができた。調査の内容について、その成果を来年度秋の特別展で紹介する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は当初計画通り順調に進んでおり、その成果については、内蒙古関係諸機関の全面的協力の下、来年度秋に当館で開催予定の特別展で、広く一般に公表することになっている。なお、本特別展は、当館会期終了後、東京藝術大学美術館・MIHO MUSEUM・静岡県立美術館（順不同）に巡回する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 室町時代に政治権力者や有力寺院が関与して制作・受容された仏教絵画について基礎的な調査研究を行う。その造形的・文化的な意義を中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的として実施する。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 畑 靖紀
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は当該テーマについて次の二つの観点から研究し、下記の成果を得た。 (1) 新出の観音図（個人蔵）などを調査し、中国絵画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。 (2) 室町時代の仏教絵画に注目し、とくに雪舟の観音変相図を考察し、発願者や造像の意図などについて知見を得た。			
【年度実績概要】 従来、室町時代の仏教絵画についての研究成果は非常に少ないが、この研究の状況に対して本調査研究では、当該の領域に関する基礎的なデータを収集して歴史的な意義を考察し、それらを東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的としている。この目的を達成するために、今年度は「主な成果」に記した観点から研究を遂行した。 (1) については、未紹介の観音図（個人蔵）をはじめとする100点の作品の調査を山口県立美術館などで遂行し、中国絵画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。 (2) については、雪舟の観音変相図を対象として選択し、原本の復元や制作の目的について考察した。その成果として発願者や造像の意図などについて、雪舟のパトロンである大内氏の仏事に関する具体的な新知見を得た。			
【実績値】 ○調査回数 4回 ○収集資料数 100点 ○論文掲載数 1回 ・辻惟雄監修『日本の美術V 水墨画II』美術年鑑社 ○学会研究会等発表数 2回 ・"Utsushi: The Art of Copying," University of Hawaii at Manoa ・雪舟研究会講演会（山口県立美術館） ○研究員海外派遣数 3回 ・米国（作品調査） 1回 ・韓国（作品調査） 2回			
【備考】			



研究対象資料 伝雪舟筆観音図（個人蔵）ほか

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、十分な成果が認められると判断される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	学会研究会等 発表数	研究員海外 派遣数	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価についてはとくに国際性とオリジナリティの観点から、定量的評価については公表した成果の実績値から、別記の総合的判断が妥当であると考ええる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続してゆきたいと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 埴輪に認められる赤色顔料についての基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 埴輪に認められる赤色顔料について、粒子の形態分類や組成による分類を行い、編年や地域性を検討することを目的として実施する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 志賀 智史
【スタッフ】			
【主な成果】 古墳時代以前の赤色顔料には朱とベンガラが知られており、墳墓ではこの二種類の赤色顔料が使い分けられることが多い。今回対象とした埴輪に認められる赤色顔料は、従来目視によりベンガラが多いとされてきたが、本研究から科学的にもベンガラであることが確定した。さらに出土ベンガラには直径 $1\mu\text{m}$ のパイプ状粒子を含むものと、これを含まないものに大別されているが、埴輪のベンガラはパイプ状粒子を含むベンガラを用いる地域と、これを含まないベンガラを用いる地域があることがわかった。この地域性は墳墓主体部内で使用されていたベンガラの地域性と概ね合致していた。			
【年度実績概要】 今年度は東日本を中心に調査をおこなった。埴輪に認められる赤色顔料は、全てベンガラであった。出土ベンガラは直径 $1\mu\text{m}$ のパイプ状粒子を含むもの(以下、ベンガラ(P))と、これを含まないもの(以下、ベンガラ(非P))に大別できるが、今回調査をおこなったものは全てベンガラ(P)と考えられた。 ベンガラ(P)に含まれるパイプ状粒子については、先行研究により湖沼に生息する鉄酸化細菌を焼成して得られたものであることが判明している。ベンガラ(非P)については、現段階では原料が何であったのか明らかではない。			
【実績値】 ○調査遺跡数 8 遺跡 ○収集資料数 約 150 点 ○論文掲載数 1 件 志賀智史 2011「森添遺跡出土の赤色顔料について」『森添遺跡発掘調査報告書』三重県度会町教育委員会			
顕微鏡で確認された赤色顔料			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 同様な視点での研究は無く、一定の研究成果も認められる。継続していくべきテーマである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数			
判定	A	A	A			
備考						

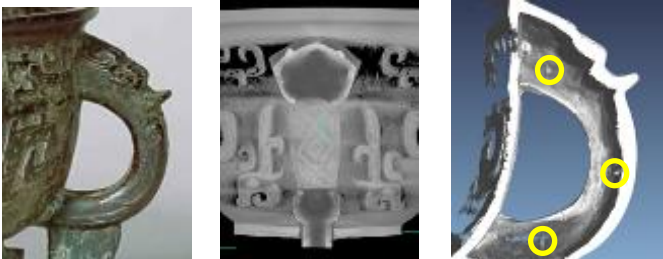
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	考古学的な視点に立った埴輪の赤色顔料についてのはじめての調査研究である。これまで知られていなかった地域性が明らかになりつつある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	地域性があることが明らかになりつつある点は大きな成果であり、目的を順調に達成しているといえる。しかし、編年については、現時点では変化は認められなかった。 平成23年度以降も出土赤色顔料についての研究を継続する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進								
プロジェクト名称	10) X線CTスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析 (科学研究費補助金) ((5) - ① - ii)								
【事業概要】 九州国立博物館において、X線CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の状態や製作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。									
【担当部課】	博物館科学課								
【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津節生								
【スタッフ】 森田 稔 (副館長)、河野一隆 (企画課文化交流展室長)、市元 壘 (企画課研究員)、鳥越俊行 (博物館科学課主任研究員)									
【主な成果】 泉屋博古館の所蔵品を中心にX線CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果を基に、伝統的な鑄造技術者に協力を得て、鑄造実験を実施した。さらに、研究成果を内外の研究者に公開して研究会を実施した。									
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1年間で約60点のCT調査や精密三次元計測を実施した。得られた成果は、文化交流展での展示の際に活用している。 本研究は、X線CTスキャナならびに3次元計測器を使用して得られたデジタルデータを蓄積しアーカイブを構築し、そのデータを活用した共同研究・博物館展示の可能性を探るものである。とくに、X線CTスキャナによる調査では複雑な形状の青銅器の内部構造の解析、精密3次元計測調査では青銅器表面に施文された精緻な文様の記録などをおこなった。また、研究成果を検証する鑄造実験も実施した。 その結果、中国古代青銅器の製作技術を非接触非破壊で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会とアジア鑄造技術史学会で発表した。また、論文を日本中国考古学会、泉屋博古館紀要で発表した。									
 X線CTによる中国古代青銅器鑄造技術解明の調査									
【実績値】 <table border="0"> <tr> <td>○調査回数</td><td>60回</td></tr> <tr> <td>○資料収集数</td><td>60点</td></tr> <tr> <td>○学会研究会等発表数</td><td>2件</td></tr> <tr> <td>○論文掲載数</td><td>2件</td></tr> </table>		○調査回数	60回	○資料収集数	60点	○学会研究会等発表数	2件	○論文掲載数	2件
○調査回数	60回								
○資料収集数	60点								
○学会研究会等発表数	2件								
○論文掲載数	2件								
 中国古代青銅器（西周前期）における鑄造技術の解明（取っ手部分）									
【備考】									

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 独創性と効率性では、国内外の研究者から注目を集めた。発展性では取得したデジタルデータから三次元プリンタで正確な複製品を作製する技術確立すると共に、このデジタル複製品を活用して鋳造実験による研究結果の検証を実施することができた。正確性では高精度を保った三次元計測を行い、さらにデジタルデータを蓄積している。今後は、展示への活用、デジタルデータの国際的な共同利用に向けて研究を進めたい。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
備考 日本文化財科学会には約 500 名の研究者が参加した。またアジア鋳造技術史学会には韓国・日本の研究者が約 200 名参加した。また、日本中国考古学会、泉屋博古館紀要に論文を発表した。さらに、内外の研究者が参加して研究成果を検証するための鋳造実験を行った。今後はさらに国際的な共同研究を進めたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、国内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。京都泉屋博古館との共同研究を進めながら、奈良文化財研究所・中国上海博物館・南京博物院など外部機関との連携研究も進んでいる。 23 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めると共に、展示への活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置、精密三次元計測装置等を活用しながら成果を上げることで、国内外の博物館・研究機関との連携が進みつつある。23 年度はさらに広い範囲で展示に活用したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) アジアの木地螺鈿—その源流、正倉院宝物への道をたどる— (科学研究費補助金) ((5)－①－ii)		
【事業概要】 本年度は、ベトナム、インドにて現地調査を行った。ベトナムは正倉院の螺鈿宝物の多くを占める木地螺鈿が現在でも盛んに制作されている土地であり、インドは東方アジアとイスラム圏をつなぐ狭間の位置にあり独自様式の螺鈿制作が行われているが、その具体的な様相は明らかとなっていない場所である。 また、調査の帰路、この調査成果を含めたアジアの螺鈿について、バンコク国立博物館ボランティアを対象とする講演を行った。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長 小林公治
【スタッフ】 研究代表者：小林公治（文化財課資料管理室長） 研究分担者：猪熊兼樹（東京国立博物館） 研究協力者：原田一敏（東京芸術大学）ほか			
【主な成果】 ベトナムでは、今までの調査であまり情報を得ていなかった螺鈿用の貝素材加工等について、特に具体的な情報を得ることができた。また、インド調査は現在螺鈿制作が比較的盛んにおこなわれているインド西北部、特にウダイプールの工房を中心に調査を行い、現代インドにおける螺鈿制作技術を中心とした情報が得られた。なお、成果の一部を九州国立博物館研究紀要『東風西声』第6号にて論文発表した。			
【年度実績概要】 正倉院宝物として残されている螺鈿器は技法的に木地螺鈿、漆地螺鈿、樹脂地螺鈿の三種に分類される。またその制作地については諸説あるが、木地螺鈿と樹脂地螺鈿は中国唐代に造られたものとされている。しかし、この後、この両者の技法によって螺鈿が造られることはごくまれになり、中国を含めその後の歴史は明らかとなっていない。 こうした中で、ベトナムでは19世紀頃から突如として木地螺鈿制作が盛んに行われるようになる。今年度の調査ではこうしたベトナムの木地螺鈿技術について詳細に確認し、正倉院に残る木地螺鈿と同類の技術がベトナムの木地螺鈿制作にも使われていることが理解できた。 またインドは東南アジアまでの東方アジアと西方アジアとをつなぐ接点でもあるが、その螺鈿技術についてはほぼ不明と言って良い。こうした中今回初めて調査を実施し、インドの螺鈿は、木地螺鈿と同じく象嵌技術を多用する技法と、樹脂地螺鈿のように貝文様を地に貼り付け、その段差を漆などの素材で埋めていく技法との2種が存在することを明らかにした。 なお成果の一部を、九州国立博物館研究紀要『東風西声』第6号にて「ベトナムの螺鈿」として報告した。			
【実績値】 ○調査回数 ベトナム1回、インド1回 ○収集資料数 数点 ○論文掲載数 2回 ○学会研究会等発表数 2回		  ベトナムの貝加工 インドの螺鈿制作	
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-11

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 全体的に従来の研究ではほとんど行われていない視点から、研究を実施できたと言える。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数	学会研究会等 発表数		
判定	A	B	A	A		
備考 調査対象者との関係から、収集資料を十分に収集できたとは言い難いが、それ以外については当初計画同等ないしはそれ以上の成果を上げることができたと考えている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にない新たな視点による調査成果を上げると共に、また様々な機会を通じてその成果を迅速に公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度の中国調査や外国人共同研究者を日本へ招聘し、また今年度の調査などを通して順調に計画を達成している。こうした成果を受けて、最終年度となる来年度は木地螺鈿の歴史的な中心地と考えている中国の調査を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 五胡十六国から北魏時代の出土陶俑に関する基礎研究(科学研究費補助金)((5)－①－ii)		
【事業概要】 五胡十六国から北魏時代は、隋唐社会の基盤が形成される時期であり、また日本の古墳文化を東アジア史の中で理解する上で欠くことのできない領域である。本研究では、これまで十分な考古学研究が進んでいなかった当該時期の出土資料について、調査研究をおこなうものである。主な調査対象地域は陝西省、内蒙古自治区、寧夏回族自治区、山西省である。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 市元 壘
【スタッフ】 市元壘(企画課研究員)			
【主な成果】 十六国時期から北朝早期の古墓の年代については、きわめて流動的な状況にあった。本研究は、出土陶俑の諸要素を整理するなかで、当該時期の古墓の年代について一定の見解を得ることが出来た。また、5世紀前半に華北を領有した北魏政権の文化は、十六国時期の諸政権の制度や文化と密接な関係があると判断するに至った。			
【年度実績概要】 6月には寧夏回族自治区において調査を実施した。特に固原博物館における調査では、破片資料の観察機会に多く恵まれ、陶俑の製作技法にかかわる重要な知見を得ることが出来た。また、前年度に実施した陝西省での調査成果と比較をすることで、ひとつの政権内における斉一性と地域差を明らかにすることができた。 7月には特別展「馬 アジアを駆けた2千年」において、研究成果の一部を公開した。特に古代中国における装飾馬を扱う中で、漢時代から北魏時代にいたる変遷過程を整理し、また日本の古墳文化とのつながりについても言及する機会を得た。10月には内蒙古自治区において調査を実施した。北魏時期の木棺画や剥ぎ取り壁画など画像資料の観察を通して、北魏の文化や風俗に関する新知見を得た。 12月～3月にかけては、2ヶ年に及んだ本研究の成果をまとめるべく、論文の執筆にとりかかった。			
【実績値】 ○調査回数 3回 ○収集資料数 400点 ○調査概報 1篇 ○論文掲載数 1篇 ○研究員海外派遣数 2回		 固原彭陽新集郷墓出土の陶馬 甲冑を身に着けた馬で、5世紀初頭頃の副葬と考えられる。	
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 十六国時期の研究は、そこに民族や地域性の問題を多分に含んでおり、今日のアジア文化理解を深める上で重要な領域である。しかし既往の研究は、多くが正史などの後代に編纂された漢文文献を主たる典拠としていた。本研究では出土資料という同時代資料を基軸に歴史の構築を目指したものであり、独創性や発展性はもとより、定性的評価に掲げる各観点において、高評価に値する成果を挙げることができたと考える。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	研究員海外派遣数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 調査を実施するにあたっては、対象機関と連絡を密にとりながら良好な関係を構築したことで、十分な成果を挙げることが出来た。本年度は現地調査と資料整理に力点をおいたため、学会発表は行っていないが、次年度以後、成果を発表していく予定で準備をすすめている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究史を十分に踏まえて問題点を整理し、調査研究にあたることができた。一方、当該研究では華北を主たるフィールドとしたため、華南地域の資料との比較を通して研究成果を批判的・客観的に整理し、拡充をはかることができなかった。この点については次年度以後の課題として継続して取り組んでいきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初予定していた調査対象資料のうち、主要なものについてはほぼ観察を行うことができた。また、調査資料の整理を進める中で、今後の研究につながる成果をあげることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 海の東アジアが醸成した貝と漆の文化「螺鈿」の再発見―その共通性と多様性を探る― (トヨタ財団研究助成) ((5)－①－ii)		
【事業概要】 平成20年度に開始した本研究は本年度が最終年度となる。6月に、韓国螺鈿調査、バンコクで開催されたタイ国主催漆国際会議における基調講演およびタイの螺鈿工房調査を実施したほか、沖縄の工房調査と九州大学に編集委託して、沖縄の伝統的螺鈿制作技術についての映像化事業を実施した。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室長 小林公治
【スタッフ】 研究代表者：小林公治（文化財課資料管理室長） 共同研究者：宮里正子（前那覇市歴史博物館）ほか			
【主な成果】 韓国の調査は、沖縄の螺鈿職人と共に韓国の人間国宝ほかの工房を訪問調査し、韓国螺鈿技術と沖縄のそれとの比較を含めた検討などを行った。タイでは、基調講演のほか、バンコク近郊の国営および民間螺鈿工房を訪問し、タイの螺鈿制作技術について調査した。また現在、ほとんど制作者がいない沖縄の伝統螺鈿制作について、宮城清氏の制作過程を一貫して撮影し、現在その編集作業を行っている。			
【年度実績概要】 6月の韓国螺鈿調査では、統営において長年螺鈿制作を行っている韓国人間国宝・宋芳雄氏の工房にて、その螺鈿制作について実際に調査し記録を行った。また国立民俗博物館・国立中央博物館にて韓国の螺鈿作品の調査を実施したほか、ソウル近郊の漆匠裴金龍工房でも調査を実施した。 バンコクで開催されたタイ国政府主催漆国際会議”Study of Oriental Lacquer Initiated by H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn for the Revitalization of Thai Wisdom”では本研究を含むこれまでの研究成果について、王女ほかタイ国政府関係者や海外からの会議参加者らに対して基調講演を行いまたその概要が予稿集として公表されたほか、長年の探索の結果ようやく調査が実現した国営および民間の螺鈿工房を訪問し、タイの螺鈿技術調査を実施した。このほか沖縄で王朝期以来造られてきた伝統的な螺鈿制作技術について、九州大学芸術工学部の協力を得て琉球王朝時代の代表的螺鈿である雲龍黒漆螺鈿盆の復元過程を、具体的かつ理解しやすく映像化した。 なお、成果の一部を九州国立博物館研究紀要『東風西声』第6号にて「ベトナムの螺鈿」として報告したほか、上記国際会議の成果論文集に論文を投稿中である。			
【実績値】 ○調査回数 3回 ○論文掲載数 2回 ○学会研究会等発表数 2回 ○研究員海外派遣数 2回		 韓国人間国宝 宋芳雄工房での調査風景	
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 一般的な作品調査だけでなく、同行してもらった沖縄の螺鈿職人に韓国の螺鈿技術について比較してもらい、また国内外の螺鈿制作工程の映像化など、従来の研究ではほとんど行われていない視点も含めて研究を実施できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	論文掲載数	学会研究会等 発表数	研究員海外 派遣数		
判定	A	A	A	A		
備考 調査成果の公表も含め、当初計画と同等ないしはそれ以上の成果を上げることができたと考えている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の回数は多くはないが、その中で従来にはない新たな視点による調査成果を上げると共に、様々な機会を通じてその成果を迅速に公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度までの沖縄・韓国・中国・東南アジア調査に今年度の調査成果などを含めて、その一部を公表するなど、順調に計画を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究 (5)-②-i)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課 木下史青
【スタッフ】 矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員）			
【主な成果】 展示デザインのクオリティを向上させるための設計技術や、そのデザインアイデアを実現し、維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的事例を調査した。 また以上の調査にもとづき、当館においていかなるシステムでの導入・実施が可能かを検証し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。			
【年度実績概要】 ① 東洋館耐震改修工事とともなう展示デザインおよびサイン計画 8月4日～ ※継続中（写真） ・ 低反射ガラスを使用した展示ケースの調査研究および導入。 ・ 超高演色LED（発光ダイオード）の素子および照明器具の展示照明への利用。 ② 『本館・工芸展示リニューアル』（東京国立博物館アクションプラン） ※2011年1月2日（日）～（写真） ・ 本館（重要文化財）における新たな展示システムのあり方。 ・ 展示ケースへの床からの電源供給システムと、免震装置付展示ケースの設置方法。 ③ 『館内サイン リニューアル』（東京国立博物館アクションプラン） ※2011年1月2日（日）～（写真） ・ 正門チケット売場付近の来館者誘導のためのサインのあり方。 ・ 多国語対応（日/英/中/ハングル）による、案内誘導サイン及び展示解説システムの導入			
【実績値】 ● 研究会発表件数 2回 ・ 江東区森下文化センター 講演 ・ 日本美術解剖学会 等 ● 論文掲載数 1回 ・ 『淡交 増刊号』 等 ● 他館調査 国内外多数（20館以上） ・ 三菱一号館美術館（東京） ・ 三井記念美術館（東京） ・ 汐留ミュージアム（東京） ・ 九州国立博物館（福岡・大宰府） ・ ベルリン博物館島（ベルリン） ・ モダンピナコテーク（ミュンヘン） ・ レンバッハハウス（ミュンヘン） ・ ローマンゲルマン歴史博物館（ケルン） ・ 通信/郵便美術館（フランクフルト） 等			
			
		① 新規展示ケース検討	② 漆工展示リニューアル
			
		③ 正門・売札サイン	
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 博物館における公開・展示は、最新技術の調査研究に基づいた、その時代に合った展示手法の実現と、その客観的な評価が求められる。またデザインプロセスの効率性を向上させるための設計技術や、高品質のデザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、他館における事例調査を行った。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載数	調査回数			
判定	B	B	A			
備考 調査・研究によって明らかになった展示技術・手法を、当館の特別展および平常展において、どのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、研究会・論文等で発表した。また実現可能なものについては館内の展示において実施し、撮影等の手法による記録・調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に導入を継続している、質の高い展示・照明システムにより、展示のバリエーションが広がったといえる。さらに照明器具の問題点についてメーカーと改良を進めている。具体的には次期中期計画で予定の特別展・平常展への導入・実施に向け、検討・デザインを進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、独創的アイデアの創出と技術開発および館内展示システムの充実に力を注ぎたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館美術教育に関する調査研究 ((5) - ② - iii)		
【事業概要】 当館本館 20 室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、総合文化展と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果の一部を研究会等で発表する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 今井敦
【スタッフ】 鈴木みどり（博物館教育課ボランティア室長）、神辺知加（博物館教育課教育講座室主任研究員）			
【主な成果】 本館 20 室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で 10 万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着している。鈴木はこのプログラムを博物館教育の見地から調査研究し、口頭および論文で発表を行った。			
【年度実績概要】 - 当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、スライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう!」、制作工程模型展示「悉皆金色 阿弥陀如来像ができるまで」の博物館教育事業を実施した。 - 上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践について以下のように発表した。 鈴木みどり 「博物館で伝える日本の伝統文化」（『教育研究』） 「教員の『ミュージアムリテラシー』の展開—歴史系（古美術）博物館の活用」（『科学系博物館の学校利用促進方策調査研究報告書—教員のミュージアムリテラシー向上プログラム開発—』） 「東京国立博物館のスクールプログラムとワークショップ」（東京都中学校美術教育研究会。口頭発表） 神辺知加 「博物館で行うイベントについて—『博物館でお花見を』を例に」（『博物館研究』 vol. 45）			
【実績値】 研究発表 1 回（東京都中学校美術教育研究会） 論文発表 3			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」での総合文化展と密接に関連した博物館教育事業を研究会等で報告できたことは、今後の国内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	論文本数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館本館 20 室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」では、博物館のガイダンス機能にくわえ、各種レクチャーや体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開している。これは当館の博物館教育を推進する上で大きな成果といえる。また、この事業を通して、博物館教育の理論と実践について、担当研究員が研究し、その内容を広く内外に発信できたと。今後もさらに研究を続け、博物館美術教育に関する情報発信を精力的に行ってゆきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術教育に関する調査研究は、博物館教育課の研究員を中心に概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財とそれらに関する調査研究の成果を活用しながら、博物館美術教育理論の構築、ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－②－iii)		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務情報の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理および蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課 村田良二
【スタッフ】 村田良二（博物館情報課情報管理室長）、佐藤祐介（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、課題を抽出するとともに随時改善を重ねて性能向上を図った。また、修理関連業務の支援として、鑑査会議管理機能における修理関連機能の運用を開始し、文化財収蔵場所環境情報管理システムとの連携を図った。			
【年度実績概要】 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、運用経験から改善のための課題を抽出した。これらの課題については、随時システムを更新することにより迅速に対応した。特に、定型文書の出力についてきめ細かい改善を積み重ねた。 鑑査会議管理機能においては、昨年度実装した修理議案機能について運用を開始し、随時改善を行った。 他システムとの連携機能も強化し、文化財移動情報登録システムと連動した所在情報の一元管理、文化財収蔵場所環境情報管理システムと連動した保存環境情報の連携、画像管理システムと連動した収蔵品画像データの連携を実現した。			
 収蔵品管理システム (プロトタイプ)			
【実績値】 作品データ件数 182,980 件 平常展データ件数 2,508 件 鑑査会議データ件数 22 件 貸与データ件数 655 件 ○研究会等での発表 2 件 村田良二「ミュージアム資料情報構造化モデル」(南山大学人類学博物館シンポジウム) 平成 22 年 7 月 24 日 村田良二「人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える—MLA の立場から」(第 89 回人文科学とコンピュータ研究会) 平成 23 年 1 月 22 日 ○論文等掲載数 2 件 村田良二「ミュージアム資料情報構造化モデル」, 南山大学人類学博物館シンポジウム『博物館資料の文化資源化』発表要旨, 南山大学, 平成 22 年 7 月 24 日 村田良二「人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える—MLA の立場から」, 第 89 回人文科学とコンピュータ研究会 発表要旨, 平成 23 年 1 月 22 日			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 博物館のシステムに必要な機能を着実に開発しており、業務の円滑化と情報の効果的な蓄積につながっている。最新の技術も取り入れており、博物館におけるシステムのあり方を先導的に示すものとなっている。						

2. 定量的評価

観点	収集データ 件数	研究会等 発表件数	論文掲載数			
判定	A	A	A			
備考 効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れのなかで効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積を行えることが確認された。また各種外部システムとの連携により、収蔵品データを軸としてさらに発展的・総合的な情報システムへの展望が得られた。今後は未実装の業務支援機能の開発とともに、これまでに得られた知見からより高度なシステム設計の検討を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者との連携をとりながらシステム開発を継続し、博物館におけるシステムの参照実装となるよう、さらに調査研究を進めていく。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-4

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査研究の推進		
プロジェクト名称	4) 凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究((5)－②－i)		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と協同で研究する。平成19年度から「国宝 聖徳太子絵伝」「国宝 灌頂幡」「重要文化財 洛中洛外図 舟木本」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアム・シアターにおけるコンテンツの公開を実施している。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上 洋一
【スタッフ】 田良島 哲（調査研究課書跡・歴史室長）			
【主な成果】 ＊ 「洛中洛外図 舟木本」のデータをもとにした、新しいシナリオ2件（「京の政」「京のかぶき」）を作成し、平成23年1月から公開している。			
【年度実績概要】 ＊ 新規公開コンテンツ 2件 ➤ 京の政 江戸時代前期の幕府の権力と天皇家との関係を、洛中洛外図の中で読み解いた。 ➤ 京のかぶき 歌舞伎の語源である「かぶき者」の姿と初期の歌舞伎の有様を洛中洛外図の中で紹介した。			
【実績値】 新規コンテンツ 2件			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ作成					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は新規のアーカイビング作業は行わなかったが、既存のコンテンツを素材にした応用を比較的スムーズに行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新たな文化財の公開手法を開発するという点で、3年間の共同研究は十分な成果をあげたと言える。引き続き、アーカイブの方法も含めたデータの蓄積と活用に関する研究を行うとともに、来館者の反応を確かめながら、公開方法についてさらに研究を進めることが必要だと考えられる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラム-ハンズオンとワークショップを中心に (5)－②－iii)		
【事業概要】 「平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備事業」により、盲学校に向けたスクールプログラムの本格実施を 23 年度以降に行うための基盤事業。スクールプログラムの企画開発と教員への広報、盲学校の児童・生徒に対応するためのボランティアの育成を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 今井敦
【スタッフ】 鈴木みどり(博物館教育課ボランティア室長)、藤田千織(博物館教育課教育普及室研究員)、神辺知加(博物館教育課教育講座室主任研究員)、池内一誠(九州国立博物館交流課主任研究員)			
【主な成果】 盲学校教員と有識者による委員会において、ハンズオン教材とプログラム開発の実施、バリアフリー対応のボランティアに対する研修会と連携盲学校を対象とした実践を継続的に行っている。今後、盲学校対応のためのスクールプログラムの冊子を作成し、全国盲学校教員に向けた研修会を実施することで、次年度以降の本格受け入れにつなげる計画である。			
【年度実績概要】 ①盲学校および視覚障がい者の博物館対応の有識者による委員会を通じ、ハンズオン教材の開発、プログラムの企画開発を行った。 ②当館生涯学習ボランティアのうち、バリアフリー対応に特化したボランティア 22 名に対し、継続的に研修を行い、視覚障がい児童・生徒に対する理解と経験を深めた。(図 1) ③八王子盲学校、文京盲学校との連携により、学校における事前授業、博物館での見学プログラムを実施した。(図 2・3) ④盲学校のためのスクールプログラムを作成し、全国盲学校教員に向けた研修会を実施した。			
図 1			
			
図 2			
			
図 3			
			
【実績値】 ・委員会 5 回 ・ボランティア研修 12 回 ・盲学校における事前授業 2 回 対応生徒 8 人 ・盲学校の見学対応 2 回 対応生徒 9 人 ・バリアフリーボランティア 22 人 ・教員研修会 1 回 参加者数 36 人			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
備考 国立博物館としての公共性から、障がいをもつ人々への対応は、ソフト、ハードともに改善していく必要があり、館全体としてもバリアフリー化に取り組んでいる。本事業では、対応する人材育成やプログラム開発などのソフト面から、積極的に活動を行っている。 また、視覚障がい者の対応の中でも、盲学校を焦点にあてたスクールプログラムの開発は当館独自の視点であり、全国の博物館でも特筆すべきものである。来年度以降の本格実施にあたり、継続性や発展性をもった事業である。						

2. 定量的評価

観点	委員会数	ボランティア研修数	盲学校事前授業数	盲学校見学対応数	バリアフリーボランティア数	教員研修会参加者数
判定	A	A	A	A	A	A
備考 計画に沿って実行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に委員会およびボランティア研修を行い、質の高い教材開発、プログラム開発を行っている。また、ボランティア研修においては、着実に育成を行い、実践を重ねている。次年度の盲学校受け入れに向けて、教員研修会を行い、具体的な教員への広報や受け入れ準備を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業はその進捗度、質の高さからも、堅調に実現した。計画に沿って実施し、来年度以降の盲学校の本格的受け入れに向けて、基盤作りを行うことができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究 ((5)-②-ii)		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムに関する調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 久保智康
【スタッフ】 山田奨治 (客員研究員)			
【主な成果】 文化財情報システムの問題点を整理し、運用ソフトを全面的に更新 既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステムを構築 ウェブサイトのコンテンツ充実のための検討			
【年度実績概要】 ・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における現状調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・SEと共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出、見直しを行い、運用ソフトの全面更新を行なった。 ・e-国宝のための国宝・重要文化財高精細画像コンテンツの拡充の検討を行った。 ・特別観覧への対応を見越して、既存の収蔵品高精細画像のファイリングシステムを構築した ・重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。			
【実績値】 ・システムの現状調査 6回 ・システム検討会 11回 ・ウェブサイトコンテンツの検討 6回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 文化財情報システムを全面更新し、研究業務、特別観覧業務の円滑化が各段に進んだ。 当館のウェブサイトは、コンテンツの豊富さ（収蔵品データベースなど）から定評があるが、さらに多くのページで質の充実をはかった。						

2. 定量的評価

観点	システム 検討会	システム 現状調査	ウェブサイト コンテンツの検討			
判定	A	A	A			
備考 システムとウェブサイト・コンテンツの検討を随時行い、定期的な検討会を実施した（計11回）。 特別観覧業務の作品原板提供の全面デジタル化に備え、1000カット以上に及ぶ既存高精細画像のファイリングシステムを構築できた。 ウェブサイトにおける重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加、メールマガジンの配信などの充実をはかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財情報システムを更新し、ウェブサイトも質・量ともに格段の充実をはかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算をフルに活用し、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている。特に4館共通のe-国宝に向けてのコンテンツ整備の達成度はきわめて高い。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けての調査研究 ((5)-②)		
【事業概要】			
①室町時代以前に製作された袈裟を中心に、袈裟を着用した肖像画（頂相）・関連する古文書などの資料を、広く調査・研究する。 ②袈裟については綿密な調査と顕微鏡撮影を行い、詳細な作品調書を作成する。 ③近年世界で主流となっている染織の織組織分析の基礎をまとめた用語集を作成する。 ④展覧会にあわせて日英二ヶ国語表記の図録を作成し、国際シンポジウムを開催することにより、研究成果を広く発信する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 山川 暁
【スタッフ】			
モニカ・ベーテ（調査員） 吉田雅子（調査員）			
【主な成果】			
①調査の過程で、南北朝時代を代表する禅僧である夢窓疎石所用の袈裟（天龍寺蔵）を見だし、各種メディアにて報道された結果、袈裟についての関心を喚起した。 ②特別展覧会「高僧と袈裟」を開催し、日本に伝えられた中世染織の豊かさを広く紹介するとともに、調査データ・織組織分析用語集・論文を盛り込んだ日英二ヶ国語表記による展覧会図録を作成した。 ③日本・韓国・中国の研究者による国際シンポジウムを開催し、国際的な学術交流を実現した。			
【年度実績概要】			
特別展覧会の実施年度であるため、データ確認および顕微鏡撮影のための追加調査を主に実施した。その中で、新出の夢窓疎石着用の袈裟について事前記者発表を行い、多くのメディアに取り上げられ、身近ではない袈裟についての関心を喚起した。 昨年度遅れ気味であったデータベースの入力に傾注するとともに、調査作品から出品作品 121 点を選定し、展示計画および展覧会図録の作成にあたった。展覧会は日本の仏教史を袈裟を通して辿る構成とし、奈良時代から室町時代初期までの作例を取り上げ、展覧会場を一巡することで、東アジアの織物の発展を体感できるよう努めた。 本研究は、袈裟という製作年代を類推できる作品群を取り上げ、織物の構造と文様の分析を行い、東アジア染織の基準作についての情報を公開することを主眼とするが、それを展覧会として多くの観客に分かりやすく提示することは容易ではない。そこで、ワークシート「袈裟ってなあに？」を作成し、その中に組織分析の重要性を盛り込んだ。会場では、作品ケースに作品解説とともに織組織の拡大写真を示し、織組織の分析用語については会場にパネル掲示した。また会期中には、関連土曜講座を三回（10月9日・16日、11月6日）開催した。 図録では、作品写真とともにこれまでに蓄積してきたデータを織物の分析結果と顕微鏡による 10 倍拡大画像という形で併記し、織組織分析の基礎をまとめた用語集、作品解説、ふたつの論文（山川暁「ころもが語るふたつの歴史」・モニカ・ベーテ「東アジアの顕文紗」）を、すべて日英二ヶ国語によって掲載した。 11月13日には関連国際シンポジウム「染織にみる東アジア交流」を開催し、日本・中国・韓国の研究者が集い、最新の情報による学術交流を行った。			
【実績値】			
①写真撮影 12 件。 ②袈裟の調査および顕微鏡撮影、約 50 件。 ③袈裟データベースおよび裂データベースの作成、92 件。 ④これまでの調査に基づく論文、2 件。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	A	A	A	S
備考 中世に遡る袈裟は脆弱化が進んでおり、現時点での正確な調査は、今後の保存策の検討において重要な意味を持っている。染織史および仏教史という複眼的な視座からの袈裟の研究はこれまで全くないうえ、中世以前の袈裟を集めた展覧会も初めてであり、新たな研究分野を提示することができたと考える。展示された袈裟の多くは所用者が判明することから、これから東アジア染織品の基準作となるものである。図録に示した基礎データはすべて、追加検証ができるよう、分析結果とともに拡大画像を同倍率で掲載した。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影数	顕微鏡撮影数	データベース作成数	論文	
判定	A	A	S	S	A	
備考 特別展覧会の実施年度であり、データ確認および顕微鏡撮影のための追加調査を主に実施した。昨年度遅れ気味であったデータベースの入力に傾注し、成果の多くを論文とともに作品分析として図録に反映した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中世以前の染織品が伝世品としてかなりの量伝えられているのは、染織の先進地域であった東アジア文化圏では日本だけである。これまで、法隆寺や正倉院に伝来した古代の染織品については紹介されてきたが、鎌倉時代・南北朝時代といった中世前半期の染織品がまとめて紹介される機会は、なかったと言っても過言ではない。 このたびの「高僧と袈裟」展によって紹介された袈裟の多くは、この中世前半期の作品群であり、いずれも所用者の名とともに伝えられることから製作時期が類推でき、基準作となりうる作例ばかりである。その研究は、日本のみならず東アジア染織史の発展を考えるうえで、極めて重要な意味を持っている。世界的に見ても重要な作品群を綿密に調査し、世界中の研究者と共有しうる分析データを公開することはこれまでも望まれていた。 その実現に向けて取り組んできた業務であったが、本年度はそれを自主展覧会という形で公開し、調査データの共有、織組織分析手法の共有、関連論文を含んだ日英二ヶ国語による図録を発刊した。さらに、日本・韓国・中国の染織研究者が集う公開シンポジウムを開催したことにより、中世の東アジア染織品に対する三ヶ国の研究状況を互いに確認し、今後の共同研究に向けての第一歩となる成果を得た。 計画の最終年度として予定以上の成果があったと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査結果をデータベース化した。 展覧会を実現し、調査結果を反映した二ヶ国語による図録を作成した。 国際シンポジウムを開催し、染織研究者の学術交流を実現し、今後の共同研究へ向けての基礎を築いた。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別展覧会「中国の書画（仮）」にむけて旧上野コレクションと関連作品の調査研究を行う（(5)-②-ix）		
【事業概要】 上野コレクションの明清の書画を中心に、関連する作品を調査し、その成果を特別展覧会「中国の書画（仮称）」（平成23年1月8日～2月20日）に反映させ、特別展覧会を充実させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 (当館研究者) 赤尾栄慶(上席研究員)、西上 実(学芸部長)、呉 孟晋(研究員)			
【主な成果】 上野コレクション中の作品を検討し、特別展覧会に出陳すべき作品を選定し、補完すべき作品の検討を行った。これに基づき、他に所蔵される作品の調査を行い、撮影も実施した。その結果、上野コレクションから40件、新収品1件を含む館蔵品が29件、上野家所蔵品18件、個人蔵や他機関の所蔵品が26件、合わせて113件の作品を選定し、特別展覧会を開催した。			
【年度実績概要】 特別展覧会開催のために、明清時代の書画を中心に法帖など書跡76件、絵画87件、合わせて163件からなる上野コレクションの中から、調査して展覧会に出陳すべき作品を40件選定し、上野コレクション以外の館蔵品からは29件を選定した。これに加えて、上野家及び個人や他機関に所蔵されている作品を調査し、上野家から18件、個人蔵や他機関所蔵品から26件を選定し、テーマごとに特別展覧会に出陳する作品を選定した。			
【実績値】 事前の調査に基づいて、上野コレクションから40件、新収品1件を含む館蔵品が29件、上野家所蔵品18件、個人蔵や他機関の所蔵品が26件、合わせて113件の作品を選定した。さらに特別展覧会の名称も「中国の書画（仮称）」から「筆墨精神—中国書画の世界—」に改め、特別展覧会の構成も「典籍の世界—テキストを写す—」「法帖の世界—名筆をめぐる—」「文人の世界Ⅰ—宋～明時代—」「文人の世界Ⅱ—清～民国時代—」「名品と収集余光」という5テーマとし、上野コレクションの特徴と書画の時代的な流れが理解できるように組み立てた。 研究書としても使えるように配慮した解説付き目録も作成した。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 昭和35年(1960)にご寄贈を受けた上野コレクションを顕彰することができ、上野コレクションを中心とした中国書画の流れを理解しやすいように展示した。						

2. 定量的評価

観点	特別展覧会開催					
判定	A					
備考 総入場者数 37,535人(目標値30,000人) 目録販売数 4,204冊(8.9人に1冊)						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事前の調査に基づいて、上野コレクションを中心に、国宝10件、重要文化財23件、重要美術品2件を含む113件の作品を選定した。さらに内容を勘案し、特別展覧会の名称も「中国の書画(仮称)」から「筆墨精神—中国書画の世界—」に改め、特別展覧会の構成も「典籍の世界—テキストを写す—」「法帖の世界—名筆をめぐる—」「文人の世界Ⅰ—宋～明時代—」「文人の世界Ⅱ—清～民国時代—」「名品と収集余光」という5テーマとした。 展示に際しては、上野コレクションの特徴と中国の写本を含む書画の時代的な流れが理解できるように配慮した。また研究書としても使えるように配慮した解説付き目録も作成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事前調査を踏まえ、個人及び他機関との出陳交渉を行い、質の高い特別展覧会を開催した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 特別展観「上田秋成」の開催に向けて、日本近世文学会と共同で調査研究を行う。((5)-②-iv)
【事業概要】 平成22年7月17日(土)から同年8月29日(日)まで開催される特別展観 没後200年記念「上田秋成」を視野に入れ、日本近世文学会と協力し、上田秋成と周辺の画家・文人に関する調査研究を行う。あわせて、博物館収蔵品の文化財に関する情報を蓄積し、得られた成果を展観や講座、誌上で公開し、広く還元することを目的とする。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 水谷亜希
【スタッフ】 〔京都国立博物館〕 山下善也(連携協力室長)、狩野博幸(客員研究員) 〔日本近世文学会〕 稲田篤信(首都大学東京教授)、木越治(上智大学教授)、長島弘明(東京大学教授)、飯倉洋一(大阪大学教授)	
【主な成果】 日本近世文学会と協力し、新発見12件をふくむ上田秋成関連の文化財の調査、作品情報の整理を行い、その成果を展観の展示・図録に反映させるとともに、報道発表や講演会などを通じて広く発信した。	
【年度実績概要】 ・展観にかかわる収蔵品の再調査を行い、得られた情報を蓄積した。また、日本近世文学会の稲田篤信氏、木越治氏、長島弘明氏、飯倉洋一氏と打合せを重ね、日本近世文学会が調査した秋成に関する情報と、京都国立博物館が調査した秋成ゆかりの画人・文人の作品に関する情報を共有、それに基づき展観の作品選定、展示、解説執筆を行った。展観の構成、作品選定に関しては狩野博幸氏(客員研究員)の助言を受けた。 ・展観の開催にあわせて小冊子「没後200年記念 上田秋成」(京都国立博物館編)を発行・販売し、会期後には図録「没後200年記念 上田秋成」(日本近世文学会編)を作成、日本近世文学会会員に配布した。 ・展観に関連して下記の講座を行い、研究成果を広く公開した。 ☐ 連続講座「いま、京都で秋成を読む。」(6月12日、6月19日、同志社女子大学主催、京都国立博物館後援) ☐ 夏期講座「文学と美術」(長島弘明「上田秋成の画賛」、7月29日、京都国立博物館主催) ☐ 土曜講座(7月24日、31日、8月21日、京都国立博物館主催) ・京都新聞の連載記事「畸人 秋成の世界」で4月7日から7月21日にかけて、高田衛氏(東京都立大学名誉教授)、中野三敏氏(九州大学名誉教授)、廣瀬千紗子氏(同志社女子大教授)らと展観関係者あわせて9名による連載15回を行い、研究成果の公表と展観の周知につとめた。	
【実績値】 ・調査資料点数 108件(絵画24件、秋成資料84件) ・著作数 2冊(小冊子、図録) ・講座聴講人数 約1,330名(連続講座 約600名、夏期講座 約240名、土曜講座 約490名) ・新聞連載 15回(「畸人 秋成の世界」、京都新聞)	
【備考】	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 上田秋成の没後200年を機に、一般にはあまり知られていなかった秋成の広範囲な創作活動と、同時代の人々との交流を紹介することができた。 日本近世文学会と協力することで、博物館主催の企画の他に、西福寺での秋成忌にあわせた講演・演奏会、同志社女子大学での連続講演会など、館外の催しものを通じて展覧に対する地域住民の関心を高めることができた。また、文学と美術の両側面から、この時代の文化・芸術の様子をさぐる独創性の高い展覧となったことは大きな成果であり、両者の協力は、今後の研究活動にもつながる有意義な人的交流となった。 展覧をきっかけとして、観覧者から重要な新出資料に関する情報が寄せられ、今後の秋成研究に大いに貢献する収穫となった。						

2. 定量的評価

観点	調査資料点数	著作数	講座聴講人数	新聞連載		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究は順調に進展し、特別展覧「上田秋成」では、今年度の調査だけでなく、各研究者が長年蓄積してきた調査・研究成果を、実物の展示とともに一般に公開できる大きな機会となった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会計画の中で、調査研究は順調に進めることができた。予定通り、特別展覧「上田秋成」にて調査の結果を広く公開し、計画を完遂することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)特集陳列「園田湖城」の開催に向けて、篆刻資料の調査研究を行う		
【事業概要】 大正・昭和期に京都を拠点に活動した篆刻家・園田湖城（1886－1968）の篆刻作品や書跡作品、関連資料の調査を行い、特集陳列「園田湖城」展にてその成果を公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西上 実
【スタッフ】 赤尾栄慶（上席研究員）、呉 孟晋（研究員）			
【主な成果】 園田湖城は、日本の篆刻史にその名を刻みながらも近年その業績が評価されることが少なかったため、篆刻や書などの作品や関連資料などの基礎的な調査に重点をおき、その活動の全体像を明らかにした。とくに、大正期の湖城は篆刻家として出発するにあたり、富岡鉄斎や橋本関雪ら京都の書画家たちと密接な交流をもっており、近代京都における書画篆刻が一体となった「文人」文化の拡がりを確認できた。			
【年度実績概要】 ・園田湖城作品・資料にかんする調査 関西地方と関東地方を中心に、個人や美術館・博物館（和泉市久保惣記念美術館、清荒神清澄寺鉄斎美術館、白沙村莊橋本関雪記念館、日本習字教育財団観峰館、東京国立博物館など）31ヶ所、のべ35回にわたる調査を実施した。昭和44年（1969）の琵琶湖文化館（大津市）での遺作展以降、湖城作品・資料の多くは門弟を含む個人が分散して所蔵していたが、本調査により99点の篆刻作品を確認した。また、湖城旧蔵の日中の印譜や秦漢古印、中国書画などについても調査を行い、湖城が作品制作の際に参考としたこれらの文物から湖城作品について多面的な理解の助けとした。 ・園田湖城の業績にかんする研究 上記の調査により、日本篆刻史における園田湖城の位置づけと、湖城をとおして近代京都における書画篆刻一体の文人文化の様相が明らかになった。湖城は中国美術に傾倒するなかで、呉昌碩に私淑した中国味あふれる剛健な作風を確立し、篆刻家としての地位を確立した。その一方で「同風印社」結成や戦後の日展審査員就任など、篆刻界の活性化につとめた側面も評価されるべきである。また、富岡鉄斎や橋本関雪ら著名な画家たちと交流は中国美術愛好という共通の趣味をとおしてであり、近年京町家の「看板書き」として評価の気運がある小川鶴斎との交流も明らかとなった。こうした成果は特集陳列での展示とその図録にて公開した。 ・特集陳列関連講演・講座およびワークショップ 外部での講演として、西上が園田湖城ゆかりの京都書道連盟にて湖城の篆刻芸術について紹介した（2011年1月8日）。また、本事業をとおして構築した篆刻家および篆刻研究者とのネットワークを活用して、特集陳列「園田湖城」展開催期間中に外部講師による当館土曜講座（2011年2月12日於京都女子大学）や、ディスカッション形式のワークショップ（2011年1月23日於当館）を開催。来場者はそれぞれ、210名、51名であり、ともに収容人員を上回る多数の来場者でにぎわった。 ・園田湖城関連資料・作品の寄贈・寄託 調査の進展に伴って明らかになった湖城作品のうち数点が寄贈・寄託され、特集陳列以後の展示にも活用が期待できる。寄贈されたのは湖城作品印譜で、寄託作品は書・画・印影合装の一幅や湖城宛て書簡など。とくに合装の一幅は、湖城の早期の活動で拠点とした平安印会の会員たちとの交流を示すうえで重要な作品となる。			
【実績値】 （刊行物）特集陳列図録1冊 （講演・講座）3回（2011年1月於京都書道連盟など） （調査）調査地：31ヶ所 回数：のべ35回 件数：320点 （寄贈・寄託）寄贈：園田湖城印譜1件 寄託：湖城関連書画作品など2件			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 園田湖城生誕125年(2011年)にあわせた事業であり、かつ特別展覧会「筆墨精神—中国書画の世界」展との同時開催により、書画篆刻を不可分の芸術と考える中国美術の全体像を提示できた。通常の篆刻の展示では印章作品を陳列するにとどまるが、本陳列では富岡鉄斎や橋本雪ら書画家のために制作した印章とそれが捺された絵画作品を同時に展示しただけではなく、各所に四散していた湖城旧蔵の中国文物も合わせて展示したことで、湖城芸術の背景にまで踏み込んだ独創性を志向した内容を目指した。また、本事業は京都で活動した篆刻家に焦点をあてた企画であるゆえ、京都文化の展示・研究を掲げる当館の活動方針に適い、今後も京都に発展性と継続性をみることができる。						

2. 定量的評価

観点	刊行物	講演・講座数	調査回数	調査件数	寄託・寄贈 件数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 特集陳列では図録を制作しない場合も多いが、調査公開の観点から約70頁で構成した図録を刊行した。講演・講座数の3回は特集陳列としては多く、寄贈・寄託作品も今後の展示に活用が見込まれる件数を確保した。こうした成果をもたらしたのが、特集陳列では類を見ない調査の規模の大きさである。その回数と件数は篆刻作品の調査・研究・展示という当館では初の試みゆえに基礎資料収集から開始したことにもよるが、実証的な手法にもとづいた悉皆調査を志向したゆえの結果である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査・研究の成果を特集陳列の展示とその刊行物である図録に十全に反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当該年度にて調査・研究にもとづく特集陳列を終えた。その成果は、今後の篆刻作品の展示にあたり参考に供することができる。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 特別展覧会「法然」の開催に向けて、浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究を行う		
【事業概要】 浄土宗寺院所蔵文化財の調査研究をし、その成果を特別展覧会「法然—生涯と美術—」（平成 23 年 3 月 26 日～5 月 8 日）に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 若杉準治
【スタッフ】 赤尾栄慶 浅湫毅 大原嘉豊 久保智康 呉孟晋 永島明子 羽田聡 山川暁 若杉準治			
【主な成果】 特別展覧会「法然—生涯と美術—」の充実のために、従来より知られている資料については、より学術的に確かな位置づけを行うための調査研究を行い、さらに従来知られていない資料を得た。 また画像の入手が困難な作品について、新たに撮影を行い高質の展覧会図録を制作した。			
【年度実績概要】 ・「法然—生涯と美術—」という展覧会テーマに関連する作品のリストアップを行い、個々に資料調査を行い、展覧会出品候補作品の絞り込みを行った ・展覧会の出品候補作品について、従来資料の乏しかった作品について、展示の可否および展示方法等を検討するため、現地調査及び写真撮影を行った。 大念寺 阿弥陀如来立像及び像内納入品 興善寺 阿弥陀如来立像 ・出品の決定した作品について、事前に搬入し、詳細な調査を行った。 知恩院 二祖曼陀羅図 浄土宗 阿弥陀如来立像 ・展示の充実のため、知恩院において、法然上人像のヴァリエーションを調査し、従来全く知られることのなかった「自画像」と伝える画像や、法然上人の本地身が勢至菩薩であることを視覚的に示す宝瓶御影などの新出資料を得た。			
【実績値】 刊行物 : 特別展覧会「法然—生涯と美術—」展覧会図録刊行			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行物					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果を特別展覧会にて公開することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会準備において、調査研究を順調に進めることができ、特別展覧会「法然—生涯と美術」を開催することができた。展覧会は翌年度に渡って開催される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 特別展覧会「細川家の至宝」(平成23年度)の開催に向けて永青文庫と共同で関連作品の調査研究を行う		
【事業概要】 東京・目白に位置する永青文庫は、熊本藩主であった細川家に伝来してきた文化財を保護するために設立されたもので、そのコレクションは8万件にものぼり、国宝、重要文化財に指定されたものも数多い。本計画は、これら宝物をあらためて調査した上で、初代細川藤孝(幽斎)ゆかりの京都の地で展覧会として結実させ、広く一般に公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 浅湫毅
【スタッフ】 西上実(学芸部長)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、赤尾栄慶(上席研究員)、羽田聡(研究員)、中村康(文化財管理監)、久保智康(工芸室長)、尾野善裕(主任研究員)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、村上隆(保存修理指導室長)、呉孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエート・フェロー)			
【主な成果】 本展覧会は東京、京都、九州の各国立博物館を巡回する。京都においては平成23年度秋に開催予定であるが、すでに東京展は平成22年春より開催された。そのため基本的な宝物調査は21年度中に終了している。本年度の成果としては、永青文庫に残されている資料を博捜することにより、近代にあらたにコレクションに加えられた作品が、どのような経緯で入手されたのかという点がより明らかとなるとともに、次年度の当館における展示に際して生かしうるあらたな情報を入手することが出来た。また、東京展の開催にあわせ刊行された図録に、各研究員が分担して執筆にあたったとともに、京都展のための補足調査および、永青文庫との打ち合わせを行った。			
【年度実績概要】 上でも述べたように、本展覧会の開催は京都国立博物館においては平成23年10月からであるが、東京国立博物館を最初の巡回地として、すでに平成22年4月より開催された。巡回先の各館で、出品作品は7割が共通し、残りの3割は異動があり、開催地それぞれで個性を出すように構成されているが、図録は共通のものとした。その結果、東京展の開催に合わせて図録を出す必要があり、基本的な調査は平成21年度中に終了している。したがって本年度の主な成果としては、図録に浅湫が概説を執筆し、各研究員が作品解説を分担して執筆した。また、東京展開催中に出品作品の補足調査をおこなうとともに、次年度に開催する京都展における出品作品を最終確定するとともに、展示レイアウトの基本プランを作成した。			
【実績値】 図録の刊行『細川家の至宝 一珠玉の永青文庫コレクション』 4月 同書概説 浅湫毅が「宝慶寺から請来された石仏群―細川護立と中国彫刻」と題して執筆した。 作品解説 各研究員が出品作品のうち97作品について解説執筆を行った 東京展開最中に作品の補足調査をのべ2回行った。 永青文庫において展示作品に関する打ち合わせを1回行った。			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
適時性：近年の歴史（とくに戦国時代）に関する一般の関心の高まりにかなうものと考えられる。 独創性：熊本藩主のイメージが強い細川家であるが、初代が頭角を表したのは京都・長岡京市の勝龍寺城を根拠としていた時代であり、細川家と京都とのゆかりは深い。京都展では、京都と細川家のゆかりを全面に押し出した作品選定となっており、これまで数多く開催されてきた細川家関連の展覧会でも、これまでにない構成となっている。 発展性・継続性：本展に関連する調査で永青文庫と良好な関係が築かれ、将来へと発展しうる。 効率性：各研究員が多忙を極める中で効果的な調査及び展覧会の企画ができた。 正確性：永青文庫コレクションに対し、学問的により正確な位置づけを行うことができた。 各項目を以上の観点から判定した。						

2. 定量的評価

観点	執筆					
判定	A					
図録の執筆においては、東京、九州の国立博物館と分担し、当初想定どうりの分量を達成することが出来た。なお、調査に関しては、今年度のみの成果ではないが、各研究員が永青文庫におもむき、実際に収蔵作品されている作品の調査行い、既存の図録等に収録されている所蔵品情報の数倍に上る成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査および図録の刊行という観点からは、おおむね当初の計画通り遂行することができた。次年度秋に、当館において展覧会が開催されるが、調査結果を十分に反映した展示となるように努力したいと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	永青文庫に所蔵される各分野の文化財について、まんべんなく調査し、その成果を展覧会の作品選定および図録の執筆に遺憾なく発揮することができ、これまでのところはおおむね順調と考えられる。次年度は実際に展覧会が開催されることになるが、調査・研究の成果を生かして、作品の安全な移動、展示をこころがけるとともに、観覧者の理解、賛同が得られるような、効果的な展示解説を行いたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 特別展覧会「中国近代絵画（仮）」（平成23年度）の開催に向けて、須磨コレクションと関連作品の調査研究を行う		
【事業概要】 京都国立博物館が平成11年（1999）度からその後数回にわたって寄贈を受けた須磨コレクションを中心に、中国近代絵画にかんする調査・研究を行い、平成23年度に開催を予定する特別展覧会「中国近代絵画（仮）」にてその成果の公開を目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西上 実
【スタッフ】 呉 孟晋（研究員）			
【主な成果】 次年度開催予定の展覧会に向けて、約2000点におよぶ須磨コレクションの調査を継続し、その全容把握に努めた。とくに昭和初期の南京総領事・須磨弥吉郎によるコレクションの性質にかんがみて、政治や社会とのかかわりに注目し、中国近代史のなかでの絵画芸術に位置づけを明らかにした。また、一般にはなじみの薄い分野であるだけに、一般向けの広報・紹介に注力した。			
【年度実績概要】 ・須磨コレクションにかんする調査およびその研究 中国近代絵画は膨大な現存作品数と近代の日中関係の複雑な展開から、清時代中期以前の中国絵画研究とはアプローチを異にする面もある。須磨コレクションには、日中の政治・外交の場で贈答された作品が多く、中国近代政治史・外交史との関連を念頭において作品調査を行った。その結果、康有為、汪兆銘、唐紹儀、鄭孝胥ら中国近代史にその名を残す著名政治家の書作品について、いくつかの新知見を得ることができた。また、須磨コレクションには中国書画のみならず、民国期の中国に流寓した日本人画家による作品もある。そのほとんどはこれまで日本近代絵画史でも等閑視されてきたが、本事業により、大正期新興美術運動に参加した後台湾や中国大陆を放浪した重松岩吉や、水彩画家の太田貢、上海の日本人サロンにいた小川七五三二らの活動の一端を解明することができた。これらは中国での日中文化交流の新たな一側面を示すものであり、その成果の一部は平成22年7月から8月にかけての当館の「新収品展」において公開した。 ・海外招へい研究員の受け入れ 平成22年9月から翌年3月まで、日本学術振興会海外招へい研究員として広東美術館研究員の蔡涛氏を受け入れ、展覧会目録や新聞雑誌記事など須磨コレクションの関連資料についての調査・目録制作などで協力を得た。これらの資料は中国本国には現在ほとんど残っておらず、将来的にデータベースとして情報発信を目指すうえでも必要不可欠な準備作業となる。また、中国近代絵画史を専門とする同氏とは滞在中積極的に意見交換を行い、中国側からの視点で展覧会への助言も数多く得ることができた。 ・中国近代絵画について紹介 上記の成果について、一般向けにまだ広く知られていない中国近代絵画の紹介につとめた。具体的には、当館における講座や他機関での講演会の開催のほか、一般向け書籍の刊行や各種刊行物で広く紹介の機会をもった。			
【実績値】 （調査）回数：30回 （刊行物）単行本1冊、論文・エッセイ2本 （講座・講演）4回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 平成23年(2011)は、近代中国のあり方を大きく変えた辛亥革命100周年であり、平成24年(2012)は、日中国交正常化から40年の節目にあたる。本調査の成果として計画される特別展覧会は平成23年度の事業にして平成24年1月から2月に開催するため、二つの記念年にまたがる。また、当該年度は関西地方において当館や大阪市立美術館など9つの博物館・美術館がリレー方式の「中国書画コレクション展」を開いており、本特別展はその棹尾にあたる。日中関係が大きな振幅をもって推移するなかで、近代での日中交流の軌跡をたどる試みは、両国の相互理解の一助となりうる。とくに絵画をとおしての交流は、これまでその重要性が認識されていながら、具体的な取り組みには乏しかった。本調査では、当館が所蔵する須磨コレクションを基礎にして、新出の作品や関連資料からその軌跡を検証するものであり、定性評価の項目として、「独創性」「発展性」「効率性」「継続性」の4項目に適う成果を導くものである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物数	講座・講演数			
判定	A	A	A			
備考 須磨コレクションの調査は当館所蔵品であるゆえ、通常の業務の合間に週1回程度、継続して実施した。その成果は、単行本では関西中国書画コレクション研究会著『中国書画探訪―関西の收藏家とその名品』(二玄社、平成23年1月)にて、西上と呉がコレクターとしての須磨弥吉郎の伝記と須磨コレクションの名品を紹介し、当館紀要の『学叢』や広報誌『京都国立博物館だより』などでも須磨コレクションに関連した日中の近代絵画について言及した。講座・講演については、当館土曜講座(平成22年8月28日)や、兵庫県民会館における「ひょうご講座」(同11月6日)、神奈川県立近代美術館・葉山における「県立機関活用講座」(2010年11月21日)などで行い、当館以外の場所においても積極的に中国近代絵画の紹介につとめた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	須磨コレクションの基礎的調査を継続するとともに、一般向けに中国近代絵画の紹介と次年度開催の展覧会広報に注力できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度での特別展覧会の開催に向けて基礎的調査をほぼ終え、研究面においても一般向け広報の面においても、当館所蔵のコレクションについての理解を深めることができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4523-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「大遣唐使展」「仏像修理100年」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」、「お水取り」及びなら仏像館の仏像展示に反映させる ((5)-②-vi)		
【事業概要】 近隣社寺の所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）			
【主な成果】 「大遣唐使展」「仏像修理100年」「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に関連する文化財を蔵する近隣社寺等への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示活動等に反映させた。			
【年度実績概要】 ① 特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」の開催に際して借用した薬師寺・法隆寺・唐招提寺・東大寺・大安寺等所蔵の文化財について前年度に行った調査研究の成果を、同展の図録、展示解説、パネル等に反映させた。 ② 特別展「仏像修理100年」出陳作品（法隆寺・東大寺・興福寺・唐招提寺・平等院・三十三間堂等から借用）に関する調査研究の成果を、同展の展示解説・パネル類や展覧会図録等に反映させた。当館修理所で復元修理作業が進行中の薬師寺四天王像（重文）のうち3軀が展示され、最新の修理の過程で得られた成果が図録や解説等に盛り込まれたことが特筆される。 ③ 聖観音立像（勝林寺蔵、重文）のなら仏像館（本館）における名品展「珠玉の仏たち」への出陳を機に、同像と作風が酷似する観音菩薩立像（斑鳩町・法輪寺蔵、重文）の調査・撮影（8月5日）を行い、その成果を展示解説や夏季講座等で公表した。 ④ 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」開催にあたっては、春日大社三宮の本地仏としての地蔵に対する信仰に注目し、この観点からの関連資料収集・調査研究を重点的に実施して、その成果を展覧会に反映した。特に米国・ジョン・C・ウエバーコレクションの絹本着色地蔵菩薩像の里帰り展示は、新聞紙上で紹介されるなど注目を集め、また若草山の地蔵石仏の調査・撮影（8月26日）や、東大寺知足院における地蔵菩薩立像及び厨子の調査・撮影（9月16日）で得た資料と知見も、会場のパネル展示や展覧会図録の論考に活用された。 ⑤ 特別陳列「お水取り」の開催にあたり、近世に刊行された名所図絵に掲載された東大寺二月堂及び修二会に関する情報についての調査研究を重点的に進め、具体例を展示するとともに、調査研究の成果を展示解説や、会期中配布するリーフレットに反映した。			
【実績値】 調査回数 7回 関連調査の展覧会への反映回数 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4523-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展覧会への反映				
判定	A	A				
備考 展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「大遣唐使展」「仏像修理 100 年」等に出陳した近隣社寺を中心とした所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。また春日信仰・若宮おん祭及び東大寺二月堂・修二会に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に反映された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。22 年度も東大寺を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果、及び当館所蔵品についての調査研究成果を生かし、なら仏像館仏像展示や名品展（平常展）の充実を図る（(5)-②-vii）		
【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博（上席研究員）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、稲本泰生（企画室長）、吉澤悟（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、斎木涼子（列品室員）、岩戸晶子（工芸考古室員）、野尻忠（情報サービス室員）、清水健（教育室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示に反映させることができた。			
①名品展（平常展）彫刻部門では、本館の「なら仏像館」への改称に伴うリニューアル以降も、中国及び朝鮮半島の石仏・金銅仏から日本の仏像に至る様式の流れを体系的に展観した。また小金銅仏・檀像・塑像・埴仏のコーナーを中心に、隋唐時代の中国で流行した仏像の諸類型がその信仰背景とともに古代日本に伝来したこと、平安初期木彫における用材観と中国檀像との関係などについての近年の研究成果を、展示構成・作品解説・展示パネルなどに反映した。 ②耐震工事の完了・展示ケース新造後の西新館で最初に開催された名品展（平常展）では、工芸部門において中・韓・日の舍利容器・密教法具の比較研究の成果に基づき、各地域の作例の比較展示を行った。また書跡部門でも、平成 21 年度特別展「寧波」の開催に際して行った調査の成果などを踏まえ、鎌倉期以降における仏教を介した中国との文化交流の様相を最もよく示す、禅僧の墨跡に重点をおいた展示を行った。			
【実績値】 名品展（平常展）への成果の反映 3 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4523-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の平常展・特別展等に反映させるように努めている。						

2. 定量的評価

観点	平常展への反映					
判定	A					
備考 調査研究の成果を積極的に反映させており、その点では必要十分な条件を満たしている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学術交流協定を締結している上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・中国国家博物館（中国）・国立慶州博物館（韓国）との研究員の交流などをおして行った、アジア諸国を視野に入れた調査研究の成果を名品展（平常展）に反映させることができた。その過程で、中国・韓国・日本の三国の作例を比較展示してその共通点・相違点を浮き彫りにするなどの工夫を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 22 年度名品展（平常展）の内容を充実させることができた。今後も引き続き調査研究を続け、その成果を展示に反映していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)平成20年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう。((5)-②-ix)		
【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸の作家の創作活動について、調査研究を行なう。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。伝統工芸の技術についてもワークショップを開催した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 伊藤 嘉章
【スタッフ】 原田あゆみ（文化財課主任研究員）、赤司善彦（展示課長）			
【主な成果】 平成22年度西部工芸展、日本伝統工芸展など、今年度開催の工芸展で作品調査を行なった。陶芸部門では、西部工芸会陶芸部会の研究会に参加し、新たな創作活動の展開について調査し、これまでに対象となっていなかった若手作家も調査に加わった。 タイと共同で開催する展覧会の中に伝統工芸を位置づけ、日本の伝統技術によって現代に展開する工芸を紹介することとし、タイ国バンコク国立博物館で開催の「日本とタイーふたつの国の巧と美」に日本の伝統工芸とそれが現在に生きている姿の展示を行った。同時に、伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。			
【年度実績概要】 九州・沖縄の伝統工芸の中で最も層の厚い陶芸で、調査の継続と研究会への参加を行なった。西部工芸展、日本伝統工芸展、西部工芸陶芸部会展、九州・山口陶芸展の出品作品の調査を行い、新たな創作の動向とこれまで調査対象となっていなかった新しい人材の発掘を行なった。その一方で、日本工芸展の審査に関り、全国規模での陶芸の状況の把握をつとめた。 陶芸では柿右衛門様式の色絵技術の復活と伝統の継承について、タイ国バンコク国立博物館で開催の「日本とタイーふたつの国の巧と美」で紹介した。 染織の久留米絣の作家による伝統工芸の技術を示すワークショップを開催した。			
【実績値】 ○調査回数 3回 第107回 九州・山口陶芸展、第45回西部工芸展、第57回日本伝統工芸展で九州・沖縄の工芸の調査と全国的な工芸の状況の調査。 ○収集資料数 伝統工芸展 99件 西部工芸展 237件 九州・山口陶芸展 98件 ○研究会 2回 秋季、冬季の西部工芸会陶芸部会展研究会に出席し、九州・沖縄の陶芸の現状調査と研究発表。 ○展示 8件 1/15～3/13 タイ国バンコク国立博物館で日本の伝統工芸について伝える展示を実施。 ○ワークショップ 3回 1/29～30 タイ国バンコク国立博物館で久留米絣のワークショップ開催。			
【備考】			



タイで開催のワークショップ

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 伝統工芸への取り組みは近代美術館を持たない九州地区にあつて、無形文化財を扱う役割を果たすとともに、地域にある博物館として伝統工芸の発展を通して地域貢献を果たすというものである。これらは平成20年度の展覧会以来の、継続的な事業であった。工芸作家の中にこの活動に対する期待も大きく、また既に昨年度のこの事業によって九州・沖縄の工芸は確実に新たな展開を示しつつある。 海外展の中に伝統工芸を組み込むことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究会	展示	ワークショップ	
判定	A	A	A	A	A	
備考 個別調査主体から、展覧会出品作による追跡調査を行っている。さらに全国レベルでの工芸の状況へと調査対象を広げている。それらの成果の一部は、工芸作家とともに行なう研究会によって公表している。 海外で日本の伝統工芸を紹介し、その技術保護の状況を伝えた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地域に根ざした博物館として、九州・沖縄の伝統工芸の発展に寄与している。技術の保存とともに、伝統の美意識について、貢献することができる。 日本以外の工芸技術の実情調査、保護といった新たな研究の広がりがあり、文化交流を視座に置く九州国立博物館としては今後さらに広げる必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	工芸展開催以来の成果を受け、さらに広がりをもてたという点は評価できる。陶芸、染織といった層の厚い分野では、より活発な研究活動が行なわれているが、今後は層の薄い分野での活動を深めていく必要がある。 海外での工芸技術の実情と保護という面について、更なる研究が望まれる。無形文化財に積極的に取り組んできた日本の状況について、海外に伝えることで、海外の無形文化財の保護についても貢献が可能となる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 京都、九州における黄檗宗寺院に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。((5)－②－vii)
【事業概要】 江戸時代における日中文化交流の接点の役割を果たした黄檗宗寺院の所蔵する文化財について、調査研究を実施する。調査を通して見えてくる黄檗宗の開立と興隆の歴史を17世紀の東アジア世界という広域的な歴史の中で捉え、その成果を特別展としてまとめる。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	主任研究員 楠井 隆志
【スタッフ】 伊藤嘉章（学芸部長）、金井裕子（企画課研究員）、川畑憲子（企画課研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、小泉恵英（企画課長）、酒井芳司（展示課研究員）、末兼俊彦（アソシエイトフェロー）、畑靖紀（企画課主任研究員）、原田あゆみ（文化財課主任研究員）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、丸山猶計（文化財課主任研究員）、森實久美子（企画課研究員）、	
【主な成果】 調査箇所 黄檗宗大本山萬福寺および塔頭（5回） 関西地区黄檗宗寺院（1ヶ寺）、九州地区黄檗宗寺院（12ヶ寺） 国立国会図書館内閣文庫、京都国立博物館、神戸市立博物館、長崎歴史文化博物館、 北九州市立いのちのたび博物館、柳川古文書館 上記各所蔵の文化財についての基礎的な情報を収集・整備することができた。これまで調査対象とされなかった彫刻分野において、数多くの知見を得ることができた。これらの調査の成果は特別展「黄檗」に反映した。	
【年度実績概要】 分野横断的に調査を実施して黄檗の美術や文化について基礎的な情報を収集・整備することができた。その成果は特別展準備に反映された。また、調査の課程で所蔵文化財の保存状態について問題となる場面もあったが、所蔵者への適切な助言をおこなうとともに修復方法の研究にも寄与するところがあった。	
【実績値】 ○調査回数 18回 ○収集資料数 調査点数 200点 ○調査概報 特別展『黄檗』図録	
 福岡県久留米市・福厳寺 釈迦如来坐像および観音菩薩坐像・地藏菩薩坐像	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 江戸時代における日中交流の接点となった黄檗宗の歴史と文化を調査研究の対象とし、その成果を展覧会としてまとめ、広く一般に紹介することは、アジア諸国との文化交流をテーマに掲げる九州国立博物館にふさわしい活動と評価される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 調査成果を反映した特別展「黄檗」の開催は今年度末からであるため、成果公表の反響については来年度の評価となろうが、実績値としては十分な成果をあげたといえる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黄檗宗大本山萬福寺および各黄檗宗寺院の理解と協力を得て、分野を横断した総合的な調査を実施することができたことは大きな成果である。それは、特別展「黄檗」の質の向上と内容的魅力の増大におおいに寄与している。よって、標記評価が適当である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査はほぼ計画どおりに達成された。その成果を、23年3月から開催する特別展「黄檗」の展示内容に反映させるとともに、調査概報として図録を刊行した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本、韓国、中国における馬文化に関する考古遺品、美術作品に関する調査を進め、成果を特別展に反映する。((5)-②-ix)		
【事業概要】 日本の馬文化は、紀元5世紀に朝鮮半島から渡来したウマが起源であり、以来1600年に亘って日本人と密接な関わりをもって展開する。また、黄金で馬や人を飾る習俗も馬文化に付随して日本に導入されたものである。本研究事業では、ウマの動物学的な特性を明らかにすると同時に、中国・韓国・日本の考古資料や美術作品から馬と人の悠久の歴史を考究し、特別展へと結実させる。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
【スタッフ】 赤司善彦(展示課長)・市元壘(企画課特別展室研究員)・坂元雄紀(展示課研究員)・進村真之(展示課研究員)			
【主な成果】 騎乗馬や農耕馬など、日本人と密接な関係を持っていた馬との絆は、現代の産業構造の激変に伴って失われた。しかし、私達の生活には馬文化に由来する有形・無形の要素が多く含まれている。特別展では馬のいる情景(厩)を再現すると同時に、最新の考古学研究に基づいた飾り馬の馬装を復元し、馬具から読み取ることのできる馬文化の広がりや立体的に示すことができた。			
【年度実績概要】 本研究事業では、動物としてのウマ、歴史としての馬、文化としての馬という多面的な馬の捉え方を試み、その成果を特別展にて公開することを主眼とした。特別展の実施に当たっては約10回の事前調査を遂行し、135件の出品を収集することができた。まず、動物としての馬は、馬の祖先ヒラコテリウムから原生馬への進化過程を示し、人を騎乗するのに適した生態へと変化してきたことを示した。歴史としての馬については、1600年前に日本に渡来した最古の馬を遺跡出土資料によって例示し、中国・韓国・日本の馬具伝来ルートに係る考古資料によって馬が日本に渡来したことを立体的に示すことができた。中でも、日本の馬の伝来に高句麗が果たした役割が大きいことを示すために、実物拓本を室内に樹立して、馬の伝来と東アジアの動乱が背景にあることを印象付けた。また、鎧の発生として古くから注目されてきた河南省安陽孝民屯遺跡出土品を初公開できた意義は大きかった。また、古墳時代の馬具の到達点に位置付けられる奈良県藤ノ木古墳の馬具を通じて、シルクロードへと繋がる日本の馬文化の広がりを示すことができた。黄金の馬具の展示と併せて、最新の考古学研究の成果に基づいた飾り馬の馬装をイラスト図で提示した。文化としての馬は、現在でも神事として行われている古式競馬や飾り馬によって、武家の権威の象徴や農耕馬以外に、文化としての馬文化の諸相を示した。現在、ウマと人との絆は以前ほど密接なものではなくなっているけれども、現代に到るまでの日本人の生活にとって欠くことのできない役割を果たしたことが、研究事業の成果を踏まえて示すことができた。 特別展の観覧者の意見では、馬に対してより身近に感じられた、文化交流の要素としての重要性が認識できたという意見が寄せられた。一方、歴史として馬を捉える場合には、アジアの他地域、中世武士の馬文化も取り上げるべきとの意見が寄せられた。			
【実績値】 ○調査回数 10回 ○収集資料数 135件 ○調査概報 1冊 ○論文掲載数 1本 ○学会研究会等発表数 1本		 和歌山市博物館での作品調査風景	
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 着手当初に策定した目的に鑑みて、成果公開の場である特別展で、ほぼその内容を達成することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	学会研究会等 発表数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 実施にあたっては多少の改善を要する問題等もあったが、概ね達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的・定量的な面において、おおむね内容を達成でき、自主企画としての特別展として開催することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究系プロジェクトの成果を特別展に結実させることで、目に見える成果をだすことができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 中国内蒙古自治区出土の遼時代に属する考古遺物に関する調査研究を進め、成果を特別展に反映する。((5)-②-ii)		
【事業概要】 唐滅亡後の東アジアは契丹や宋、高麗などが互いに影響関係を保ちながら、新たな国際秩序の形成へと向かった。なかでも契丹はいちはやく国家建設に着手し、国力を増大させた。しかしながら、契丹の文化芸術に対する研究は宋や高麗の研究と比較して大きく立ち後れた感があり、東アジアの文化理解における大きな空白地帯となっていた。そこで九州国立博物館では、契丹文化の総合理解を目指し、現地調査を進めることとなった。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 市元 壘
【スタッフ】 市元壘（企画課研究員）、小泉恵英（企画課長）、臺信祐爾（文化財課長）、今津節生（博物館科学課環境保全室長）、末兼俊彦（文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 内モンゴル自治区、台湾において調査を実施し、また展覧会開催にむけて関係機関と積極的に交流をはかり、良好な関係構築につとめた。調査においては、紀年墓出土資料や仏塔出土資料の調査を通して、金銀器を中心に契丹工芸の特質把握につとめた。また遺跡踏査を実施し、陵墓や都城、仏教寺院等の立地等において多くの知見を得た。12月には調査成果の一部を九州国立博物館主催の国際シンポジウムにおいて発表した。			
【年度実績概要】 4月に台湾故宮博物院において契丹文化を中心とする展覧会を実見し、特別展開催にむけての具体的なプランの構築と、資料調査を実施した。8月には内モンゴル自治区へ赴き、調査を実施した。トルキ山古墓、耶律羽之墓の各出土品の調査においては、一対あるいは複数組となる器物について、彫金技法や材質に優劣の差異が認められることを確認した。陳国公主墓出土品の調査においては、公主の葬具が主人の葬具よりも良質であることを確認した。また、慶州城や上京、豊州城遺跡などにおいて仏塔の調査を実施し、その立地や建築様式に関して多くの知見を得た。11月には赤峰地区を中心として現地踏査を実施した。特にヘシグテン旗では契丹に続く国家である金の時代の出土品を実見し、契丹時代とのつながりに関する知見を得た。12月には内モンゴル自治区から研究者を招聘し、契丹文化に関わる国際シンポジウムを開催し、契丹文化の特質と日本の平安文化との関わりについて発表した。			
【実績値】 ○調査回数 3回 ○収集資料数 400点 ○調査概報 2編 ○論文掲載数 1篇 ○学会研究会等発表数 1回		 金製七稜杯（耶律羽之墓出土、10c前半） 唐代に盛行した形態を引き継ぐが、7面体は珍しい。各面には老賢者を彫金する。	
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 近年、契丹研究はとくに日本仏教史や日本美術史のなかで関心が高まり、研究が活性化しつつあるが、本研究では、それらにも寄与し得る十分な成果を挙げることが出来た。また本研究においては、内モンゴル自治区の契丹研究者を招聘し、日本における平安文化遺存の調査を実施するなど、幅広い視点で契丹文化に対する研究を実施することが出来た。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数	学会研究会等 発表数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 定量評価に掲げるすべての観点において、十分な成果をあげることができた。						

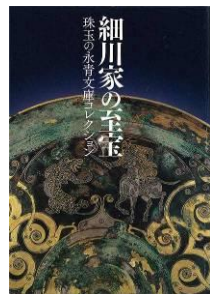
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	次年度の展覧会開催にむけて、契丹文化の周知をはかるべくシンポジウムの開催などを通して一定の成果を挙げることができたが、契丹に対する認知度はいまだ十分とはいえない。今後研究成果を十分に活用しながら成果公開につとめていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初予定していた調査対象資料のうち、主要なものについて調査の機会を得て、見識を深めることができた。その成果の多くは、次年度に予定している展覧会に反映させることが可能であるが、今後も継続して調査を進め、研究領域を拡充していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 細川家伝来資料に関する調査を行なう。((5)－②－ix)		
【事業概要】 23 年度開催予定の特別展「細川家の至宝」の作品調査を兼ねて、今年度は細川家伝来資料のなかでも中心的なコレクションを形成している永青文庫所蔵作品について、美術・工芸・考古遺品の代表的な作例の保存状態を中心に調査した。また、永青文庫所蔵作品の学術調査にもとづき、当館での特別展開催に向けて調査研究を進めた。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化財課 主任研究員 丸山猶計
【スタッフ】 美術部門総括：丸山猶計（文化財課主任研究員） 工芸・考古部門総括：川畑憲子（企画課研究員） 美術担当：畑靖紀（企画課主任研究員）、金井裕子（企画課研究員）、絵画分野 森實久美子（企画課研究員）、小泉恵英（企画課長）、楠井隆志（展示課主任研究員）、彫刻分野 原田あゆみ（文化財課主任研究員）、酒井芳司（展示課研究員）、藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、書跡・歴史資料分野 丸山猶計（文化財課主任研究員） 工芸・考古担当：陶磁分野 伊藤嘉章（学芸部長）、漆工分野 川畑憲子（企画課研究員）、考古分野 市元壘（企画課研究員）			
【主な成果】 財団法人永青文庫所蔵資料について、分野ごとに調査結果をまとめ、同時にデータ化を推進し、展覧会出品作品の基礎的な情報を整備した。また、永青文庫所蔵コレクションの性格について分野横断的に研究し、江戸時代の大名家コレクションにおける特質について、分かりやすく展覧会で紹介できる段階におおよそ至ることができた。			
【年度実績概要】 前年来、特別展『細川家の至宝』の巡回先である東京国立博物館・京都国立博物館の研究員とともにやってきた永青文庫所蔵作品調査を基礎に、今年度は同文庫所蔵作品についての約 1000 点にのぼる作品情報を分野別に整理し、研究を進め、展覧会準備に寄与した。また、同文庫所蔵作品を中心に、その保存状態について集中的に調査・確認し、当館で開催する特別展「細川家の至宝」のための文化財のより安全な輸送および取扱方法について考究した。			
【実績値】 ○調査回数 4 回 ○収集資料数 1000 点 ○調査概報 特別展図録『細川家の至宝』			
			
			特別展図録「細川家の至宝」
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 11 万件以上になる細川家伝来資料のうち、古美術品の優品が多く収蔵される財団法人永青文庫所蔵コレクションを調査対象とし、その中核をなす作品群についての精査を反映したものとなっている。くわえて、精査した作品の収蔵状況についての調査結果を含むものとなった。展覧会開催にあたり、永青文庫の格別の理解と協力を得て、予想以上に充実した調査研究が可能となった。よって、標記評価が適当である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 展覧会出品作品についての質の高い情報を網羅的に収集できたこと、さらに展覧会には出品しない重要作品群についても具体的で詳細な文化財情報が収集できた。本件の発表の場として、当初から 23 年度特別展「細川家の至宝」を予定している。よって、標記評価が適当である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	永青文庫の特段の協力を得て、脆弱な文化財に対しても細やかな調査を行うことができたのは特筆すべき点であった。上記のような分野単位の精査を基礎に、同文庫コレクションの性格や本質について、総合的な視点から見直す基盤が整い、当館特別展「細川家の至宝」の質の向上に確実に寄与している。よって、標記評価が適当である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は当初の計画にそって順調に進んでおり、その成果を、23 年度開催予定の特別展「細川家の至宝」に反映させる予定である

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 九博に関連する絵本の次シリーズの企画について検討する。((5)－②－iii)		
【事業概要】 「きゅーはくの絵本」シリーズは、17年度開館時から発刊をすすめ、21年度に10巻目の刊行を遂げた。21年度末には、絵本10巻刊行を記念して座談会を実施し、その席上で今後の新たな展開案が示された。これをうけて本年度は既往の絵本に対する内容の分析を進め、絵本を用いた各種の取り組みを推進しながら、今後の展開を検討することとした。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 市元 壘
【スタッフ】 新名佐知子（企画課研究補佐員）			
【主な成果】 既刊絵本の外国語版作製を検討するにあたり、福岡県を中心とする九州島内のインターナショナルスクールの実態調査を行った。5月には日経流通新聞において『月夜のおおさわぎ』に関する取材記事が掲載された。また、交流課とボランティアスタッフを中心として、小学生以下を対称とするワークショップや読み聞かせを行った。			
【年度実績概要】 交流課とボランティアスタッフが主体となって、絵本を用いた取組みを実施し成果を挙げている。4月にはあじっぱにおいて、『はらなのかのはらっぱで』の読み聞かせと出典資料である医学書針聞書の鑑賞を行った。5月には文化交流展示室において、『じろじろぞろぞろ』の読み聞かせと出典資料である南蛮屏風の鑑賞会を行った。8月には『エイサー！ ハーリー』の主要作品であるハーリー船のペーパークラフトを作製する小学生向けのワークショップを開催した。			
【実績値】 ○調査回数 1 ○収集資料数 10 ○調査概報 1			
 南蛮屏風の登場人物に扮して、絵本『じろじろぞろぞろ』の読み聞かせ。夢中になって絵本をみつめるこどもたち。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 絵本の読み聞かせについては、絵本の題材となった収蔵品の展示公開期間にあわせておこない、かつ展示室内で行うものとして、適時性と独創性に富んだ取り組みといえる。また読み聞かせはこどもたちの絵本に対する反応を直接知ることができるので、今後の絵本製作にむけての参考と成るべき知見を得ることができるため今後も継続していきたい。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 本年度は既刊絵本を用いた活用と今後の展開を探るための諸調査に重点をおいた。また、絵本の取り組みに関しては論文や研究会発表等でも公開すべく準備を進めている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	きゅーはくの絵本シリーズは、文化財に対するより深い理解を得る上で有効であり、また新たな来館者層の獲得という側面においても有効なツールである。本年度は絵本を用いた様々な活動を実施することで、参加者の生の反応を知ることができ、絵本が高い情報発信力をもつことを再確認することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	きゅーはくの絵本シリーズは、発刊を出発点として、博物館の内外で積極的に活用することを重視している。今後も新しいシリーズの製作にむけて、さまざまな取り組みを続けていきたい。